
MAINE TRAFFIC

紫電改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAINE TRAFFIC

【コード】

N0514X

【作者名】

紫電改

【あらすじ】

静岡県に住む鉄道大好き少年。この小説は彼の生きがいをも小説にしたものです。
中学生の彼の心が回り始める。
目標は・・・一人前の運転手。

なおこのシリーズでは岸川高校鉄道研究部のエピソードです。

1 列車 鉄道少年（前書き）

この小説はフィクションです。

なお、鉄道に興味のある方にはこのことを頭の中に入れて読んでいただければ幸いです。この小説には現実と違う個所がございます。どうかご了承ください。

1 列車 鉄道少年

僕は静岡県に住んでいるどこにでもいる中学3年生。スポーツは全くダメ、勉強はできるとは思いたくない少年である。そんな自分であるが、一つだけ自分を輝かせることができるものがある。それは鉄道である。

僕の将来はもう決まっている。それもそこ以外考えてもいない。だが、そこへ行くためには高校をかまさなければ行けないことも分かっている。もちろんその高校生活にも鉄道が絡んだ方が面白いと思っているのは事実。そのためにはどこに行ったらいいものか？と考え悩んでいるが、めったにパソコンでそんなこと調べていない。だが、暇があると自分の家にある離れにこもって、模型で遊んでしまっている。中学3年生の6月となれば、僕は最悪の中学生かもしれない。いや、そうに違いない。

と、ここまででは前フリ。ここから本題に入るのだが、まだ自分の名前を言っていない。永島智暉。これが僕の名前である。

6月8日。今日は久しぶりにフリーな日だ……。久しぶりというのはウソ。本当は毎日フリーなのだ。いつものように離れに行つて模型を走らせている。言っていないが、僕の離れに展開しているのは新幹線と複々線の在来線が走っている鉄道模型。周囲の大きさは実物にたとえて10キロぐらいになるといほどの大きさ。車両は別の部屋に置かれている。ここには折りたたみケースに入つた鉄道模型が30箱入っている。内訳は22箱が父のもの。3箱が祖父のもの。2箱が従兄のもの。3箱が自分のものだ。レイアウトは大きすぎだし、車両は持ちすぎではと思つているかもしれないが、自分の持っている量などまだひよこ。いや、卵にもなっていないかな……。世の中にはそう言う人もいるくらいだ。ここで前述した通りの時に遊んでいる。もちろん、やっていて飽きたことは一度もない。

遊んでいると離れのドアが開く音がした。顔を上げてみると女の子がそこに立っている。僕と顔つきはよく似ている。

「ナガシイ。6月14日に岸川きしかわっていう高校で文化祭があるんだけど、見に行かない。」

第一声はこれか……。彼女は坂口萌さかぐちもえ。僕の理解度が一番いい人だ。

「ええー、文化祭。行くの面倒くせえじゃん。」

「そう言うと思ったよ。……でも、これ見たら行くっきゃないでしょってなると思うな。」

「どっという意味だよ。」

聞き返すと萌もえは何のためらいもなくモジュールを置いている長机の下をくぐった。ためらいがないのは当然だろう。小学校の時はほぼ毎日。中学になってからだ土日ほぼ毎回と多いからだ。僕の近くまで来ると、手に持っていた岸川きしかわ高校のパンフレットを差し出した。受け取って中をサラサラとみてみる。するとあるところが目にとまった。

「でしょ。」

「……。」

「ねっ。だから行こうよ。絶対満足できること間違いなしだから。確かにそうなのだが。この手の部活があるというのは今初めて知ったことだ。」

「よしっ。決めた。行こうか。……で、何日だっけ。」

「忘れるの早いねえ。6月14日。パンフレットの裏に書いてあるけど、遠江急行とんげいきゆうの涼ノ宮すずのみやえんてつが遠州鉄道えんてつの助信すけのぶから行くのが近いんだって。どうする。」

「じゃあ遠州鉄道えんてつで行って遠江急行とんげいきゆうで帰ってくる。」

「なんでもいいよ。そこは任せる。」

「つつかその文化祭何時から始まるんだよ。」

「あつ、言い忘れてた。9時からだよ。それで終わりが15時。」

「15時終わんのかよ。もうちょっと長くやれよ。」

「まあ、そこ文句言ってもしょうがないし……。じゃあ行ってくつ

「ことでいいね。」

言い終わるとグルッと部屋の中を見まわした。ほぼ毎日来ている状態で見るものなんてないはずなのだと思うている人は分かっている。この部屋にあるのは鉄道模型のモジュールレイアウト。つまり探しているのは……。

「ナガシイ。あすこに走ってる寝台特急何。」「北斗星」……じゃないか。「さくら」かなあ。それとも「あさかぜ」。

目的のものを見つけて僕に問いをした。

「「出雲」だよ。」

「えっ、「出雲」。」

今度はじっくり見て、走っているものを確認する。その姿がはつきりしてくると、

「あっ、ホントだ。よく見たら24系引つ張ってたのがEF66じゃなくてEF65だった。」

「だろ。EF66とEF65じゃまず見た感じが違うんだから。」

「そう言われればそうでした。EF65は箱っていう感じだもんね。その箱っていう感じで赤いのがEF81だけ。」

「……そんな感じでいいよ。」

立って、長机の下をくぐって車両庫のほうへ歩いて行く。

「えっ、もう車両換えるの。換えるんだったらさあ「カシオペア」にしてよ。」

「うーん……。どうしようかな。」

車両庫の奥に入って従兄の箱を見つけて中身を出す。

（あれは貨物を取ってくるね。高速貨物かな。それともタンク貨物。いや、紙……。）

12両編成用の箱を見つけて2つ取りだす。とりあえず中身を確認して、次は機関車を探した。機関車は地元のEF210（桃太郎）をはじめとする機関車を大勢引つ張り出した。機関車の次は機関車に対応する車両を探す。例えば、EF210が貨物列車を牽引している時は313系や223系など東海道本線を走っている車両。E

F64が重連じゅうれんでタンク貨物を牽引している時は383系「特急しなの」など中央本線ちゅうおうほんせんを走っている車両という風にする。その車両を一つか二つ見つけて、戻った。

「やっぱり「カシオペア」は持ってきてくれないんだ。」

「その代わりにもつと面白いもん持って来たぞ。貨物だ。」

「また26両やる気。準備するだけでも疲れない26両つて。」

「26両以外走らせる気ないし。それに萌もえが手伝うからそんなに関係ないじゃん。」

車両の入った箱を萌もえに渡して、机をくぐる。中に入ると萌もえはすでに着発線荷役方式の貨物駅にいて車両を並べ始めている。その並べるのに合流して、4両5両と並べていく。その数が26になったところで、その前に機関車を連結する。スタートはDF200（レッドベアー）だ。

「レッドベアー」だっけ。」

「ああ。」

「「ブルーベアー」とかいけないのかな。雷かみなりものは「レッドサンダー」と「ブルーサンダー」でちゃんというのに。」

「まあ、作らなかつただけだろ。じゃあ、もうちよつとしたら出発だつぞ。」

今まで走っていた「出雲いせ」を駅で止めて、車庫まで回送する。その回送が終わると貨物の番だ。貨物列車が停まっている線路に電気が行くように変えて、コントローラーのブレーキを解除。マスコンを入れて、貨物駅を発車する。発車した後は放っておくだけ。走っていくところを子供のように追いながら、その工程を見守る。やがて貨物列車は新幹線の高架橋こうかきょうの下をくぐり、また新幹線の高架橋をくぐる。坂を上って鉄橋てつかを通過。次に坂を下ってこのレイアウトの緩行線かんせんの下をくぐる。緩行線の駅を通過した後また坂を上ってこのモジュールで一番大きい駅を通過。やがてまた元の貨物駅に戻ってくる。しばらくこの動作を繰り返して、EH500（金太郎）にバトンタッチ。また動作を繰り返して次の機関車へとバトンを渡してい

く。

「そろそろEF210（桃太郎）に変えない。」

「EF210（桃太郎）はまだ。次はEF510の北斗星色ほくとせいに引かせるんだから。」

「なんでそこでそれ。EF510の北斗星色ほくとせいも貨物引くけど、ED75から引き継ぐっていうことはないでしょ。つうか東北本線とうほくほんせん通ってきて常磐線じょうばんせんに入る貨物なんてあるの。」

「あるわけねえだろ。究極にありえない貨物やってんだから。」

「・・・。ねえ、ナガシイ。気になってはいたんだけどさあ、日本で一番長い貨物つてどこからどこ結んでて、どこをどう通ってるの。」

「知るか。多分東京とうきょうから西鹿兒島にしかりしまあたりまでじゃない。」

「こういう貨物列車もあるだろう。だが、この貨物列車は日本一ではない。日本一は札幌貨物と福岡貨物を結んでいる列車。走行路線は札幌さっぽろから千歳線ちとせせん、室蘭本線むろらんほんせん、函館本線はこだてほんせん、江差線えさしせん、津軽海峡線つがるかいきょうせん、奥羽おうう本線ほんせん、羽越本線うえつほんせん、信越本線しんえつほんせん、北陸本線ほくりくほんせん、湖西線こせいせん、東海道本線とうかいどうほんせん、山陽本線さんようほんせん、鹿兒島本線かりしまほんせんの順だ。」

「それって「はやぶさ」とごつちやになつてない。」
「速攻でツッコまれた。」

「そうだな。でも、これって仕方ないんだよなあ。駿兄ちゃんしゅんも貨物マニアじゃないし。分かる人いないんだよなあ。」

「へえ。駿兄ちゃんしゅん貨物の模型結構持つてるから一見すると貨物マニアって感じるけど、違うんだ。」

「ああ、本人が言つてた。」
「ふうん・・・。」

お互い走っている車両に目を向ける。今走っている貨物列車は26両のコンテナ貨車にコンテナを満載している。当然ずっと満載では面白くない。

「そろそろ牽引機変えるかあ。」
「変えるんだつたらコンテナ満載もやめない。」

「そうだな。じゃあ、長いタイプのコンテナと載せ替えるか。」
貨物駅に列車を止め、そこまで歩く。まずここまで牽引してきたE
D75を貨車から切り離し、ケースにしまう。次に後ろに続いてい
るコンテナ貨車のコンテナを必要数外し、20フィートコンテナに
載せ替えていく。この20フィートコンテナは1両の貨車に3個載
る。載せ方も何パターンがあり、満載。12フィートコンテナを2
0フィートコンテナで挟む形。その逆。こういった方法。もしくは
満載されているコンテナすべてを外し、そのままにするということ
だつてある。僕は26両中18両にそれを施した。そのうち10両
を何も載せていない状態にした。編成は満杯から一気にスカスカに
なつた。

「空コキ多いなあ。」

「なんか別なほうがいいのか。もっと空コキ増やすか。」

「なんでそうするんだよ。もうちよつと空コキ減らすべきだよ。」

「常磐線だつたらこんな感じなんじゃないの。あれ、EF510の
北斗星色は。」

萌もえの手にチラツと青い物体が見えた。真ん中には金色っぽいライン
が入っている。

「おい、それ返せよ。」

見つかつているということが分かつていたようなのですぐに感じる
と思いきや、

「せめて、あと2両増やしてくれないとヤダ。」

「空コキ。」

「違う。コンテナ載せてあるコキ。」

「外すのより載せるほうが面倒くさいんだよ。」

「知るか。載せる。」

5秒ほどいがみ合つて、

「最初はグー。ジャンケンポン。」

チヨキとチヨキであいこだ。

「あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あ

「そうだな。東海道本線って言ったたらEF210（桃太郎）の王道だもんな。」

「その隣は313系。・・・ねえ、ナガシイ。5000番台（313系）2編成連結して、12両編成やってよ。223系みたいに。」

「気持ち悪い。やめろ。」

「やってよ。面白いじゃん。」

そう言いながら、萌は僕に近づき、わき腹を指でなぞった。

「やめろ。くすぐりたいから。」

「ナガシイがやるって言ってくればやめろよ。」

「お前・・・。」

「ねえどっち。やってくれるの。」

「はあ。今日だけだぞ。」

そう言うのと萌のくすぐり攻撃は約束通りなくなった。車両庫に行つて313系の箱を探す。車両庫には父の313系5000番台と従兄の313系5000番台がある。それを探し出して、車両庫から戻ってくる。

「はいよ。やるとは言ったけど、並べるとは言っていないからな。」

「・・・。並べてくれたっていいじゃん。」

「ダメ。」

この言葉で萌はあきらめたらしい。自分で313系を並べ始めさっき言った通り12両編成にした。並べ終わると萌はコントローラーの位置まで来て、

「外回りは借りるね。言っとくけど、出してる間に貨物がぶつかるってことないようにね。」

「大丈夫だって。さっき貨物駅通過したばっかだから。今鉄橋のところにいるし。」

「了解。」

車両基地のポイントコントローラーで313系が止まっている線路に電気を行かせる。次にコントローラーのつまみを回して、313系の発車を促す。それを確認すると、自分の運転するコントローラ

ーのブレーキを解除。マスコンを入れて、出庫してくる313系を本線に乗せるよう電気をとる。313系が本線に乗るところ問いてきた。

「ナガシイ。313系、脱線しないよねえ。」

「知るか。脱線するんだったら、どつちかの編成にモーターぶち込めばいいじゃん。駿兄ちゃんしゅんせいのちゃんの「スーパー雷鳥」みたいに。」

「そうだね。もし、脱線したらさういうよ。」

「さういう……。まさか、自分じゃやりたくないって思っ
てない。」

「チエツ。ばれた。」

どうしても萌もえはさうしてほしかったらしい。舌打ちをした。

「チエツ。ばれたじゃなくて、自分でそれくらいできるだろ。」

「あー。何も聞こえません。」

「ウソつけ。」

このあと30分間ぐらい313系とEF210牽引の高速貨物列車を運転した。

他にも223系1000番台の12両編成と223系2000番台の12両編成のしんかいそく新快速。京浜東北線の209系とやまのてせん山手線のE231系など。いろんな列車を走らせていたらもう時間は5時。いつも思うことだが、気付くともう夕ごはんの時間だったりする時もある。時間が足りないのだ。

「ヤベ。家帰らないと。ナガシイじゃあね。明日学校でな。」
時間に気付いて萌もえが離れのドアに向かう。

「6月14日忘れんなよ。」
ドアを半開きにした状態で行った。

「忘れねえよ。これ見ちゃったんだから。」

パンフレットをかざすと、ニツと笑って帰っていった。

「岸川きしかわかあ……。」

裏付ける思いで、つぶやいた。

人物
ながしまともき
永島智暉
さかくちもえ
坂口萌

誕生日
誕生日

3月11日
10月3日

血液型
血液型

O型
A型

身長
身長

161cm
159cm

1 列車 鉄道少年（後書き）

感想がございましたらお書きください。

2列車 見に行きます 文化祭

6月14日。岸川高校きしかわの文化祭に向かった。岸川高校は遠州鉄道えんてつの助信すけのぶから西へ歩いて25分ほど。岸川きしかわの正門についた時刻は9時03分だった。もうすでに受け付けは始まっている。受付をスルーしてからはすぐに鉄道研究部てつどうけんきゅうぶが展示を行っているというホールに向かった。

ホールは人でたくさんだ。その人が集中しているところには建物が建っているとても小さい風景が見える。家の離れでよく見なれたレイアウトだ。

「家のより小さいな。」

「ナガシイ家ちのは大きすぎるだけじゃないの。」

「いや、そうかもしれないけど……。」

「ほら、なんか走って……。」

汗が出てきそうだった。そう言う頃には他の子供に混じってかじりついてそれを見ているからだ。でもいつものこと。萌もえにとっては普通のことと受け止めた。永島ながしまを追ってモジュールとこころにした。

「313系だ。これ東海とかで走ってる車両しゃだぜ。」

「これだつて毎日走らせてるじゃん。新快速だか、普通で。知ってるよ。」

「ああ、そうだった、そうだった。」

今度は313系の走っていった方向からまた列車がやってくる。前面が白くオレンジと緑のラインが入っている。湘南色しやうなんしきという塗装うすまだが、その車体にはステンレスボディーの部分が多い。211系という車両だ。

(211系でシングルアーム。こんなの見たことないけど……。) カープを曲がりきってきた6両編成の車両の後ろにはさつき走っていた313系がくっついていて。こんな編成あるのだろうか。僕は初めて見る編成に少し違和感いわかんがある。だが、走っている車両にそ

んなことは関係ない。他の子供がやっているように列車の進行方向しんこうほうに先回りする。ここで見ていたいなあというところに来たら、しゃがんで電車が走っている高さを目線を合わせる。こうやってみると模型でも本物の様に迫力を感じるのだ。その時萌もえは僕の背中側にある方に目線を向けていたらしい。先にあっちの列車が来たみたいで肩をつついた。

「「サンダーバード」だよ。」

目線をそっちに替えて、「サンダーバード」を見る。だが、その列車は「サンダーバード」と違って顔が赤い。

「「サンダーバード」じゃなくて「スノーラビット」だよ。「はくたか」、「はくたか」。」

「えっ「はくたか」ってこんなに顔真つ赤の車両やうもあるの。」

「ああ。北越急行ほくえつきゅうこうが持つてる車両やうは顔真つ赤だよ。」

「へえ。そうなんだ。」

理解しているのかどうかは知らないけど……。目線を戻して、さっきの列車が通過するのを待った。通過すると走り去った方向に顔の向きを変えて次のカーブを曲がって姿が見えなくなるまで見送る。見送り終わるとまたつつかれた。

「「雷鳥らいちょう」。「しらさぎ」。「どっち」。」

むこうから走ってくるのは485系という特急電車。この手の車両には先頭にこの車両は「特急」と掲げている。そこを見ればいい。けど、今走ってくる車両にはそんなどこにもない。おまけに流線型の顔をしている。

「お前、今分かってて聞いただろ。」

「えっ……。はあ。「雷鳥らいちょう」でしょ。パノラマだったから分かりやすかったよ。」

「だったら聞くなよ。」

「いいじゃん別に。ナガシィに比べたら鉄道知識ないんだから。」

「いや、そうだけどさあ……。」「すると今度は、」

「おい、ハクタカ。「雷鳥」編成違う。4号車と5号車と8号車ドアの向き逆。」
後ろから声を張り上げられる。

「今更いいじゃないですか。そこまで見てる人いませんよ。」
さっきの人にハクタカと呼ばれた人が答える。すると、さっきの人とは別の人が「雷鳥」に手を出した。走っていた車両を手で捕まえ、モーターがはいつていると思われる車両を抜き取った。それを抜き取るとそれまで走っていた「雷鳥」は動かなくなり、その人はさっき後ろの人が指摘していた車両の向きを正常な向きに直していった。そして一番最後にモーター車を線路上に戻して、分離した車両を連結しなおしていた。

「膳所さん。そこまでしなくても……。」
「ハクタカの場合はおそこまでしてやないとダメ。名寄もこれからそうすればいいじゃん。」
さっき「雷鳥」を直した人は膳所、編成が違つと指摘した人は名寄というらしい。

「はあ……。」
「名寄。次「立山」行くから、内回りにこれ並べて。」
「うわ。来たよ「立山」。」
今まで313系が走っていた方は「立山」という列車に置き換えるらしい。この名前も初めて聞く列車だ。だが、並べているところをよく見ていると見たことのある車両だった。家の車両庫にある「急行ゆのくに」というのと同じ車両だ。

「ちゃんと並べるよな。」
「まあ、ハクタカとは違って編成間違つことないだろ。」
「いや、名寄の場合は間違い方がひどい。上野でもよく解るぜ。」
「あつ。外回りあつち向きなのをこつち向きで入れちゃった。」
「ほらな。」

「八八。そう言うことが。」
ちよつとの間中のやり取りを聞いているといろんなことが分かる。

名寄なよろという人は鉄道のことはよく解っているがケアレスミスが多い。「立山たてやま」を渡した上野うえのという人は鉄道にはそんなに詳しくないらしい。膳所せせという人はパーフェクト……。そんな具合だろう。

また今度は、

「ナヨロン、そつちに313系の「ムーンライトながら」ある。」
女子の声だ。この部活には女子もいるみたいだが、言ってることは全然違う。313系はいくら使われても特別快速とくべつかいそくまで。「ムーンライトながら」に充当されるわけがない。そして、今言いたかった車両は……。

「「ムーンライトながら」って373系で運転してるよねえ。」
当の本人も萌もえにツッコまれるとは思っていないだろう。

「そんなのではないぜ。」
「あれないっけ。」

すると後ろからまた別な人が出てきて、

「313系の「ムーンライト」……じゃなかった。えーと313系の……あーもう。373系の「ムーンライトながら」。」
「ようやっとその答えにたどり着いた。」

「違っつて分かってるのに2回も間違っかな。」

「さあな。あの二人は天然っつてところかなあ。まああれでマニアだったらただのバカだけど。」

「……。ナガシィ。他のところも見に行かない。なんか面白いのやってると思うし……。」

「ヤダ。終わるまでここにいろ。」

(やっぱり……)

しばらくの間同じところにしゃがんでみていたため足が痛くなってきた。座ろうとしても電車のほうがさせてくれない。今名寄なよろと上野うえのという人たちのほうは489系の「特急あさま」と「特急白山たけはくしやま」がEF63という機関車にプッシュアップしてもらって走っている。この情景はかの有名な碓氷峠つばきとうげでしか見れない光景だった。一方ハクタカという人がある方は883系の「特急ソニック」と787系の

「特急つばめ」が走っているが、その「ソニック」のほうだけ「クソニック」と呼ばれているのはなんでだろうか。

「さつきから「クソニック」ってよく言ってるけど、「ソニック」ってそんなにクソなのかなあ。」

言い終わると叫び声が聞こえる。

「ああ。この「クソニック」また架線柱喧嘩売りやがって。」

「本当にクソだな。つうか誰だよ。内回りに「クソニック」出したの。そいつ処刑だ。」

「あのお僕ですけど、何かいけないんですか。」

「犯人ハクタ力だつてさ。ダメに決まってるだろ。内回りに置いたら「クソニック」が架線柱に喧嘩売りにいって自分から脱線するから。「あずにゃん」もそう。」

「じゃあ、なんで「スーパーおおぞら」は内回りに出しても何も問題ないんですか。」

「あれはKATOの振り子機構が少ししか働かないからいいんだつて。だけど「あずにゃん」と「クソニック」と「しなっちの副作用」はマジで副作用するからダメ。」

「「あずにゃん」と「クソニック」は何言いたいか分かりますけど、最後の「しなっちの副作用」ってなんですか。」

「えっ、「しなっちの副作用」は「しなっちの副作用」に決まってるんじゃないか。」

「全然答えになってません。つうか善知鳥先輩それ遠回しに解らないうって言ってますよね。」

こういうやり取りが聞こえてきた。

「あの人が言ってる「しなっちの副作用」って「しなの」のことだよねえ。」

「ああ、多分な。」

なんか分かってはいけない気がするのなんでだろう。

ずっとホールにいて2時間。もうほとんど終わってしまった。昼でも食べに行こうかと誘われて、他の展示に行ってみる。そこで見

たのはポケットモンスターに変装した人や、気ぐるみを着ている人。今の高校生というのはいさかい感じなのだろうか。そんなことを思いながら、あるクラスのクラス展に入って焼きそばを買ってまたホールに戻った。

戻ってみると名寄・上野周回のほうには貨物列車が走っていた。その先頭に立つのはEF210。桃太郎。後ろに続いているコンテナ貨車は17両。貨物列車としてはふつうであるが、家で走らせている26両の高速貨物列車と比べてしまえば少し短い。その隣に走っているにはEF66が牽引する寝台特急。ヘッドマークは「あさかぜ」となっていた。編成は7両。正規の14両の半分であるが、ツツコまないことにおこつ。一方のハクタカチームはEF510が牽引する「寝台特急カシオペア」と「寝台特急北斗星」が我が物顔で走っている。どちらかといえばこちらのほうが客の目を引いている。

「あーっ。ハクタカっ。カシオペア」止めてっ。

叫び声が出た。その叫び声はさっきギャグを言っていた人だ。止めてと言った「カシオペア」を見てみると、機関車の動輪が線路から外れており、その車輪の下に何かを巻き込んでいた。

「止めました。」

「ちよつとサヤ。北斗星」も止めてっ。ぶつかると。

と言った時にはもう遅かった。「北斗星」は「カシオペア」が待ちこんだ謎の物体Aに突っ込んで乗り上げる形で脱線した。そのおかげで「北斗星」を牽引していたEF510は少しばかり態勢を崩した。次の瞬間。EF510は観客側にグラッと倒れて落下していった。

すかさず手が出た。落ちていくEF510をダイレクトキャッチ。床に落ちる手前で受け止めた。その頃には部員の人々が脱線した「カシオペア」と「北斗星」の復旧に駆けつけており「カシオペア」を復旧させていた。それに混じってEF510を「北斗星」が走っていた外回りの線路に乗せて、

「あの。お手を触れないようにお願い……。」
そう聞こえた時には六つある車輪を次々と乗せていった。

（なんだ。こいつのなれたような手つきは。家で模型やってるとしか思えない……。これは将来期待できるかも……。）

「触れちゃいけないのは分かってますけど、EF510（こいつ）を助けたついでです。」

全ての車輪を乗せ終わってから口を聞いた。その現場には少しづつ
らくなつたため、萌を促して場所を移動した。

「毎日やってるからって。あれは将来来るって勘違いされたんじゃない。」

あきれた。でも、その顔には決めつけているというのも垣間見た。

「いいじゃねえかよ。やつちやつたもんはやつちやつたんだから。」

それよりもここで「北斗星」が来るの見てよう。」

永島ながしまに続いてしゃがもうとすると、対角線のコーナーで同じように
している人を見た。明らかに中学生。そういう人だった。

（同じような人もいるんだなあ。ナガシイと同類……。）

「北斗星」を見て目を輝かせている永島ながしまを見てふと笑いがこぼれた。
「どうした。何か笑えることでもあったか。」

「いや。なんでもない。」

「何でもないわけないだろ。笑えることが何もないのに笑うって
うのは変人の証。」

「変人とも限らないんじゃないか。思い出し笑いつていうのがある
んだから。」

「……。」

「ほら。そっち向いてなくていいのか。「北斗星」が来たぞ。」

萌もえに言われて振り向いてみると「北斗星」はすでに僕の前ではなく
カーブを曲がっていつてしまっていた。

「あっ、この野郎。」

「八八八。引つかかった。」

「……。」

「抑えろつて。家でいつばい見れるだろ。」

「見れるけどさあ。EF510の北斗星色での「北斗星」はここで見れない気がして。」

「なんで……。あれ、ナガシイ家の「北斗星」って私のあげたカシオペア色のほうだったっけ。」

「そうですね。萌からもらったカシオペア色ですよ。」

「あれ、そうだったっけ。「北斗星」のJR北海道仕様のやつはあげたの覚えてるんだけど、他の何かとごっちゃになってわかんない。」

「確か。お前からもらったやつは「北斗星1号・2号」のセットと「北陸」の客車セットと「能登」の9両セットと「EF510のカシオペア色」だった。」

「あれ……。なんかナガシイにワムの34両セットあげた記憶があるのは……。」「それ当てたのは駿兄ちゃん。駿兄ちゃんがそれもってきた時に見せてって最初に言ったのが萌だった。それだけ。」

「15時近くになると他の客をひいてきて、だんだんいづらくなってくる。ちよつと前にホールを出て、家への帰路についた。」

「文化祭が終わるとすぐに片づけに入る。今まで大きなモジュールとプラレールで埋め尽くしていたホールは何もない状態に早変わりしていく。」

「今年は優秀賞かあ。去年グランプリだったけどおしかつてね。」

「まいったか。生物部死ねばいいと思う。」

「おいおい。過ぎたこと悔やんでもしょうがないだろ。それより片付け手伝え。」

「ねえ膳所さん。生物部に聞こえるように死ねって叫んでいいですか。」

「やめろ。それやる前に片付けろよ。」

「じゃあ片付け終わったら叫んでいいんですね。」

「いや、そうじゃなくて。」

「おい、善知鳥。話してばっかで手が止まってるぞ。」

「ごめんねアヤケン。気をつけるよ。」

ふつ々の学習机を「はっ」という声とともに持ち上げる。

「でも、今日絶対岸川くるっていう人見つけたよ。」

「誰だよ。」

「あの「北斗星」が脱線したときに、EF210（モモちゃん）を危機から救った人。」

「えっ。善知鳥の言っていたいと従弟じゃないのかよ。」

「だって海斗はもう大阪で行く高校も決めたって言ってたし。それに今日はちよつと見に来てただけだから。」

「にしては最初から最後までいたよな。あいつと同じで。」

「その人がここに来るっていうのか。でもそれは併願じゃないか、併願校落ちたらの話だろ。」

「そうだけどさあ……。なんか単願できそうな気がするんだよねえ。」

「こらッ。机持ったままそこで話してたら同じだろが。」

「あつ。すみません。」

その頃、

「ナガシイ。今日楽しかったね。」

「ああ……。萌。俺、行く高校あすこに決めた。」

「他の高校とか見てから決めた方がいいんじゃない。」

「いや、俺にはあすこしかない。それに……。あすこだったら楽しめそうだ。」

7月。

「文化祭を見に行った後はテストかあ。」

萌は小さくため息をついた。

「ナガシイはいいよねえ。勉強しなくていいんだからさあ。」

「さすがにそれは無理。1時間くらいは勉強しないと。」

「それでもいいじゃん。塾行き始めたら定期テストぶつづに200

点いくようになったし。何か覚える秘訣ひけつとかあるの。」

「秘訣ひけつなんてないよ。それに萌もえがこれやったら死ぬと思う。」

僕がやっている勉強法とはテスト1時間ぐらい前になってパニックッ
ている状態でノートもしくは教科書に目を通すこと。ここではそれ
だけやって数学の問題集などはあらかじめやっておき、ここで目を
通す。といった具合。もちろんこれができるのは1時間目のテスト
だけで2時間目、3時間目のテストは10分間の休み時間だけでこ
の作業をする。

「そりゃ死ぬと思うよ。ナガシイのやり方で覚えられる人のほうがす
ごいと思うから。」

「人をエスパイみたいに言うな。」

「永島ながしま。今度のテスト勝負しようぜ。」

そう話しているときに話しかけてきたのは友達の宿毛佑真すくもゆうまだった。

彼とは中学校からの中で、定期テストでは毎回勝負している。勝敗
は五分五分。塾に行く前は負け続けていたが、塾に行き始めてから
は勝ち続けている。

「宿毛すくもも懲なぐりないよねえ。勝てっこないよ。」

「いいだろ。それに勝負する前から負けるって思うのは嫌だ。今回
は俺も自信あるんだ。合計点勝負しようぜ。」

「ああ、いいよ。」

「ねえ、宿毛すくも。宿毛すくもってテストの時どうやって覚える。」

「えっ。俺の場合は、とにかく実践かなあ。問題集なんか買って、
まずその問題集にやらずにノートにやる。やり終わったら採点して、
次に問題集にやって、また採点。そんな感じかなあ。」

「その方法でナガシイに負けてるってどうよ。」

「まあ、少し腹立つけどな。でも、結果がそうだったんなら、もっ
と頑張ればいいだけの話。」

「もっと頑張っても勝ったことないじゃん。」

「あのなあ。もっと長い目で見るって。永島ながしまの場合はすぐに忘れる。
短期記憶に頼ってテスト乗り切ってるんだから。」

「それに、学調とかじゃ、あれ完全に負けてるから。国語19点とか取ったことあるし。」

「それ1年の話だろ。2年生の時は26点取れてたじゃん。」

「上がったには上がったけど、国語が弱点ってことには変わらないじゃん。」

「お前もつと本とか読もうぜ。そうすれば読解力上がるから。」

「なんか今更って感じるんだよなあ。俺の場合本はアニメにして読んでるからなあ。」

「……ナガシイの場合本を読むと想像力が発達するから。別に悪いやり方じゃないんだけどね。」

「そうだったな。永島サスペンス系以外は速く読めないもんな。」

「ふつうおかしいよねえ。」

「おかしくて悪かったな。」

「まあまあ。じゃあ、永島。テストの時待ってるぜ。」

宿毛はそう言い残して、自分の席に行った。

「ナガシイ。今からもテスト期間も勉強せずに離れにコンツメですよ。私なんかそれ出来ないからいいよなあ。」

「懂れるんなら、ずっと「デュエモ」とか「バトルアーマー」のゲームやってればいいじゃん。」

「見つかったら没収されるんだけど。」

「……そ、そりゃドンマイ。」

数日後。

「永島。国語何点。」

「37点。」

「八八。国語では勝った。38点。」

「勝ったって。まだ国語だけだろ。この後どうなるかだって。勝負は合計点だろ。」

「そうだったな。わりい。」

「そう言い残すと自分の席に戻っていく。」

「ナガシイ37点か。私23点。」

「あと2点で半分じゃん。せめて半分取ろつぜ。」

「まあ、この調子なら合計110点ぐらいだと思っし、またゲーム解禁かな。」

「よかつたな。」

「あつ、そうだ。ナガシイ。電車でGO！の新快速姫路行き。あれどうしても尼崎で数秒遅れちゃって高得点でないんだよねえ。ナガシイだったらやりこんでると思うから、今度やってくんない。」

「マジかよ。それ俺も苦手なんだ。特に尼崎。あれって塚本で早く通過しそうになってわざと速度落とすと痛い目見るんだよねあ。停車位置550mまで130km/hでツッコんで一気に減速っていうことやらないと間に合わなくなるからな。」

「でもそれやるとどうしても±(プライム)30cmに収められなくなる。」

「いや。そこはうまくやればどうにでもなる。後は時間との闘いつてところか。」

「ナガシイ。それで何点いった。私23万。」

「24万。」

「あつ。じゃあナガシイでも私の記録更新無理かあ。」

「無理だな。」

そのまた数日後。

「えー、これはオープンキャンパスに行った時の感想を書く用紙です。この夏の間公立を少なくとも2校。私立も1校見て……。」

その説明が終わるとあくびと声が出た。

「あーあ。決まってるのに公立も見に行かなきゃなんないのかよ。」

「面倒くさそうだね。」

「できればずっと家にいて模型いじってるほうがずっと楽しいんだけど。」

「アハハ。ナガシイらしいね。」

「そういえば、萌はどこに行くか決まった。」

「えっ……。公立はいける学校だったらなんでもいいんだけど、

私立なら宗谷にでもしようかなあって……。」

（何言ってるんだよ。私。）

「へえ。萌らしいな。夢に近づくためなら宗谷に行くのが一番か。」

（ダメだ。私も岸川行きたいなんて到底言える状態じゃない。）

「うん……。」

「自信持てて。実をいうと俺のほうが受かるかなあって思ってる。」

「

「それ絶対無駄。ナガシイ内申点高いに決まってるじゃん。」

「それでも心配になるときない。」

「そりゃ少しはあるけど、ナガシイは大丈夫だって。ナガシイの進

路はみんなが意外に思うほどレベル低い進路なんだから。」

「……。」

「そうでしょ。」

「それもそうか。変な心配かもな。」

笑っている永島の顔がなぜか遠くの人のように思えた。

この回からの登場人物

宿毛佑真

誕生日

4月7日

血液型

B型

身長

164cm

m

2列車 見に行きます 文化祭（後書き）

これにはタイトルの前に 列車と冠していますが、大して意味はありません。ただ、順番が分かりやすければと思ったからつけました。もしほかのシリーズになったら Mに変わるかもしれません。

3列車 夏 冬

今は夏休みの真ただ中。公立のオープンキャンパスはいよいよ行つて、そこで聞いたことはすぐに頭の中から拭い去つた。8月の第3週。岸川きしかわのオープンキャンパスがある。そこに行つて体験授業を聞き流して、自由に見学できるときにまた鉄道研究部の展示に行つてみた。

展示を行つていたところは昇降口じやうこうぐちのある2階。昇降口から右にかじをきつてつきあたる部屋だった。ドアを開けて中に入つてみると、文化祭より小ぶりのモジュールが展示してある。中にいたのは文化祭の時に見た人たちと同じように岸川きしかわを見に来た中学生。部員の数は文化祭見たときよりも少ないと思つた。今走っている車両は内回りは何か分からないが、外回りは253系「特急成田エクスプレス」であることはすぐに解つた。

「「253系」だ。」

声を上げたくなくても上がつてしまふ。電車を見ると出る癖。しよ
うがない。声を上げたのが影響したのか、目線が自分のほうに向い
ているがお構いなし。「253系」ネククスに近づいて、間近で「253系」ネククス
が走り去るのを見た。

その子の姿と反応の仕方を見て、鉄研部員は声をひそめて、
「おい、善知鳥うつくし。あの子なのか。善知鳥うつくしが言つてた絶対に鉄研てつけんに入
るつていう中学生は。」

「よく覚えてないんだよ。顔つきとか。」

「おい、ふつう覚えてるだろ。物忘れひどすぎ。」

「あの子ですよ。見かけなかったのつて11時ぐらいから30分く
らいの間でしたから。」

「アヤノンはよく覚えてるね。」

「外回りだったし、気付きやすかつたつていうのもありますから。」

「へえ。」

「善知鳥先輩。へえじゃなくて……。」
また、

「あの子電車で詳しいんだな。まるで木ノ本や留萌みたい。」

「友紀はまだ分かってないなあ。別に詳しくないよ。」
「253系」
「253系」

「そうそう。」
「253系」
「253系」

「そうか。あたしは分かるとしたら「ドクターイエロー」くらいしかないのに……。2人もあそこまで詳しくければ入るんだよね。あの子も鉄研に入るのかなあ。」

「蘭。まだ鉄研に入るって決めたわけじゃないって。さくら行こう。」

「えっ。ちよつと木ノ本、留萌。待って。」

しばらく253系に見入っていたら内回りは681系「特急はくたか」に変わり、やがて外回りはEF81が牽引する貨物列車に変わった。それに目線をあわせてみると誰かが僕に話しかけた。

「将来鉄研に入ろうって思ってる。」

おそらく文化祭の時にしているのかもしれないけど、僕のほうはそれがだれかなんて覚えていない。誰だかわからないけど、

「はい。」

とだけ返事をした。

「おい。この子将来の鉄研部員だって。」

「マジ。こんなマニア部入ってくれる人いるの。」

「よかったな。今年は2人だったから来年はどうなるかと思っただけ。」

「よし。まずこれで1名は確保したわけだ。1人と言わずに来年は5人くらいドンと入部があった方がいいけどな。」

「5人なんて。そんなたくさん入部するわけないだろ。3人くらいで十分だよ。」

「多いほうが楽しいじゃん。ねえ君。」

すると何かをかぶせられた。手を当ててみると帽子だ。それもただ

の帽子ではない。運転手や車掌のかぶる制帽だ。

「似合うって。これかぶりたかったら鉄研こいよなあ。」

「それだけで来るかっていうの。ていうか最終的に決めるのは本人なんだから、本人に選ばせないと。」

「でもそそのことはできるのよね。」

「確かにそうだけど・・・。」

「もう決めてますから。」

と云ってかぶせられた帽子を取った。

「もうここしか来るところはありません。絶対にここに来ます。」帽子をかぶせた人に渡して、教室を出た。もうしばらくいればと止められたが、もう帰りたいと言って断った。だが、一つ次の心配がやってきた。もし僕一人の入部だけだったらどうしよう。でも、そんな心配は後か。

それから月日が流れて2月。岸川高校の受験日は2月9日。その日までにやれることをやっていった。

「永島。お前って岸川志望だったんだな。」

宿毛が話しかけてきた。

「何。その言い方。知らなかったの。」

「いや、多分そうじゃないかなあとは思ってたんだけど、本当に同じ進路とは思ってなかっただけ。」

「同じ進路。」

「ああ、俺も北星落ちたら行くところ岸川なんだ。あすこだったらものすごく適当にやらない限り留年はないからな。」

「北星併願かよ。落差ひどくない。」

「そんなのどうでもいいって。俺北星は受かるかどうか知らないけど、岸川だったらどんなバカでも受かるからな。」

その声は周りにも聞こえていた。隣にいたクラスメイトが意外そうに話しかけてきた。

「永島も宿毛も私立岸川狙ってるのか。」

「ああ。」

「ウソ。永島も宿毛も成績いいよねえ。」

「ああ。高校のほうに送られる1学期の成績永島が34で、俺が36。」

「そんなに成績よくて岸川行くの。」

「俺はまだ北星狙ってるけどな。永島は岸川単願で狙ってる。」

「えっ。もったな。それで親なんか言わないの。」

「言わないよ。進路は全部任されてるから。だからどこ行くのが自由。」

「自由でも岸川以外行く気ないだろ。鉄研やりに行くんだから」

「えっ。鉄研やるためだけに岸川に行くの。もつと上の学校とか狙

わないわけ。」

「いや、さっき言ったじゃん。岸川以外行く気ないって。」

「二人とも俺より成績いいのにレベル低いなあ。」

「俺が思うに成績いい奴って全員レベル低い高校言って自分の好き

なように高校生活送るもんだと思うけど。」

「いや。それは永島と宿毛だけだと思う。」

この話が終了すると、

「もう願書は出したんだしあとは受けに行くだけ。宿毛テスト1時

間前になつたらよろしく。」

「おいおい。永島受験会場違うってこと考えとけよな。」

「あつ……。考えもしなかった。」

「おい。ふつうに考えろよ。俺は併願。お前は単願。受験会場が違うって考えてふつうじゃないか。」

「ナガシイはふつうじゃないからそういうこと考えないの。」

クラスメイトと入れ替わりに話に入ってきたのは萌だった。

「言われてるぞ。ふつうじゃないって。」

「結構前からふつうじゃないのは自覚してるけど。」

「。。。。。」

「ハハ。ねえ、ナガシイ。勉強してる。」

「してると思う。」

「うっん。家で模型と遊んでると思う。」

「うん。その考え方正しい。なんか勉強すると体が拒絶反応を起すというか。」

「それはウソでしょ。ただ勉強したくない言い訳じゃん。」

「……。はい。そうですね。」

そんなこんなで2月9日。岸川きしかわ高校を単願で受験。その数日後には……、

「あー、受かったかどうか心配だ！」

「ナガシイ心配しすぎ。内申34あって、岸川きしかわ単願。受かんないわけないじゃん。」

「それでも受かってるかどっかは気になるだろ。」

「それは……。」

（なんでだろう。ナガシイにここまで受かってほしくないって思ったことなんて……。いや、そう思ってちゃだめだ。ナガシイは岸川きしかわで鉄研やる。それを止めちゃいけないんだ。そうしなきゃいけない……。でも……。んっ……。）

（高校からは萌もえとは一緒じゃないのかぁ……。えっ。俺何考えてんだよ。宗谷そつやに行きたいって言ったのは萌もえの意思じゃないか。それを止めるなんておかしい。二人とも自由に生きて、もしまた……。その時。その時そうすればいい。）

そう思いを巡らせている間に自分たちの順番がやってきた。僕は岸川きしかわに萌もえは宗谷そつやに合格。

（これで本当に……。）

（……。今は……。でも、いつか言わなきゃ。私が目指してるのはこんなのじゃない。今からでも間に合う……。）

そして、合格通知をもらった日の放課後。

「ナガシイはやっぱり岸川きしかわ合格おめでとう。あすこなら毎日楽しそうだね。」

「ああ、だろうね。萌もえは宗谷そつや。お互い夢に前進だな。」

「そうね。これからお互い夢に向かって歩いてくんだよね。」

「うん。俺は電車の運転手。萌は幼稚園の先生。この二つをかなえるためにはそこに行くのが一番の近道になるのは間違いないんだからな。」

「……。そうだね。」

何かかわす言葉がなくなつたみたいに黙り込む。

「ナガシイ。鉄道研究部って何するんだろうね。」

「よくわからないけど、どっか行ったり文化祭とかで展示やつたりするんだって。」

「よくわかんないって……。それでも入る部活。」

「入る部活だよ。俺岸川行かなかつたら行く学校ないんだから。他の学校はただのトゲだよ。」

「内申34あつてそういう人も珍しいと思うけどね。」

「そうかあ。俺には全部トゲみたいに見えるけど。」

「違うでしょ。ナガシイには岸川はとげを覆うクッションがあるけど、ほかの学校にはそのクッションがないからおりたくないだけじゃない。」

その描写を想像してみる。ヘリコプターに乗っている僕はいま下を見下ろしている。下にはたくさんのおとげ。それもとても鋭い。ちょうど中心ぐらいにはとげが突き出ていないところがある。そこに飛び降りようとしている。

「うーん。当たってるかも。」

「かもじゃなくて当たってると思うよ。」

それから1か月と数日。今執り行われているのは伊奈中学校卒業式。中学3年生全員の名前が順番に点呼されて、卒業証書を授与されていく。僕も卒業証書を受け取って、自分の席に戻った。

（ここで、萌と話すのも今日が最後か。）

心の中で分かりきっていることを思った。

（ナガシイと毎日話せるのも今日が最後かあ。）

萌も分かりきっていることを思った。

卒業式が終わると3年生は保護者と2・1年生に見送られて、体育館を後にする。体育館の次は学校の外へ。あるところまで歩いて全員水入らずになる。

「ナガシイ。帰ろ。」

「お前友達とは話してかなくていいのか。」

「綾たちとか学校同じだし、また会えるし。」

「そう。じゃあ、行くか。」

自分には友達はそんなにいない。別に悲しくもないし、何の未練もない。ただ一つだけ僕を悲しませるのは萌とは違う学校になるということだけだった。

「これから違う高校だな。」

「嫌なの。」

「いや、そういうわけじゃないけど……。今までずっと話してたのに、これからは話せなくなるんだなあって思っただけ。」

「……。それはそうだけとさあ。でも、県外の高校とか行くわけじゃないし、会おうと思えばいつでも会えるわけだし。」

「それもそうだな。ごめん。なんか暗くなるようなこと言って。」

「気にしないで。ナガシイのことよく分かってる人だから。」

「そうだったね……。」

しばらく黙って数歩。今日はいつもの帰り道がどうしても長く感じてしまう。

「なあ、萌。文化祭とか見に来いよ。待ってるから……。」

「暇だったら行くね。」

「いつも暇なくせに。」

ちよっとの間お互い黙っていた。

「ナガシイ……。創るなよ。あと頑張れよ。」

何をつくるなということなのだろう。でもだいたい想像はつく。

「分かったよ。そっちこそな。」

「……。うん。じゃあね。私こっちだから。」

「おう。じゃあな。」

手を振って僕は萌もえと別れた。その後ろ姿を見送っているとため息が出た。

(結局言えなかったなあ。でも、いつか言わなきゃいけないことか……。これ、本当にナガシイ許してくれるのかなあ。やっぱりウソついてきたから許しちゃくれないのかなあ。)

永島ながしまの歩いて行った方向を見て、考えを巡らせていた。

その時僕は……、

(結局えいなかったなあ。好きって……。大丈夫。萌もえはほかの男子には……)

家のところまで来てそれを思う。ちょっと萌もえの家のある方向を向いてしばらくそのままにいる。

(言えるチャンスはいくらでもある。また、その時が来たときに……)

二度と訪れることがないだろうと思う二度目を心の中で思う。だが、この先に待っていた展開は少なくとも僕には想像できなかった。

3列車 夏 冬（後書き）

気まぐれ投稿みたいになってすみません。
これからもこのような不定期投稿ですが、読んでくれる人には感謝。

4列車 スタート 高校生活

中学を完全に卒業して7日後。4月7日。僕は真新しいワイシャツに腕を通し、ネクタイを締め、黒いズボン履き、ブレザーに身を包んだ。

岸川高校入学式。^{きしかわこうこうがくしき}1年生は9クラス。そのうち1クラスは中高一貫コース。^{ちゅうこういつかん}2クラスは特進か^{とくしん}コース。残りの6クラスがふつうにやっ
ていくコースとなっている。僕は1年5組で、同じ中学校から来た人は僕を含め3人。そのうち一人は僕と同じクラスである。彼とは親友で名前は宿毛祐真^{すくもゆうま}である。もう一人は名前も顔も知らない。

「あーあ。俺は北星^{ほくせい}落ちてここになっちゃったけど、またお前と一緒だな。」

「そうだな。」

「これからもよろしくな。またテストとかになったら勝負しようぜ。」

「ああ。でも・・・、始まってそうそうテストの話っていうのもな

あ。」

「テストの話を引き合いにしたのは悪かった。いきなり勉強の話だと遊べなくなるってか。」

「うん。」

「お前は十分遊んでるって。受験勉強だつてろくにしていって我慢してただろ。」

「それでもやったって。受験前の1日前に1時間くらい。」

「それをろくにやってないっていうんだよ。まあ、私立なんて受からないほうがおかしいってところあるからそれでも合格したならいいか。」

「そつ。そういうこと。」

「八八。永島^{ながしま}らしいな。永島^{ながしま}の場合は結果しか気にしないからな。

その頭ある意味うらやましいよ。」

「何。宿毛俺の頭みたいなほうがいいって思ってる。」

「自分の好きなことしか頭に入ってこないだもん。そこまではつきりしてる頭だったら何かと苦労することがないのかなあってこと。」

「そうかなあ。」

「じゃあ、考えても見ろよ。お前高校決めるときここに鉄研があるから来たんだろ。他のところまともに考えてたか。」

「ああ、確かに。」

(分からせるにも一苦労かよ……)

体育館に移動しながらこんな話をする。今日は部活紹介があるそう
だ。まあ入る部活も決まっているのだが……。

「永島はどこをどう考えたって鉄研だろ。俺どの部活にしようかなあ。」

「宿毛部活入ろうって思ってるの。」

「いや。出来れば入らないほうがいいなあ。まあ、強制だったら適当なところ入つといて活動に行かないっていうのも一つの手だな。」

「入るんだったら活動しろよ。」

「もう部活動にはうんざり。永島は運動部に入ってたからそう感じないんだって。」

「確かに運動部じゃなかったけど、情報処理部でも後々面倒くさくなつたぞ。」

「お前その時代から遊んでたんじゃないのか。」

「うん。インターネットいじってKATOとかTOMIXのインターネットで好きな車両の再生産とかいつかなあってみてた。」

「やっぱりやるのはそれかあ。ちゃんとタイピングとかやってたんだろうな。」

「やってはいたよ。2年生までに表計算2級取ってスピードは3級まで取った。」

「……なあ、永島。気づいてはいたけど、お前活動と遊びがごっちゃになってないか。」

「えつ。」

永島ながしまのこの反応には正直困った。

中高一貫ちゅうこういっかんコースをのぞくクラスの生徒全員が集まったのが13時10分ごろ。始まったのは13時20分きっかりだと思いたい。まず始まるのは運動部の紹介。運動部なんて入る気はないし。運動部の部活紹介はとにかく耳から入れて耳から出した。頭をただ通り過ぎていくだけ。なんといつているのかも忘れた。

何分かつた後に5分間の休憩をはさむ。これが終われば文化部の紹介。まず一番に生物部の紹介。その次に鉄道研究部の紹介となっていた。

（これ以外聞かなくていい。）

そして、いよいよ鉄道研究部の紹介。出てきた人は2人。1人が演説台に行ってもう1人は胸の前で何かを広げた。あの広げた物は間違いなく鉄道模型である。その車両が何なのかは分からなかったが、何かと白が強調される車体である。583系「急行きたくに」だろうか。その傍らで語っている人はこう言っている。

「僕たち鉄道研究部てつどうけんきゅうぶは3年生4人。2年生2人の計6人で活動しています。部費は年間14,000円と多少高いですが、年に一度臨地研修りんちけんじゅうと言う旅行りょこうに行つて東北とうほくなどいろんな所へ訪問しています。また地域からの要請ようせいで学校以外でも展示を行つております。…」

（部費は14,000円。それを差し引いても入る価値はある。いや。入らなきゃ岸川に來た意味がない。僕は勉強をここに來たんじゃないんだ。それは二の次。）

また別の人は、

（鉄道研究部かあ。私がここに來た半分の目的はあれ……。でも、女子が入つていいの。逆にそういう面でいじられたくないし……。）

それが終わるころ。僕の頭の仲は鉄道研究部のことだけでいっぱいになった。部活紹介が終わつて教室に戻ろうとするころ。宿毛すくもが話しかけてきた。

「頑張れよ。部費も高いみたいだし。」

「あんなの関係ないよ。関係すんのは、入るか入らないかだ。」

「それもそうだな。」

「宿毛は部活何にするんだよ。さっきはどうでもいいやつに入っとけばいいって言ってたけど。」

「なんていうかなあ。こういうときに限ってそういう部活って見つからないんだよなあ。」

「あつ、なんかわかる。自分に合ってるの探してる時って自分が気に入ったのは何か都合が悪くて、気に入ってないけど都合がいいっていうことだろ。」

「そんなところ。でもさっきの説明聞いて、俺情報部にでもしようかなあって思ってる。やっぱりこれからの時代パソコンいじれなきやついてけねえだろ。さすがに基本操作ぐらいはできたほうがいいかなあつて。」

「ふうん。」

「宿毛にそう返事を返すと自分の肩が少し重くなった。」

「どうした。」

「落ち込み気味の僕が少し気になったらしい。」

「なんかここまで来ると鉄研入るの俺だけなんじゃないかなあつて思えてきた。」

「なるほど。もし一人だったらお前が自動的に次期部長になるんだもんなあ。」

「俺部長なんて柄じゃないし。出来れば俺よりもしっかりしたやつが入ってくればいいなあつて。」

「ストライクゾーンの狭い要求だな。残念だけど俺は鉄研にはいかないぜ。部費14,000円なんて到底払えないからな。」

「そこをなんとか。お代官様。」

「他当たれつて他。」

このやり取りを見ている人がいた。すらりと伸びた僕よりも身長のある人が。

教室に戻ると担任から部活登録届の紙をもらった。顧問はうちのク
ラスの副担任安曇川正司先生らしい。部活登録届をもらうと時間は
すでに15時を回っている。全員10分間ぐらい自由にしていた。
その10分間が過ぎると遊びを危ぶむ宣言があった。

「ええ、これからは毎日ノート3ページやって出してもらいます。」

（マジかよ。）

（これじゃあ北星と同じじゃん。）

「土曜と日曜合わせて6ページを次の週の月曜日に出して、ゴール
デンウィークなどの連休中は1日5ページやって出してもらいます。
この勉強は絶対みんなのためになるからな。この高校生活でどこま
で頑張れるかが……。」

（知るか。）

その悪夢のホームルームが終わって……、

「永島。四ツ谷先生のあれ。どう思う。」

「俺たちを殺す気かよ。四ツ谷先生。」

「殺す気はないんだろうけど……。永島は当然やらないんだよな

あ。」

「やるわけねえじゃん。あのなのやったらいつか死ぬ。だから反抗
してノートは出さない。……。そう聞く宿毛は出す気あるのか。」

「ふと、これやったら永島を抜き返せるかなあって思った。」

「やってみれば。ノート出したほうがいいか出さないほうがいいか
はそれで決着がつく。」

「出したほうがいいだろ。……でもそれをすると対等じゃないか。
永島が出さないなら、俺も出さないでお前に勝負しかけたほうがいい
か。でないとハンデ大きいからな。」

「なんだ。結局宿毛も出す気ないじゃん。」

「だってやりたくねえもん。北星受かってたら俺も考えたかもしれ
ないけど。」

アルミ可撤出てきている下駄箱の下から2番目の手をかけて、ロッ
クを解除。手前に引っ張ると靴の入った口がぼっかりと開く。上履

きを靴に履き替え、両開きになっている昇降口を出る。その先には階段があつて10段くらいの階段の2本立てになっている。最初の10段を下ると進行方向右側にまた別の階段が通じてきている。

「あれ、永島そつちから帰るのか。」

「違つて。鉄研のあるとこ体育館のステージ裏つて言つてただろ。だつたらこつちから言つたほうがいいのかなあつて。」

「ああ、そういうことか。」

その階段を下ると1回の昇降口に通じる。そこを左に曲がつて2・3年生の駐輪場のあるところへ向かう。ちよつと開けたところに出ると右手側に2・3年生の立体駐輪場。左手側に体育館の入り口がある。その入り口からステージ側を除くとステージの上にか何か置いてあるのがわかる。

「ステージ裏じゃなくてステージ上じゃないのか。何か置いてあるし。俺が思うにあれの後ろに部室みたいなものがあるとは到底思えない。」

「どこにあるかなんて今はどうでもいい。それより、分からなかったら安曇川先生に聞けばいいよ。」

「そつちな。鉄研の顧問らしいし。」

宿毛は歩き始めて、僕にさよならを言つて帰つた。

案内があつた体育館ステージ裏に向かおうと思つたが、ここで路頭に迷つた。すると誰かが声をかけてきた。振り向いて見るとクラス
の・・・誰だつて。

「佐久間だよ。永島何してんだよ。」

「鉄研見に行こうかなつて思つてて・・・でも、ステージ裏つて言つてただけでどこにあるのか分かんないからここに突つ立つてるつていう感じだけだ。」

「鉄研つ。永島も鉄研はいんの。実は俺も鉄研に入ろつて思つてんだ。つつかそのためにここ来たくらいだし。どうせ見に行くんなら一緒に行こうぜ。」

「ああ。」

「でも……、場所が分かんないってというのは俺も同じなんだよなあ。」

「安曇川先生に聞けばいいじゃん。あの顧問だし。」

「なんでお前聞かなかったんだよ。」

「んつ。多分頭がそこまでまわんなかったんだよ。俺バカだし。」

職員室に戻って安曇川先生を呼ぶ。すると、居合わせた先輩らしき人を呼びとめた。

「鷹倉君。この2人鉄研見学に行くって言うてるから、部室まで連れてって。」

「はあ。アド先生。僕はただのパシリですか。あつ後、部活登録。」

「はいはい。分かりました。じゃあ連れてって。」

安曇川先生は鉄研部内ではアド先生と呼ばれているようだ。誰が命名したかは知らないけど、まあいいか。そして呼びとめられた鷹倉先輩という人はいかにも迷惑そうな顔をしている。しかし、その顔も誰かを見てからは変わった。

「絢乃。こいつら部室まで連れてって行ってやって。」

「ハクタカさあ。そういうことするのやめなよ。」

と言ってから僕達のほうに顔を向ける。するとため息をついて、

「分かったよ。場所教えるだけでも教えとくわ。だから案内終わるまでは待つてるよ。」

「ハイハイ。」

「で、ハクタカ。あたしの部活登録届も出しといてね。」

「お前なあ。」

「じゃあ、行こうか。」

絢乃と言った人は紙をハクタカという人に渡して、すぐに僕達を連れていってくれた。

「鉄研に入部かあ。君達ってなんか詳しいことってある。」

「俺は新幹線のことほだいたい分かります。」

まず佐久間が口を聞いた。

「俺は電車のことならだいたい……。」

「そう。電車のことと話をするなら先輩にいい人がいるんだけどなあ。」

話しながら、体育館のグリーンベルトを歩く。端まで来るとドアを開けて中に入る。そこで体育館用のスリッパに変えるように促されて、体育館内に入る。中ではバスケット部が準備を始めている。どこまで行くのかと思っているとステージの手前で左にかじをきつた。すると目の前にドアが現れる。そのドアを開けるとステージに上がるための階段。それを上ってステージに上がる。ステージを無視して、奥側の狭い通路に入る。そこをするとすり抜けて、さっきいたところの反対側に来る。その前にはまた階段。それを7段上ると小さな踊り場を介してまた階段。この位置まで来ると上に二つのドアがあることを確認した。絢乃という人はそこまで来ると二つあるうちの左側のドアを指差して、

「あつちがあたし達の部室。普段は鍵がかかっているから、来たいときは安曇川先生か吹奏楽の山科先生に鍵をもらって開けてね。これで部室の場所分かった。」

「あ……、はい。」

「それじゃあ。今日は活動ないから。不定期っていうのも不便だねえ。ああ、そうそう。名前言ってなかったね。あたしの名前は楠絢乃。とりあえず部員だからよろしくね。」

そう言って来た道を戻っていった。僕と佐久間はしばらくその場にいたが、早く帰りたいという気持ちに押されて帰った。

今回からの登場人物

佐久間悠介	誕生日	1月15日	血液型	B型	身長	174cm
鷹倉俊也	誕生日	3月22日	血液型	B型	身長	173

cm

楠絢乃	誕生日	12月22日	血液型	B型	身長	16
-----	-----	--------	-----	----	----	----

7cm

安曇川正司（アド先生）	誕生日	10月21日	血液型	B型
-------------	-----	--------	-----	----

身長 163cm
1年5組担任 四ツ谷よつや

5 列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）

その頃もえ萌が通い始めた宗谷学園では……。

「萌の彼氏は当然鉄研入ったんだよねえ。」

「入らなきゃ岸川に言った意味ないしね。」

「ていうか萌もえなんで岸川行かなかったのよ。そうすれば彼氏とも同じ学校だったのに。」

「ナガシイが宗谷に行くのが一番だって言ったからね。それがあるとなんか行きづらいだろ。」

「ああ、そういうことが。それだと行きづらいわなあ……。でも寂しくない。」

「そこまで子供じゃありません。ナガシイがいくら大きい子供だからって一緒にしないでよ。」

「永島君ながしまにあつたら言ってやろうかなあ。萌もえが永島君のこと大きな子供って言ってたって。」

「言うてもいいよ。本人がそう言ってたんだから。」

「……。」

（手回しが速かった……。）

翌日。部活の中身はまだ見ていないが、部活登録届を出した。数日後。今日はアド先生から活動日だと聞かされて勇んで楠先輩くすのきに教えてもらった部室に向かった。

だが、ドアの前に立ってドアを押ししてみると開かない。鍵がかかっている。

（あれ。ドアって押せば勝手に開くっていうやつじゃなかったっけ。）

しばらくすると佐久間さくまも合流して、またしばらくの間ドアの前で突っ立っていた。

「あれ、新入部員。」

下から声がする。踊り場のほうを見てみると女子の顔がこちらをの

ぞきこむ状態にある。

「サヤ早く来てみ。新入部員いるよ。」

その人はサヤという人を呼んだ。ちよつとするとそのサヤという人が顔を出した。

「あれ、なんで前に突っ立ってんの。入ればいいじゃん。」

第一声はこれかよ。この人はバカなのか。それとも、ウケを狙っているのか。

「サヤバカだろ。鍵かかっているから入れないに決まってるだろ。」

「あれ、鍵は善知鳥（ぜんちどり）が持つてるんじゃないの。」

「あたしが持つてるわけないでしょ。だからサヤが取って来てよ。」

「サヤ先輩も善知鳥（ぜんちどり）先輩も自分で鍵取り行くとかして下さいよ。」

聞き覚えのある声は楠先輩（くすのせな）の声だ。その声がしたあとサヤという人が階段を上って来て部室のドアを開放した。

「あれ来てたんだ。前に鍵は安曇川先生（あどがわ）か山科先生（やましな）に貰ってつて言ったのに。」

僕達の顔を見つけるとそう言って、

「ちよつと狭いけど入れば。電車好きにはたまらない部室だと思うし。」

促されて中に入った。入ってみると確かに狭い。ドアのすぐ横にはレールの入った箱が置かれている棚。レールの他に転車台の模型も置かれている。ドアの左側にはカラーボックスみたいなのが2つ置いてある。ぱつと見モジュールの材料になりそうなものが置かれていた。その向こうには木の棚があり、そこには製作中のモジュールが置かれている。そして、右側奥の方には白いケースに詰まった引き出し。中はカラーボックスの中身と同じモジュールの材料だろう。真ん中あたりにはこの狭い部屋に長机。それも2つはベコベコになり、そのうちの1つには製作中と思われるモジュールが3枚置かれている。またそのうちの1つには木の棚が置かれており、そこにはE231系の写真とモアイ像が置かれている。意味はあるのだろうか。そして、その長机に対応するように長椅子が一つ。後は折り

たたみ椅子が3脚。学習椅子が5脚ほど置かれている部室だった。

先輩達は思い思いの席に腰をかけて、休んでいる。さつきサヤと呼ばれた人はPFPをやり始めて、善知鳥という人と楠先輩は携帯電話をいじり始めた。全員マイペースすぎて逆に困るというか・・・。しばらくそんな状態が続いていると、また人が来た。だが、その人はドアを開けるとすぐにドアを閉めてどっかに行ってしまった。

「ナヨロン。」

いきなり善知鳥という人が叫んだ。ドアに突進して、今帰ったと思う人を捕まえて、部室の中に引きづり込んだ。

「おい。善知鳥。首掴むことないだろ。いつもギャグでやってるの分かってるじゃないか。」

「半分冗談じゃないって気があるから。つい癖で。」

「それはウソだろ。ていうかお前からこのこととかいろいろ言っただれよな。1年生は分かんないんだから。」

今いる3人を叱ってからその人はこう説明してくれた。

「とりあえず名前だけは言っとくわ。俺は名寄真佐哉。よろしく。」

「あだ名ナヨロンな。」

「余計な事言っな、善知鳥。まあいいか。多分お前らも強制的に善知鳥にあだ名つけられると思うから・・・。とりあえず中のこと説明しとくけど、お前らの後ろにある棚と木の棚でちよつと隠れてるところ以外は開拓していい。今言った部分開拓すると死ぬからやめとけってことをまず最初に言っとく。で他は、その後ろの白いケースト、こつちのボックスの中にはモジュール作りのための道具。まあ作らなきゃ関係ないけどな。それで木の棚の下にあるのが、ボンド水と工具。と、無いとは思っけど間違っただけだよ。飲んだら食道と胃が固まるから。まあ今言っただけかな。」

「お前ら自己紹介だかなんかやったか。」

「やってないよ。」

「じゃあやれよ。1年生来てるのにゲームとか携帯は失礼だろ。」

「分かったよ。じゃあ名前くらいは言っとくわ。」

それまでPFPをいじっていたサヤという人がゲームを一時中断して、

「俺の名前は北齋院大智きたさやだいち。漢字難し（むず）いからサヤとかって呼んでくれていいよ。」

「あたしは善知鳥茉衣じゅんちむまい。電車のこととか全然分かんないけど、分かんないことあつたら聞いて。でこっちの彼女がハクタカの追っかけの……。」

「ちよつ、善知鳥先輩。余計なこと言わないでください。」

「えつ、だつてそうじゃん。」

「そうじゃありません。」

「顔真つ赤で説得力無いよ、アヤノン。」

「だから、善知鳥はそういう余計な説明しなくていいんだつて。」

「ええ。いいじゃん。」

「いやそれがよくない。」

3年生が言い合っている間にまた一人やってきた。その人を見て、

「アヤケン。オヒサア。」

僕達を見ると、

「新入部員。」

「ああ、そうだよ。」

「じゃあ、名前は言っとくな。綾瀬健斗あやせけんと。部活じゃアヤケンで通つ

てるからそう呼んでもいいよ。」

ざつと自己紹介を済ませる。

「そういやあ、お前らの名前聞いてなかったな。1年何組でどこに住んでるかとか名前言ってもらうか。まずそっちののっぽのほう。」

「1年5組の佐久間悠介さくまゆうすけです。涼ノ宮すずのみやに住んでいます。」

「涼ノ宮かあ。案外近いね。」

今度は指を僕のほうに向けて言えと促す。

「1年5組の永島智暉ながしまともしです。小楠の中瀬おくすなかぜっていう所に住んでいます。」

（小楠の中瀬……永島……）

「佐久間悠介に永島智暉かあ。分かった。」

「部員は全員で6人って言ってましたけど、今ここにいるのは5人ですよええ。」

「前職員室の前であたしと話した人がいるでしょ。あの人6人目だよ。名前は鷹倉俊也っていうんだけどね。ハクタカってみんなに呼ばれてるからそう呼んでもいいよ。」

噂をしているとその鷹倉先輩が来た。

「彼がさっき言った鷹倉俊也君。前あってるから分かるよね。」

「ああ、はい。」

その後佐久間は足早に帰り、僕はしばらく部室においてあった車両で遊んだ。

「永島ってどんなあだ名がいい。ないならあたしの独壇場で決まるけど。」

「ああ、じゃあ。ナガシイをお願いします。」

「分かった。永島イコールナガシイだって。皆覚えるよ。」

「……。」

「そのあだ名って何か関係あるんですか。」

「別に関係ないよ。ただ鉄研の文化みたいなやつ。この部活の部員は全員友達だからさあ。先輩と後輩の関係っていうのも少しは大事なんだろうけどあたしはそんな固いこと言わなくていいと思ってるだけ。」

「……。」

「は……反応無っていうのも少しらいんだけど。」

「善知鳥先輩インパクトありすぎなんですよ。1年生からヒカレル対象だと思いますけど。」

「そうか。ねえ、ナガシイあたしってそんなに個性的か。」

「えっ……。」

「ほら、永島が困ってるじゃないか。」

「いやあ、ごめん。いきなり難しい質問しちゃって。まあそんなに固くならなくていいってだけ。いいよ、あたしに限ってはタメ口で

も。」

「タメ口聞くんならナヨロンのほうがいいんじゃないか。こいつ電車詳しいし。」

「それだけでそうするなつうの。」

「ウソ。それは冗談。」

「どこまでが冗談で、どこからが本当なんだよ。」

「よし、質問変えよう。担任誰。」

（こいつは人の言うこと聞いているのか……。）

「えっ。四ツ谷先生ですけど。」

「うわっ。四ツ谷かよ。」

「四ツ谷かあ。お前まだよかったな。」

先輩たちがこつこつというのは十中八九あのことだろう。そのことを先輩に聞いてみると夏休みや冬休みに1日5ページ出されるといふことは本当。そして、出さないといつか付けが返ってくるということを知った。

「へえ。そうなんですか。」

「まあ、ナガシイならどうにかなりそうだね。バカそうだし。」

（いや。こいつバカじゃないだろ。）

ふと時計を見るともう18（6）時だ。

「あつ、すみません。今日はこれで。」

「ええ。もう帰っちゃうの。もうちょっと長くいればいいのに。」

「帰るって言うてるのに引き留めちゃいけないだろ。」

「次の活動日いつですか。」

「明日だけど。」

「じゃあ、明日も来ます。失礼します。」

ドアを閉めて帰路についた。

その後の部室では……、

「すごいのが来たな。」

名寄がつぶやいた。

「すごいって。ナガシイなんかすごいところでもあるのか。」

「いや、あいつ自体がすごいって意味じゃない。永島ながしまの家がすごいって言った方がよかったかな。」

「どつという意味だよ。」

「あいつ、小楠おぐすの中瀬なかせってところに住んでるって言ってた。たぶん間違いないと思う。あいつ遠江急行こっけいの社長の孫だ。」

今回からの登場人物

北齋院大智きたさいだいち 誕生日 11月19日 血液型 B型 身長

169cm

綾瀬健人あやせけんと 誕生日 3月30日 血液型 AB型 身長 167

cm

名寄真佐哉なよろまさや 誕生日 9月3日 血液型 O型 身長 17

1cm

善知鳥茉衣ぜんちまゐ 誕生日 6月4日 血液型 A型

身長 165cm

5列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）（後書き）

珍しく連続投稿です。今後連続投稿は恐らくないと思いますが、読んでくれる人には感謝。

6列車 彷徨い娘

部室の窓を割るほどの絶叫が5秒間続いた。

「マジ。ていうかふつうそういう人って北星とかに行かされるんじゃないの。」

「行かなかったんだろ。あすこは完全な進学校だし。」

「そりゃあ置いといて、なんでそう・・・ってさっき言ったか。」

「でも、ナガシイってそういう風に見えないよね。」

「いや、あの性格でそう見える方がすごいと思う。」

「もうその話やめればいいじゃないですか。同じ部員なんですから。そういう目で見ない方がいいですよ。」

楠がこの話を辞めさせてからはいつもと同じバカ騒ぎに戻った。なお、この部活のクオリティはバカ騒ぎにある。

その頃運動場のほうでは・・・。

「友紀はソフト部でしょ。私もソフト部に入ろうかな。」

「そう。留萌は入ろうって思ってるんだ。木ノ本は。」

「えっ。まだ迷ってるけど・・・毎日練習はきついなあ。」

「おい。中学のときだってそうだろ。だいたい運動部なら毎日練習しないとダメでしょ。」

「榛名が言いたいのは中学の途中から部活来なくなってたし、続けられるかどうか不安なことですよ。」

「それもあるけど・・・。」

（入るか入らないかは別として一度鉄研部も見に行ってみるかなあ。）

ソフト部が練習する風景はもはや白黒でしか映っていない。色づいて見えていたのはオーブンキャンパスで鉄研がやっていたあの展示だった。ただ、女の子が鉄研に入っているのだろうか・・・。その口論が続いていた。

翌日。

「永島^{ながしま}。ノートやってきたか。」

「昨日言ったじゃん。やる気ないって。」

「いや、いちばん最初ぐらいはやっといたほうがいいって。1か月くらいやってゴールデンウィークのあたりから面倒になりましたって言えば通るって。多分お前だけだぜ。1日目からやってないって
いうのは。」

「……。」

ちよつと心配になったが、そうでもなかった。逆にやってある人のほうが珍しかったぐらいだった。

「出して損じゃないのか。宿毛^{すくも}。」

「いや。損とは思ってない。でもあれやるのは骨がいるってことは分かった。書くスピード速い俺でも2時間はかかったぜ。さすがに90行はきついなあ。」

「そんなこと言わないで。よけい痛みがひどくなる。」

その放課後。

(鉄研^{てつけん}かあ。)

壁に貼り付けてあるポスターを見てふと思う。そう言えば岸川に来てから鉄研^{てつけん}のこと以外正直考えたことがない気がする。

(女の子でも見に行つていいんだ……。よし。)

決心をきめてポスターが指示する部室のあるところまで行つてみることにした。だが、体育館のところまで来て足が止まる。ここに来るとバスケット部の目がある。鉄研^{てつけん}を見に来たと思われたくないというのも少しある。

すると、今来た方向から一人走ってくる人が見えた。矢のごとく自分の前を通り過ぎて、ドアノブに手をかけた。

(鉄研^{てつけん}部員……。)

その人からは何かと自分と同類のような気配がする。思い切つて声をかけてみた。

「ねえ。君、鉄研^{てつけん}部員。」

顔をこちらに向ける。

「そつだよ。・・・見学に来たの。」

とりあえずここははいと返事をする。そつでなければここに来た意味がない

「そつ。じゃあ、昇降口で靴替えてくれば。そうすれば、ダイレクタで帰れるから。」

「・・・分かった。替えてくるけど、私部室の場所分かんないんだけど。」

「分かった。戻ってくるまで待つてるよ。」

待たせては悪いと思いつぐに皮靴に替えて戻った。戻るとさつきの方が約束どおり待っている。その後はその人に促され、靴をスリッパに替えて、バスケット部の隣を通ってステージ裏の通路を通って階段を上がる。左側のドアに手をかけて開けようとする鍵がかかっている。

「開けんの面倒くせえなあ。」

独り言を言つて、その場に座った。しばらく立ったままだったが、「ねえ。カギ取りに行かなくていいの。」

「そのうち先輩が来るつて。それまでこのままでいいよ。」するとその先輩が来た。先輩もまた面倒くさいと言つてその場に座る。次の人もそつだ。誰か取りに行く人はいないのだろうか。すると下から怒った声がする。その声を聞くと先輩の一人が腰を上げてドアを開けた。

部室内に入ると携帯電話使い放題。同じ一年生と思われる人は木の棚のほうから車両を取りだして、机の上に置かれているモジュールで遊び始め、他の人は携帯電話をいじるかPFPでゲームをし始める。

「よーす。皆。」

後ろからすごく大きな声だ。ただ、今後ろから入つて来た人は男子ではない。女子の声だ。

「おお、新入部員。これでナガシィとユウタンと合わせて3人目かあ。」

「えっ、マジ。」

「サヤ先輩今気付いたんですか。」

「しょうがねえだろ。こいつはスゲー鈍感なんだから。」

「まだ部員になるとか限らないです。今日は部活見学に来ただけみたいですから。」

「へえ。でもうれしいよ。名前なんて言うの。」

「木ノ本榛名です。」

「榛名ちゃんかあ。で、ちなみに榛名ちゃん電車好き。」

「・・・まあ、少しは。」

「へえ。あたしは電車全く分からないけどよろしく。善知鳥茉衣よ。」

それで、そこでゲームやってるのがこの部活の部長の北齋院大智で、

奥で携帯いじってるのが綾瀬健斗あやせけんとで、もう一人携帯いじってるのが・

・・・ねえ、サヤ。ハクタカって名前なんだっけ。」

「3年生分かってて2年生分かってないってなんですか。鷹倉俊也たかくらしゆんやです。」

少々あきれ気味になっているのは分かる。

「それで、そこで遊んでるのが、同じ1年生の永島・・・。」

「智暉ともしきです。」

「そう。智暉君だ。」

（なんてハイテンションな部活だよ・・・。）

「まあ、部員は後2人いるんだけどねえ。今日ナヨロンとアヤノンとユウタンはどうした。」

「ナヨロンは補修。」

まずアヤケン先輩が答える。それに続けてハクタカ先輩が、

「絢乃あやのは日直ひちひら。」

と答えた。

「じゃあ、来るっていうことだね。」

「佐久間さくまは帰ったと思います。」

「帰ったって。面白いのに帰るなんて本当にやなやつだな。」

「まったくだ。この部活に来なくて何が面白い。」

「そこまでいう人はごく稀だと思います。」
「そうか。」

「ぼ……僕の場合は家でも十分楽しいですけど。」
「それはそうだろうな。」

振り向いてみるとそこにいたのはナヨロン先輩だ。

「あれ、ナヨロン補修じゃないの。」

「補修だけど、その道具ここに忘れてったみたいで探しに来ただけ。」

「多分、これだろ。はい。早くしないと補修に遅れるぜ。」

サヤ先輩がその補修道具をナヨロン先輩に手渡す。

「大丈夫。もう間に合うとか思っていないから。後、これサンキューな。」

その後楠先輩も合流。僕は昨日と同じ6時くらいまで遊ぶ。6時になると時間だと言って帰ろうとした。見学に来た木ノ本もほぼ同時に帰ると言った。

部室を出て、足早に階段を下りる。

「永島君。ちよつといい。」

まだ部室のドアの前に立っている木ノ本に止められる。

「いいけど、何。」

「私って……鉄研に入ってもいいと思う。」

（なんじゃそりゃ。）

今回からの登場人物

木ノ本 <small>きののもと</small> 榛名	誕生日	8月13日	血液型	O型	身長	160cm
室蘭 <small>むろらん</small> 友紀	誕生日	7月1日	血液型	A型	身長	162cm
留萌 <small>るもい</small> さくら	誕生日	7月20日	血液型	A型	身長	157cm

m

6列車 彷徨い娘（後書き）

こういつく感覚って書きづらい・・・。
思い切って女子鉄も出してみました。

7列車 またまた新入

いきなりそう聞かれても……。僕には入ればいいじゃんと答えるしかない。

「入ろうと思ってるなら、入ればいいじゃん。」

「でも、私女の子だよ。女の子が鉄研てつけんに入るってなんか変じゃない。」

「変じゃないだろ。先輩の中でも女子いたじゃん。」

「あの2人は違う。マニアじゃない。……あの人たちは旅行ができるからこの部活に入ったって言うてたじゃん。でも私は入るならそんな理由で鉄研てつけんに入らない。私は言っちゃえばマニアなの。」

「ならなおさら……。。」

「でも、女の子が鉄研てつけんとかそういう部活に入ってるの良かった。一度降りた階段をまた上る。」

「そんなの関係ないよ。なにに興味持とうが、どんな部活に入ろうがそれはその人の自由だろ。木ノ本きののもとが好きなようにすればいい。」

「……。。」

「もし入りたくないなって思ったら、中学で入ってた部活にでも行けばいいじゃん。もちろん、その部活が自分にとって楽しければの話だけだ。」

今度は上った階段を下りる。

「永島君ながしま。ありがとう。ようやっとどうすればいいか分かったよ。」

「そう。んじゃあサイナラ。」

階段を下りてさっきの勢いで帰っていった。ステージの向こう側にチラッとその姿を捉えて、

(なにに興味持とうがその人の自由かあ。)

翌日。

「蘭らん。ちょっといい。」

「何。木ノ本きののもと。入りたい部活でも決まった。」

「うん。私鉄研てつけんはいる。」

「…… やっぱり。そうだよ。ソフト部来たって木ノ本きのもとにはきつただけだもんね。」

「まあね。そういえば、さくらはどうするって。」

「留萌るもいはソフト部入るだって。まあるもいを辞めて鉄研てつけんに行きそうなどころはあるけどね。」

「……。」

しばらく友達の室蘭友紀むつらんゆきを見つめた。

「どうした。あたしの顔になんかついてる。」

「ううん。なんか蘭はこうなること分かってたのかなあって。」

「分かったかあ。分かってたらあたしは神だね。……でも、そうなるのかなあ。木ノ本きのもと中学に入ってからだんだん元気がなくなってきたじゃん。だから木ノ本きのもとが好きな鉄道でどうにかなるかなあってね。」

「やっぱり分かってたじゃん。」

「いや、でも女子の入る部活じゃないって敬遠けいえんするとは思ってたけど。最初はマジで敬遠してたし……。」

「途中経過はダメダメでも結果オーライだろ。」

「だな。……鉄研てつけん入るからには楽しんでこいよ。そこでいい彼氏とかもできるだろうし。」

「さあそれはどうか。」

「まさか、もういるとか。」

「えっ……。い……今はいないよ。」

「まあ今はそんな話どうでもいいか。」
話は授業によりここで中断にされた。でも伝えたいことはちゃんと伝わっているだろう。

その後木ノ本きのもとはもう一人の親友留萌るもいさくらにも鉄研てつけんに入るといふことを伝え、同日。部活登録届を提出した。

その頃5組では……。

「永島ながしま。今日は出しといたほうがよかつたんじゃないのか。」

「確かにそうかもな。でもどんな奴でも続いて1か月だろ。早い奴は三日坊主で終わるにきまつてる。」

「お前の場合はやらすじまいだもんな。」

「だってやりたくないもん。あんなのやるくらいなら家でずっと模型いじってるほうが楽しい。俺がここに来た理由は……。」

「鉄研やるためであって、勉強は二の次だろ。それは分かっているけど、出さなかったやつお前だけみたいだったから絶対ホームルームの時にたたかれるぜ。」

「たたかれようがどうってことねえよ。ていうかそれで定期テスト俺の上に行ってくれるやつがいれば俺にとっては大歓迎だけだな。」

「それは、俺か。それとも、また未知の人間か。」

「できれば、お前。」

「ないな。お前の上あきらめたわけじゃないけど、絶望的だと思う。」

「宿毛すくもの言ったことは当たった。」

「永島ながしま。お前だけだぞ。ノート3ページ出してないのは。お前はできるんだからこれやってもっと上狙うべきだ。」

（狙い気ないのに。）

「はい。じゃあ、さらっとやって持ってきます。」

とか、適当に返事をしておいた。

「あれ言ったら余計ヤバいんじゃないか。」

「ヤバいな。でも出す気はない。死ぬから。」

「その死ぬっていうのは当たってるな。俺も9ページやって出してるんだけど、あの9ページだけでもしんどいって思った。あれは永島ながしまの言うとおり続く人でも1か月だと思う。」

「だろ。やらないでもそれが伝わってくるんだから異常だって。それならノート代を払わずに自分の小遣いにしたほうがよっぽど賢い。」

（永島ながしまにとつてはそれが賢い選択なんだな。）

「つつか宿毛すくもはあれやり続けるの。」

「あれ1冊終わるまではな。それ以降はやれない。つつかやらないと思う。」

「そう。んじゃあ。俺今日も鉄研てつけんやってくから。」

「おう。じゃあな。」

その後ろ姿を見送っている間

（永島ながしまのやつ。鉄研てつけんあるっていう日だけ元気だな。坂口さかぐちと一緒にやなくなつたからか。いや。そんなことあまり首ツッコまないほうがいいか。あいつの選んだ道だし。）

その頃そのちやがくえん宗谷学園では・・・、

「萌ちゃん。今日何か部活見てく。」

「それだつたら綾あやだけで行けば。私情報部に入る気もないし。」

荷物をまとめて、カバンを背負う。すると、すたすた昇降口のほうへ歩いて行った。その後ろ姿を磯部いそべと端岡はしおかが見送る。

「萌ちゃんどうしちやつたんだろつ。情報部にも愛想つかしつちやつたのかなあ。」

「そうじゃないの。」

「ナガシイ君と一緒にじゃないから。」

「それかなあ。あたしはもっと別な理由だと思うけど。」

「例えば。」

「・・・。すぐには思いつかないって。萌もえの考えるパターンって永島しま君でないと分かんないくらいだと思つし。」

「そこまでかなあ。」

「そこまでじゃない。つか話ズレてる。あたしが思うにもう部活には入りたくないんじゃないの。なんかに専念したいっていうのかなあ。そんなこと読み取れるんだよねえ。」

「なんかに専念したいって。何に専念する気よ。ナガシイ君との恋愛。」

「それじゃないと思う。永島ながしま君のことはそつちのけじゃないのは分かるんだけど・・・。」

（私わたしってこれからどうすればいいの。ナガシイと同じ進路に行くた

めには観光系の専門学校かなんかよねえ。でも、どの学校に行けばいいの。それが全然分かんない。少なくとも浜松にあるっていう国際観光と大原はなしね。あんなところ言ったらつてろくなものにはなれない。なんかナガシイには知られたくないし……。どうすれば……。)

またその日の放課後。鉄研の部室にさらに3人が押し掛けた。その3人は全員中学生で名前は背が高い順に諫早轟輝、空河大樹、朝風琢哉だそうだ。

「じゃあ、あだ名はイサタン、ソラタン、アサタンでいいね。」

「えっ。それはどう……。」

「新入部員に拒否権はない。」

ナヨロン先輩が言っていた強制的というのはこういうことか。

「で、みんな何に詳しい。」

「僕は模型鉄ですから、それなりに電車のことは分かってますけど。」

「まず諫早が口を開いた。それに続いて、空河がディーゼルに詳しいと言い、朝風は寝台特急に詳しいと言った。」

「みんなそれぞれ詳しいものがあるんだな。」

木ノ本が傍らでつぶやいた。

「なんだ。自分には詳しいものはありませんみたいな言い方してるけど。」

「今はね。昔は寝台特急とか新幹線とかはだいたい分かってたんだけどね。小学校の3年生くらいになった時から女の子がこれに興味持っていていいのになって考え始めてからはどんどん忘れてって、今分かるのは新幹線の形式か特急の名前だけ。」

「まあ鉄研に入って新幹線が分かんないんじゃ絶望的だからな。」

「何。ナガシイ。新幹線分かってなきゃ絶望的か。」

会話を聞いていた善知鳥先輩が自分の頭に手を置いた。そして、強く握る。

「いや、そういう意味じゃなくて、0系とか「こだま」とか。それ

ぐらいは分かってた方がいいってことです。」

「ごめんね、ナガシイ。あたしには0系も「こだま」も分かんないから。」

「いやそれでも「こだま」、「ひかり」、「のぞみ」くらいは分かってた方がいいですよ。日本人として。」

「何。ハルナンもそう思ってるのか。じゃあ、「こだま」とか分かってなきゃ日本人失格にほんじん しっかくってこと。」

「まあ、簡単に言えば……。」

「言っちゃうの。」

僕はこう答えたが、先輩たち。特に3年生は当然というような顔をしていた。

「……まあ言われてもしようがないとは思ってるけどね。膳所せせさんや青木あおきさんにもそう言われたからなあ。でもね、覚えられれば苦勞くろうしないわけよ。どうやったらナヨロンみたいにオタク化できるか分かんない。」

「おい。オタクって言うなオタクって。少なくともマニアの領域で止めといてくれない。」

「だってナヨロン完全にオタクじゃん。SLエスエルのボイラーの形とかが違うからこれはなんとかっていうことふつうの人間が解るか。」

「それはお前の出してる例がマニアックすぎるだけ。いくら電車知らない人間でも1964年10月1日に東海道新幹線とうかいどうしんかんせん東京しんおさか新大阪しんおさか間かん515.4キロが開業したことくらいは分かるだろ。」

今度はアヤケン先輩が口をはさむ。

「あのう。そののなんていうか分かんない先輩。いくらなんでも総延長いんげんは分かんないって。」

諫早いさはやも話に入ってくる。

「少なくとも、1964年10月1日に東海道新幹線とうかいどうしんかんせんが開業して、東京とうきょう新大阪間しんおさかが「ひかり」で3時間。「こだま」で4時間になったっていうのは知っとくべきでしょ。」

「所要時間しゅじょうじかんなんてド素人が解るかよ。だったらまだ総延長のほうが

ハードル低いつて。」

「アヤケン先輩も諫早もやめるよ。1964年10月1日までは一般常識としてその先は2人ともマニアックだ。」

木ノ本が止めに入る。

「だから、開業当時は最高速度210km/hから始めたって言った方が分かりやすいだろ。」

「やめんか。アヤケンと諫早が話に入ったから話がこじれてるだろ。だから……。」

「サヤ先輩まで辞めてください。余計話がややこしくなります。」
僕が止めに入っつてようやつと話が収まった。その後はまたまた電車の話で持ちきりにはならず、面白話で持ちきり。6時になるまで部屋でバカ騒ぎ。木ノ本の話では先輩達は7時までバカ騒ぎらしい。でも、その時間までこの状態が続いても暇じゃないのはすぐに想像できる。

今回からの登場人物

端岡夏紀 はしおかなつき	誕生日	2月21日	血液型	O型	身長	16
磯部綾 いそべあや	誕生日	11月3日	血液型	A型	身長	147
諫早轟輝 いははやこうき	誕生日	11月17日	血液型	O型	身長	15
空河大樹 そらかわだいしき	誕生日	2月10日	血液型	O型	身長	151
朝風琢哉 あさかせたくや	誕生日	5月8日	血液型	AB型	身長	1

7列車 またまた新人（後書き）

このやり取りって知ってる人でないとウケないかなあ・・・。

8列車 気持ち 決定

そのまた翌日。

「結局今日も出さなかつたんだな。」

「やる気ない奴のやる気を底上げしてやったって無駄。ともかく俺にはやる気はない。何と言われようと絶対やらない。」

「はいはい……。」

「何。」

このところずっと思っていたことを永島ながしまに打ち明けてみた。

「永島ながしま。お前寂しくないのか。」

「えっ。」

「なんか知ってるから余計こう感じるのかなあ。お前を見ると今のお前より中学の時のお前がもっとイキイキしてた気がする。」

「……。」
「今からいつものお前になってってというのは無理ってというのは分かってる。そうしてくれてたのはあいつだっていうの分かってるけど、元気がないお前はお前らしくない。」

「……。」

「俺思ってたけど、お前はあいつのことが好きなんだろ。今からでも遅くない。あつて気持ちを確認しあうだけでも自分の気持ちももっと落ち着けるんじゃないかって。」

「……。」

「こんなこと言いたくないけど、何か言ってくれよ。ずっと黙ってるってお前らしくないから。」

「気持ちだけなら確認し合ったかもな。卒業式の時に。」

「……。なんだ。それなら。」

「寂しいっていうのは当たってるかもな。いつも話してたやつが今はいないんだから。」

「……。」

しばらく机を挟んだ状態にいる。

「永島^{ながしま}。俺でもいいか。」

その言葉で顔を上げた。

「俺にお前の電車の知識ぶつけてくれ。俺電車のこととはわかんないけど、覚えることだったらお前にも負けない。お前が持つてる鉄道知識を俺にぶつけて……。もつと言っちゃえば俺をあいつと思っ
てくれて構わない。それぐらいの気持ちで俺と話してくれ。そのほ
うが断然お前らしい。」

(宿毛^{すくも})

「なあ。頼む。暗いお前は正直見たくないんだ。」

「……。悪いけど、それはできない。半分^{もえ}萌だからできっただって
ところもある。それをお前が再現しようとしたって無理だ。宿毛^{すくも}に
電車のことは覚えられない。」

「なんでだよ。」

「じゃあ、聞くけどお前東海道新幹線がどっからどこまで走ってる
かわかるのか。」

「そ……。それは。」

「最低限今この段階でその話ができないと……。」「
「決まったわけじゃない。今からでも間に合う。俺がそのこと全力
で覚えれば1日で十分だ。掘り込んだところまで……。」

「だから無理だと言ってるだろ。その知識は萌^{もえ}だから習得できた
んだ。いくら頭がいいからって。お前の頭はそういう風にできてな
い。宿毛^{すくも}は……。お前はいつもみたいにしてくれればいい。それ
だけでいい。」

「永島^{ながしま}……。」

「自分で言うのもなんだけど、なんかこれだけで俺たちは終わらな
い気がする。今元気が少ないのは我慢の時だと思う。」

「……。」

「分かった。そんなに簡単に終わらない来いっていうのは俺もうす
うす感じてる……。でも……。どうしても我慢しきれなくな

「つたら俺に言えよ。なんでも受け止めてあげるからな。」

「宿毛……。ありがとな。分かった。どうしてもそうならお前に鉄道知識いっぱいぶつけるからな。」

「はっ。ぶつけるものは悩みじゃなくてそれかよ。」

「さつきそうしてくれって言ったじゃん。」

「……。そうだったな。」

その日の放課後。

「今日また新入部員が来たぞ。」

今日は一段とテンションの高い善知鳥先輩である。

「また新入部員かよ。今年は善知鳥が言った通りブレイクしたな。」

「さあ、新人入って来い。」

そう言われてはいってきた人は……。木ノ本はその顔を見ると、

「あつ、箕島君。」

「えっ。木ノ本さん。」

「新入部員って箕島君だったんだ。」

その会話を聞いている善知鳥先輩の目は明らかに光っている。

「何ハルナン。まさかハルナンの彼氏だった。」

「そんなんじゃありません。同じ中学同じクラスだった人です。」

「なんだ。つまんないの。」

「はい。そういうこと言わない。」

「まあいいわ。それより今日はもう一人部員が……。何勝手に入ってるんだよ。」

善知鳥先輩がそう言ったとき全員その人の存在に気付いた。

「何か入ってきたし。」

「もの扱いしないでください。」

「いや。したくなる。」

「はい。サヤもそういうこと言わない。」

「とりあえずまずは名前だけ言ってくれるか。」

「1年4組の箕島健太です。よろしくお願いします。」

「1年7組。醒ヶ井瑛介です。よろしくお願いします。」

「あだ名はミツシイ、サメちゃんていいよね。考えるの面倒だし。」
「そんな安易でいいのかよ。」

「その前に先輩。サメちゃんっていつのはやめてください。」

「何。文句でもあるの。」

「……いえ、ありません。」

善知鳥先輩は醒ヶ井の文句を人にらみで退けると今度は僕たちの紹介に入った。

「こつちが鉄研部員。」

と言つてから人数を数えて、

「いないのはユウタンだけか。まあいつか。この部活の天然部長のサヤとモジュールデザイナーのアヤケンとマニアのナヨロン。北陸大好きのハクタカとその人大……。」

「それ以上何も言わないでください。」

そう言わせまいと楠先輩がその口をふさぐ。

「ぶはあ。分かった。じゃあ、言い方変える。鉄研のホームヘルパーアヤノン。後は鉄研一お調子者の1年生ナガシイと1年生の紅一点ハルナンとあんまり部活に來ない背の高いユウタン。これで全員よ。」

「……。」

「だから、善知鳥先輩のそのハイテンション差で1年生がヒイテますつて。」

「じゃあどうすればいいのよ。あたしからこのテンション取ったら何も残らないんだからね。」

「それはよく分かってますけど……。」

「分かってるならそれでいいじゃん。」

そのやり取りを見ていた箕島が、

「なあ、木ノ本さん。この部活っていつもこんな感じなのか。」

「こんな感じだよ。まあ、1年生の中にもそういう人いるけど。」

その人に目を向けて、誰かということ saying。

「納得。」

そういつと同時に心の中で思うことが一つあった。

(部活内でのあだ名がナガシイって言ってたな。俺と同じ感覚でつけてあるとすれば、こいつの名前は永島か。まさかとは思うけど、永島ってあれじゃないよな。)

「普段からこういう感じなんだろうけどな。」

「普段からねえ……。」

(これでもしあれだったら驚きだぞ。)

しばらく先輩たちと話していると部室のドアがまた開いた。

「おお、イサタン。」

「手を上げる。」

諫早は手で拳銃の形を作ってあからさまにこう言った。それに乗せられて手を挙げる人は……。

「うわあ。お前ら手あげないと撃たれるぞ。」

「そこまでじゃないだろ。諫早が作ってるのは指拳銃。弾丸が出てくるわけじゃないじゃん。」

「サヤ先輩。死んでください。」

どこから取り出したのだろうか。諫早が手にしていたものがいつの間にか本物の拳銃になっている。

「あーっ、バカやめろ。」

「そこまで驚かないでください。エアガンなんだから。」

「そんなの学校に持ち込むんじゃない。あぶねえから鞆中しまつとけ。」

「諫早……。お前休日とかになったら山に分け入ってサバゲーでもやってるのか。」

「そんなのやってませんよ。休日は家で自分の模型いじってますから。」

諫早はエアガンをかばんにしまいながら言う。

「……。」

続いて空河と朝風が来て、中学生全員がそろつ。

「諫早。お前本当にエアガン抜いたのか。」

「ああ。抜いた。サヤさんの反応が面白かったけど。」
「イサタン。後で覚えとけよ。」
「はい。ちゃんと忘れまーす。」
「こういう部活でいいのだろうか。でも、こういう部活だからいいの
だろう。」

それから数日が過ぎていき、4月20日。部活登録のあった新入
部員は僕を含め8人。鉄研部てつけんは全員で14人となった。
これから岸川学園鉄道研究部きしかわがくえんてつどうけんきゅうぶ（略KRC）ケイアールシーの今期の活動が本格化
していくのだ。

今回からの登場人物

箕島健太 <small>みしまけんた</small>	誕生日	4月5日	血液型	A型	身長	159cm
醒ヶ井瑛介 <small>さめがいえいすけ</small>	誕生日	2月21日	血液型	O型	身長	165cm

8列車 気持ち 決定（後書き）

このところ連続投稿。あー死ぬー。

とまあようやくとここまで来ました。そういえば舞台設定していませんでしたが、この物語2008年スタートです。

ということとは・・・なんですよねえ。

これからこの先の展開を考えるためにまた不定期になるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

9 列車 基本事項

4月24日。部活決定の日から4日。クラスの人ともなじんで、次はという段階。これからは部活の先輩やその仲間、高校生活になじむ番である。その一環と言っているのかはわからないが、鉄研部員1年生は5組に集合して昼食をとっている。

日も浅いことだし、全員自分たちの話になるのは当然のことだろうか。みんなのことは少しでもわかっておく必要がある。

「永島は何で電車が好きになったわけ。」

僕の右隣に座っている木ノ本が話しかけてきた。

「うーん……。なんで、好きになったか。」

「そうそう。だってここにいるみんなは電車のことが好きだから入部したようなもんでしょ。だったら知りたいじゃん。その理由。」

「それだったら、木ノ本が電車好きな理由のほうが聞きたいなあ。」

これには全員興味を示した。木ノ本はちょっと話しぶらいという顔をしたが、

「お母さんに憧れたから。」

と答えた。

「へえ。木ノ本の母さんって運転手みたいなことやってるの。」

「うん。JRの在来線の運転手やってる。よくそれ見にお父さんが連れてつてくれたんだ。その時から電車のこと好きになった。」

「へえ。」

「で、永島ながしま。質問には答えたんだし、私の質問にも答えてよ。」

「ああ。・・・自分でもよくわかんないんだよなあ。それ。」

「えっ、何かきっかけあるでしょ。それとも物心ついた時から好きなのわけ。」

「いや、そうじゃないんだけど……。いつ、どのタイミングで好きになったかわからないんだよなあ。「パノラマスーパ―」見たときからか、100系を見たときからか。」

「パノラマスパー」はいつ見たんだよ。」

「多分、幼稚園の時。よく兄ちゃんに連れられて100系見た行った時も幼稚園の時だったから。」

「なるほどねえ。子供の記憶だし、あいまいになるよなあ。佐久間さくまは何で好きなの。」

「んなことしらねえよ。いつの間にか好きだったんだから。」

「箕島みしまは。」

「俺は、こういう部活もいいなあって思って入っただけだから。」

「醒ヶ井さめがいは。」

「モジュールとか作れるって言ってたじゃん。だから楽しそうだなって。」

全員に目的はあるそうだ。

「おい、ナガシィ。」

ドアのほうから大きな声が聞こえた。一様にその方向を見てみると善知鳥先輩ぜんちょうが立っていた。

「なんですか。」

「今日、アド先生が集合って言ってたから、それ伝えに来た。」

「あの、それもう全員知ってますけど。」

「・・・。ならいいや。全員こいよ。」

とだけ言っつて、自分の教室のほうへ走っていった。

1年生も交えた今季最初の部活動。今までと同じように部室に集う。今日は何をするのだろうか。

「よーす。諸君。さあみんな運べ。」

善知鳥先輩ぜんちょうがみんなに指令を出す。その指令を聞くとすぐに先輩達は嘆いた。それも裏声である。嘆く必要はあるのか。そして、裏声である必要もあるのか。おそらくないだろう。

「じゃあ、1年生は全員外に出て、階段のところと並んで。」

名寄先輩なよろが外に並ぶように促す。今日はどうやら荷物運びらしい。

部室前の階段に醒ヶ井さめがい、箕島みしま、木ノ本きののほん、僕の順に並ぶ。すると、上からまず白いケースが大量に運び出されてきた。次はどこに置い

てあるかも分からない謎の物体の山。最後はいたるところに指の跡が付いている荷物。ぶつちやけていうと金属の山。電車のおもちややそのレールなど。鉄道研究部に関連するものも含まれている。だが、中には……。

「なあ、なんで卓球ラケットがあるんだ。」

木ノ本きのもとが回ってきた荷物の中にある卓球ラケットを発見する。

「ホントだ。なんに使ったよ。」

荷物を渡されて、中を見てみる。すぐに見つかったラケットは1つ。だが、よく見てみると1つだけではない。3つある。他に卓球ボールも入っている。本当に何に使ったのか分からない。すると上から、

「おい。そっちにラケットいつてない。」

北斎院きたさいいん先輩の声である。

「あつ、来てますけど。」

「ちよつとそれ、必要だから上にまわして。」

「サヤ先輩がラケットの入った箱上にまわしてだつて。」

「なんに使ったの、これ。」

「さあ。」

用途不明のままラケットの入った箱を上に戻した。

しばらくの間部室から下ろされる荷物を床に置き続ける。安曇川あつがわ

先生（アド先生）がその荷物をステージ裏にある狭い通路に置いて行く。狭い通路がさらに狭くなる。上からは「ゴミ」とか「あーっ」とかいう声に混じって、掃除機の音や、何か物を動かす音が響いてくる。一方階段のところからは上から運ばれてくる荷物にあだ名をつけて伝言ゲーム状態。もちろん前者の声も後者の声も何の意味もないと思う。

なんだかんだもう18時。その頃にもこの作業は終わりが見えないう。醒ヶ井さめがいが用事で帰ってからもしばらくはこの状態のままだった。体育館で練習しているバスケット部がランニングするところになると、上から先輩達が大量のゴミ袋を抱えて降りてきた。僕達1年生はそれと入れ替わりに自分の荷物を持って下に下りる。

「そんじゃあ。今日はこれで終わりだから、みんなオツ。」
「サヤ先輩が簡単に締めくくる。」

「で、誰がゴミ袋を捨てに行くか決めたいんだけど……。」
と言った瞬間に6つあるうちのゴミ袋を2つもって駆けだす人が一人。

「あつ、ハクタカフライング。」

鷹倉先輩を追って善知鳥先輩が。続いて、サヤ先輩がまた2つゴミ袋を持って走りだそうとすると、

「ちよつと待てよ。それは俺の獲物だ。」

「離せアヤケン。獲物だったらまだそつちにあるだろ。」

「あつちのはゴミだから。」

「お前ゴミ袋にゴミって言うてどうすんだよ。ゴミ袋の立場がないだろ。」

「知るか。」

その頃僕の傍らにいる名寄、楠先輩は……。

「ナヨ先輩。プレゼントです。」

「んじゃあいつてくるか。」

「あつ先越された。いい加減離せ。」

「獲物くれるまではなさねえよ。」

「おい、ホモケン離せ。」

「サヤが渡してくれれば離すよ。」

「誰がこれやるか。」

「あのう。楠先輩サヤ先輩達は何やってるんですか。」

「毎回恒例のゴミ袋争奪レース。詳しいことは後で説明するからちよつと待っててね。」

すると楠先輩はサヤ先輩が左手で掴んでいるゴミ袋の一つを取ってさつさと走っていった。それを追うようにしてサヤ先輩がアヤケン先輩を振り切り、アヤケン先輩はそれを追っていった。僕達はいつとただ唾然とした顔で見ただけである。しばらくすると、毎回恒例ゴミ袋争奪レースに参加してきた先輩達が全員戻ってくる。

「んじゃあ、お約束が終わったところで全員解散。」

サヤ先輩が息を切らしながら解散命令を出す。解散命令が出された後楠先輩くすのきがこう教えてくれた。

「モジュールとか作ってるよ、そのゴミが出るから毎回ゴミ袋に固めて、サヤ先輩の前に置いてくじやん。それでサヤ先輩がゴミ袋に話しに入ったところでスタートよ。体育館を出て、あっちの2・3年生のチャリ置き場のあるところにダストシュートがあるから、そこまでダッシュするの。取られないようにね。それで、取られずにダストシュートにいれたら、その人の勝ち。取られたら取った人の勝ち。」

「うーん。よく解らないけど、ゴミ袋持ってダストシュートまで逃げろってことですよ。」

「そういうこと。面白いから次からやってみれば。じゃあね。」

「なあ、永島ながしま。鉄研って本当に個性的だな。」

「ハハ、個性的すぎて少しついていけないかもな。」

4月25日。今日もまた部活。9時30分から開始ではあるが、

先輩たちは全員パワフルである。北齋院先輩きたさや せんぱい以外は全員集合済みだ。

「善知鳥先輩ぜんちう せんぱいたち早いですねえ。」

「そうかあ。そんなことより、授業担当誰だか知りたい。」

なんでパワフルという話からこんな話になるのだろう。善知鳥先輩ぜんちう

の話方は全く読めない。とはいっても聞かれたことだ。話すのが鉄則だろう。

「えーと、生物の担当が橋本先生はしimotoで、・・・」

「サッカーボールじゃん。サッカーボールって最悪じゃない。授業の教え方とかくそ下手だよ。要点言うだけだし。それだったら教師いらないうっていうくらいだから。」

「えっ、サッカーボールって。」

「だって、あのメタボ体系。完全にサッカーボールじゃん。人にけられながらダイエットすることをお勧めするよ。」

「善知鳥違つって。サッカーボールは袋井。」

「袋井。あれは、ラグビーボール体系。腹が出てて、縦に長い。で、ごめん他は。」

「英語は小林先生で、数学は青梅先生、情報が東中野先生。」

「数学青梅とか最強じゃん。」

「おめえらしいな。青梅先生は指導力あるから。後の小林と東中野はどちらでもない区分。最悪でもないし、最高でもないってところかなあ。」

「あとは、国語アド先。社会は四ツ谷だろ。」

「何かとすごいな。でも、四ツ谷って嫌だろ。毎日ノート3ページ出されるんだから。」

「あつ、確かにそれはちよつと。僕なんか出してませんから。」

「早いなあ。でも、テストとかでいい成績とると特進行けとかってうるさくなるぞ。」

「えつ、ナヨロン先輩も言われたんじゃないんですか。」

「ああ、言われた。でも、そんなことしたら遊べなくなるからなあ。」

「どうせ遊び相手いないじゃないか。」

「うっさい。これからできるんだよ。これから。」

するとドアが開いた。見ると木ノ本だった。善知鳥先輩はいまぼくにしたのと同じ質問をして、ナヨロン先輩とアヤケン先輩はそれを聞いて楽しんでいる。そうしている間に9時30分になった。

「はい、みなさんお集まりですね。」

ドアを開けてアド先生が部室の中を覗き込んだ。

「あれ、北斎院君はどうした。」

「サヤだったら、まだ来てませんけど。」

「部長不在じゃあなあ、困ったもんだな。」

と言っているとサヤ先輩が息を切らして、部室に飛び込んできた。

「北齋院君。おはよう。」

「というアド先生はサヤ先輩の首を後ろからつかむような体制をとった。」

「アド先生。それダメ。やっちゃダメ。」

「はいはい。これからは部長が遅れるということはないようにしてください。」

すると僕のほうを見て、

「永島君。木ノ本君。ちよっとその木の板とつてくれないかなあ。」

「

と頼んだ。いち早く木ノ本が反応し、白いケースの隣に無理やり押し込んで歩きの板を1枚取った。木の板は薄いベニヤ版。長方形の形になっている。木ノ本がそのベニヤ板をアド先生に渡す。

「あと綾瀬君。直線レールの入った箱持ってきてくれないかなあ。」

「へーい。じゃあ、このゴミに植林終わったら行くから少し待っててちょ。」

その返事を聞くとアド先生は下にきて、と手招きをした。僕たちはそれに促されて、部室から出る。部室から出るとすれ違いに中学生の諫早と空河にあった。アド先生はその二人にも声をかけて、ステージに降りた。ステージに降りると、僕たちがいつも利用している奥の通路から折りたたみ椅子を取り出してきて、一人勝手に座る。

僕たちはその前に思い思いに腰を下ろす。諫早と空河が合流して、数秒経つとアヤケン先輩が緑色の横30cmくらいある箱を持って下りてきた。アヤケン先輩はその箱を渡してすぐに部室へと戻っていく。それを確認してから、

「これがKATOというところから出ているレールです。」

と説明を開始した。アド先生が取り出したものには、当然だが、レールが2本規則正しく並んでいる。そのレールの下にある黒くレールの枕木が主流だということがあったが、その中で「木じゃないじゃないですか。」とツツコミを飛ばしていたことをふと思い出した。

木でなければ、名称は「枕コンクリート」にでもなるのだろうか。
「これはKATOから出ている最も標準的なレールです。この長さが124mです。KATOのほうはこれを基本にレールの長さが決まっています。例えば、この2分の1のレールは62m。これの2倍のレールは248m。その248mのレールに62m足すと310mという風になってます。さらに長さを調整するために64mとかつていう端数レールも出てますし、このような伸びるレールなどもあります。」

アド先生はまだ箱から出されていない伸びるレールを僕たちに掲示した。このレールには他と違って真中は枕木ではなくコンクリートをモチーフにした板が取り付けられている。そのレールの上には「78-108」と書いてあった。元の長さは78m。最大は108mになるということだろう。

「ただ、このレールはほかのレールより壊れやすいので、慎重に扱ってください。」
直線レールの説明は大体終わった。今度はカーブレールについての説明。

「この裏側を見てください。」
アド先生はカーブレールをひっくり返すとその真ん中あたりを指差した。そこには「R282-15。」と文字が浮き上がっている。「この「R」というのはこのカーブのきつさを表しています。そしてこちらの「15。」というのはこのレールで曲がれる角度を表しています。そして、カーブとカーブの間は33ミリが基本になっています。だから、282mの次は315m、その次は348mという風になっています。それで、この中に216mのやつがありますが、それは製作には使わないでください。」

説明が終わると今度は箱に入っているレールと2本ずつ僕たちに渡した。

「つなげてください。」
そう指示があった。2本のレールを床に置いて、連結する。中には

空中のまま連結したりする人もいる。連結が完了すると、しばらくそのままでした。

「それじゃあ、今度はこれを外してください。」

そう指示が出る。両方のレールに手をかけて引っこ抜こうとする。だが抜けない。

「このレールは両方に引っ張っても抜けないようになってます。だから、この継ぎ目をどちらかに折り曲げるようにして引き抜いてください。Nゲージのレールは両方に引っ張って抜けるやつやこれみたいにとちらかに折り曲げて抜けるタイプもあります。」

説明を受けた後はその通りにぬいていくだけ。これが完了すると後ろに置いてあったベニヤ板を取り出した。ベニヤ板を床に置いて、レールを3本つなげる。そして、板の上に置き、左右を合わせた。

「この板は248mのレールを3本つなげた長さになってます。248mを3本つなげると何ミリだ。計算せい。」

「248×3で、744mです。」

後ろからナヨロン先輩が覗き込んでいた。

「はい。今名寄君なよりが言ってくれた744mミリというのがこの部活のモジュールの基本です。この中にレールが収まるようにしてください。」

その後レールのさらに詳しい説明を受けた後、自分たちで何を作りたいかということを聞かれた。僕としては家にいっぱいある分、何を作りたいかなんて言う欲望はない。だが、ほかの人は駅を作りたいとか山のある風景作りたいたとか、川がある風景を作りたいなど意見は様々。その中でも採用されるのはごく一部。今回は山と川の融合と山と駅の融合。後は留置線のある風景を作ることとなった。

9 列車 基本事項（後書き）

だんだん鉄道研究部らしくなってきました。

10 列車 製作

そういう風になったとはいっても僕は作り方を知らない。当然一緒に作ることにになった木ノ本きのもとも知らない。これでは到底前に進むことはないだろう。

「ナガシィ。何作るの。」

「えっ、留置線のある風景でも作るのかなあっと思って。」

「そういうことで分からないことがあつたらアヤケンに聞くのが一番だよ。あいつ器用だし。」

「ああ、はい。そうします。」

「おい、善知鳥うつくし。そういうところで俺の仕事を増やすな。まだ、あれ出来てないんだから。ナヨロンにでも頼め。あいつは車両だけだけど何も作れないってわけじゃないから。」

「ナヨロンに頼むとろくなことがないじゃん。古墳作るって言い出すかも……。」

「そう言ったのはサヤだぞ。それで俺が作ったんじゃないか。結局ごみの一員になったけどな。」

先輩と話していたら余計進まなくなる。とりあえず、家に広がっているレイアウトのことを思い出す。だが、家のレイアウトにはこういう風なものはない。自分たちに与えられているのは板3枚だけ。これが家にあるレイアウトみたいになるのだろうか。そう思った。

「まあ、まず配線決めるかあ。」

「そうだな。でも、どうやって配線すればいいわけ。」

「さっきアド先生がやってたみたいにしてあげばどうにでもなるだろ。とりあえずポイントと直線レールがあればどうにかなるかあ……。あつそれだけじゃどうにもならねえ。ゆるくてもいいけどカーブも必要かあ。」

独り言のようにしゃべっていると、

「ほれ。」

アヤケン先輩がレールを持ってきてくれた。手に持っているのは248m^{ミリ}レール12本。

「線形が単純ならこれだけで足りる。留置線配置するっていうならもうちょっとこの直線レールと道床が片方ないレールと124m^{ミリ}のポイントレール4番とかがついでいうふざけたやつが加わるから。」

そのレールはふざけているのだろうか。僕たちが探そうという前にアヤケン先輩はそれも探して持ってきてくれた。さっき言っていたレール。ポイントレールは皆さんお分かりだと思うが、片方道床が欠けているレールというのは見たことがないだろう。見てみるとそのレールは標準の半分くらいの長さで僕たちから見て左側の道床が斜めにカットされている。文字通り片方道床が欠けたレールだ。

「4番ポイントの直線側にこのふざけたレールをつなげて、その片方にR481のカーブを分岐側に組ませる。こうすると両方の線路がつくんだ。もしこの4番ポイントで、道床が欠けてないやつとやると片方ははまってももう片方ははまらなくなる。だからこんなふざけたレールがあるんだよ。」

さっきから聞いていればアヤケン先輩はそのレールのことをずいぶん迷惑がっている。だけど、その理由は問いてはいけないことにも思えた。とてもくだらない理由が返ってきてさうだからである。

「お前らに必要なレールはこのくらいかなあ。後、その直線レール道床の色何かに揃えとけよ。その中でも茶色のやつは結構古いのだからあんまりあてにしないほうがいいぜ。」

アヤケン先輩から渡されたレールを使って配線をする。さっきアド先生が言ったとおりにして、直線レールをつなげていく。248m^{ミリ}の直線レールを3本つなげたところで、1枚目の板の上に置く。すると、ちょうどびつたりとおさまるのだ。もちろんこのことには種も仕掛けもある。

「とりあえずはなったな。」

木ノ本の隣^{きのもと}を見てみるとまだレールが余っている。それもカーブレ

ールとポイントレール。

「お前バカだろ。この中に留置線を配置しなきゃ意味ないだろ。これじゃあ、ただレール並べてはい終わりじゃん。」

「知らないよ。大体留置線はそっちに並べるんじゃないの。こっちは余裕が。」

「あるだろバカ。何のためにこの板があるんだよ。こっちには隙間がないんだよ。どこをどうやったらレールが並べられるんだよ。」
「ちなみに今どういう状態でレールが並んでいるかというと、僕のほうはしっかりと板の端を一直線に、木ノ本のほうはそれに並行して仲良く並んでいる。」

しばらくどうすればいいかを考える。もちろん方法はいくらかでもある。真ん中に留置線を持つてくる、真ん中に留置線を持つてくる。このうち僕たちがとった策は真ん中だ。そのため、木ノ本が敷設した線路にカーブレールを組み込み、1本レールが入るスペースを作る。次に僕の敷設したほうの1枚目の終わりにポイントレールを組み込み、留置線につながる線路を作る。2枚目は3本のレールが並んでいる状態のまま右側まで進んで、2枚目終了直前に留置線が終了。3枚目は1枚目の逆バージョン。ポイントレールが組み込まれていないところだけは1枚目を違うか。その状態で配線が完了した。配線が完了したところで、僕たちのものをアド先生に見てもらおう。アド先生のほうは別にいうこともなかったらしく、配線はこのままでOKということだった。

「よし。じゃあ、ここまで進んだら、罫書きをしてください。」

「けがき。」

「このレールの配置をペンかなんかで板に写し取ってくださいってことです。さあ、やって。」

いわれるがままそうやる。レールと板の接着しているところにペンを当てて、レールに沿って線を引く。そして、全部の線を引き終わったら次は継ぎ目の部分に今書いた線とは直角に線を引く。これでどこに継ぎ目が来るのかがわかる。継ぎ目を書くまでが終了したと

ここで、仮置きした線路を板から外す。線路配置が決まったところで次の作業に入る。次の作業とは当然、家などの配置を決めることだ。

「家の位置決めろって言ったって、わかんないよなあ。どこにどうやっておいていいかわかんないし。」

「こういう時ってどうすればいいんだろう。」

「永島ながしまって電車に詳しいよなあ。こういう方面も詳しくないのか。」

「電車詳しいからってこれも詳しいなんてこたないよ。」

「しばらく考え込む。するとさっきの言葉が思い浮かんだ。」

「はいはい。」

僕たちのモジュールのところまで来てもらい、アドバイスをもらう。「なるほど、線路配置は決まったのね。」

そうつぶやくと、近くにあった家の模型から一つ取り出して、説明を開始した。

「これは、道路の形を想像しながら、建物を配置して組んだ。こういうところはこういう風になってるかなあとかってことを想像しながら、家の配置を決めていく。それが難しいなら、先に道路の形を決めちゃったほうがやりやすいよ。」

「アヤケン先輩はそう教えてくれた。」

アドバイスをもらったところで、家の配置に取り掛かる。まず道路を決めてからとも言ったが、お互い想像力に乏しいわけではない。頭を使って物を作る。

「この道路の感じは線路に沿ってずっと続いてるってどう。」

「いいんじゃない。それなら、ずっとこっちに続けていくでいいじゃない。」

「それでもいいけどさあ、ずっと平坦ってなんかやじゃない。2枚目だけ丘にしちゃうとか。」

「でも、そんな道路あるのか。それだったらなおさらトンネルかなんだろ。」

「それ言っちゃったら、道路がトンネルで並走してる鉄道がトンネルじゃないっていうところあるのかよ。私の知ってる限りじゃないぞ。」

「わかったよ。じゃあ、2枚目は丘にしちゃうでいいか。」

「丘にするのはいいけど、それだれが作るんだよ。私汚れるの嫌だからね。」

「汚れるのは俺も嫌だけど、それ言ったらものなんて作れないだろ。だったらジャンケンで決めようぜ。」

ジャンケンをやって結果は、

「永島ながしま。お前いかさまとかしてないよなあ。」

「ジャンケンでどうやっていかさまするんだよ。」

「えっ、簡単じゃん。後だしとか、マインドスキャンとか、ジंकウスとか。」

「ジंकウスはないけど、マインドスキャンって無理だろ。千年眼ミレニアムアイじゃないんだから。」

プラノコの歯を発泡スチロールに入れる。前後に動かすとキユ、キユと音を立てる。

「ああ、この音ヤダ。」

「木ノ本きののもと、もうちょっと静かにやれないか。」

「あんたはいいよなあ、耳ふさげて、私はふさげないのよ。ちょっと変わりなさいよ。」

「ヤダよ。」

「変われ。」

「ヤダ。」

すると楠先輩くすのせながやってきた。

「あっ、楠先輩。これ変わってください。」

「遠慮しとくね。あたしの専門は物作りじゃないから。」

あっさりと断られた。

次に来た醒ヶ井さめがいは、

「あっ、醒ヶ井さめがい、これ変わって。」

「おう、いいよ。」

快く引き受けてくれた。

「醒ヶ井君。こんにちは。」

醒ヶ井が来たことに気づいてアド先生が醒ヶ井の後ろからつかみかかる。

「こんにちは。ていうか安曇川先生やめてください。今切つてるところだから。」

そう言っている間にカット終了。

「これだけなら、俺じゃなくて、自分たちできれよな。おれもこの音嫌いだから。・・・ん。木ノ本。もしかしてそのためだけに俺に切らせたのか。」

「うん。思いつきはまってくれてありがとう。」

何がともあれ、作業が完了したのだ。次は道路の配置だ。

「この発泡をこうやってくと道がふさがるんだよなあ。また切らなきゃダメじゃん。」

「おい勘弁してくれよ。また俺に切らせるのか。」

「うん、分かっている人は分かっているねえ。」

「分かりたくないんだけど。」

「大丈夫。おれたちも手伝から。だから、醒ヶ井はこっちのここから下を切り出して。俺と木ノ本で、こつちを坂みたいにするから。」

「おい、そつちそんなに人数いらないだろ。」

「気にしない、気にしない。」

「気にするよ。」

と話しているど、

「みなさん。12時ですので。お昼にしてください。」

とアド先生から指示があった。

10列車 製作（後書き）

最初は不定期更新。この頃は毎日更新・・・。
いつかまた不定期更新に戻るかも・・・。
そんなので読んでくれる人には感謝。

11列車 バスケと走行テスト（前書き）

ストーリー中にある批判はあくまでもストーリーの中だけです。現実にはそうということは一切ありません。

11列車 バスケと走行テスト

作業は一時中断。部室に戻って、弁当を食べる。

「ナガシイ、ハルナン、サメちゃん、ミツシイ、イサタン、ソラタン、アサタン。バスケットやらない。」

「おお、面白そうじゃん、やるやる。」

サヤ先輩がそれに乗る。サヤ先輩に次いで、アヤケン先輩も乗った。「おい、バカタカとアヤノンはやらないのか。」

「バカタカって呼び方やめてください。つつか、いつから僕のあだ名は変わったんですか。」

「あたしは運動は苦手だからやめときます。一人プレイだったらしますけど。」

「えー、シユートだけ。つまんないじゃん。試合やるうよ。試合。」
「でも、それ下のバスケット部がいなければの話でしょ。」

箕島^{みしま}が当然の質問をした。

「大丈夫。バスケットは午前中だけ。午後はあたしたちの貸切になる。」

弁当を食べ終わって下に行くと、さつき言ったとおりバスケット部はいなかった。

「ほれ、やるぞ。」

体育館のステージから飛び降りて、北の器具庫のほうへ走っていく。中からボールをつく音がして、善知鳥^{うつけ}先輩がドリブルしながら、出てきた。

「善知鳥先輩。体操服とか持ってきてませんよ。」

「大丈夫。見られたら見られたでござ愛嬌。」

「じゃあ、僕参加します。」

「おお、サメちゃんはさすが変態を自嘲したぞ。ナガシイたちは参加しないのか。うまくいけば、女の子のパンツが見れるぞ。」

「そういう釣り方やめろつうの。」

「……。」
「榛名、参加するなら、あたしの体操服貸すけど。」
「えっ、でも。」
「いいって。どうせあたしは参加しないんだし。それに、モジュールも作ってないし。」
「……じゃあ、私も。」
「じゃあ、ちよっと上来て。ハクタカ。もしのぞきにきたら、頭から飛び降りてよ。」
「のぞかねえよ。」
「ふうん。あたしの時はのぞきに来るのに。」
「それは。お前の着替えてるタイミングが悪いだけだろ。」
「ねえ、ナガシィ。本当に参加しない。」
「楽しそうだから、参加します。」
「よし、4対4でやるか。」
やる人は全員体育館のフロアリングに行つてスタンバイする。その姿を見ている人は、
「善知鳥のやつ。ああいつても中にハーフパンツはいてるよなあ。」
「あれにつられる醒ヶ井さめがいつて。ただの変態なんじゃないのか。」
「ああ、ただの変態かもなあ。」
「もう集まつてるし。」
「ハルナン。早く、早く。」
「楽しそうなのはいいんだけどなあ。」
「ハクタカ。今日は珍しくのぞきに来なかつたね。」
「だから、のぞいてるんじゃないくて、お前の着替えるタイミングが悪いって言うてるだろ。」
「それ言つたら、ハクタカの来るタイミングが悪いってことになるじゃん。」
「そうかもしれないけど、着替えるタイミングも悪い。」
「ハクタカ言つてることおかしい。だからバカタカつて言われるんだよ。」

「いったな。クソアヤ。」

「ナガシイ。パス。」

「いただき。」

「あつ、サヤとるな。」

「申し訳ない。昔バスケットやってて。」

「少しは手を緩めるよ。」

「残念。はいスリーポイント。」

10分後。

「つ……疲れた。この頃動いてなかったからな。」

「最後なんか体育苦手な善知鳥（じょうち）にもボールとられてたもんな。」

「うるさい。ああ、暑い。服ぬぎてえ。」

「脱げばいいじゃん。」

「女子がそんなにさらつと脱げばって言うなよ。」

「サヤ先輩、上から扇風機持つてきますか。」

「ああ、お願い。」

「はあ、久しぶりにバスケットやったなあ。1年生以来だっけ。」

「そうだな。猪谷（いのたに）さんがいた時以来だな。昔はバスケットがない

ときは製作そつちのけでよくやったな。」

「サヤ先輩たちそんなことしてたんですか。」

「ああ、あのときは俺たちも若かった。」

「若かったって。もう年寄りみたいな言い方ですね。」

「人間18になればおじいちゃん（おじいちゃん）の仲間入りすんの。18になると

体が言うこと聞かなくなる。」

「サヤ先輩。そんなこと言わないでくださいね。」

扇風機を持ちに行った楠先輩（くすのき）が言った。

「だってそうなるんだからしょうがないだろ。」

扇風機の前に行って誰もがよくやることを始める。

「だから、サヤとるなつて。」

「マジックカード。部長権限を発動。」

「トラップカード。無効を発動。」

「あー、バカたれ。トラップカード。カウンターカウンターを発動。」

「サイクロン。」

何を始めると思えば・・・。

「おいおい、何こんなところでデュエルしてるだよ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩（じょうと）がそんなことをしている間に扇風機はナヨロ先輩が占領していた。だが、僕には別のことを思い出していた。萌とよくやったのだ。カードはほぼそのままでモンスターカードだけ電車にしてやったことがある。あれについては自分でもよく考えたものだと感じするところがある。

それはさておき。13時45分から作業再開。

「これ、塗料で塗ったほうがいいよ。」

アド先生に言われて上から筆と塗料の缶を持つてくる。この塗料缶の固まったふたを開けると、中で塗料が固まっていた。カツピカピになつており、乾ききった土のようにひびが入っている。仕方がないので、体育館を突っ切つて近くの水道まで歩いていく。水を入れて、筆で押したりすりつぶすようにしながら、水に浸らせていくと塗料が復活。ここまで来てようやくと塗る作業に入った。

発泡スチロールと板の道路と家の部分に塗る作業を施行すると、この先の作業が進まなくなると思ったが大きな間違いだった。塗料は一度塗っただけでは下地が透けてしまいうらしい。そのため何べんも塗つて色を濃くする。それが完了すると外に持つて行って、干す。その間塗料の缶にふたをして、筆を洗う。この部活では筆を洗わなかつたら制裁があるという。何ともおかしな風習がある。

筆を洗い終わつてもとの位置に返す。これが終わると次は配置すると決めた家の組み立て。Nゲージの家屋は組み立てられ終わっているものからプラモデルのように自分で組み立てるものまで様々。僕たちが使うと決めたものはジオコレという中の数種類。近郊住宅地の全シリーズを網羅してモジュールに配置することにした。これを箱から出すと、地面と壁など数枚のパーツに分かれている。それ

を組み合わせて、地面となるところにさしていく。これをさし終わるとききれいな近郊住宅ができる。このころには塗装した板のインクも乾いており、中に持ってきて、どのように置くか仮置きする。

「その住宅はそこかよ。面倒だから順番に並べちゃおうよ。」

「おいおい、そんな住宅地あるのかよ。」

「醒ヶ井さめがいツツコつづこんだら負けだと思っていいよ。」

「どついう意味だよ。」

「まあ、それでいいだろ。」

「これはこれでいいんだけど、ここどうする。変に余っちゃったけど。」

「工場にでもすればいいだろ。」

「えっ、ちよっと古臭い感じのこれにするのか。」

「いいだろ古臭くても。半分模型だからできることじゃん。」

「そうだな。」

「おい、そつちはもういいよ。こつちはどうするんだよ。そつちばつか決まったって意味ないぜ。」

「そつちどうしようか。」

「コンビニとか。トラックステーションでもいいんじゃないか。」

「えー、トラックステーション。」

「えっ、ヤダ。」

「いいよ、何も思いつかないし。」

「ああ、そう……。」

「永島君ながしま。他を決める前に線路つけちゃっていいよ。まず電気が通るかどうか確認して。」

アド先生がレールを取り付けていいという。午前中に決めたレールを元通りに直して、幅のある両面テープで張り付けた。レールをつけ終わると、バラストをまく。バラストとはレールの下にひかれてある砂利のこと。あれは車輪からかかる重みを少しでも分散させる効果がある。一種のキヤタピラなのだ。僕たちの取り扱っているレールは道床という部分があってその道床の部分がバラストの部分で

ある。まかなくてもいいのではあるが、まかないままだと木の板があらわになる。そのために薄くまく必要がある。さっきの両面テープと同じように上からバラスト（カラーパウダー）の入った容器を持ってきて、指でつまみながらまく。地道な作業がツボにもなる。

1枚にバラストをまき終わると板を立てていないバラストを落とす。滑り台のように駆け下りていったバラストをさらにかき集めて、2枚目に転用。2枚目も同じ作業を行って余った分は3枚目に転用。3枚目で余ったバラストはごみを含まないように容器に戻す。

バラストをまき終わると車両の走行試験。順番が逆なのは「愛嬌」とりあえず、走れば今はOKだ。部屋にある名鉄めいてつ「パノラマデラックス」とフィーダー、コントローラー、フィーダー線接続用の線路を持ってきて、試した。

コントローラーのコンセントを差し込み、コントローラーのパイロットスイッチが点灯したことを確認する。そして持ってきた「パノラマデラックス」を線路上に置いて、ディレクションスイッチを前進に入れた。そして、コントローラーのつまみをゆっくりと回す。電気に反応した「パノラマデラックス」の顔が次第に明るくなる。ライトがついているのだ。そして、ピクツと前に動いた。するとぎこちないがゆっくりと動き出し、僕から見て手前側。板の端の線路を完全に走破した。

今度はディレクションを後進にして、同じように走らせる。こちらも良好。「パノラマデラックス」は順調に走った。

走るということが確認されたら今度はフィーダーをさしている線路を変えてテストする。「パノラマデラックス」もそっちへお引越して、同じ動作を繰り返した。今度もよく走ったいたのだが、2枚目と3枚目を越えるところで、急に止まった。

「あれ、どうかしたの。今までよく走ってたのに。」
見ている全員が異変に気付く。「パノラマデラックス」を覗き込むと、顔がさつきと違って暗いことに気付いた。電気が行っていないのだ。「パノラマデラックス」を走っていた位置まで後退させると

「ギューーン」とモーターが動いた。電気はある位置まではいっている。だが、進むとすぐに止まった。

「これの位置変えてみればいいんじゃないか。」

「いや、それじゃあない。」

今度は「パノラマデラックス」をどかして、走らなくなるところを検証した。すると、2枚目と3枚目の継ぎ目はジョイナーと呼ばれる部位が一つしかないことに気付いた。

「分かった。こいつだ。」

2枚目と3枚目を切り離した。切り離し終わると上に行つて、アヤケン先輩に言った。

「アヤケン先輩。このジョイナーってどこにありますか。」

「ジョイナー。ああ、レールの入ってる箱から、ジョイナーのついでるレール出して、あーって取り外せばいいよ。」

なぜ「あー」のところだけ裏声だったのか。それはさておき、レールの入った箱を探す。レールの入っている箱を見つけたが、なかなかジョイナーのはまったものに出くわさない。出くわしてもなかなか外れない。だんだん外れないジョイナーにキレたくなってくる。

「あーっ、もう。なんで外れないんだよ、バカたれ。二つはまったの出てこいや。あつたら返事しろーっ。」

全部独り言です。

「すげえ。永島ながしまがどんてっけんしよくどん鉄研色てっけんしよくに染まってく。」

善知鳥ぜんちょう先輩は何か別なところに感心している。

なんとか2つジョイナーのはまった線路を見つけて、持っているレールとつなげる。そしてすぐに外す。すると本来ジョイナーのはまっているほうにジョイナーがはまる。これで問題は解消だ。

そのレールを下に持って行って再びはめる。また走行テストを行うとこの区間もとおりようになった。内側の線路も電気が通ることが確認された。

そして時間は16時。今日の作業はここで終了した。

翌日。4月26日。今日もモジュール製作である。今日はほとんど走ることを楽しむだけ。午前中はほぼそれだけで終わり、昼はまたバスケットボール。午後になって初めて、製作を進めた。今日は2枚目の住宅地づくりである。

「ここも近郊住宅だけだとなんか張り合いないよね。」

「それはないだろ。1枚目で近郊住宅を使っているいじょうそれはできない。どれもこれも同じようになるからなあ。」

「醒ヶ井さめがいって本当にこれだけだよなあ。」

「うるさいなあ。」

「あと、変態っていうのもあるよねえ。」

「だまれつつうの。」

「まあ、それは置いといて、ここどうする。」

「近郊住宅から田舎に通じるところだろ。ここは結構古臭い建物にしとくのがいいんじゃないか。」

「確かにそれもあるけど、今は田舎から町につながるところって大体新しい家が建ってるだろ。反対に近郊住宅よりも近代的なもの建てたほうが効果的かも。」

「何。2階建てとか、3階建てのやつ。」

「そう。それくらいのほうが自然じゃないかってこと。」

「うーん。」

しばらくどうするか考え込んだ。しかし、何分考えても答えが出そうにないため、

「アヤケン先輩だったらどうするのが一番自然ですか。」

「えっ、自分が思ったとおりじゃなくてくのが一番いいよ。道路配置が決まったら何も考えなくてやってても何とかなるよ。」

という回答だった。道路配置が決まるまでは想像力。道路配置が決まったら自分の勘。このづくり方って効果的なのだろうか。それともアヤケン先輩だけに通じることなのだろうか。

結局アヤケン先輩が言ったとおりになっていくことになって、古臭い建物を配置。実際あるかどうかは別として、その家の隣。2枚

目始まつてすぐ(1・2)のところに畑を配置。そのあとは一列に家を並べて、反対側の切り出されたところに詰所を配置した。実際のところ、この詰所は郵便局もどきという設定となった。

概略ができたところで、家をベニヤ板に張る作業になった。模型ストラクチャーの家を張る作業はいくらでもあるのだろうが、この部活でとっている方法はストラクチャーの地面のふちに両面テープを張って張り付ける方式。こうすれば、確実に接着できる。

上から細い両面テープを持ち出して、裏側に張る。縁から反対側の縁まで行くとテープを適当な長さに切る。それを4回繰り返し、仮置きしたところに置いていく。1枚目の建物はすべて決まっているため、1枚目はすぐに完了。3枚目は設置が決まった建物は貼り付けていった。2枚目使う発泡スチロールと設置する建物を張り付けた。なんかとんとん拍子に進み気味である。

ここまで作業が完了すると醒さめヶ井い以外は墮落した。僕は中学生のほうの進行状況を見に行った。

「諫早いさはや。どうだ進み具合は。」

「えっ、この山をハゲからモッサモッサにするために植林してるんですよ。」

諫早はアド先生をちらつと見てそう言った。

「なんですか。永島ながしまさんもやるんですか。水分たっぷりの山にするために。」

「いや、ただ見に来てただけだよ。ていうか。これ走行テストやった。」

「あー。やり忘れてた。・・・でも、7000番台(223系 網あ干区ほしく)のくそつたれだったらぶつうに通りますよ。ゴミじゃないから。」

「7000番台。どれかわかんないけど、まあ大丈夫なんだな。」

「おいおい。それやめてくれよ。」

顔を上げるとナヨロン先輩の顔があった。

「俺が一番最初に作ったのもそうだけど、サヤが作った「安曇川あどがわ」。

マイクロ Aceの車両が通らないっていうやつもあるし、テスト

トはしとけ。でないとごみを量産することになるから。」

「あの。その二つ今どうなったんですか。」

「んっ。俺のはちょっと前にジェットピストルで破壊して、サヤのやつは・・・まだ残ってたかなあ。まあ、寮に行けばあるかないかわかるよ。」

「・・・。」

「じゃあ、明日7000番台持つてきます。」

「いよ。今調べる。部室に確か。サヤの乗物があったはず。サヤに貸してもらえ。」

諫早はナヨロン先輩に促されて上に行った。上ではスピーカー全開で曲を聴いている。今はやりのEDOとかいうやつだと思う。

「サヤ先輩。」

「んっ。何。」

「モジュールの走行テストやりたいんですけど。」

「ああ、分かった。俺の貸してやるからちょっと待って。」

サヤ先輩はそう言って開拓してはいけないといわれたところのものをどかして、中から車両ケースを取り出した。

「はい、諫早。「ふみさん特急」。」

(間違い方がひどいなあ。)

「ありがとうございます。」

サヤ先輩がくれたのは富士急行の特急「フジサン特急」の模型であった。それをモジュールに持って行って走行テストを行う。車両はスムーズに走り出し、つなぎ目にある鉄橋も難なくクリア。植林しすぎのように思える崖の部分も何の支障もなく通過した。次に線路を変えて、同じようにテスト。車両はまず僕たちが覗き込んでいる側の線路と別れて、奥に進路をとり、つなぎ目で鉄橋を渡る。そしてトンネルに入り手前側の線路と合流する。トンネルの中もさほど支障はないようだ。

「よし。行け。「フジサン特急」。」

「諫早。いつまでそんな際物走らせてるんだよ。」

「なあ、諫早。やめようぜ。横の富士山が気持ち悪い。」

「フジサン特急」の拒絶反応はナヨロン先輩だけではなかった。空河も嫌いのようである。

「気持ち悪すぎて吐き気がする。」

「電車見ただけで吐き気でもすんのかよ。」

「いや、電車は大丈夫。でもこれはダメ。」

イコール好みの問題である。

「確かにそうだな。名寄さんが「際物」っていった意味もわかる。

サヤさんってこういうもの好きなんだな。」

「そう。サヤこういうの好きだから。」

「……。」

「際物好きで悪かったな。」

目線を後ろに向けるとサヤ先輩が立っていた。いつの間に来たのだろう。

「ナヨロンか。俺の際物伝説広げたの。」

「ああ。それがどうかしたか。」

「お……お前。」

「ああ、サヤ先輩もナヨロン先輩もなぐり合うんだったら外か向こうでやってくださいね。」

「大丈夫。なぐり合う気はないから。……よし、ナヨロン。上で平和的に話し合おうじゃないか。チャカとか、チャカとか、チャカとか。」

「それ絶対に平和的な話じゃないですよねえ。」

さて、話を進めよう。と言っても今日は終わりまでこんな調子のままであった。そして一番最後に掃除。楠先輩曰く毎回恒例のごみ袋争奪戦も行われて今日の部活は終わった。

11列車 バスケと走行テスト（後書き）

作者が後ろ向きなのに後ろ向きじゃないってどうですかねえ…。

話は変わりますがこれから先さらに濃くなっていきますが、読んでくれる人には感謝。

自分自身のって書いているいじょう面白いもの（多分）できてると思っのでこれからもよろしくお願いします。

12列車 原則

翌日。4月27日。

「……永島^{ながしま}。今日めちやくちや疲れてるな。」

「いや、そうでもないよ。確かに休日なかったけどさあ、意外と楽しいから。」

「へえ。先輩とはもうなじんだの。」

「うーん。なじむというか。部活の先輩「もう鉄研色に染まってきた。」とかつて言ってたからなあ。」

「本当にその順応性には感心するよ。」

あきれたのと関心とが入り混じった顔だ。そういう顔をしているのは宿毛^{すくも}である。

「ところで、静岡まで何円かかるか知りたいんだけど。」

僕はこの手のものには詳しくない。というか知らない。

「1280円。」

佐久間^{さくま}が口をはさんだ。いいところに助け舟がいたものである。

「1280円かあ。ありがとう。」

「ていうか、そんなこと聞いてどうすんの。遊びにでも行くの。」

「まあね。」

「それよりも、もっと安く静岡に行く方法があるぜ。」

佐久間^{さくま}がそのあとなんといったかというと、

「それ、法律的にダメだろ。立派な犯罪だぞ。」

これがその言葉に対する宿毛^{すくも}の答えだった。何を言ったかというところは想像に任せるとしよう。もちろん、いま言ったことは実行してほしくない。

その日の放課後。同じように部室に赴いた。部室の前には醒ヶ井^{さめがい}がいた。もう一つカバンがあったが誰のものはわからなかった。しばらくすると、サヤ先輩と箕島^{みしま}が来て部室を解放した。

中に入って、製作途中のモジュールを眺めてみる。この2日だ

いぶ進んだものだ。今日はこれの製作をちょっと進めて終了した。

一方。宗谷学園に入学した萌のほうはというと、今日は友達と街に出ていた。今は帰り列車の中である。ロングシートに肩を並べて、ちよつと前のほうを見てみた。そこは行き止まりになっていて、一人男の子が前を見てはしゃいでいる。

「萌、さつきから笑ってるけど、なんかあつたのか。」

「ずっとニヤニヤしてたのが気になったらしい。」

「えっ、なんでもない。ただ、昔のこと思い出してただけ。」

黒崎も萌の見ていた方向を見してみる。何を見ていたかはすぐに分かった。

「にしても、電車の前ではしゃいでる子供を見て思い出し笑いするとはなあ。」

「だって、なんか笑えない。ああいうところ見てると。」

「よくわからんなあ。少なくともあたしはあれを見ても笑えない。」

「じゃあ、私だけかなあ。昔の友達みたいだなあって思うの。」

「へえ。萌の友達って電車好きなのか。」

（それだから萌は電車に詳しいのか。）

「うん。幼稚園の時からずっと電車のが好きでさあ。浜松はままつによく新幹線見に行ったり、家で模型で遊んだり、インターネットで動画をあさったりとかね。中でも新幹線の100系が一番好きでさあ、連れてかれたときはダダこねて「帰りたくない。」って言ったり、小学校の修学旅行じゃ自分の座る席に座らずに16号車のドアまで行って東京駅に着く直前までそこにいたりとかしてたからね。」

「それ、先生に叱られたよなあ。」

「うん。でも、怒られた後も100系見たらすぐに復活したりするから。」

「あたし電車のことは全くわかんないけど、その人にとっては特効薬なんだな。だから、ああいう風にしてる人を見ると過去のその人みたいに見えてくるのか。」

「過去のっていう意味じゃないんだけどねえ。今もそういうところ

があるから。」

「その人って成長してるのか。」

「ぜんぜん。大きな子供だよ。でも、そういうところがかわいいんだけどね。」

会話は一呼吸置いたらまた始まった。

「そういえば、宗谷に入学したとき私驚いたわ。世界には同じ顔つきした人が3人いるとかっていうけどさあ、マジでその人に会うとは思わなかった。」

「誰かと、その人似てるのか。」

「うん、鳥峨家大希君だったかなあ。顔つきもそうだけど、声までそっくりだったんだもん。」

「・・・萌。まさかそれで鳥峨家のこと好きになったとかって言わないよなあ。」

「いわないよ。・・・なに、梓、鳥峨家君のこと好きなの。」
顔が赤くなった。

「いや、そういう意味じゃないけど・・・。」

「へえ。」

「な・・・何か疑わしいことでもあるのかよ。」

「ううん。別に。」

といったとき外を対向列車が通り過ぎた。すると頭を抱えて、

「はあ。ここからだとかパanta見えないからダメだよなあ。」

「何。パantaとかっていうやつ見ただけで車両の判別つくの。」

「うん。遠江急行なら菱形だったら1000系。シングルアームだったら2000系っていう風に決まってるから。ちよつと複雑っていえば遠州鉄道のほう。あれは基本1000形は菱形で2000形はシングルだけど、1000形のうちの1001がシングルアームになってるから。モーターしか変わらないから紛らわしいんだよねえ。」

「自分の手で菱形とくの字を作ってパantaグラフを再現する。」

「遠州鉄道って全部同じ車両だろ。あん中にも違いあるのかよ。」

「梓。マニアの前でそう言ったら殺されるよ。全然違うんだから。」
2000形はVVVFインバーターっていう高い音の出るやつだけ
ど1000形はそんなのじゃないもん。それに乗り心地で言ったら
1000形より2000形のほうが上。同じことは遠江急行の20
00系と1000系にも言えることだから。」
「あたしには、そんなこと言われても何もわからん。」
「とりあえず、聞けば分かるって。どんなバカでも。」
「それってさあ。もしわからなかったら、萌があたしを馬鹿にする
材料になるよなあ。」
「そのつもりはないから安心して、梓。」
この後列車はすぐに駅に停車した。その時になる音に少し耳を傾
けていたが、やはり梓には違いは分からなかった。
「何がどう違うの。あたしには全部同じように聞こえるんだけど。」
「逆にあたしにはなんでみんな同じに聞こえるかわかんない。どう
いう聴覚してるか・・・ああ、あとこれもあるか。そう思うこと。」
梓が少し首を傾けた。
「遠州鉄道って結構古い車両も持ってるじゃん。」
「持つてるじゃんって言われてもあたしにはわかんないって言うて
るじゃん。」
「あれ。一番モーター音うるさいんだよ。あの中でよく寝れるなあ
って思う。」
「へえ、うるさいんだ。」
「本当にうるさいよ。時折その電車に乗ってくるんだけどさあ、満
員になった状態でも西鹿島側のところまでモーター音が聞こえてく
るくらいだに。」
「いや、だからあたしに・・・。」
「あの中で寝れる神経がおかしいよねえ。一度精神科医とか耳でも
直してくればって思うくらいよ。」
「何。電車の中で寝ちゃダメなの。」
「梓。電車の中で寝て何が面白いの。電車に乗ったら根気でも起き

「てることですよ。」

「その考え方あたしには理解できない。」

「えっ、何で。これってふつうのことだと……。」

「いや、ふつうじゃない。ふつうじゃない。」

「そうかなあ。」

「おい、自分。その考え方ふつうじゃないって思ったことないの
よ。」

「ないよ。だって、電車乗ったら携帯いじらない。音楽聞かない。
あんまり人と話さない。寝ない。前ずつと見てるは鉄則じゃないの。」

（どんな五原則だよ。）

ふと前にまた目を向けてみるとさっきの男子の姿はなかった。
今止まっている小楠おぐすで降りたのだろう。ずっと普通ふつうに乗っている萌
たちにとっては関係のないことだが、ここでは急行きゆうと普通ふつうの接続が
行われている。ここで終点まで用がない人は急行きゆうに、途中駅に用が
ある人は普通ふつうに流れてくる。しかし、寝過ねこして急行きゆうに終点鹿島ま
で連れてかれるといった客はよく見る。自分も4日前にやってしま
ったことだ。

「そつえば、あたしたち浜松はまから急行きゆうに乗ってこなかったけど、
何で急行きゆうじゃダメなんだ。急行きゆうなら結構早く家につけるじゃん。」

「急行きゆうはダメ。寝過ねこすと痛い目に合う。」

「痛い目って。もしかして、自分もやっちゃったのか。」

「うん。やっちゃったよ。目を開けたらなんか知らないところ走っ
てるなあって思ってたらさあ、間もなく終点鹿島ですって言った
んだよ。でも2000系に2連ちゃんに乗れたから結果オーライな
んだけどねえ。」

（転んでもただじゃおきないやつ。）

4月28日。昼休み。

「ねえ、永島ながしま。N700系の喫煙ルームでバーベキュウとかやつち
エヌナナ

やダメかねえ。」

佐久間さくまがネタを振った。思わずふいてしまう内容だ。

「やつちやダメだろ。」

「でもやつちやいけないとも書いて無いよねえ。」

「確かに書いてないけど、そういうことするやつがないからじゃねえ。」

「なあ、永島ながしま何。喫煙ルームって。」

木ノ本きののもとから質問が出た。ちよつと予想外だ。

「喫煙ルームって、N700系エヌナナについてるやつだよ。そこ専用で喫煙ができるんだ。」

すると頭を抱えて、

「ダメだ。この頃離れすぎてたから私の中の情報が古い。なんかいろいろなのとごつちやになってる。」

「そのうち思い出すって。今はいわば我慢の時かなあ。」

その頃先輩たちはというと、

「行先エティーエムってATMでいいんじゃない。」

「うーん。なんか思いつかないもんなあ。じゃあそこにするか。」

「ATMエティーエムに行つて戻つてくるだけかよ。それだけじゃ能がないな。」
アヤケン先輩が口をはさんだ。

「だから、それだけじゃだめだからKODケイオーディーまで行つて放物線に乗つてグルつて帰つてくれればいいんだよ。NMDエヌエムディーまで。そうすれば時間がそんなないだろ。」

「それだとまだ時間が余るだろ。大体何時の「ホームライナー」に乗つてくんだよ。って言つても1本しかないけど。」

ナヨロン先輩は時刻表を取り出して、ざっと目を通した。

「ふつうに無理だな。どつかで暇つぶさないと。」

「じゃあ、SMZエスエムゼットのエスパルスドリームプラザとかどう。あそこ正直言つてみたいって思つてたし。」

「果たして、それに1年生が乗るかだな。」

「1年生が乗るか。そるかかあ。鉄道好きには少々きついところも

あるかもな。移動意外。」

「そんなこと言ったら旅行なんかできないじゃん。」

「確かにそうだけど。」

「まあ、いまそんな話するのよそうぜ。乗るかどうかは別として、乗らないことはないだろ。初めての旅行なんだし。」

「そうだな。後は俺たちがどう味付けするかだもんな。」

「時間は俺に任せろ。善知鳥（じょうと）じゃだめだし、アヤケンじゃこいつの読み方知らないだろ。」

「なんで俺じゃダメなんだよ。」

「サヤは間違えずにこれ読めるのか。」

「うっ。そ・・・それは。」

「だろ。だから俺に任せろ。えーと、全員唇抜きでいいよなあ。」

「いいわけないだろ。」

さてさて、いったいどういう旅行になるのだろうか。

今からの登場人物

黒崎梓（くろさき ずい）

誕生日

12月12日

血液型

B型

身長

15

7cm

12列車 原則（後書き）

こんな5原則ふつう守れない。

13列車 初旅行の工程

4月29日。今日は岸川学園きしかわがくえんの寮で部活動である。岸川学園の寮きしかわりょう（岸川寮）は正門を出て、南に歩いて行く。すると職員駐車場が見えて来る道を左に曲がって、近くにある神社の前を通ってすぐのところにある。ここの2階はほぼ鉄道研究部の貸し切り状態になっており、中の階段の右側にモジュールなどが保管されており、学習室のほうはほぼ自由に使っていいそうだ。

「えー、今日は5月2日の歓迎旅行にどこに行きたいかってことだけど、どこに行きたい。」

「って、1年生に聞く必要ないじゃないですか。もう行き先決まってるんだから。」

「ナヨロン。ちよつと書いて。」

「サヤ、ATMエーティーエムって浜松はままつから東だよなあ。」

「ナヨロン。それやばくない。編成に詳しいんだから分かるだろ。ぶつづ。」

「うっさい。知ってて言ったただけだよ。」

黒板にうねうねした線を一本。それにつながった線を一本。その端に至り豊橋とよはしと至り東京とうきょうと書いた。

「えーと。まずこれで浜松はままつがどこ分かるか。」

「だいたいここじゃない。サヤ合ってるよねえ。」

「合ってるけど、善知鳥じゆいが書くなよ。」

一呼吸おいて、

「まず工程を話す。5月2日に浜松駅改札口・・・言うの面倒くせえなあ。ハカグチに6時45分集合。集合したら「休日乗り放題」とかっていう2600円の切符渡して、7時05分に出る「ホームライナー」に乗って静岡しずおかまで行く。そこで、静岡しずおかまで行ったら普通でATMエーティーエムまであっていって、それから国府津こくふづとかいう・・・。」

「国府津な。」

ナヨロン先輩が訂正する。

「それはどつちでもいいから。で、その国府津とかいうところまで着たら御殿場線に乗ってあーって戻ってくる。それで清水の 에스パルスドリームプラザとかいうところであーって休んで、普通であーって帰ってくる。ざっと工程はこんなもん。説明終了。」

「にしていけないだろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がさかさずツッコんだ。

「えーと、サヤだとまた端折りそうだから、俺から工程言っとく。」

説明はサヤ先輩からナヨロン先輩に変わった。

「まず、集合はさつき言った通り6時45分。この時間に集合できなかったやつはたとえサヤでも置いてく。それで今回の旅行で使う切符は「休日乗り放題きっぷ」とかっていうやつで、旅する。これが2600円。だから当日は2600円忘れるなよ。で改札とおつて一番最初に乗る列車が7時05分発の「ホームライナー静岡」。

それで終点の静岡まで行く。次が8時51分に発車する普通熱海行き……。」

「あーっ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩が叫んだ。すると、ナヨロン先輩をどっかに連れて行った。

「しょうがない。今度はぼくが説明するか。」

説明のバドンはナヨロン先輩からアヤケン先輩に変わる。

「さつき言ってた8時54分発の熱海行きに乗って、終点熱海の到着が10時04分。次に乗る列車は11時30分発の普通だから、この間に食うもん食っとくように。まあ、食いたくない人は別だけどな。で11時30分のふつうで途中の国府津で降りる。国府津で降りたら御殿場線の12時32分発の列車に乗って終点沼津が13時50分着。それで、沼津から14時15分発の普通で、途中の清水まで乗る。その清水到着が14時59分。そのあとエスパルスドリームプラザとかっていうところに行つて、清水に戻つて17時15分発の普通で終点浜松が18時41分。とまあ、こんな感じだ。」

ああ、あと言い忘れてたけど「ホームライナー」に乗るためには310円必要だからそれも忘れるな。忘れたやつはたとえサヤでも置いてく。」

「はい、分かりました。」
すると、ナヨロン先輩を抱えて、サヤ先輩と善知鳥先輩じゅんちゅうが戻ってきた。

「何二人でネタばらししちゃってんだよ。」

サヤ先輩に抱えられている状態だったナヨロン先輩がそこから抜け出して、

「ネタばらしじゃないだろ。いくらなんでも通じないって。」

「そうそう。ナヨロンの言つとおりだぜ。とりあえず工程はざっと話しておいたけど。」

「そうか。」

サヤ先輩はため息をつくど、

「よし、本当に分かったか今からおさらいする。まず「ホームライナー」って何て呼ぶか分かるか。」

ほとんどの人が手を上げて、自分の考えを述べる。まず醒ヶ井さめがいが、

「「ホームライナー」。」

「違う。永島ながしま。」

「HR。」

「そうだ。HR。」

「サヤ。HRじゃなくて、HLな。Home Linerだから。」

またナヨロン先輩が訂正する。

「んじゃあ次。ATMってなんだ。」

「現金自動預け払い機。」

「醒ヶ井バカだろ。違う。空河そらかわ。」

「熱海あたみ。」

「そう。次、御殿場線ごてんばせんってなんだ。」

「御殿場線。」

「木ノ本きののもと。いい加減気づけて。」

「あつ。分かった。突起、突起。」
「違う。」

「突起違うんじゃないよ。」

「放物線。」

「うわ、スゲエ。永島^{ながしま}当てやがった。」

「感心するところ違うだろ。」

ナヨロン先輩がツツコム。

「とまあそんな感じだ。全員覚えろー。」

「サヤ。まだ注意事項いってないだろ。」

「ああじゃあ頼む。諸君聞けー。」

「えーと、注意事項今からいいいます。注意事項はまず車内へのマックスの持ち込み禁止。」

「善知鳥^{うつくし}先輩。もしマックス持ち込んだらどうなりますか。」

「もし車内にマックス持ち込んだら、窓開けて外に投げ捨てる。」

（今の車両つてだいたい窓あきませんよねえ。）

「その2。車内でもし携帯^{ケータイ}とかが鳴ったら、その人の携帯^{ケータイ}壊します。

どうやって壊すかって言うと、折り畳み式携帯^{ケータイ}はスライドして、ス

ライド式携帯^{ケータイ}は折りたたんで壊します。」

「もし両方だったらどうするんですか。」

「もし両方だったら窓開けて、外に投げ捨てるか。開かなかつたら着いた駅でゴミ箱に捨てるか、車内のトイレに流す。」

（とにかく。まともな壊し方しないってことね。）

「その3。来た列車が吊りかけじゃなかったら、界磁^{カイジ}チョッパヤダ

吊りかけがいいって言うこと。」

「言わなかつたらどうなりますか。」

「一番最後。やらなくていいだろ。だいたい、今の車両^{車両}なんてVVVF^{VVVF}が多いんだから。」

「んじゃあ、VVVF^{VVVF}ヤダ吊りかけがいいで。」

「関係ねえよ。とにかく言わなくていいってこと。」

「ちなみにナヨロンはその犠牲者です。」

「言わなくていいつうの。」

最後はナヨロン先輩が善知鳥先輩を押し潰して、この話は終了。

「旅行とかはだいたい決まった。」

横で聞いていたアド先生が口を開いた。

「あつ、だいたい。」

「それで、北齋院君。自己紹介とかはしたの。」

「あつ、とりあえず名前だけぐらいい言いましたけど。」

「1年生に顔とか覚えてもらうために、もう一度やって。クラスと名前と一言でいいから。」

「あつ、分かりました。えーと全員席ついて。今から顔覚えてもらうために3年生から順番で自己紹介することになったから。とりあえず俺から始めるけど。3年5組。北齋院大智です。よろしくお願ひします。」

「カツコすごく天然です。」

「一言余計。次、善知鳥。」

「3年5組善知鳥茉衣です。何か分かんないことあったら聞いてください。」

「3年8組綾瀬健斗です。よろしくお願ひします。」

「こいつの作ったゴミモジュールいっぱいあるよ。」

「ゴミじゃないだろ。・・・3年6組名寄真佐哉です。鉄道には詳しいんで何でも聞いてください。」

「地図を読むのは苦手です。それと彼女募集中です。」

「一言余計だ。次、ハクタカ。」

「2年8組。鷹倉俊也です。よろしくお願ひします。」

「「チャンダーバード」と「パクチャカ」にしか詳しくないぞ。」

「「サンダーバード」と「はくたか」だけで悪かったですね。次絢乃。」

「2年8組の楠絢乃です。よろしくお願ひします。」

「自称。鉄研のホームヘルパーです。」

「違います。次、1年生。」

「1年5組の佐久間悠介さくまゆうすけです。電車は新幹線が興味あります。よろしくお願ねがいします。」

「1年4組箕島健太みしま けんたです。よろしくお願ねがいします。」

「1年7組醒ヶ井瑛介さめがえいすけです。電車には全く詳しくありませんがよろしくお願ねがいします。」

「1年4組木ノ本榛名きのもと はるなです。よろしくお願ねがいします。」

「1年5組永島智暉ながしま ともきです。電車にはそこそこ詳しいのでよろしくお願ねがいします。」

「次中学生。」

「1年A組の諫早轟輝いさはや ほうけいです。よろしくお願ねがいします。」

「1年A組空河大樹そらかわ だいきです。よろしくお願ねがいします。」

「1年A組朝風琢哉あさかせ たくやです。よろしくお願ねがいします。」

これで部員全員の紹介が終わる。読者の皆様も少しは覚えてくれただろうか。

4月30日。今日で部活決定が仮決定から本決まりになる。

13列車 初旅行の工程（後書き）

ようやくとここまで来ました。

これから2話程度の旅行シリーズになります。どうぞ自分がそこに
いると思って読んでみてください。

本当に読んでくれる人には感謝。それと感激です。

14列車 揺られて(前書き)

現実と大きくかけ離れているところがございますがこの中だけですので。

自己満足なところがあって本当にすみません。

14列車 揺られて

5月2日。4月29日にサヤ先輩から言われたプランで旅行。

6時45分はままつ浜松駅在来線改札口を守るため、余裕を持ってはままつ浜松駅に到着した。だが、余裕を持ちすぎたかもしれない。そこには僕以外誰もいなかった。しばらくそこからそんなに離れないところをふるふると行ったり来たりを繰り返していると、

「ナガシイ。」

聞き覚えのある声だ。でもこの声は萌の声ではない。善知鳥先輩の声だ。

「ナガシイ早いなあ。本当に鉄道好きっていう表われかもなあ。」

「・・・。」

いうことは何もなかった。

またしばらく待っているとアヤケン先輩が、また数分後にはハクタ力先輩と楠先輩が、その数十秒後には醒ヶ井と箕島が、そのまた数分後にはナヨロン先輩が集合した。6時40分現在、まだ集合していないのは木ノ本と佐久間と中学生3人。そしてサヤ先輩だ。

改札口が少し大きな荷物を抱えた人で込み始める。でも人数は少ない。荷物が大きいため込んで見えるだけだろう。この2分前には西鹿児島からの「寝台特急はやぶさ」がお目見えする。その7分前には南宮崎からの「寝台特急富士」が参上する。両者とフルトレインも東京と九州を結んでいる寝台特急の仲間である。

「よーす。永島。」

後ろから肩をたたかれた。振り向いてみると木ノ本だった。さらにいさはや諫早、そらかわ空河、あさかせ朝風の姿もある。

「お・・・お前らいつたどこから来たんだよ。」

「えっ。どっつて、こん中からだけど。」

木ノ本は親指で改札口の向こうをさした。イコール。今の今までホームにいた。イコール。「富士」、「はやぶさ」を撮影していた。

「まさか。「富士」と「はやぶさ」の写真撮りに行ってたのか。」
「うん。それにしても大変だったよ。お祭りから逃げるために口実
作って、昨日の20時からここにこもって、「富士」と「あさかぜ」
と「はやぶさ」と「出雲」と「瀬戸」と「さくら」と「みずほ」と
「銀河」と「スーパーレールカーゴ」撮影してたんだから。」
「よくやるなあ。」

「ああ、それにしても久しぶりにやったなあ。だから今すつごく眠
いんだよねえ。ちよつと電車の中で寝ながら行くわ。」

「おい、まさか中学生も一緒だったとかって言わないよなあ。」

「それは言わないよ。空河が来たのが6時00分ごろで、朝風が来
たのが6時12分ごろで、諫早が来たのは6時21分だもん。」
（全員俺が来る前にホームが上がってたのか。だんだん木ノ本の撮
り鉄根性がむき出しになってきたかも。）

「あつ、そつ。」

6時45分。まだ現場に現れていないのはサヤ先輩と佐久間だけ。
「サヤとユウタン。置いてけぼり決定。」

善知鳥先輩はそのことを喜んでいらしく万歳をしている。

「相変わらずだな。あいつ毎回時間通りに来ないからなあ。俺たち
が1年生の時の歓迎旅行もボイコットするみたいな勢いがあったか
らな。」

「サヤ先輩ってそんなに時間守れないんですか。」

「守れるには守れるんだけど、こういうときはルールになるってい
うのかなあ。ホント。遊びに行く時だけはこういう風になる。遊ば
ないときは真剣に時間守るんだけどね。あいつって変だよなあ。」

「まったく。後輩を待たせるなつうの。鉄研部の部長が。」

先輩たちが口々に文句を言って遅れてくる部長を待っている。す
ると、3分遅れでサヤ先輩が到着。さらに5分遅れて佐久間が到着
した。佐久間が到着するとみんなから「休日乗り放題きつぷ」の2
600円と「ホームライナー」の整理券料金310円を徴収。しば
らくその位置で待っているとサヤ先輩とナヨロン先輩が「トイカ」

の宣伝が書かれている包みを持って戻ってきた。それを順番に渡していく。渡された包みを開けてみると、切符が2枚入っていた。横に長い水色が買った切符が「休日乗り放題きっぷ」。小さくオレンジ色っぽくなっているのが「ホームライナー」の整理券だ。その整理券が示していたのは6番B席。後でだれがとなりか確認してみると僕の隣は諫早いさはやだった。

6時55分。コンコースでやる作業はすべて完了。それぞれ改札口に上がる。「休日乗り放題」は普段皆さんが使っているきっぷとは違う。改札機を通らず、直接窓口のほうを通って改札を抜けるのだ。そのとき5月2日と書かれたハンコを押される。この後改札を通ることについては改札で駅員に提示するだけでいい。無人駅だった場合は車掌か運転手に提示すればOKオーケーだ。

ハンコを押された切符はこの後熱海まで用はない。包みの中にしまつて階段を上る。階段を上ると今度は右にかじを切つて1・2番線ホームに上がる。

僕たちの乗る「ホームライナー」は1番線に控えていた。窓周りが黒。その下に入るオレンジ色の帯。JR東海の特急車両373系だ。これの3号車に乗り込み、発車の時を待つ。7時05分。「ホームライナー」は時間通り浜松はままつ駅を発車した。

浜松はままつを発車した373系は快調に東海道本線を飛ばす。浜松はままつを発車するとすぐに新幹線とはずれ、しばらくすると天竜川てんりゅうがわを通過する。天竜川てんりゅうがわを通過すると坂を上って鉄橋を通過する。

「永島ながしま 静岡しずおかまだ。」

後ろの席に座っている佐久間さくまが話しかけてきた。

「まだだよ。まだこれ天竜川てんりゅうがわだろ。」

「えっ、これ天竜川てんりゅうがわ。もう安倍川あへかわだと思ったよ。」

とぼけていることは知っている。弁当を食べているときによく話していることだが、本物を聞くとあきれる。

「んなことあるかよ。どこをどう曲げたらこれが安倍川あへかわになるんだ

よ。」

「ハハハ。そうだな。」

話が終わると、窓のほうを眺めた。下流には東海道新幹線の天竜川鉄橋が見える。

「ちよつと行ってくるよ。」

後ろに流れていく浜松の風景にさようならを言って、外を流れる風景に見入った。

時折下り列車がこちら側の視界を遮る。その時には何系かということがふつうに気になる。

「前が313系で、・・・後ろが211系。」

諫早が側面の色で判断をつけた。読者の皆様にも簡単に見分けたポイントを説明しておこう。まず、313系のラインカラーはオレンジ色。211系のラインカラーは湘南色と呼ばれる緑とオレンジのライン。そして、顔。鉄道は皆同じ顔という概念がある人はぬぐい捨ててほしい。鉄道にはそれぞれ個性があり、皆が皆同じではない。313系はオレンジ色のラインが入った顔、211系は湘南色のラインが入った顔をしている。もちろん。違いはこれだけではないが、今ここで説明してしまうと処理ができなくなると思うのでやめることにしよう。

「313系と211系か。ここら辺ってそついう編成ふつうにやってるんだな。」

「確かに。名古屋圏はこんなくそつたれ編成やってませんもんね。」

「くそつたれかよ。」

「ああ、くそつたれはありませんでしたね。名古屋圏はこんなゴミ編成ないですね。」

「あんまり変わってない気が・・・。」

そんな話で1時間。「ホームライナー」は8時03分静岡に到着。次に乗車するのは8時51分発。普通熱海行き。これまでは少々時間がある。

373系「ホームライナー」から下車して、まず集合がかかる。

8時51分発の列車に乗るためにここに集合しろということだった。その確認が終わると自由行動になる。

「なあ、永島^{ながしま}。おなかすかない。」

木ノ本^{きののもと}が話しかけた。

「えっ、どうして。」

「だって、ご飯食べてないんだもん。昨日の晩御飯から何も食べてない。飲み物は飲んだんだけどね。」

「あっ・・・そう。よくやるなあ。」

「よくやるなあって、このくらい当然だろ。」

「俺は撮りに行ったりとかしたことないから、当然とか言われてもわかんねえよ。」

「えっ。ないの。」

「そんなことより、なんか食べてこいよ。そこら辺にキヨスクだの蕎麦屋^{そばや}だのなんかあるから。」

「それくらい知ってるよ。で、話が脱線したけど、永島^{ながしま}もなんか食べる。」

「食べねえよ。つつか、ご飯家で食ってきた。」

「そうかあ。」

と言ったら階段の向こうにある蕎麦屋^{そばや}に一人駆けていった。

ふと373系に目をやってみるとヘッドマークがさっきの「ホームライナー」から「ふじかわ」に変わっていた。案内には8時17分発。「特急ワイドビューふじかわ」甲府行きとある。

携帯電話^{けいたいでんわ}を取り出して、その写真機能を使う。373系を収めるとそのあとに収めるものはなくなる。

「「ふじかわ」かあ。」

横を見るとさっき蕎麦屋^{そばや}のほうに行っていた木ノ本^{きののもと}が戻ってきていた。た。

「いつの間に戻ってきた。さっきまで蕎麦屋^{そばや}のほうに行つて・・・。」

「ああ、さっき食べて戻ってきた。こういつとき便利だよねえ。あ

の手の蕎麦屋とかうどん屋。ホームにあるから外に出る必要ないし。

「……。そこまで食べるのが早ければ、おにぎりとかのほうが効果的なんじゃない。」

「それもそうかもしれないけどさあ、気分によるんだよねえ。今はおにぎり食べたいうと気じゃなかったから、そばにしたらただけだ。それにそばとか麺類ってするする入って、早く食べ終わりそうな感じしない。」

「ああ、確かに。」

「だろ。こういうときはああいう店に駆け込み入店するのが一番いいと思う。」

(駆け込み乗車じゃなくて、駆け込み入店かあ。)

それは一理あると思った。自分も麺類は好きだし、麺類だと早く食べ終わるといふ先入観もある。

という話は置いて、8時45分。自由行動は終了。さつき確認された位置に全員が集合する。しばらくすると313系を先頭に6両編成の普通列車が入線してきた。この列車で終点熱海まで揺られる。

「ナヨロン先輩。さつきから何見てるんですか。」

僕は純粹にナヨロン先輩が向けている目線が気になった。彼はさつきから313系ではなくて上を見ている。それもずっと向こうの上だ。

「いや、パンタの向きがどっちかなあって思ってた。」

ピンポン、ピンポン。ドアが開いたので、ホームに人があふれる。ドアから吐き出される人の波が終わると今度は乗る人の波。さつきと同じで降りる人も乗る人も同じくらいなのでさほど混みようも変わらない。ナヨロン先輩は先頭のドアのところに荷物を置いて、さっきの説明を続けた。

「313系と211系サイイチサンってシングルパンタニイチイチのつき方が逆なんだ。つまりどっち向きでついているかわかれば、後ろの車両やっを見ないで判

別できる。」

ナヨロン先輩は手でくの字を作つてさらに続けた。

「これがシングルパンタとして、これが東に開いてる車両（車両）。つまり今乗つた位置からすれば右に開いてたら313系（サンイチサン）。左に開いてたら211系（ニイチイチ）つていう風になる。それで先頭車だけ判別したかつたらヘッドライトの色を見ればいい。だいたい黄色っぽいヘッドライトしてる車両が211系（ニイチイチ）。まあ、運用のあれで、311系（サンイチイチ）だつたり313系（サンイチサン）の名古屋圏の車両だつたりすることはあるけどな。それで、白のヘッドライトが313系（サンイチサン）2500番台。こころ辺で白は2500番台しかないから、見分けやすいよ。」

「へえ。」

「ナガシイ。そんなところ固まつてないでこつちにくれば。座れるよ。」

楠先輩（楠のき）に呼ばれて、そつちのほうへ赴いた、

「ほら、ナガシイ座つて。」

「えっ、でも。」

「いいの、いいの。あたしはこれくらい大丈夫だし。」

「やせ我慢するなつうの。お前こそ座つとけ。」

ハクタカ先輩が口をはさんだ。

「別に……。」

「いいから座れ。どうなつてもしらねえぞ。」

楠先輩（楠のき）はハクタカ先輩に無理やりという形で座らされた。

「チツ。アヤノンのやつうまく逃げたな。せつかくのいじる材料がなくなつちやつたじゃない。」

隣は善知鳥先輩（善のちゅう）。今のことはどうやらいじられるという立場から逃げたかつたからだそうだ。気づくと列車はすでに発車しており、次の停車駅東静岡（ひがししずおか）の案内を行つていた。

東静岡（ひがししずおか）に止まつて、すぐに発車。次は草薙（くさなぎ）と言つていころ、善知鳥先輩（善のちゅう）が話しかけてきた。

「ナガシイ。こつちやつてるのをひまだし、なんか話そうか。全員の

面白い話とか、いろいろ。」

こう持ちかけてきた。今の僕にはそんなに暇ではないのだが、さっきまで「ホームライナー」に乗っていたという反動が大きかった。

「別にいいですよ。」

了承すると後は一方的に善知鳥先輩にペースになった。

「そうだなあ。まず、アド先生の異名とかって聞きたいって思わない。」

「うーん。はい。」

「アド先生のもう一つの異名はねえ……ハゲ友の会会長よ。」

「えっ。」

「だからその名の通りだって。アド先生今髪の毛ないでしょ。だからそういう異名も5年前の先輩がつけたんだって。そういう話。」

「アド先生のほかの話ってないんですか。」

「アド先生は何かと少ないんだよねえ。でもほかの人だったらこういうの多いよ。例えばナヨロンとか。」

「ナヨロン先輩にもなんか異名みたいなのあるんですか。」

「ナヨロンの場合は伝説だよ。伝説。あいつ電車に異常に詳しいじやん。」

「じゃんって言われても。僕はまだ付き合ってたそんなに経ってませんから。」

「それでもわかるだろ。あいつ電車に乗ったら見るところが違うんだよ。パンダグラフとかっていう……。」

「パンダグラフです。」

「いいよそんなこと。あいつそれ見て、あつこれは何系だとかいうからね。他にあいつが入部したときに青木さんっていう人たちと電車のこと話してたのよ。その時ナヨロン、エスエルの話して、知識で先輩たちを撃ち落としたからね。」

「えっ、ナヨロン先輩ってそんなに詳しいんですか。」

「詳しくすぎだよ。ここがこうなってるからこれは何々だねとかってもうどっかの先生みたいに言うから。」

確かに。どこか先生じみているというところはある。

「じゃあ、鉄道知識でナヨロン先輩に勝つって無理じゃないですか。」

「あつ、でも勝つことができる分野もあるよ。例えば、料金とか、距離とか、駅名とか。ここ覚えてるとナヨロンに勝てるよ。」

料金。駅間。駅名。すべて僕が詳しくないところだ。

「ダメだ。僕はナヨロン先輩には勝てませんね。」

「何。ナガシイも電車のことだけなのか。」

「はい。僕、新幹線を除外するなら223系が好きなんですけど・・。」

「ごめん。あたしその時点でついていけない。そもそも223系って何。211系とかじゃなくて。」

「善知鳥先輩。あまりそういうこと言わないほうがいいですよ。」

「それは分かっているよ。でもあたしには違いが分からないんだって。なんせ0系もわからない人よ。」

自慢げに言われても何の自慢にもならない。

「223系ってJR西日本の新快速シニカイソクなんですよ。その1000番台と2000番台の違いはテールライトがヘッドライトのすぐ下にあるかないかなんです。」

「えっ、それだけ。もっと顔が大々的に違いますとかじゃないんだ。」

「だって同じ車両ですよ。違いが少なくなるのは当然です。でも、視認性だけで違いが判断できるわけですから、まだまだ優しい間違えを探しだと思えますが。」

「うーん。そうなのか。」
電車のことを話して首を傾げられることは今までなかった。そもそも萌はこの違いは理解していたし、223系すべての違いも分かっていた。それとも、僕が今までそういう人として話していなかったからこういう結果になったのだろうか。

「ダメだ。やっぱりあたしには電車のこととはわかんない。それより

まだまだ面白い話あるんだけど、聞きたくない。」

何かと停滞した空気を進めたいらしい。うなずいて話を進めさせて、

「ナガシイ。この部活の中で好きな人っている。」

「いませんけど。」

「うそつ。ハルナンのこと好きじゃないの。」

「好きとか嫌いとかいうわけじゃないですけど、そういう目では見てません。」

「なるほど。他の人かあ。ならいいや。ちょっと掘り込んだ話しちやつてごめん。でも、この部活には部活内恋愛しちゃってる人いるんだよねえ。」

興味はないのだが何か答えを返さなければと思って誰ですかと聞いた。

「アヤノンとハクタカ。二人とも幼馴染同士なんだけど、冷やかされると否定するから。」

「それって自分がただただ冷やかしたいだけじゃないですか。」

「その冷やかするのが面白いんだって。」

これはどう反応したらいいものか……。

14列車 揺られて(後書き)

新入部員歓迎旅行。ようやくと鉄道研究部らしくなりました。でもこういう旅行にいくとマニアの人の恐ろしい能力が発揮されるんですよねえ。それがあらわになっていてる人が多いですが、これだけだとまらない人も世の中には……。あーあ。マニアのパワーって本当に恐ろしい。

15列車 熱海 国府津 清水

しばらく313系に揺られて熱海まで行く。途中にはパルプの盛んな富士。旧東海道本線。御殿場線との分岐駅沼津。新幹線の車両基地がある三島と主要駅が続く。三島を発車すると次は函南。函南を出ると次は終点熱海だ。ここ函南と熱海の間には丹那トンネルというトンネルが存在している。このトンネルを通りぬけると隣に東海道新幹線の線路が見える。そしてまたトンネルに入る。そのトンネルを出ると熱海のホームに滑り込む。

「やつとここまで来た。」

善知鳥先輩は体を伸ばした。

「よく耐えたな。」

サヤ先輩はそれに感心している。

「よく耐えたなって。よつぽど耐えきるのが珍しいみたいな言い方だな。」

「だってそうだろ。お前の場合寝てるかなんかしないとどうかなるだろ。」

この話を聞いていると善知鳥先輩がこの部活に入った理由がなんなのかわからなくなってくる。

「みなさん。集まってください。」

アド先生が集合をかけて、全員を集める。全員集まったら改札に向かい、朝渡された「休日乗り放題きっぷ」を駅員に掲示して出た。

改札を出ると人盛り。歩くところが狭いからか東京よりも人がいると錯覚する。僕たちが出た出口付近には足湯と蒸気機関車が展示されていた。多分、日本に鉄道が走り始めたところに走っていた蒸気機関車だと思う。その蒸気機関車の前まで来るとアド先生から指示があった。

「みなさん。これから自由行動にします。11時10分にここに集合してください。」

「はい。」

全員の声がそろつ。それが済んだところで、みな思い思いに解散していった。

「さて、俺たちは昼飯にでもするか。」

佐久間が僕を誘った。

「昼か。早くない。」

「早くないだろ。乗る電車が11時30分なんだから。」

それもそうかと思ひそれに同意することにした。熱海駅側には長屋みたいに建物が建っている。そこに2階はどうやら飲食店が並んでいるらしい。そこに入って、全員で昼を食べることになった。入ったところは2階に上がってすぐのラーメン屋。そこで昼をとったあとは何もすることがない。1回のお土産屋のあたりをふるふると歩いて、家用に買っていくお土産を選んだ。それが終わったらさっきの蒸気機関車のところに戻った。

そこにはすでにナヨロン先輩がいた。ただ、厳密に言えば違う。のんきに足湯に浸かっているのだ。

「ナヨロン先輩。」

声をかけた。すると振り向いて僕のほうを見た。少し驚いたようだ。

「永島か。善知鳥かと思つたよ。」

「善知鳥先輩だったら都合が悪かったですか。」

「悪すぎたよ。もしかしたら、この足湯に突き落とされるかもしれないからな。」

「そうなんですか。」

「いや、それくらいしてきかねないっていうのかなあ。まあ、そんなところ。・・・ところで、永島今まで何してきた。」

正直に昼ご飯を食べてきたと答えると、

「そうかあ。真面目だな。」

「えつ。お昼ご飯食べるこつて真面目なんですか。」

「そつ真面目。いや、真面目すぎる。こつという業界にいくと昼なんてただ邪魔なイベントになるだけだぞ。永島もそつというタイプだから」

らすぐに分かる。」

（そういえば、アヤケン先輩「昼食べたい奴は食べとけ」って言うてたなあ。もしかして、アヤケン先輩も食べてないのかなあ。）

「アヤケン先輩はいま何してるんですか。」

「んっ。確か綾瀬あやせなら、海のほうへ歩いてったと思ったけどなあ。何か写真にでもとってるんじゃないか。ギャルとか、ギャルとか、ギャルとか。」

「それしそうなのは断然ナヨロンのほうだけだなあ。」

後ろを見てみるとさっき噂していた善知鳥ぜんちう先輩だった。その姿を見るとナヨロン先輩はさっさと足湯から出た。

「どうしたナヨロン。」

「いや、何となく。」

一息おいて、

「ところでなんだよ。俺がギャルの写真撮りに行くって。」

「だってしそうじゃん。ナヨロン彼女いないんだし。それに初恋もないらしいし。」

「初恋はあった。フラれただけ。」

「どっちも同じじゃん。そんなことよりナヨロンで遅れてるぞ。このナガシイでさえ彼女いるくらいだぞ。」

「へえ、そうなのか。」

「ナヨロンいつまで、電車が彼女だって言ってるんだよ。」

「勝手に話進めるなよ。俺はそこまでじゃないぞ。・・・ところで、そういう善知鳥ぜんちうには春が来たのかよ。」

ナヨロン先輩がそう聞いた瞬間善知鳥先輩の顔が少し赤くなった。

「い・・・いえるかよ。恥ずかしい。」

少しは恥じらいというものあるらしい。

11時10分。サヤ先輩が1分遅れて集合場所に到着。これで全員そろった。揃ったところで改札口を通り抜けて、またホームに戻る。ホームで待っていると函南側かんなみから白いヘッドライトをつけた車

両が接近してきた。JR東日本の一大勢力。E231系のお出ましである。乗車位置は8号車。15両編成の車両のちょうど中間である。

11時30分。僕たちを乗せた15両編成の車両が熱海を発車する。その隣には185系の「特急踊り子」など。東海道本線の特急列車が並んでいる。熱海を出るとしばし、外の風景に目を向けていた。

しばらくすると眼下に相模湾が広がるようになった。世界に比べれば相模湾などほんの点でしかないのだが、ここから見る限りはそんなことは思わない。あなたには地球の輪郭がわかるように少し丸みを帯びて見える。

「海だ。」
普段海に縁のない人のテンションが上がる。しかし、すぐにトンネルに入ってその視界が遮られる。

「このトンネル死ねばいいのに。何やってるんだよ。」
トンネルに文句を言ってもどうにもならないと思うが……。そのトンネルを抜けるとまた海が見える。しかし、今度は木に邪魔されてよく見えなくなる。これを何度か繰り返して、根府川に停車。その後早川まで相模湾を望み、早川から沿岸部を外れて小田原に。次の鴨宮は東海道新幹線が開業する前モデル線があったところである。ここから30km程離れている綾瀬までモデル線は伸びていた。ここで新幹線のための各種試験が行われたのだ。鴨宮の次は国府津。ここで東海道本線からは分かれる。

12時00分。国府津に到着。8号車から下車して、E231系を見送る態勢をとった。しばらくするとE231系のドアは3回電子音がしてしまった。すると高い歌声を奏でて国府津のホームを後にいしていった。国府津を発車すると線路が左にカーブしている。そこに差し掛かるころにはスピードは70km/hを優に越しているだろう。こんなに早いものかという速さで走り去っていった。

それを見送ったら、御殿場線のホームに赴いた。ここに列車が来

るのはまだ先である。そのころ。さつきE231系が走り去っていったホームにはまた別のE231系が入線してきた。これもさつきと同じスピードでホームから走り去っていく。

「早いなあ。」

ふと言葉が漏れる。

「あんなに早いものかなあ。いつつ寝台特急フルトレとか見てるからあんなに加速率いいとはつきり驚くわ。」

木ノ本きのもとも意外な感じで話している。

「まあ、そこは人それぞれだろうな。普段電車しか見てない人はあの速さがふつうと思って、寝台特急フルトレとかが発車するときはこんなに遅いのかって思う。だけど、そのほうが見慣れてる人はあれくらの速さが速く見えて、寝台特急フルトレのほうがふつうに見える。木ノ本きのもとはそういう方面では正常だよ。」

ナヨロン先輩がさらに続けた。

「乗ってるぶんにはそういうこと考えないんですけどねえ。」

「乗ってるときはそういうこと考えないだろうなあ。他のに気をとられてるから。」

(他のに気をとられてるかあ。そうかもな。)

「。。。。」

この会話が終わってしまうと3人も黙ってしまった。全員見る風景に気をとられて、そういうことを考えないようにだ。

数分後。御殿場線ごてんばせんの列車を待つているホームに電車が入線する。

今度はさつきの313系と違い211系という車両である。違いは前述したとおりである。

「211系ニイチイチかあ。乗り心地悪い奴だな。」

佐久間さくまが211系を見るなり文句を言った。

「えっ。乗り心地悪いのか。」

「悪すぎだよ。こいつ発車したときにガクンガクンなるからな。」

この表現は相当悪いということらしい。

「佐久間。乗るんだつたら前がお勧めだぜ。」
隣で会話を聞いていたナヨロン先輩が答えた。前の車両のパンタグラフを遠目ながら見てみると2つあった。僕にはそれが何系なのかわからなかった。

御殿場線に乗車して、発車を待つ。12時32分国府津を発車。しばらく外に目を向けていると隣に大量の線路が現れた。車両基地のようだ。そこには211系など御殿場線で活躍する車両が止まっていた。この光景を後にすると山に分け入り、風景的にはそんなに面白くない光景が続く。また数十分揺られていると目の前に富士山が現れた。今日の富士山は晴天に恵まれ頂上まで見える。その写真を僕は写真ではなく目に焼き付けた。しかし、そのころになると風景にも飽きてしまった。もちろん、こうなったらやることは一つだ。席を立って数人誘った。

乗った車両は3号車。隣の2号車に方へその数人を引き連れて歩いて行った。2号車に入るとシートの形が変わった。さっきまでのロングシートがクロスシートに変わった。

（なるほど。ナヨロン先輩が「前がいいよ」って言ったのはこういうことか。）

ここでようやくと白黒はつきりした。

そのころ、誘った諫早、空河、朝風はすでに一番前にかじりついていた。僕もその一員に加わって前を見る。さらに木ノ本、佐久間が加わって6人で前を見つめた。

この状態を終点沼津の手前までや手、沼津に到着する直前に元の場所に戻った。

「お前ら何してんだよ。」
戻るなりハクタカ先輩にそう聞かれた。

「大目に見てやれって。ハクタカだってわからないわけじゃないだろ。」

「確かにそうだけど。ガチでそれをやられると・・・。」
「何か不都合なのか。まあ、普段裏声上げてるハクタカが言うのに

も説得力っていうものがないけどなあ。」

「このう。」

沼津ぬまつに到着。ここからは東海道本線を逆戻りだ。14時15分発の普通列車で、途中清水しみずまで揺られ清水で下車。下車してからは清水しみずの繁華街みずつぽいところを抜けて、東海道線をまたいで、清水しみずの東側にある公園を通り抜ける。途中で踏み切りがあつて、そこを211系が通過していくのが見えた。さらに歩いて静岡鉄道の鉄橋が見えるところまできた。そこをゆっくりと通り過ぎていく静岡鉄道の車両を眺めて、また歩き出す。そのあとはいろんなところを通って行ったため、どこをどう歩いたかなんて覚えていない。30分か40分くらい歩いただろうか。エスパルスドリームプラザに到着。しかし、鉄道好きの僕には何もすることがなく困っていた。ふるふる和中を歩いていると佐久間さくまが僕の肩をたたいた。

「おい、永島ながしま。見てみるよ。フェラーリ乗り場。」

笑いが噴き出た。当の佐久間さくまも笑いをこらえられないでいる。

「フェラーリつて。フェラーリ乗り場じゃないか。」

「こっから乗れるのは、フェラーリじゃなくて、フェラーリに変わったんだよ。」

こんな冗談誰なら受けるだろう。

15列車 熱海 国府津 清水（後書き）

高い歌声ってモーター音のことですよ。

電車を人に見立てた描写がまた多く出てくるときがあるかもしれない。
せん。

また、電車にも感情があるんですよ。

読者のみなさん。これからはたとえものといえどいたわってやって
と思う今日この頃です。

16列車 3 cars or 6 cars

16時30分ごろ。エスパルスドリームプラザの2階入り口に集合。そこから今度は道を一直線に進んで清水しみずに帰る。予定では乗る列車は17時20分発の列車である。帰路。僕、諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかぜはさつさと歩いて一番先頭に立ち、その後ろに木ノ本きのもと、さらにその後ろに先輩たちが続く形になった。先輩たちとは距離が離れて、50mメートルぐらいあったと思う。

しばらく歩いて、長い歩道橋らしく物が見えた。その西側に目を向けると清水しみずの駅舎が見える。僕たちの前に現れた歩道橋は自由通路らしく清水しみずまで伸びている。中学生たちはすぐにその通路を伝って清水しみずまで走っていき、僕はそれを追う形になった。改札を通りに抜けて17時15分。十分間に合う。階段を下りてホームに向かった。ホームにはすでにその列車に乗る人たちの人盛りができていた。その頃先輩たちは、

「17時20分。まだ間に合うけど・・・。」

「そうだな。最後の最後までいゆっくり帰らせてくれよだよなあ。」

「これじゃあ、死んじゃうじゃん。」

「できれば、もうちょっとあったほうがよかったなあ。」

電光掲示板に書かれている「3両」の表示にため息をついていた。

17時19分。その列車が入線。そのころには先輩たちもホームに降りてきて、列車を待つていた。

「最後に乗る列車はこいつですね。」

諫早いさはやが乗り込み、空河そらかわが乗り込む。僕もそれについて乗り込もうとした時、

「待て、その列車こいつに乗るな。」

サヤ先輩が待ったをかけた。

「おい、諫早いさはや。空河そらかわ。降りろ。」

その声を聴いて、下りるように促す。すぐに反応した二人はホーム

に降りて、数秒後にドアが閉まった。間一髪である。ドアが閉まった211系はホームから走り去っていった。

「サヤさん。なんで今の列車に乗らなかつたんですか。」
「諫早が下りるといった意味を聞いた。」

「今のは3両だぞ。あんな中に放り込まれたいか。」

「いわゆる。混むから乗りたくないってことだ。」
「アヤケン先輩が解説する。」

「なんですか。それ。今に乗っていくっていう風になつてたじゃないですか。だったらあれに乗るべきでしょ。たとえ1両でも。」

「大丈夫。こんなの日常茶飯事だから。お前たちに今後の部活の予定表渡してあるだろ。あれ。今までなかつた日にやることつてなかつたか。」

善知鳥先輩の解説には何となく納得できた。4月の24日以降あつた部活は25日、26日、27日、28日、29日。予定されていた日は25日、26日、29日。27日と28日の部活は最初から予定になかつた。それをやっているのだ。そして、24日の部活も予定されていなかつた。つまり勝手に行われている部活があるのだ。「だから、予定表なんて気にしちゃいけない。予定表通りにやらないのがこの部活なんだから。諸君。分かつたか。」
「こつという部活で、そんなにルーズじゃいけませんよねえ。」
「いけないんだけどねえ。でもすぐになれるよ。」

この後聞いた話だが、善知鳥先輩たちが入部したときからこの状態だつたらしい。ほぼ伝統化してしまつているそうだ。

次に来る列車は17時37分発。普通浜松行き。これには行先の隣に6両とはいつていた。そのため、この列車に乗って帰ることになり、浜松到着は19時04分となつた。

17時37分の列車は211系を先頭にする6両編成。パンタグラフを見ていたナヨロン先輩の判断では後ろは313系ということだつた。

211系のシートに座つて、ポーツと外を眺めていると新幹線の

線路が隣に現れた。静岡しずおかに着いたのだ。その静岡しずおかには長居せずにくぐりに発車。その後「ホームライナー」で通過してきたすべての駅に停車しながら、浜松はままつを目指す。その間はどうしても暇になる。

「永島ながしま。柿ピーでも食べる。」

「おう、食べる、食べる。」

柿ピーがなんなのかは別にして、今は何かしていたほうが暇ではない。そう思って佐久間さくまから柿ピーをもらい食べる。

「木ノ本きののもとも柿ピー食べるか。」

「おやじか。お前は。」

「うるせえな。いいだろ好きなんだから。」

数分後。

「結局木ノ本きののもとも食べるのかよ。」

「そうじゃないって。なんか食べてたほうがまじってこと。なんかやることなすこと久しぶりすぎて体がついていけない。」

「あー、そう。」

「あー、もうこれが夕ご飯でいいや。」

「えっ、柿ピーが。」

「だって、この後夕ご飯のことなんか考えたくないもん。それにお父さんには夕ご飯食べてくるねっていえばそのあとはスルーしてくれるし。」

「なぜお父さんにメール。」

「ああ、うちイクメンだったから。お母さんがJRジェイアールで働いてるって言っただろ。だから、自動的にあたしの世話はお父さんになったわけ。」

「いや、育児休暇いくじきゅうかみたいなの取らなかつたのかよ。」

「取らなかつたらしいよ。お母さんが休んだのは私を出産する間の1年ぐらいで、私を産んだらすぐに職場に戻って運転やつたんだって。」

「木ノ本きののもとの父さんよくそれ了承したよなあ。」

「今考えてみるとかんなんだよ。お父さん昔よく私を連れて駅とか

に出かけてったから。だから、お父さんも鉄道マニアだったんだと思う。けど理由^{わけ}あって、仕事続けられなくなったんだと思う。」

「なんで仕事続けられなくなったんだよ。」

「そんなこと知らないよ。それに小さい時からそんなこと知っちゃったら運転手になりたいなんて思わないって。」

「……。」

掛川^{かけがわ}を過ぎると東海道本線は新幹線と並走する。

「なんか来ないかなあ。」

前の新幹線を見て、木ノ本^{きののもと}がつぶやく。

「なんか来てくれるといいな。でも新幹線つてさあ、なんか来てほしいなあつて思ってる時に来なくて、どうでもいいかって思ってる時に来るんだよなあ。」

「あつ、それよくある。なんで新幹線つてあんなにKY^{ケイワイ}なんだろうなあ。もうちよつと空気が読めればいいのに。」

「ハハ。空気読めか。……なんかわかる。」

すると前を新幹線が通過していった。特徴は鼻の先に光っていたテールライトだった。

「N700系^{エヌナナ}だな。」

「N700系^{エヌナナ}だな。はあ。この頃あいつ多すぎ。」

「これからあの手の車両しかいなくなるんだろうなあ。私N700系^{エヌナナ}あんまり好きじゃないんだよねえ。まだ700系のほうがかわいかったというか。」

「えつ、700系かわいいか。俺あれ一番最初に見たときなんじゃこりやつて思ってた車両^{やつ}だけど。」

「なんじゃこりやか。そこは人それぞれだもんなあ。……永島^{ながしま}さあ、自分が一番好きな車両つて何。」

この手の質問には正直困る。それぞれでいちばんがあるためだ。例えばJR^{ジェイアール}北海道ならキハ261系「スーパー宗谷^{そうや}」。JR^{ジェイアール}東日本なら253系「成田^{なりた}エクスプレス」など。他にもたくさんある。

「一番か。……答えるのに困るなあ。」

「あつ。じゃあ、新幹線でいちばん何。」

「100系と200系のH編成^{エイチ}。俺それが好きだな。」

「100系はどういう顔してるかわかるけどさあ、200系のH編成^{エイチ}ってどんな顔してる。いまいちよくわかんないんだけど。」

「H編成^{エイチ}って、あの100系の顔した200系だよなあ。」

佐久間^{さくま}が確認してきた。

「そうそれ。」

「あつ、なるほど。・・・じゃあ、永島^{ながしま}って「グランドひかり」の100系も好きなのか。」

「「グランドひかり」の100系は好きじゃない。鼻の下にあるひげが・・・。」

「あれって空気取り込み口なんだってなあ。俺もあんまり好きにはなれないなあ。」

「あつ。そうなんだ。知らなかった。」

「えつ、永島^{ながしま}なら知ってると思ったのに。」

「俺確かに電車には詳しいけど、そういう方面詳しくないんだ。それに今の今まで遠江急行^{えんぎやう}の駅と遠州鉄道^{えんてつ}の駅全部言えなかったから。」

山手線の駅は全部言えるけど。遠江急行^{えんぎやう}と遠州鉄道^{えんてつ}とは地元を走っている私鉄のことである。

「それふつう逆だろ。」

「だって、そうだったんだから仕方ないだろ。」

「でも、今なら言えるんだろ。」

「いや。まだちょっと怪しいところがあるけどなあ。順番通りに言える自信ねえし。」

こんな話をしながら211系に揺られた。浜松到着^{はままつ}は19時04分。定刻通りに到着した。

翌日。5月3日。この間は浜松祭り^{はままつ}も絡んで部活はない。毎日のように家の模型で遊んでいる。しかし、今日はちょっと携帯^{ケータイ}をいじって遊んでもいた。

「昨日、部活の歓迎旅行で国府津まで行ってきたよ。」

文面をこうして相手に送る。その返信は、

「ふうん。ところで、何か珍しい車両とか見た。」

「見てない。」

「そう。じゃあ、100系とかも見てないんだね。ナガシイの好きなやつだけだ。」

「確かに。でも本物見て失神しても困るから。」

「失神じゃないだろ。その前に死ぬだでしょ。うれしすぎて。」

「ハハ。そうかも。」

「でも、ナガシイいいなあ。いろんなところに行けて。次行くときは何か撮ってきてよね。お土産はいらさないから。」

「何がお土産はいらさないだよ。いるじゃねえか。」

「まあ、いいじゃん。でも、このお土産だったら買う手間ないよね。」

「確かに。次臨地研修が夏にあるから、その時は何か撮って帰るよ。」

「じゃあ、どこ行くかわかったらメールしてよね。予約入れるから。」

「へいへい。」

そう送ってスライド携帯の端末を閉じた。

「さて、そろそろ貨物にでも変えるかなあ。」

寝そべった状態から体を起こして、車両子に入る。これを何十回も繰り返してこの日を過ごした。他の日も同じで6日までの暇つぶしには困らなかったが、ゴールデンウィーク中に出された宿題は何もやっていなかった。とりあえず6日の午後に片づけて、次の日からまた部活だ。

5月7日。宗谷学園では、

「何、安希。」

「赤電って芝本から新浜松まで乗るといくらかかる。」

「赤電って何。」

「えっ。萌ちゃんそれでも電車詳しいの。」

「分かんないものはわかんないんだから。そもそも赤電あかでんって・・・あつ、遠州鉄道えんてつのことか。」

「ようやっとその意味が分かった。」

「400円だよ。」

「400円ね。そのあと名古屋なごやまで行きたいんだけど、名古屋なごやまでいくらかかるかわかる。」

「ごめん。私詳しいの車両だけだから。」

「あつ、そうなんだ。じゃあ、「ひかり」か「こだま」どっちが速い。」

「えっ、「ひかり」だけど・・・。それわかんないってヤバくない。」

「ヤバくないって。これって知ってたほうがいいこと。」

「そういう意味じゃないけど、それくらいふつうじゃないってこと。つてごめん。話が脱線しちゃったね。」

（本当に萌ちゃんって電車のこと好きなんだな。これで、電車が彼氏あきとか言わないよねえ。）

安希あきはそう思いながら、自分のクラスに戻った。

クラスに戻ると友達に話しかけた。

「ねえ、梓すくも。梓すくもの言うこと本当だったよ。あれってすごいよねえ。」

「すごいというかすごすぎだよ。前なんか、電車なんか見分けられてふつうみたいなこと言われたから。」

「えっ、電車って違いと違ってあるんだ。」

「そうらしいよ。この前なんか電車来たのにあれには乗りたくないとかって言ってたし。」

「へえ。」

今度はそのことを萌の中学からの友達に振ってみた。

「そのことだったらあたしたちはどうとも思っていないけど。」

「あれって受け流しとけばいいんだって。梓すくもも安希あきも真剣まことに受け止めようとするとそうなるんだって。聞き流しておけば軽い反応で

済むから。」

「萌ちゃんって昔からああいう子だったのか。」

「いや、少なくとも小学校1年生の時はああじゃなかった。」

「小1の時は……。つまり小2からああなっただっていうわけ。」

「そういうこと。萌よく電車に詳しい男子と休み時間中話してて、本人が言うにはそれだけで覚えちゃったらしい。新幹線のこととかいろいろ。」

「へえ。」

お弁当を食べ終えて、机にのめっている萌の姿を見る。

「でも、このごろ元気がないんだよなあ。彼氏と違う学校になったからかなあ。」

「えっ、あれで。」

「あつ、梓あずなたちが知ってるのは電車の話するときの萌だけ。中学の時とかもそうだったけど、授業とかになったらあれがふつつ。だから、電車の話してる時のほうが生き生きしてるように見えるだろ。」

「……。」

「本当はその人のことが死ぬほど好きなんだよ。なのに、何で別の学校に行ったんだかあたしにもわかんない。」

「……。」

ところどころ聞こえてくる言葉を背中受ける。ふと机の中からスライド携帯ケータイを取り出して、端末を開いた。待ち受け画面は阪急8000系。永島ながしまが好きな車両の一つである。

「……。」

5秒くらいの間8000系を見つめて端末を閉じた。

一方岸川学園では、

「結局ボイコットするとかみたいなこと言ってたけど、しなかったじゃないか。」

醒さめヶ井が呆めがれたように言った。

「するわけないだろ。1年生のいない歓迎旅行ってなんだよ。まあ、サヤ先輩がやりそうみたいだったけど。」

「善知鳥先輩が言つてたけど、サヤ先輩つて時間にとつてもルーズなんだつて。それだから、歓迎旅行の時に「サヤがボイコットした歓迎旅行」だつて先輩が言つたんだつて。」

「鉄研の部長が時間守れないつて死んでるよなあ。」

「あれで、将来なんになるんだか知らないけどさあ。」

「ハハハ。」

その頃3年生のほうは・・・、

「ハックション。」

「食事中にくしゃみするなよな。サヤ。」

「いや、誰かに噂されてる。まったく誰だよ。こんな時間に噂する

ゴミなやつは。」

「ゴミなやつつて。それお前おほい十八番だな。」

「ところで、今日部活あつたつけ。」

「ないよ。」

「ないのかよ。ホントゴミだな。」

その頃部室では・・・、

「お・・・お前。のぞきに来たわけじゃないんだから、ハンマー投げることないだろ。ていうか、それで窓が割れたらどうするつもりだつたんだよ。」

「そついうときは、のぞきに来たバカタカに弁償してもらつたよ。」

なんでそんなにあたしの下着姿見たいわけ。」

「見たいわけじゃねえよ。ちようど絢乃あやのが着替えてることが多いんじゃないか。つつか、そんなに見られるのが嫌なんならあつちの更衣室ういしつに着替えればいいじゃないか。あつちなら見られないんだから。」

「今ちようど体育でバレーボールやつてるんだからしょうがないだろ。あたし教室じゃなくてここで昼食べてるんだから。」

「一人で食事かよ。さびしい奴だなあ。」

「別に。教室で食べるとバカタカと一緒に食べないのかって冷やかされるから。」

「教室に帰ってくれば同じだろうが。」

その言動にあきれ閉じた目を開けると、

「何胸見てるんだよ。体育の後は制服が透けて下着の解像度がいいみたいな目で見てるなよ。」

「それ、お前の一方的な考えだ。」

「黙れ、このバカタカ。」

絢乃あやのは机の上に置かれていた小物入れの引き出しからポンド水を滴下する注射器を取り出した。

「バカやめろ。それはヤバいって。」

「バカタカ。どっちの目に打ってもらいたい。」

「どっちも嫌だわ。」

とまあ、今日も一日ふつうに過すごしている僕たち鉄道研究部てつどうけんきゅうぶである。

今回からの登場人物

そのだあき

蘭田安希

誕生日

3月10日

血液型

B型

身長

157

cm

16列車 3cars or 6cars (後書き)

この小説に出ているほとんどのキャラクターには電車からの由来があるんですよ。

今回の安希も東京〜広島間を走っていた「特急安芸」からきてます。

17列車 中間テスト

5月9日。歓迎旅行かんげいりょこうが終わって最初の部活。ゴールデンウィークの時浜松では盛大なお祭りがあるため、ほとんどの浜松市民はそっちへ貸し出される。浜松祭りとして有名である。凧上げや屋台の引きまわしなどなど。いろんなことをやっている。

今日の活動は文化祭に展示するモジュールというものの製作である。モジュールとは小さなレイアウトをたくさん繋げて一つの大きなレイアウトにするためのパーツのことを言う。それを作っているのだ。僕達がつけているモジュールは中に留置線を設けた駅のような風景のもの。まあ近くに駅はないためただの引き込み線と言った方がいい。それを作っているのだが、あれからほとんど進んでいない。それから少し日がたってテスト期間になる。この時はどうしてもモジュールの進行はストップしてしまう。それよりも少し心配がある。

「永島ながしま。今回のテスト勝負しようぜ。」

友達の宿毛すくもに誘われる。

「おう、いいよ。今回は絶対負けないからな。」

「よく言うよ。でも、今回はいい勝負になるだろうな。英語に至れば中学の復習だもんな。」

「ハハハ。で、ソツコウで悪いんだけど、数学教えて。」

「おい、数学こそ俺が教えてほしいわ。」

「まあ、そういわずに。」

「はいはい。そうしないと勝負になんないもんな。特にお前の場合は。」

宿毛すくもから数学、国語、英語、現代社会、生物。いろいろ教えてもらってテストで勝負する。45分後。テストが始まり50分のガチンコ勝負がスタートする。それを3時間。次の日に2時間。終わったらどうなるかというのは想像に任せよう。

テストが終了しテストが返却される。

「永島ながしま何点だった。」

宿毛すくもに聞かれてテスト用紙を見せる。

「マジかよ。この点数シートだぞ。」

「宿毛すくもは何点。」

「これ。でも永島ながしまの点数にはとどかないな。その点数取られると。

他ので挽回しなくちゃいけないじゃないか。」

「大丈夫。俺も国語が足引つ張るから。」

「その割にはいつも勝ってるじゃないか。」

「永島ながしま。何点だった。」

佐久間さくまが聞いてきた。

「まあまあだったよ。」

(こいつ。頭いいってこと知られたくないのかよ。)

数日後。テストの合計と平均点、クラス順位が出る。

「やっぱりこういう結果かあ。今回もまいりました。」

「いい加減にしてくれよな。俺こういうの好きじゃないんだよなあ。」

「

「順位だけはお前嫌いだな。俺が頑張ってるときにお前が手を抜い

てくれればいいのに。」

「それじゃ勝負にならないだろ。」

「お前なら勉強しなくても大丈夫だって。」

「さすがに勉強はしないと無理。1時間くらい。」

「今回1時間も勉強してないよな。」

一方他のクラスでは、

「今回のテスト、5組の人が学年トップなんだって。」

「蘭らんそれどこから。」

「興津おきつ先生の話をちよつと聞いちゃったから。名前までは聞きとれ

なかったんだけどね。でも、そんなに珍しい名前じゃなかったと思

う。珍しいやつだったら覚えてるし。」

(5組って。もしかしてあいつかな……。いやいや。バカっぽい

し、ないよな。」

「心当たりとかがってあるの。」

「いや別に。」

「だよねえ。」

友達の室蘭にはこういったが、やっぱり気になった。

「だから聞いたんだけど。誰だかわからない。」

「何。どういうこと。」

「うちの担任の沖津さんの話だと5組の生徒が学年トップ亭ことらしいんだけど。誰か心当たりないかなあって思って。」

「永島。宿毛君だよねえ。学年トップって。」

「ああ、そうじゃない。宿毛頭いいし。」

だが箕島はこう思っていた。

（学年トップってこいつだぞ。木ノ本さんこいつが同じバカ友とかって思ってるのか。そして、同じクラスの佐久間はこの事実知らないんだ。）

「じゃあ、宿毛君っていう子が今回の学年トップなんだ。」

「ああ。多分ね。」

ふと、このとき室蘭が言った言葉が再生される。

（珍しい名前……。宿毛ってふつうに聞くような名前じゃないか。じゃあ、鈴木とかがっていう名前だよねえ。だったら覚えてないのも裏付けるけど……。）

だが、そう思っただけで声にはしなかった。

「ていうか。今日からだよねえ。部活。」

「ああ、そうだな。」

「あー、これでまた文化祭まで休めなくなる。もうちょっと家でゴロゴロしてたいのになあ。」

「ゴロゴロって。永島の場合それ毎日やってるだろ。」

「ゴロゴロしてるから休めるんじゃないか。あー、家で遊びてえ。」

「永島の場合はもう遊ばなくてもいいだろ。普段から遊んでるようなもんなんだから。」

「ダメ。普段から遊んでるけど、遊び足りない。」

(いつまでこんな子供みたいなこと言ってるんだよ……。)
そのあと永島ながしまにどう話しかけていいのか。その言葉を失った。

6限目終了。これからホームルームをやって、掃除。今週は掃除担当ではないため、長いホームルームが終了したら、部室に即行で向かった。

「宿毛すくも。永島ながしまとテスト勝負してたみたいだけどどうだった。」

「あ。ああ、それなら、永島ながしまの勝ちだよ。俺は今回も負けた。」

(えっ。)

その会話を聞いて目が点になった。

(永島ながしま。あのとき学年トップは多分宿毛すくもだって言ってたよなあ。まさか、そういうの知っててああいう風に言ったのか。知られたくないのかよ。いずればれることなのに。)

「あいつ生物で満点取りやがったからなあ。俺も90点台は叩き出したんだけどシクツチまってな。それがあつちの決勝点って感じなんだけどなあ。」

「ところで、お前合計何点取ったんだよ。」

「えっ。俺が474点で、永島ながしまが475点だったけど。」

「はっ。おめえら最強じゃん。」

「まあ、今回は内容が中学からの布石で簡単だったっていうところもあるけどな。」

「お前からその学力でなんでここに来たんだよ。」

「永島ながしまは鉄研やりたいから。俺は併願校落ちたから。」

「マジかよ。俺あんなバカっぽい奴に負けたのかよ。」

「気落とすなって。俺もこの頃勝ててねえんだよ。」

「宿毛すくもに勝てないってもう無理じゃん。俺勝ってこないじゃん。」

「あきらめんなって。俺もいつかは抜いてやるうって思ってたんだ。あいつ1番嫌いだから。そうしてやれば、永島ながしまのほうは満足してくるんだけどね。」

「だったそれだけ。」

「だって。そうしなきゃ永島ながしまがうるさいんだよ。」

「永島ながしまってホントよくわかんねえな。」

「……。」

その話を耳で受けながら、掃除を終わらせると家に帰った。

17列車 中間テスト（後書き）

こういう人いたらウザいですね。

またこれって案外敬遠されがちなんでしょうか。

登場人物のほとんどが鉄道に興味があること以外はふつうだと思いますが……。やっぱりその知識量が掘り込みすぎてますかねえ……。

話は変わりますが、感想は受け付けておりますので……。感想がありましたらどうぞお書きください。そうしていただけると嬉しいです。

18列車 模型選び

テストが終了すると部活は再スタート。これから文化祭までピッチを上げる。6月に入ると衣替えで、男子も女子もポロシャツに夏のズボン・スカートに替わる。6月初頭。僕達のモジュールが完成。ここまでくれば何をすることがない。

「名寄君。文化祭で使う車両を決めたいんだけど。」
「分かりました。」

すると、

「永島。車両庫行くけど、一緒に行かない。」
「行きます、行きます。」

ナヨロン先輩についてまた岸川寮に赴いた。

岸川寮に入つて階段を上がって右にかじをきると右側に5枚扉が現れる。ここには分けて鉄道研究部のものが詰まっている。

「とりあえず説明しとくけど、相談室4には展示で使うときのモジュールとかが入つてて、自習室1が車両庫。自習室2と3がモジュール保管庫。自習室4はどうでもいいもんが入ってる。」
そう説明してくれた。

アド先生が自習室1の鍵を開けて、ナヨロン先輩と僕が続けて入った。

「名寄君。6時間で4周回だから・・・。」
「10分に1回交代が1時間で6回。6時間で36回。それが4つで144回。それだけ選べばいいんでしょ。」

「そうです。」
「じゃあ、適当にやっときますから任せてください。」
それを聞いてアド先生は他の部屋に言った。

「あのお。ナヨロン先輩。ここにあるものって全部アド先生のなんですか。」

「ああ、だいたいな。時折OBが寄贈した奴があるだけ。」

「あつ、223系とか「サンダーバード」とかいろいろある・・・。」

「自分が走らせたいやつなんでも入れていいよ。でも時折・・・。」

「それじゃあ223系と「サンダーバード」と「253系」^{ネックス}と100系。」

「ああ、ごめん。言っただけじゃなかった。走らせたといって言っても新幹線^{しんかんせん}はなしだ。新幹線^{しんかんせん}が在来線^{ざらいせん}走ることになるからな。」

「でも、E3（イスリー）系とか400系はありってことですね。」

「確かに。そういう言い方するとそうなっちゃうな。・・・入れたいのか。」

「はい。」

「分かったよ。じゃあ2本はエントリーでいいな。」

それからというものの僕は2段ベッドの下を占領している箱の中から走らせた車両を引き抜きまくった。キハ283系「特急スーパーおおぞら」。485系3000番台「特急はつかり」。E351系「特急スーパーあずさ」。383系「特急しなの」。373系「特急東海」。快速ムーンプライトながら「683系「特急しらさぎ」。787系「特急つばめ」。代表的なものはだいたい入れた。だが144も車両を選ぶとなるとどうしてもネタが尽き気味になる。3年もこの部活にいるナヨロン先輩でも困るくらいだ。

「そうだな。今回は313系^{サイイチチ}の0番と211系^{ニイチイチ}の5000番つなげて中央線^{ちゅうおうせん}の快速やるっていうのもいいな。」

「ナヨロン先輩。去年の文化祭きて思いましたけど、313系に211系を連結した運用ってあるんですか。」

「あるよ。歓迎旅行^{かんげいりょこう}のときにも乗っただろ。御殿場線^{おひつせん}の列車。後ろは211系^{ニイチイチ}だったけど前は313系^{サイイチチ}の3000番だったじゃないか。」

「あのおう、そんなこと言われても分かんないんですけど。」

「だよなあ。313系^{サイイチチ}ってややこしいからな。」

ため息をついて説明し始める。

「まず0番台が東海道線の快速で4両編成だろ。300番台がその2両編成バージョン。1000番台は0番台の中央線バージョン。1100番台はそれのLEDバージョンで、1500番台が1000番台の3両編成バージョン。2300番台は2両編成でダブルパン装備準備車。3000番台はダブルパンの2両編成。2500番台はここら辺の3両編成で5000番台が6両固定の快速用。8000番台は中央線のセントラルライナー用ってな感じだからな。まだいっぱいあるけど。」

「えっ。313系ってそんなに番台あるんですか。」

「ああ。でもこれなんか西日本の223系に似てるんだよな。」

「223系だったら分かります。0番台と2500番台が関空快速用で1000番台と2000番台が東海道線の新快速用。」

「あと6000番台のダブルパン車が地下鉄東西線に乗り入れることができて、ワンパンのやつは221系との共通運用。5000番台は「快速マリンライナー」で5500番台が霜取りようにダブルパンになった2両編成ってな。」

「あつ、223系の中にも知らないのがある。」

「永島なら知ってると思っただけどなあ。知らないんだ。この部活に入ってればいやでも詳しくなる。」

話しながら車両を選ぶ。

「そうだ。永島。貨物列車だったらどれがいい。2軸貨車だけの古きき国鉄貨物か、コキ50000形だけの旧高速貨物か、コキ100系だけのJRFの高速貨物か。もしくは鮮魚特急っていう」とびうお「か、タキ1000のタンク貨物列車か。」

「別に何がいいっていうやつはないですけど……。つつかそれだったら家にもあります。」
それを聞くとナヨロン先輩は何か思い出したようだった。

「あつ。そうだった。これ聞いてなかった。お前文化祭当日何持つてくる気。」

「えっ。考えてるのは「カシオペア」と「北斗星」と「トワイライ

トエクスプレス」と「出雲いすも」と「瀬戸せと」……。」

「寝台特急フルトレのほとんどな。」

「あとは「雷鳥ライオン」と「しらさぎ」ぐらいかな。」

ナヨロン先輩はしばらく考えてから、

「なら。「出雲いすも」はDD51（デデゴイチ）の重連で持ってきてくれない。あと他に「カシオペア」や「北斗星ほくとせい」の牽引機けんいんきはなにが来る予定になってる。」

「「カシオペア」はEF510の北斗星色で、「北斗星ほくとせい」はEF81の予定ですけど。」

「EF510（アオカマ）とEF81（ホシカマ）かあ。分かった。それで「雷鳥」っていうのはパノラマグリーン。それとも非貫通グリーン。」

「それって何か重要ですか。」

「いや、自分の中にあるイメージを膨らませてるだけ。永島ながしまだったら分かるだろ。模型は想像だって。」

「はい。何となく……パノラマグリーンですけど。」

「はい、了解……「ネックス」のさあ253系の12両編成持つてくれる。」

「できるにはできますけど。」

「じゃあそれも頼む。で持つてくる寝台特急は「カシオペア」、ほくとせい「北斗星」、フルトレ「トワイライトエクスプレス」、いすも「出雲」、あとは九州特急とっきゅうの何か自分が好きなの……って言って分かんないか。「あさかぜ」とか東京から、大阪から九州に言った寝台特急フルトレのことこういうんだよ。それだけでいい。できれば、牽引機は全区間エントリフルトレが望ましいけどな。」

「はい、分かりました。」

「大体こんなところかな……。これじゃあサヤ達のほう考えてなかったな。自分達のほうはこれで終わりでもいいか。よし永島ながしま。サヤ達のほうも考えるぞ。」

他に残っていて有名な車両や特急は883系「特急ソニック」。

小田急のHiSE、ハイエスイー LSE。エルエスイー 2000系「特急南風」。なんぷう キハ85「特急ひだ」。781系「特急ライラック」など。

「かわいそうだから221系でも入れといてやるか。あとE259系もこつち。225系もこつち。」

「こつちにも「北斗星」ほくとせい入れときましようか。あとは「カシオペア」も。」

「そいつら牽引するEF510（カシカマ）とEF510（アオカマ）が「いやだ、いやだ。」っていつてるぜ。」

「なんですかそれ・・・。」

「まあそれは冗談だけど。これも入れてやれEF210（モモカマ）」

「いや、ナヨロン先輩ここはEF200のほうがいいですよ。」

「EF200（ハイカマ）。そいつやめとけ。スカイダイブ経験6回の強豪だから。」

「ともかくそれどういう意味ですか。」

「今は知らなくていい。そのうち分かる。」

そんなこと話しているうちにこちらもほとんどナヨロン先輩が決めてしまった。ここにはずっと所属していたから何がどうなっているのか分かっているのだろうか。それともただ自分の好みで選んだのか。

その日の帰りの列車。小楠おぐすに停車した時だった。

「あれ、ナガシイ。」

振り向くと萌の姿があった。同じ方面に通っているのだが、こつちであつたのは久しぶりだ。

「よーす。久しぶり。」

「なあ、萌。あたし邪魔見たいだからどっかいつてるか。」

萌の隣の人が聞いた。

「別にいいよ。ここにいても。」

「お前おぐすが小楠おぐすくるって珍しいな。」

「今日は友達とこつちに来ただけだから。」

「へえ。」
「そうだ。ナガシイ。そつち文化祭っていつある。」
「確か、・・・何日だった。」
「そういうと思ったよ。ナガシイそういうこと気にしてないもんね。6月13日でしょ。」
「ああ、確かそう。」
「見に行くからよろしく。家から何か持ってくるの。」
「「カシオペア」とか「北斗星^{ほくとせい}」とか。まあいろいろ持ってくるよ。」
「じゃあ、荷物も持ってくるわけ。」
「貨物は持ってかない。学校にあるみたいだから。」
「そう。じゃあ26両はやらないんだ。」
外を浜松方面に向かう列車が通り過ぎる。
「何系。1000系。それとも2000系。」
「パンタ見えないから分かんねえよ。多分普通だから1000系だろうな。」
「でも、1000系も2000系も関係なしに普通とか急行に使ってるよね。」
「確かに。最初から運用が分かっていたらこうやって苦労することもないんだろっけどな。」
「ハハ。・・・部活楽しい。」
「うん。先輩達はみんなハイテンションだし、1年生は多いし中学生からも入部があったくらいで。」
「へえ、多いんだ。その中に女子とかいる。」
「いるよ。同じ学年の中に隠してなければお前と似てる人もいるんだけどなあ。」
「.....」
このとき会話を聞いていた友達。黒崎^{くろさき}には端岡^{はしおか}が言った言葉が再生されていた。
(あのことって本当だったんだな。電車の話してる時のほうが生き生きしてるって。)

「へえ、そうか。かくしてなければ私と同じね。中に入るんだね。そういう人。」

「まあ、女子ならそういうところは意識しちゃう人もいるだろうな。」

「……。なんでそんな話すんのよ。暗くなるじゃん。」

「ああ、そうだな。じゃあなんか別な話でもするか。でも、何話す。」

「ナガシイ、2日に熱海行ってきたって言ってたじゃん。その時の話でもいいじゃん。」

「ああ、そんな時の話かあ。いいよ。」

話している間に芝本に到着。萌は小楠おぐすから乗ってきた友達と別れて、僕と帰路に就いた。

「文化祭に持つてくのは去年と同じで身分証でいいんだよねえ。」

「ああ。多分それだけでいい。」

「それじゃ6月13日見に行くから。」

そういって萌と別れた。

18列車 模型選び（後書き）

今回は会話がマニアックすぎてごめんなさい。

この先も時折このような列車が出てくるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

19列車 運び屋

6月8日。岸川寮に集合。

「おい、諸君。運ぶぞー。やれーっ。」

サヤ先輩がみんなに指示を出した。するとまずアヤケン先輩が動いて、

「はーっ。」

相談室4から裏声。するとアヤケン先輩はとても大きく口を開けた木の箱を持って相談室4から出てきた。

「おめえらもやれー。」

アヤケン先輩に促されて僕達も相談室4に入る。相談室4にはさっきアヤケン先輩が運んで行ったのと同じ箱が5つ。1年生は2人ずつでこの箱を運び出す。だが、必ずと言っていいほどドアから出るときに問題になるのだ。箱を長いほうのままドアを抜けようとする^{っか}と問える幅。縦に持つと今度は自分達が問える。でも何とか抜けることができる。抜け出したら階段を下って寮の玄関まで輸送する。これをこの後何度も繰り返す。2階に戻ると今度は大きな箱の代わりに衣装ケース。部活では白い箱で通じている。これには引き出しの代わりにモジュールが入っている。それを2・3年生は2段。もしくは3段。1年生は1個ずつ運んでいく。

しばらく同じ動作を繰り返していたが、モジュールを乗せる岸川のハイエースの荷台が満タンになったため、まずこれを学校に運んでいくことになった。

「えーと。一人乗ってください。」

先輩達は行きだそうとしない。むこうで何かあるか分かっているのだ。

「えーい。全員右手を上げる。」

何が始まるのか・・・。

「最初はグー、ジャンケン、ポン。」

何が始まるのかと思えば、ジャンケンかよ。

「はい、ハクタカ行つてらっしゃい。」

「マジかよ。」

「じゃあ北斎院君きたさいけん。上にしまつてあるモジュール全部出してください。」

「へーい。」

ハイエースが寮から出ていったところで、僕達は2階に戻つてさつきから出している白いケースを下に運んでくる。玄関には白いケースが7段くらいになった山が2個くらい。

「おーい。こんなに積むんじゃないよ。」

アヤケン先輩が注意する。

「アヤケンその持つてる奴また上のつけようぜ。」

「やるなつうの。」

「おつ、ナガシイいい所に来た。乗せるーっ。」

言われるがままに乗せる。

「バカ。下ろせ。もう乗せるな。」

「アケ先輩注意もいいですけど、運んでくださいね。」

しばらくすると第2陣でハイエースが戻ってくる。またハイエースが満タンになると第3陣に持ち越し、第3陣が来ると運び出したものはすべて乗りきった。荷物が全部乗ると僕達は歩いてホールのところまで向かう。

鉄道研究部が展示を行うホールは僕達1年生が授業を受けている南棟ではなく北棟というところにある。ここの1階なのだ。

ホールの北側には第1陣で連れてかれたハクタカ先輩と第2陣で連れてかれた楠先輩が運び入れたものが詰まっている。僕達は第3陣が到着するまで待っている。待つこと数分。第3陣のハイエースが到着。後ろから荷物を降ろして、いっしょに運んできた車両も運び出した。

今日の部活はここで終了。これからの1週間はずっと文化祭の準備である。

翌日6月9日。今日部活動はない。6月10日。今日から本格始動。

「まずは作ったモジュールを運びこんでください。」
アド先生の指示で部室にある作ったモジュールを運びこむ。運びこんだら8日に運び入れたところにまず入れる。

「ええ、次は・・・。名寄君^{なよる}。1年生ひきつれて特教6の机をここに運んで来てくれる。あと事務室に頼んで昇降口下の長机も出して。」

「分かりました。おーい1年生と中学生行くぞ。」

まずはアド先生に言われた長机から。ナヨロン先輩曰くめんどくさいらしい。その長机を運び出すと佐久間^{さくま}がこういうことをやった。

「永島^{ながしま}。バズーカ隊用意。ズドーン。」

「おいおい。」

それをホールに運び込む。軽いには軽いのだが、何回も往復すると手が痛くなる。3往復目で長机がなくなる。次は南棟1階の一番東の部屋特別教室6から机を運び出す。ここには2段重ねで学習机がぎっしりと埋まっている。

「うわあ。ゴミっていつけにあるなあ。」

「ゴミかよ。」

「とりあえずこれ運んで。一人2つずつでいけるだろ。・・・よし、行けーっ。」

今度は学習机を抱えて何往復。もう何回行ったり来たりしたかなんて数えてられない。ふつつなら軽い机でもずっしりと重く感じられた。

学習機が必要数に達すると次はモジュールが並ぶように机を並べていく。一つはホールにある長机とさつき運び出した長机で収まる。もう一つは学習機が長机の代わりになる。

「永島^{ながしま}。その机こっちに持ってきて。」

「アヤケン先輩。これはどっちに持ってたら。」

「木ノ本^{きののもと}。まだモジュールはいい。・・・ああ。あとそのゴミ落と

してもいいから。」

「ハクタカ。これ中にいれるから受け取って。」

「んっ。バカ。箱ごと中にいれようとするな。」

「ナヨロン。部誌間に合いそう。」

「サヤのバカ。なんで進めとかないんだよ。」

「おーい、ナガシイ。この・・・アヤケンこれなんだっけ。」

「えっ。ああ、ゴミ2号だよ。」

「このゴミ2号をむこうのほうに運んどいて。そんでもってサメちゃん。このアヤケンのゴミ3号はあっちに運んどいて。」

「あっ。アド先生。313系の5000番台のギアボックスください。」

「ナヨロン裏切るな!。」

「絢乃。ライダーこの向きでここにいれといて。」

「はいはい。」

「こつち一般人通行不可ね。」

「なんですか。そのハルヒ的な。」

「あっ、そうだサヤ。今年はみんなでコスプレする。」

「いいよ。コスプレなんかしなくても。まあ帽子だけはかぶりたいけどな。」

「じゃあナヨロンは全身ね。あとは帽子だけでいいか。」

「勝手に決めんなよ。」

「大丈夫。あれ着て似合いそうなのは1年生の中にもいるし。それにナヨロンが着るとなんか渋くなるんだよね。SL好きっていうのがその渋さを後押ししてる感じで。」

「どういうやつじゃ。それ。」

「ねえちよつと1年生集まって。」

「善知鳥先輩に言われて、ひとまずサヤ先輩達のところ集合する。」

「ねえ、みんな乗務員が着てる服、着てみたいって思わない。」

「ちよつと考えるとところがある。なおこの問いについては醒ヶ井と箕島はやダ。木ノ本、僕、諫早、空河、朝風は帽子だけならと回答。」

「でも、一つだけ問題があるんだよねえ。今回は帽子だけっていてもこの数ないんだよね。去年作ったから8人分しかなくて。」

「善知鳥もよくやるよなあ。」

「逆を言うとは家庭以外ダメダメだからなんだけどなあ。」

「それは今関係ないだろ。でも何人でかぶるかなあ。女子のやつはあたしのアヤノンの分しかないし・・・、男子のやつは6人分しかないもんな。うーん。よし。あたしの独壇場で決めよう。えーとサヤはかぶるでしょ。アヤケンはずり回ってことが多いからいいでしょ。ナヨロンは向こうの内勤だからかぶって、ハクタカもかぶる。」

あとはナガシイかな。でもあと一人余ってるなあ。・・・じゃあ残りはサメちゃんでもいいか。」

「ここまで考える頭があるんだったらもうちょっと進路のこと深く考えろよ。」

「うるさいなあ。いいだろ。で、あとは女子のほうか。ハルナンがかぶりたいうって言ったから・・・。アヤノン別にかぶらなくてもいいよねえ。」

「はい。」

「うーん・・・。やっぱりかぶせよう。」

「や・・・やめてください。あれかぶってるとなんか冷やかされそう。」

「よし。かぶせよう。」

「嫌です。」

この時今まで部誌に取りかかっていたサヤ先輩が何かに気付いた。

「お前ら何やってんだよ。ちゃんと仕事しろ。」

「おいおい。それ今気付いたのかよ。」

「サヤ。本当に眼科が精神科医に行ったら。ヤバイよ。」

「眼科が精神科医に行くのはナヨロンだろ。この知識量と今更教師になりたいっていうこの頭どうにかし・・・。」

ポカッ。

「黙ってやれよ。」

「はい。すみません。」

今日はホール入り口手前に凹おっの集会を完成させるところまで進んだところで解散。この次は次の日にまわる。

6月11日。今日は真ん中に設置する大周会の二つ目。この周回は長方形で組成させる。

「ナガシイ。この「綾瀬車両区」あやせしやうりょうくをむこうに運んで。」

ここで呼ばれた「綾瀬車両区」あやせしやうりょうくとはモジュールに付けられたタイトルらしい。

「で、ハルナンはこっちの「青木海岸」あおきかいがんを運んでつて。それで、ミ

ツシイは「青木海岸」あおきかいがんの片割れ運んで、サメちゃんはそこの「ピザ」

お願い。」

ちなみに「ピザ」とは45cmセンチ四方のコーナーのことである。

「あおう、善知鳥先輩。このコーナー……。」

「コーナーじゃないつて言ったでしょ。「ピザ」「よ」「ピザ」。「ど」でもいいから運んどいて。」

本人はどうしてもコーナーのことを「ピザ」と呼びたいらしい。

「それで、……ハクタカ。お前の作った「鷹電」たかでんのやつってどこにある。」

「それだったらもう使いましたけど。」

「ここに1枚余つてんだけど。」

「善知鳥先輩バカですか。それは「鷹電」たかでんじゃなくて「貨物駅」かもつえきですよ。目玉あんのか。」

「ナガシイごめんね。ちよつとハクタカ待てー。」

「まったく。子供かよ。永島。この「貨物駅」かもつえき持ってつて。セツティングは俺がやるから、仮置きだけでいいよ。」

とまあごたごたがありながらも何とか完成。ここで今日の活動も終了。続きは6月12日に持ち越しである。

19列車 運び屋（後書き）

気づいたら文字数がえらいことに・・・。

このままいったら最終回までに文字数と読了時間が・・・。
自分でもこれはすごいと感心します。

あと展開が遅くてすみません。

それでも読んでくれる人には感謝です。

これからも根性で続けていきたいと思えます。

20列車 文化祭前日

6月12日。いつものように朝学校に登校する。

「はあ。永島ながしまいいよなあ。部活でクラス展の準備逃げられるんだから。」

「何。逃げたかったらお前も鉄研とかに入ればよかったのに。」

「いや。俺はもう部活には入る気なかったからな。こういう時に限ってそういうのが裏目に出るとは。」

「そういえば、俺たちのクラスってどんなクラス展やるの。」

「お前ホームルームの時に言ってたやつすぐに忘れてんだな。そこまではつきりした頭だったら俺も持ちたいよ。・・・お菓子みたいな作って売るんだって。」

「へえ。」

「でも、永島ながしまの場合は来れないの前に来たくないだよなあ。クラス展より部展のほうが楽しいだろうから。」

「まあ、確かに。」

「ならこつちから見に行くか。その時は差し入れ持ってってやるよ。」

「気持ちだけにしてくれ。」

「分かった、分かった。気持ちだけってことで投票は鉄研部に入れとくからな。」

「えっ、何。投票って。」

「本当にはつきりした頭だな。何も聞いてない。ある意味感心するよ。」

「いやあ、それほどでも。」

「ほめてないってこと分かってるよねえ・・・。」

「そりゃ当然。」

8時30分。普段通り点呼。9時00分。文化祭準備開始。部活としての集合は10時00分。それまでの間クラス展の準備をほん

の少しだけ手伝う。9時55分。南棟3階の部屋から目の前の階段を使ってホールに赴く。ホールにはもうすでに部隊は終結済み。僕達が最後に集まった。

昨日とおとといで模型を走らせる周回は完成している。今日やるのはこれから設置するプラレールの展示と周回に電気を流すための配線作業をすることだ。

「おい1年生。むここの武道場とかつていうところからベニヤ板持ってきて。」

サヤ先輩の命令でまずはベニヤ板。それを持ってくると次は学習机を等間隔で並べその上にベニヤ板をかぶせ、シートをさらにかぶせる。だが、このシートをかぶせる作業が以外と疲れる。

「ねえ、善知鳥先輩。ここ机ありますか。」
今机の上に乗っているが、足を降ろすところを間違えば机に頭を打つ。

「大丈夫。そこにはあるよ。」
善知鳥先輩が机の下に入って上にいる僕に安全だと信号を送る。それが終わったところでゆっくり足を降ろす。下の地盤がかたい。机の上だ。端まで来て、飛び降りる。もちろん端まで机があるわけではないので、ここも踏み外したら机に頭を打つ。とりあえず何の事故もなく完了。

次はOBが持っているというプラレールを設計図通りに敷設すること。設計図にはレールに当たるところが線で示されており分かりやすい。そしてその線に少し交差するように書かれているのは継ぎ目のことだという。

「とりあえずやるかあ。青木あおきさんもここもうちよつと詳しく書いてくれれば分かりやすいんだけどなあ。」

「まあそれでもやるしかないだろ。今日は青木あおき先輩手伝いに来れないんだから。」

「んじゃあ。ナガシイ。このレール類とにかくつなげまくって。直線レール5本。」

ブラレールは鉄道ファンたる者全員が通る道。いつもの手つきでレールを繋げていく。一方その時サヤ先輩達はブラレールをガンガン繋げていく。だんだん形ができてきて真ん中あたりに橋脚を10個くらい積み上げたタワーが完成した。

「おい、サヤ。そっちから何人が引き抜いていい。」

「ああ、いいよ。」

「永島、箕島。ちょっとこっち来て。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回にやってくる。

「これから配線ってやるんだけどさあ。それやってくれない。そんなでやって覚える。以上。」

「あの。名寄先輩。それじゃよく解んないですよ。」

「さすがにいい加減すぎたかな。」

と言つて床に置いてある黒い箱を手を取つて僕達に見せた。そこには青と白のコードの先端に端子が1個ずつついているコードとつける端子が3つついているコードの2種類が入っている。またそのコードの中には赤と黒だったり茶色と白だったりと色にバリエーションがあった。

「これをファイダーってところにつないで、コントローラーのあるところまでつなげる。永島ながしまだったら分かるよなあ。」

「ああ、まあ。」

「それで繋げる時にやっちゃいけないのは内回りと外回りをこつちやに結線すること。そうしたらどつちかが逆走することになるからな。そこだけ気をつけてやれ。」

これだけ支持された。ようはつなげばいいのだ。

ファイダーというのはだいたいどういう恰好をしているかというところパターンあると言っている。まず一つ目は線路にコードの端をくつつけているタイプ。二つ目は線路に電気を流せるようになってる専用の線路にくつつけるタイプ。あともう一つは線路の特定の場所に差し込んでくださいというタイプ。学校にあるのは2番目にいったタイプ。このタイプのファイダーはこの周回の中に4カ所。

コントローラーの位置からは柱の陰になってしまう部分。その次は一つ目のフィーダーのあるコーナーの反対側のコーナー。三つ目は二つ目のフィーダーがある一の反対側のコーナー。ここがコントローラーから一番近い位置にある。そして四つ目のフィーダーは三つ目のフィーダーの反対側のコーナーに設置してある。ここからさつきナヨロン先輩が見せてくれたコードをバンバンつないでコントローラーに結線した。

結線が終了したら次は電気が流れるかどうかのテスト。前にナヨロン先輩と選んだ中からEF210を取り出して外回りの線路に乗せる。アド先生曰く機関車とマイクロエース製の車両が滞りなく走れば問題ないそうだ。

コントローラーの電源投入。ディレクションスイッチを前進に連れてコントローラーのつまみをまわした。だが、EF210はピクリとも動かない。ライトもついていない。

「どうしたんだよ。こいつ。」
「あつ。^{ながしま}永島。そいつはゴミだ。モーターがいかれてるから。EF510（レトサン）にして。」

「あつ、はい。」
EF210を線路から外し、ナヨロン先輩が持ってきたEF510を線路に乗せる。気を取りなおして、再び電源投入。するとEF510は少しピクツと後ろに動いた。このままでは逆走になる。ディレクションを前進から後退にしてまたつまみをまわす。今度はちょっと前に進んですぐに滑り出した。コントローラーから離れて少しの間EF510の走っている姿に見入る。家でいつも見ている光景と分かっていても飽きない。

とりあえず何の滞りもなく一周。次はマイクロエースの箱を探してその車両を走らせる。とりあえず手に取ったのは783系という九州の特急車両。それを外回りに並べて同じ動作を行った。すると少しばかり突っかかってしまうところがある。そこを木の板で修復しながら、783系を何周かさせる。その間に問題も解消。次は貨

物列車などの編成もの。これが途中で連結を解除しなければ完了。なのだが、毎回どこかで貨物列車は開放すると言ったので、これに完璧を求めることはできないようだ。

とりあえず貨物列車も何の滞りもなく1周。これで電気系統は完了だ。

この時にはプラレールのほうも50%がたで完了している。ふと時計を見ると12時13分となっていた。昼ごはんの時間だ。昼ご飯には持ってきた弁当。食べるのが面倒くさいと思いつながら、流しこんで13時05分作業再開。午後はプラレールの準備。遊びながらやっていたため15時ちょっと前に作業を完了。次は、体験運転のコーナりの設置である。

「諸君集まれ。」

善知鳥先輩が全員を衣装ケースが積み立てている前あたりに集めた。

「これから体験運転のやつを組み立てるんだけど、時間ないから全員でやろう。」

「だから、あれさつさと片付けとけって言ったのに。」

「さつさとっていう前に青木あおきさんいなかったからどう組み立てていかわかんなかったじゃん。」

「てめえら、時間がないならはじめようぜ。そんなところで時間くってるなよ。」

アヤケン先輩が話に歯止めをかけて、全員に複線の高架レールを手渡した。

「まずはそのレールつなげ。」

全員に行きわたったのを確認して指示を出した。

「あつ、待った。まだダメじゃん。おい、善知鳥ちゅうちゅう。白い子ない。白い子。」

「えっ、白い子。」

「ほら、アヤケン。白い子。」

「サンキュー。」

ナヨロン先輩から渡された箱の中には横2センチcmくらいしかない直方

体の白い物体がたくさん入っていた。アヤケン先輩はその1個を取り出して、

「まず、この白い子を高架レールの下の子の部分に取り付ける。2個くらい取り付けて、取り付け終わったらほかの高架レールをつなげる。これやって。後、下についてる突起下になるように取り付けなきゃダメだぞ。でないと、あーってなるから。」

「あーってどうなるんですか。」

「深入りしないでいいから、まずはやれ。」

さつき言われた動作を行って高架の直線レールをつなげていく。それを10何人でやると20本くらいの束が一気にできる。

「全員で直線レール量産してんじゃねえよ。こんないらなんて。」

「そのことに気付いたアヤケン先輩が量産を止める。」

「カーブレールだれかやれよ。カーブしない体験運転所作ってどうすんだよ。運転面倒になるだけじゃないか。」

「あたしそんなこと知りませーん。」

「知つとけ。」

「アヤケン先輩これどうするんですか。」

「多分6ペアぐらい、12本は使うかなあ。その束ねたやつをもう一度束ねて、4本にしたやつを俺にパスして。そのあとはどうにでもなるから。おい、善知鳥。橋脚のやつどこにあるかわかる。」

「橋脚ってあのラーメンみたいなやつか。」

「そう。食べるラーメンのやつ。それどこ。」

「お前の足元にあるだろが。」

「あつ、あつた。ごめん。」

「アヤケン先輩。言ったとおりにはやりましたよ。」

「あつ、サンキュー。うわつ、バカたれ。マガンなボケ。」

それを受け取ったら、新幹線しんかんせんのよく見る橋脚を3つ取り出し、線路の継ぎ目に取り付けてる。「カチャ」という音を立てて、何かがはまる。1個取り付ける作業が完了したみたいで、アヤケン先輩がそ

の位置から手を放した。すると橋脚は継ぎ目のところに礼儀正しくはまっている。さっきの音はこれがはまる音だったらしい。他の2か所も同じ作業で、はめ終わると、体験運転コーナーになるところの一番奥に置いた。

僕たちもただ見ているわけではない。僕は箕島が4本にした高架レールを受け取って同じように橋脚を取り付ける作業を行った。

「アヤケン先輩。他のもやっておきますか。」

「いや、これはもういいよ。ていうか、そっちに駅作ってくんない。」

「何駅がいい。綾瀬駅とかでいい。」

「何でもいいけど、綾瀬駅はやめて。出来ればサヤ駅とかのほうがいいんじゃない。」

「それ関係ないだろ。はあ。木ノ本。多分その箱の中に駅舎の建物があると思うから、それとって。」

サヤ先輩が指差した箱の中を探してみる。すると汚れた白い駅が出てきた。その看板には「新大阪」と書かれている。どこをモチーフにしているかはすぐ分かるが、本物とは似ても似つかない。

「ありました。」

「サンキュー。後、そん中に白いプレートみたいなのがいっぱいあると思うからそれもとって。それに空いてる溝の部分にさっきの白い子を逆向きで入れて、ほかのプレートとドッキングさせる。それやって。」

サヤ先輩に促されて作業を開始。プレート同士をさっきのレールと同じ要領で取り付け、ほかのプレートを取り付けていく。それが4枚くらいになったところで善知鳥先輩に手渡し、そのプレートをさつき掘り出してきた駅舎の上に設置した。さらにその上にレールとホームを設置。1面2線の島式ホームが現れた。

「よし、こっちは終了・・・。」

すかさずナヨロン先輩がツッコんだ。

「なわけないだろ。駅舎を境にして両方に垂れ下がってる高架駅が

どこにあるって言うんだよ。」

「狭い日本でも、そういうところくらいあるよ。」

「あるかもしれないけど、これはないだろ。駅舎過ぎたらすぐに地面まで下がるのかよ。実物にしても40メートルくらいしかないぞ。」

「なあ、善知鳥^{じゅんちと}。ボケるのもいい加減にしようぜ。こんな駅ないことには変わりないんだからさあ。」

この駅舎から急速落下するプレートの下に橋脚を設置して、垂れ下がりをなくす。これで、さっきからアヤケン先輩がつなげていた高架橋と連結。1周する体験運転コーナーが完成。すぐに配線がなされ、カーブの下にあるファイダー専用取付口に高架線用のファイダーを取り付け、コントローラーと結線。E1（イーワン）系新幹線^{しんかんせん}「MAX^{マックス}」と800系新幹線^{しんかんせん}「つばめ」をそれぞれ3両ずつおいて電気が通ることを確認。両方ともスムーズに走ったため走行テストも完了した。そして、なんとか前夜祭に間に合わせた。

20列車 文化祭前日（後書き）

話を作っていくとだんだんキャラクターに個性が……。

自分にはもうちょっと文才と考える能力が必要だと感じます。

なお次の話でも文化祭前のことなので……。本当に展開が遅くてすみません。この状態だと8月のイベントまで行くのにいったい何日かかるんだか……。

21列車 前夜祭

前夜祭。

「1年生諸君集まれ。これからも系の運転訓練やるぞ。」

運転訓練とは文字通りのことをする。なんで必要があるのだろうか。「注意事項は急発進、急停車しない。脱線したらすぐに列車を止める。の二つよ。」

「善知鳥が言えることか。」

「だから、2人ずつ来てまずナガシイとハルナン。次がミツシイとユウタン。次がサメちゃんとイサタン。最後がアサタンとソラタンだよ。」

凹の周回に入ってコントローラーのつまみを握る。線路上に置かれた車両はJR東海の車両311系と313系だ。つまみをゆっくり回すと311系のモーター車（3号車 モハ310形）だけがむなしく動き出した。

「列車は知らせてる時はもれなくマックスにしているから……。」
ポカッ。

「しちやダメだぞ。まあどうしてもこいつゴミだってゆう模型があったらやっていいけどな。」

三つ目の注意を受けて1周。1周したら訓練生交代。箕島に代わって運転訓練終了。

1年生全員の運転訓練が終了すると前夜祭に入る。その前に先輩達が配置を決める。

「ナヨロン。そっち何人必要。」

「明日青木さんも来るっていうからこっちは後2人くらいでいいよ。」

「じゃあ、そっちにミツシイとナガシイでいいでしょ。でハルナンがこっちの内勤で、中学生は新幹線の体験運転でしょ。あとは外回りでもいいでしょ。」

「それでいいな。」

「永島。箕島。ちよつとこつち入つて。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回に入る。

「えーと、次はここにある車両どれでもいいからこの線路上に並べて。」

「リレーラーとか無いんですか。」

「あるにはあるんだけどねあれ青木さんの私物だとかって明日手伝いに来る人がいうもんで、基本使わないほうがいい。」

「なんですかそれ。」

「気にしなくていいよ。ともかくリレーラー使わずに線路上に早く乗せられればいい。」

僕は223系を探して内回りに、箕島は何でもよかつたらしく373系を手にとって外回りに置き始めた。これはなれないと少し難しい。特に機関車などの車輪の多い模型はすぐには言うことを聞いてくれない。僕はいつも家でやっている手つきで次々と車両を整列させていったが、箕島のほうはそうではないようだ。車両の高さに目線をおとして両手で丁寧^{みしま}に並べている。箕島が373系3両をレール上に設置し終わるとき、僕は223系8両のうち6両(3号車サハ223形)を置き終わり7両目(2号車モハ223形)に取りかかっている時。作業スピードが浮き彫りになる。10秒後ぐらいに作業を完了した。

「終わりました。」

「やっぱりやつてる人は違うなあ。」

ナヨロン先輩独り言のように呟いてから、

「永島。明日223系も持ってこれる。」

「別に必要な何両でも持ってきてきますけど。」

「さすがだな。」

「おーい、諸君。」

善知鳥先輩がみんなを読んだ。

「これから、これでレールを磨いてもらう。」

善知鳥先輩じゅんちうが持っていたのは右手に綿棒、左手に「UNICLER ANER」と書かれたボトルだった。これでやる作業は大体見当がつく。

「このレールクリーナーで線路を磨け。」
そう言っていた。

「さて、やるか。」

「正直これ面倒なんだよなあ。」

「何。永島家ながしまに模型でもあるのか。」

「ああ、じいちゃんが作ったこれの10倍くらいあるやつがな。」

「……。」

思わず顔が引きつった。

（さすが、永島家ながしま。それを作ったっていうと永島宗一氏ながしまそういちか……。なんつう社長だよ。暇人なんだか。）

「へえ。根っからの鉄道好きなんだな。」

「ああ。でも……この構図こうずってちょっとやりづらいところもあるかも。」

やってみると案の定そういうところが出てきた。例えば凹の周回になっっているほうでは駅構内。この駅の屋根は線路側に大きくせり出している。つまり綿棒が入り込める隙間が小さいく綿棒の頭も小さいため、レールと接地しにくいのだ。

「ナヨロン先輩、もうちょっと便利なやつってないんですか。TOトックスMIXのクリーングンガーとか。」

「んな便利なものこの部活にあるけど、持ってきてない。時折、そこだけにレールクリーナーぶちまけるだけっていうのがあるから。」

「最低なクリーニングカーですね。」

「永島ながしま。その言い方はちょっと違うぞ。この部活はそういう不都合なことはゴミで片づけるんだ。」

「ああ、そうですね。ていうか、いまそんな話どうでもいいです。」

「ナヨロン先輩。これって他にどこやったらいいですか。」

「全部だよ。」

「全部。まだ、駅しかやってないのに。」

「ていうか、木ノ本もここに固まってるなよ。早くしないと6時までに終わらないんだから。」

「でも、時間通りに終わる例っていうのも少ないんですよ。」

「そう。時間通りに終わるっていうのも少ないし、予定した日にやらないっていう例まであるからなあ……。て、そんなことどうでもいいだろ。やれー。」

「はいはい。」

全体にレールクリーナーをやるのと同時進行で、モジュールには列車が走っている。今僕たちのほうには223系が走っている。

「永島。もうちょっとでそっちに列車が行くぞ。」

ナヨロン先輩から注意がある。僕はそれを聞いて手を引っ込めた。

223系はぼくのほうに接近してきたのだが、あるところを境にしてガクツとスピードが落ち、ついには止まってしまった。それもありがたいことに僕の前だ。

「ナヨロン先輩。223系止まっちゃいましたけど。」

「そういうと、すぐにナヨロン先輩が駆けつけてきた。」

「あー、もうこいつダメだな。」

そう言っただけでモーターが入っている5号車（モハ223形）を抜き取って、床を見た。

「永島。ちょっとレールクリーナーと綿棒貸して。」

綿棒とレールクリーナーを渡すと、ナヨロン先輩は車輪を外して、車輪の一つに綿棒の頭を当てた。そのあと車輪の上のあたりから延びる緑色の棒を少し回すという作業を開始した。それを1台車3回、2台車6回繰り返し返して、再び線路上に戻した。

「永島。走るかどうが見て。」

「そう言い残して、コントローラーのほうに行った。」

「永島行ってる。」

「まだ行ってません。」

そういったすぐ後、223系のモーター車がピクツと動いた。そし

て、ぎこちなくではあるが前に進み出した。

「ナヨロン先輩。走りましたよ。」

「了解。」

それを聞くとすぐに223系を止め、前と後ろに話された車両を連結。8両にして、走らせた。8両編成もゆっくり動き出し、何とか走ることが確認された。

「永島ながしま。これなんて言うやつ。まあ、特急じゃないのは見ればわかるけど。」

木ノ本きのもとが話しかけてきた。

「223系。関西の新快速だよ。これはライトの部分が広がってるから2000番台だね。」

「他のとどう違うんだよ。」

「明日223系の1000番台持つてくるからその時見せてやるよ。一発で分かる違いだぜ。」

「ふうん。そんなに違うんだな。」

「ああ。だって、テールライトのついてる位置も大きさも違うからな。」

「なるほど。」

「おい、木ノ本きのもと、永島ながしま。話してるのもいいけどちゃんと仕事しろよ。」

「だってもうレールクリーナーは終わったんだもん。」

「なんか別なこと探してやれ。」

そう言われて、ほかのことを探す。だが、結局レールクリーナーの仕事に落ち着いた。今度はEF510が牽引する貨物列車が走っている。

「なんかいつぱいつないでる。」

「おい、ナヨロン。加減しろよ。加減。つなげすぎだる前夜祭なのに。」

「いいだる別に。」

「1、2、3、4、・・・。」

木ノ本は隣でコンテナ貨車の数を数え始めた。何ともカラフルなものである。赤、緑、黄色、青、黒、ピンク。本物の貨物列車はここまでカラフルではない。

「15、16、17。全部で17両つないでる。」

「17両か。なんか驚くような数字じゃないね。」

「永島が驚く数字つてなんなんだよ。」

「えっ、32両とかそんぐらい。」

「32両つて。機関車にひけないだろ。」

「いや、引けるつて。1600ト級の貨物列車は計画上だけだけどあつたわけだし不可能じゃないつて。それに模型だつたら脱線しない限り何両でも引けるんだから。」

「じゃあ何。40両の貨物列車だつて可能とかっていうの。」

「ああ、言う。だけどうちじゃできないんだよなあ。26両しかないから。」

「十分あるじゃないか。」

その話はナヨロン先輩にも聞こえてたらしい。

「なになに。永島コキ26両あるの。じゃあ持ってきてくれよ。俺

17両じゃ物足りないつて思ってたんだ。頼む。」

「あつ、いいですよ。機関車どうしたらいいですか。」

「機関車は学校にあるやるでなんとかする。機関車つて走ればコキ引けるんだからな。」

「なんですか。その走ればいいみたいな考え方。」

「だつてそうなるだろ。模型の場合特に機関車は走りさえすればそのあとに何両続いても関係ない。だからそういう答えに行きつく。間違つてないだろ。」

「確かに。」

「うちのEF210（モモカマ）で最高のやつに引かせる。東海道・

山陽本線の長大貨物列車をやるうぜ。」

「いや、それだつたら学校のコキも使つて32両にするべきです。」

「バカ、32両なんてEF200（ハイカマ）が引ける量だぞ。3

390kWのEF210（モモカマ）に引けるわけない。」

「・・・考えてみればそうですね。EF200って定格出力6000でしたっけ。」

「そう。6000kWだから引けるの。」

「それ実際やってませんよねえ。」

「やる前に電気的問題があつてな。今の電気事情のままじゃだめだからやれないだけ。もっと電気の供給能力が上がれば、やれるらしい。」

「持つてくるか持つてこないかっていうところから結構話が脱線してるんですけど。」

「あつ。そうだったな。じゃあ、悪いけどそれもお願いな。」

「はい。」

18時00分。前夜祭終了。作業もやることがないため活動は終了した。

家に帰るとすぐに車両庫に走った。

（えっと、223系1000番台とコキ26両と「253系」と、

「カシオペア」と「北斗星」。なんかたくさんあるなあ。引き受けすぎたかなあ。）

うすうすそう感じながらも執事に頼みに行った。

「お願い。明日の文化祭でこれを高校まで運んでほしいんだけど。」

「そういうことでしたら、喜んでお引き受けしますよ。車両を運ぶついでに坊ちやまもお乗りになつたらどうですか。」

「いや、送ってくれるのは芝本までいい。そこからは電車で行く。」

「はあ、しかし・・・。」

「いいんだって。そのほうが楽しいから。じゃあ、箱はもう車に積んどくから。」

そう言つて車両庫のほうへ走つていった。

その後ろ姿を見ていたのは執事ではなかった。

「なんか、昔駿君に引き連れられて浜松駅まで行つていた時と変わ

らないな。」

「隆則様。」

「和田山。手伝ってやれ。」

「……はい。隆則様。」

3箱目を運び出し出している姿を見ると昔同じようにここに通っていたいとこのことを思い出した。今自分の息子はその人と同じ学校にいるのだということ改めて実感した。

今回からの登場人物

ながしま たかのり

永島 隆則

わたやま

和田山

21列車 前夜祭（後書き）

ようやく文化祭の前夜祭まで行きました。

これから2・3話かけて文化祭の中身。まだまだ先が長いなあ。ネットにアップしている原作を作りながら思う今日この頃です。

22列車 当日

6月13日。文化祭当日。文化祭は9時からであるが僕達はいつも学校に行くように登校しなければならない。結局家の車で送ってもらった。こういう措置は模型の輸送のためである。運転手も手伝ってケースをホールに運び込む。

「よーす、ナガシイ。早いじゃん。」
ホールには既に3年生と中学生が集まっている。皆考えることは同じなのだろうか。

「ナヨロン先輩。言われたやつ持ってきましたよ。中に言われてないのも入ってますけど。」

「あつ、ありがと。これで今日1日は持つな。」
中で僕の持ってきた箱を受け取って中身に見入る。

（うーん。「北斗星」と「カシオペア」と「出雲」と「富士」。あとはEF510（アオカマ）……。これは「北斗星」に対応してるんだよな。それとEF81（ホシカマ）。いや、これが「北斗星」か。あとの機関車はその通りか。で、永島の言ってた言っていないやつっていうのが「しなの」。でも10両って。まさかな……。）

「何かありましたか。」

「いやなんでもない。……それと一つ聞くけど、これ全部走るんだよな。」

「昨日走行試験やってきましたから大丈夫ですよ。全部走ります。」
展示場に箱を入れてから8時25分までホールで遊んで、8時28分に体育館入り。8時50分ごろまでの開会式を経て、9時00分から文化祭開始だ。

「永島。外に5000番（313系）と300番（313系）の併結入れて。」

「はい。内何にするんですか。」

「373系か、311系か。それとも2500番（313系）と2

11系の併結か。迷うところだけど、ここは373系の「東海」だ
る。」

「ですな。」

「箕島。俺たちが行っていいよっていったらすぐに走らせて。」

ナヨロン先輩はすぐさま373系の箱を探して、線路に置く。先に
内回りの作業が完了し内回りから走りだす。だが、・・・、

「ヤベ。永島がパンタ車あっち向きで入れたってことはあれ逆じゃ
ん。」

「名寄先輩。止めますか。」

「もういいよ。直すの面倒だから。そのまま行っちゃえ。素人には
わからん。」

「箕島。外線も行っていいよ。」

「よし、永島次だ。」

「えっ、早くないですか。」

「一つの列車の走行時間は10分。10分の間に入れ替えしないと
いけない。もたもたしてられないよ。」

「じゃあ、次は「しなの」行きますか。」

「うん。じゃあ「しなの」外に出して、内回りは・・・0番(31
3系)と211系の併結でいいか。並べて。」

「10両でいいですか。」

「6両だろうが、8両だろうが、10両だろうがなん両でもいい。
持ってきた箱から「しなの」を取りだす。この「しなの」は基本編
成6両と付属編成4両の10両編成。編成は大阪〜長野間で走って
いる「しなの」の運用である。今からナヨロン先輩が外に取りだそ
うとしているのは中央本線(中央西線)である快速列車。東海道線
の静岡圏でもそうだが、ここでは313系という新型車両と211
系という従来の車両の併結運転が行われているらしい。

作業をしている間に9時00分。一般客の入場が始まり、たちま
ちホールは子供たちでこった返す。

「さて、ゴジラが入って来たぞ。」

そういうのは何となく分かる。子供は何でもかんでも触りたがるというのがある。これは模型にとって強敵だ。触るということは脱線の危険性が増すということ。普段脱線しないところでも脱線するらしい。ひどい時には走ってる車両を押さえつけるため走っている車両すべてが横転することもあるらしい。

とりあえずこのゴジラは外回りの人に任せるとして、9時05分内回りを373系「特急東海」から313系0番台（運用は1000番台）と211系の併結へいけつに変える。外回りは東海道本線の新快速しんかいそく列車から中央本線の特急「しなの」に変える。ポイントを変えて「しなの」が発車していくのを見送ってまた次である。次はJR東日本に移るらしい。253系「特急成田エクスプレス」とE231系（209系？）の総武線をこれまで走ってきた車両を片づけて線路上に出す。作業を行っていると、誰かに話しかけられた。

「おい、名寄なよいる。」

誰だろうか。その問いに答えようとしていると、

「青木あおきさん。青木あおきさん僕の独断でこっちだから入ってください。」

「マジかよ。そんでもって、これはどうにかならないのか。」

走っている「しなの」を指差した。

「素人には分からないから大丈夫です。」

「分かる人来たらどうするんだよ。」

「来ないことを信じましょう。」

「あのなあ。」

どうやら今来た人は青木あおきというらしい。左側に展開しているプラットフォームの持ち主なのだ。よくあんなに集めたものだと感心する。その人は机の下をくぐって僕達の周回に入ってくる。

「とりあえず紹介しとく。OBの青木あおき洋輔ようすけさん。」

「それだけかよ。・・・まあよろしく。時折こっやってくるかもしれないから。」

「あつ、よろしくお願ひします。」

「で、名寄なよ。俺の「きたぐに」が入れる隙間はあるのか。」

「あつ、それ考えてなかった。」

「おい、考えとけよ。しょうがねえ。サヤのほうで走らせてくるか。」

「それやったら「きたぐに」が死ぬと思います。」

「そうだな。じゃあ、次こいつを行つちやえつて。走らせてちよ。」

「へいへい。永島ながしま。外回り「雷鳥らいちょう」出して。」

「あつ。はい。」

トミックス
TOMIXの「雷鳥らいちょう」の箱を開けて作業を開始したが、ナヨロン先輩が言ったあのことが少々気になった。

「ナヨロン先輩。これ持つてくるって聞いたときパノラマグリーンがパノラマグリーンじゃないかどっちかって聞きましたよねえ。なんでですか。」

「パノラマグリーンだと支持率がいいっていうかなあ。結構違うかな。」

「へえ。そうなんですか。」

「ああ、それもあるけど。パノラマグリーンとそうじゃないやつの違いも見ておきたかったっていうのもあるかなあ。まあ、それはさつき見て分かったけど。」

「どこがどう違うんですか。僕にはどうしても国鉄車は同じように見えるんですけど。」

「同じように見えるかあ。まあしょうがないよなあ。大体そういうものしか作ってなかったっていうのがあるからなあ。」

外側に「きたぐに」を並べながら続ける。

「パノラマグリーンってふつ々のやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつ々のほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。でも、中には変り種があるからなあ。パノラマグリーンの最終編成あたりだと思っけど、あいつはほかのパノラマグリーンに比べて窓周りが多い。だからちよつと見分けづらい。」

「へえ。そんなに違うんですね。同じように見えるやつも似て非な

るものってわけですか。」

「まあ。そういうところだな。」

「雷鳥らいこうを出している間青木あおきさんは今走っている「しなの」に目をやっていた。」

「名寄なよろ。これ持つてるの誰だ。」

声をひそめて聞いた。

「永島ながしま。あいつだけど。」

「俺思うんだけどさあ。これ明らかに南みなみさんのやつだよなあ。」

「永島遠江ながしま とうけい急行の社長の孫みなみだし、南みなみさんがその親戚せきってことじゃないのか。」

「・・・。そういうことだよな。ものすごい大物が入ってきたじゃないか。それであの性格だから誰もそう思えない。そこがすごい。」
「ハハハ。」

その頃僕はというと、文化祭を見に来た鉄道マニアらしき人と話していた。

「この「しなの」は10両だから大阪から来るやつですよな。」

「ああ、はい。」

「私も高校生の時にねえ、この「しなの」で名古屋なごやから長野ながのまで行ったことがあってね。」

「へえ、そうなんですか。」

「私が乗ったときはまだ383系じゃなくて・・・。」

「381系の時ですか。」

「いやいや。もっと前。確かディーゼルカーだったかなあ。もう40年位前の話かなあ。」

そういうとその人は持っているカバンの中から携帯できるサイズのアルバムを取り出し、その車両を探していった。

「あつ、あつた。これだよ。」

指差した車両の真ん中には「しなの」、その下にローマ字で「SH INANO」と書かれている。今僕が親しんでいるヘッドマークとは全く縁のないものである。そして車両はどこかで見ることがある

ような顔をしている。車両は確かキハ181系。大阪〜鳥取間を結
んでいる「特急はまかぜ」と同じ車両のはずである。

「今じゃこれもねえ、はまかぜ」だけになっちゃったからねえ。
本当はこれにはもつと走ってほしいんだけどねえ。」

名残惜しそうに語っている。この人はキハ181系これのことが好きなの
だろう。昔から親しんできた車両であることには間違いはないの
だ。

「そうですね。」

なんか暗い話になっていたので話を変えよう。

9時25分。583系「急行きたぐに」、485系「特急雷鳥」
に交代。

「ナガシイ。」

誰かに呼ばれる。今度は誰だかしつかりと分かる。萌だ。だが、そ
れを聞いて啞然とする人もいる。それは3年生と2年生。あとは木
ノ本きののである。

（今、ナガシイって呼んだよねえ。この人。）

（まさか。ナガシイって他の人から呼ばれてたあだ名。気に入って
んだな。）

（彼女か。）

「よーす。雷鳥」走ってるじゃん。それも「きたぐに」と一緒に
あ。」

（この人分かってる。まさかとは思っけど編成違つとか言わないよ
なあ。）

「それで次はなに走らせるの。「カシオペア」。」

ちよつとナヨロン先輩に視線を向けた。ナヨロン先輩は首を横に振
って、持っている箱を掲示した。「ワム38000形」の貨物列車
と今自分が手に持っている281系「関空特急はるか」が次に走る
列車だ。

「まだ「カシオペア」は出さないよ。」

「最後まで出さないつもり。」

再びナヨロン先輩に視線を向ける。何もなかったけどいつか出すと
いうことだろう。

「この間には出るよ。」

「ふうん。」

背をかがめてホームの中をのぞきこむ。

「ホームに停まってるのは「ワム」と「はるか」かあ。」

（「はるか」はまだしも、「ワム」まで分かるなんて……。ふつ
うの人だったら「あつ、貨物列車だ。」で終わるリアクションなの
に。）

「あの「ワム」って駿兄ちゃんのこと。」

「ううん。部活にも持ってる人がいてね。これその人の私物なんだ。」

（今この人駿兄ちゃんって言った。間違いない。南さんのことこの
2人は知ってる。）

「んじゃあ、他のところもさらっと見てくるから。また来たらよろし
くね。その間に「カシオペア」走らせたりとかしないですよ。」

「しねえよ。俺の独断でやってるんじゃないから。」

萌は模型を見ながら、隣の周回のほうへ歩いて行った。

（あの人って永島のなんなんだろう……。）

今度は木ノ本のいる周回に来て同じように視線をおとした。する
と向こう側から緑色の先頭の車両がこちらに向かってくる。

「ねえ、これって「スーパー白鳥」。」

おそらくこれは私に聞いたのだろう。

「ああ、ちよつと……。ハクタカ先輩。これって「スーパー白鳥」
ですよね。」

「うん。そうだよ。」

「だって……。でもよく解るね。」

「昔からナガシイと電車のこと話してたから。特急だったら名前と
使われてる車両。あとはナガシイが好きな車両くらいだけだけ分
かるよ。」

(永島の彼女なのか。)

「それで、ナガシイの言ってた、隠してなければ私と同じっていうのは君かなあ。」

(あいつそんなこと言ってたのか。)

「まあ違うつてことはないよね。ナガシイと同じ上履きはいてるの
こん中に何人もいたけど、女子っていうのは君だけだったからね。」

「。。。。。」

「あっ、名前言ってなかったね。坂口萌。また展示とかで会うと思
うからとりあえず覚えといて。」

「永島から聞いてるんじゃないか。。。。。木ノ本榛名よ。」

同じ鉄としてよろしく。」

「木ノ本さんね。よろしく。」

ふと永島を見て、

「やっぱり彼女創るなっていう方が無理だよなあ。」

「いや、別にあいつのこと彼氏とか思っけてないから。」

「ふうん。木ノ本さんがどう思ってるか知らないけど、ナガシイは
私以外に彼女を創らない。これは断言できるんだけどねえ。でも言
つといてよかったかも。」

「。。。。。」

「ただ、一つだけ問題があるんだよねえ。まだ本当のこと言っけてな
いし。。。。。」

「おい、言っけてないなら言えよ。」

「私が今言っただのはそういう意味もあるけど、違う意味もある。あ
いつには秘密にしといてほしいんだけど。」

その内容を聞くと、

「秘密にしとく必要があるのかよ。それ。正直に話した方がいいだ
ろ。」

「そうは思ってるんだけどね。。。。。ごめん木ノ本さん。この話は
またどこかで会った時にお願ひ。今はいろいろとまずいから。」

(今のごことは全部本当。。。。。)

ながしま
永島のいる周回のほうに歩いて行く後姿を見ながら心の中でつぶや
いた。

今回からの登場人物

おおき
青木洋輔

誕生日

11月1日

血液型

A型

身長

159

cm

22列車 当日（後書き）

話がブレていてすみません・・・。

展開は考えたところで成り行きということが多いので、これからもそういうしが出てくるかもしれせん。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。

根性でまずは高校1年生の最後まで持っていきたいと思います。

23列車 話し合つて・・・

一方僕達はというと展示に追われて、次に何を出そうか話し合つている。

「今はまだ11時。「カシオペア」とか行くには絶好の時間なんだろうけどな。」

「見に来てる人も多いし、今出しちゃえばいいじゃないんですか。12時になったら食料調達しにどこか行っちゃいますよ。」

「おい、名寄なよろ。ネタに困ったらこれ走らせればいいじゃん。」

「青木さんあおき。「ライトレール」はまだ。文化祭の最後の最後で暴走させるんだから。」

「「ライトレール」暴走させるって。それはどうだろうか。」

「でも、「ライトレール」はそういうところ走ってるんだよ。風景以外は問題ない。」

「いや、別な意味で問題があります。40km/hキロしか出ない車両がなんで400km/hキロ出すんですか。」

「そこは御愛嬌。」

「そんなことよりもまだ走らせてないやつだつていつぱいあるじゃないですか。223系とか、223系とか、223系とか。」

「お前、223系好きだな。」

「100系がいなければ1位ですから。」

「じゃあ100系暴走させようぜ。在来線だけど、ミニ新幹線がありならありだろ。」

「その片割れ何にするんですか。0系レイチャンですか。0系レイチャンはちょっと。」

「何0系嫌なのか。」

「そんなことはないです。でも、両方ともここに持ってきてません。」

「なんでそんな話になつたんですか。もう「カシオペア」と「北斗星ほくとせい」出しますよ。」

「いや、待て。「北斗星」は「北斗星」でもバリエーションを持たせた方がいい。例えば「夢空間」とか「夢空間」とか「ゆうトピア」とか。」

「最後関係ないぞ。なんで「夢空間」って言ってる。「和倉」になるんだよ。おかしいだろ。」

「青木さんもナヨロン先輩もやめてください。オヤジギャグにもなりません。」

「よし。永島。何に牽かせる気。EF81（カシカマ）。それともEF510（アオカマ）。はたまたEF81（ホシカマ）か。」

「「カシオペア」はEF510（の）502号機で「北斗星」はEF81（の）133号機です。」

「分かった。並べろ。」

「ナヨロン先輩の承諾を受けて内回りに「カシオペア」を外回りに「北斗星」を並べ始める。すると、

「ナヨロン。次なに行くつもり。」

「サヤ先輩がモジュール越しに話しかけてきた。」

「内回りが「カシオペア」で外回りが「北斗星」の1号だな。いや編成の向き……。」

「なあ、「カシオペア」こっちに貸してくんない。こっちからは「北斗星」貸すから。」

「んなカオスにしたいなら「トワイライト」でやればいいじゃないか。」

「「トワイライト」だったら珍しさがないだろ。」

「その前に「カシオペア」貸してほしいかは永島に聞け。こいつのだから。」

「ごめん。「カシオペア」貸してくんない。」

「それだつたら毎回家でやってますから。それに撤去すんの面倒だから嫌です。」

「1年生に拒否権は……。」

「ある。」

すると、潔くあきらめていった。サヤ先輩のおかげで作業が停滞していたが、作業を再開。すぐに2・1号車（スロネE27-200形・カハFE26形）と牽引機（EF510-502）をレールにのせた。ナヨロン先輩の腕時計で11時01分「カシオペア」が発。11時04分に「北斗星」が出発した。

「永島か。箕島。どっちか昼食べてこい。」

「えっ、でも。」

「大丈夫。こっちが編成順に片しとくから。」

「。。。。」

「じゃあ。僕が行きます。永島。運転変わって。」

と言うわけで、まず箕島が昼を食べに行くことになった。僕は箕島から運転を変わり、運転席についた。青木さんとナヨロン先輩は次の車両について何にするか話し合っている。

「ナガシイ。次はなに走らせるわけ。」

「永島。お前の「出雲」DD51（デデゴイチ）の重連で召喚して。」

「分かりましたけど。外回り何にするんですか。」

「外回りは泣く子も黙る「急行だいません」だぜ。」

泣く子も黙るのか。。。。

「だって。」

「「出雲」は聞いたことあるけど、「だいせん」って何。キハ58とか使ったやつ。それとも「きたぐに」みたいに583系使ったやつ。」

「おいおい。山陰本線は電化されていないんだぜ。583系走れるわけないじゃん。」

「あっ、そうか。。。ああ、ちょっと私バカになったかも。。。

「それ分からなかっただけでバカになっただけって言うなよな。また1から覚えようっていう人もいるんだから。」

（木ノ本さんのことだな。）

「へえ。1からね。」

「坂口じゃん。」

その声とともに来たのは宿毛だった。

「宿毛久しぶり。」

「宿毛。クラス展のほうどうなってる。」

「クラス展のほうはまあふつつうくらいだよ。やってる位置が悪いっていうことはないけど、なかなか客の量が上がらないっていうかなあ。多分ほかのところと割れてるんだと思う。」

「クラス展何やってるの。」

「お菓子とかの販売。」

「楽しそうだね。」

「楽しそうだねって言っても坂口も来る気はないんだろ。ここにいるほうが断然楽しいから。」

「まあね。」

永島は「出雲」を線路上に出すために今は運転台にはいない。そのコントローラーを見つめていると、

「ねえ、宿毛。これいじっていいと思う。」

「ダメだろ。いくら模型いじれるからってそれはダメでしょ。」

「いいじゃん。少しくらいマックスにしたって。」

その会話は十分聞こえた。

「おい。そのコントローラーマックスにするなよ。家じゃないんだから。」

と注意されてしまった。

「はいはい。ただの冗談だから安心して。」

「お前の場合どこからが冗談でどこからが本気なのかわかんねえよ。」

「ほとんどは冗談のはずだから。」

「はずってなんだよ。」

「ハハハ。」

（永島のやつ。やっぱり坂口と話してたほうが生き生きしてるじゃ

ねえか……。そうか。鉄研だからこういう機会があるのか。だったら俺が心配するまでもなかったかもな。」

一方、他の区画では。

「ねえ。あの人ってさつきからナガシイと話してるけど、ナガシイの彼女かな。」

「善知鳥先輩には何でも彼女に見えるんですね。」

「永島のやつ。うらやましいなあ。」

「何。サメちゃんもナヨロンと同じで彼女募集中か。」

「えっ。まだ一度も縁がないですから。て言うか名寄先輩も募集中つて。彼女いないんですか。」

「頭いいけど、半分電車が恋人状態だからな。それで縁がない。ところで、佐久間はどこに行ったか聞いてないか。」

「多分他のクラス展とかに行っただんじやないんですか。」

「あのバカ。アヤノンだけに任せるんじゃない。アヤノンをいじれないじゃないか。」

（そのために。）
また……、

「おい、アヤケン。貨物ぶつ倒れた拾って。」

「なあサヤ。これどこで落ちた。」

「ここおぐすかもつの小楠貨物で倒れた。」

「小楠貨物おぐすかもつかあ。よく俺こんなゴミ作ったな。」

「ゴミかよ。」

「あいよ。落ちてたコキはこれで全部。」

「バカ野郎。コンテナも落ちてどっかに吹っ飛んでる。探せ。」

「えっ。その状態じゃ何かダメなのか。」

どつという状態か説明しよう。左側からコンテナがあり、あり、なし、なし、なしの順になっている。

「この状態じゃ

になるだろが。」

解説不能のところだけ裏声でした。

「せめて、日本語しゃべれ。」

「日本語ですか何か。」

「ウソつけ。」

「ナヨロン先輩。また「雷鳥」^{ライキウ}行くんですか。」

「バーカ。またって言う言い方は何だよ。国鉄って言うのはようは頭だ。どんな編成考えるかで走らせるパターンって言うのは何百にもなる。「雷鳥」^{ライキウ}には「だんらん」をいれて、一番後ろに「ゆうトピア和倉」^{ピアワカ}をくっつけて、「雷鳥」^{ライキウ}に引っ張らせる。」

「そんな編成あるんですか。」

「あつただ。国鉄に正統性を求めるところでどうかしてるぜ。それがあからさまに出るのは客レとかディーゼルだな。キハ58にキハ10とかそういう方面を連結したとかっていう実績だつてあるんだ。・・・いや、くっつけたのはキハ40だったかな。」

「分かりました。ていうかそんなことどうでもいいです。」

12時42分。僕は持つてきた弁当を食べに一度管轄を離れた。

弁当を食べ終わって戻ってきたのは13時03分ごろだった。

「昼食食べてきました。」

「へーい。・・・永島」^{ながしま}223系の2000番台8両。内回りに出

して・・・。つていつても、外回りどうするかなあ・・・。」

「永島さん。次外回りなんか走りますか。」

諫早がクラス展をきり上げてやってきた。

「ああ、まだそれ決まってるないんだけど・・・。内回りは223系の新快速^{しんかいそく}が行くみたいだけど。」

「じゃあ、ちようどいいですね。僕のこれお願いします。」

そう言ってKATO^{カトー}の箱を差し出した。箱の背には「223系2000番台 1次車 4両セット」と書いてあるが、表には「223系6000番台4両セット(宮原)」^{みやはら}とシールで直してあった。

「ナヨロン先輩。諫早がこれ行ってほしいって。」

今の箱をナヨロン先輩にも差し出す。ナヨロン先輩も箱の背と表で表示が違うことを不思議に思ったかもしれない。だが、中身を見ると納得したようだ。

「諫早。これよくやったな。ダブルパンつてことは宮原にいる6000番(223系)だよな。」

「はい。」

「これだったら、もうワンセット繋げて、「丹波路快速」とか「直通快速」とかやった方が面白い。ここまでできてるんだし、これで終わらせるのはもったいないぜ。」

「名寄さんならそう言うと思って、もうワンセット持ってきてます。」

「えらい。なんか他に持つてる車両と違ってある。」

「今はないですけど、家に223系のパンタを全部シングルにしたやつと同じ6000番台の網干みほしにいるやつと211系の3000番台を無理やり5000番台化したやつならあります。」

「うーん。なるほど。でもそいつらは次だな。」

「ああ、あと名寄さん。もしカーブとかでこけたら「こけんじゃねえよ。ボケ。」とか言って言っといてください。僕が許します。」

「はいはい。でもこれこけないようになってるだろ。明らかに重量感違うし。」

「ああ、はい。くつつける方はモーターぶち抜きましたから。」

その時にはもう編成を理解していたらしい。

「永島ながしま。新快速を1号車(クハ222形)からこつちの方向で入れてくから6000番は8号車(クモハ223形)むこうで入れてつて。」

ナヨロン先輩から箱を受け取って言われたとおりに並べていく。レールに置いて行く順番は8号車からではなく1号車から。こうしないといれずらい。なぜかというところを並べる線路の隣に建物が隣接しているからだ。

「ナガシイ。手伝おつか。」

「いや、大丈夫。それに、これ人のだし。」

「223系の・・・2000番台。なんか顔似てるよねえ。」

「いや、こいつは2000番台じゃなくて6000番台。モーター

車のパンタ2つだし、ちょっと分かりづらいけど乗務員室扉のこのラインの下にオレンジのラインが入ってる。」

「ホントだ。223系も大家族だからなあ。分かりづらいね。」

「でも、先輩の話聞いていると223系もそんなに親戚たくさんじゃないみたい。313系のほうがもつと親戚たくさんなんだって。」

「ふうん。」

「ねえ、ナガシイ。」

善知鳥先輩に呼ばれる。

「何。ナガシイ、鉄研でもナガシイって呼ばれてるの。よっぽど気に入ってんだね。このあだ名。」

「・・・。なんですか。」

「そつちにさあ138系か981系の「あずにゃん」ない。E253の「あずにゃん」走らないんだけど。」

(言ってることメチャクチャだし・・・。)

「E253系なんていうやつありませんけど、それに138系とか981系ってどこどう間違えたらそうなるんですか。」

ここで正しい答えを皆さんには知らせておこう。もちろん、そんなこと知ってるよという人もいるだろう。まずE253系と間違えられたのはE257系。138系と間違えられたのは183系。981系と間違えられたのは189系である。

「永島。探してるのはこいつらだ。渡してやれ。」

さすがナヨロン先輩。善知鳥先輩の言いたいことはこの人にはしっかりと伝わっているようだ。

「ナガシイ。パス。」

善知鳥先輩が手を差し出す。僕も手を伸ばしたが、あと少しで届かない。

「ナガシイ、手伸ばせ。ゴムゴムのー、ピストル。」

「無茶言わないでください。ゴムゴムの実食べてるわけじゃないんだから。」

すると外回りをしていた楠先輩がリレーしてくれた。

「アヤノン。邪魔すんなよ。」

「善知鳥先輩。今自分何歳ですか。」

「善知鳥茉衣19歳。永遠の少年……ああ、いやいや。永遠の少女です。」

「……。」

「アーツ。EH200（ブルサン）の隣が困るー。」

何となくバルサンと同じ様な響きがする。

「……名寄先輩。内回りさつきからどこにいるか分かんないんですけど。」

運転業務についている箕島が疑問をぶつけてきた。

「えっ。新快速どっか行った。」

「ねえ、ナガシイ。223系あすこで横倒しになってるけど。」

萌がそう教えてくれた。指差している場所は運転台から死角になるところ。行ってみると、223系は全車両が脱線していた。1号車（クハ222形）、2号車（モハ223形）、3号車（サハ223形）と6号車（サハ223形）、7号車（サハ223形）、8号車（クモハ223形）は完全に、4号車（サハ223形）、5号車（モハ223形）はライダーのふちに受け止められる状態で横倒しになっていた。

「手伝おっか。」

「手伝つてくれるのは家だけで十分。ここはいいよ。」

脱線の復旧作業として、まずは3号車と4号車、5号車と6号車の連結を解除。そのあと1号車から3号車と6号車から8号車はすぐに線路上に仮置きする。そして4号車と5号車も線路上に仮置き。車両を仮置きし終わったら随時車輪をレールに乗せる。

「あつ、223系だ。」

ふと顔を上げると自分の前にいるのは萌ではなく小学生だった。その小学生は今ここから見える範囲をざっと見渡して僕にこう聞いた。「こっつてこっついう部活もあるんですね。中学からでも入れるんですか。」

「ああ、今年は中学から3人入ったからな。」

「へえ。ここつて頭いいほうがいいですか。」

「頭よくなかったっていいよ。僕みたいなバカでも入れたんだから。」

（んじゃあ。僕みたいなバカでも大丈夫なんだよなあ。よし。．．．）

「おいおい。僕みたいなバカっていうのはウソだろ。．．．それとも、鉄道バカとしてのバカか。それだったら裏付けるね。」

「アハハハ。」

5号車のモーターを線路上に置くと引つ張られる感覚を覚えた。車輪が明らかに動いている。

「箕島。コントローラー完全に止めてる。」

どうやらその声は箕島にはとどかなかつたらしい。まだ車輪が動いている。

「箕島つ。止めてつ。コントローラーの電源切つて。」

ちよつと声を張り上げていうと、青木さんがそれに反応してくれた。

「箕島。コントローラーのノッチオフにして。」

その声を聞くと箕島はつかんでいる新幹線のようなコントローラーのアクセルをもとの位置に戻す。するとこれまで電気をとっていた223系の車輪も止まった。止まったことを確認して、改めて5号車を線路上に乗つける。左側の台車、右側の台車の順に線路に乗つけて、

「223系、行っていいよ。」

そう指示を出すと、またも青木さんが反応して223系を走らせてくれた。

「こういう意味では家でやってるのより疲れるな。」

「いや、家でやってる時のほうがもっと疲れる。あれやるって言っても駿兄ちゃんと俺と萌ぐらいしかいないじゃん。3人しかいないから脱線しても気づきづらいつていうかな。逆にこの人数でやってるから運転班としては大助かりつてことじゃないかな。」

「ふうん。」

「呼吸間を置いて、さらに話が続く。」

「今走ってる223系ってちょっと短くない。家で走らせてるのが常時12両編成でしょ。あれ8両編成だよねえ。」

「常時12両なのはうちのレイアウトが全線複々線だから。新快速ってほとんどが12両編成で走ってるっぽいから。」

「いや、それは分かる。でも8両っていうこともあるのか。」

「あるんじゃないの。電車でGO!に収録されてる新快速全部8両編成だし。」

「2002年のデータだもんね。・・・外回り走ってる6000番台だっけ。あれは何。」

「あれって多分おおさか東線の「直通快速」か福知山線の「丹波路快速」だろ。どっちだか知らないけど。」

「「丹波路快速」は名前聞くだけでどこに行ってるのかなあってことは大体見当がつくけど、「直通快速」ってどこどこ結んでるわけ。」

「奈良と尼崎の間らしいけど。」

「奈良から尼崎までの直通ね・・・。なんかわざとらしい名前の付け方ね。」

「わざとらしいってなんだよ。」

次の車両選定に戻った。しかし、その頃にはもう決まっていたように、内回りにEF510牽引の貨物列車。外回りに「寝台特急トワイライトエクスプレス」がスタンバイしていた。

23列車 話し合つて・・・（後書き）

223系のごとが多く出てきますが、自分自身223系のごとが好きだからです。

個人的には223系1000番台がお気に入りですが・・・。

こんな話どうでもいいですね。

なお、これからも223系は大量に出てきます。

やっぱり好きなもの書いてる時が一番ノリノリですね。（笑）

24列車 暴走 富山ライトレール

EF510と「トワイライトエクスプレス」が走りだしてからは、次に何を走らせるかの議論。

「在来線にE3（イースリー）系の「つばさ」と「こまち」を走らせて何とか時間稼ぎにして、次に旧国鉄いけばいいだろ。「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか。」

「お前さつきから」とびうお。「ぎんりん」にこだわり過ぎ。少しはもつとほかのやつにしろよ。あのキハ58使って、多層建てでもやればいいじゃないか。」

「多層建てすか。やるのはいいですけど、相方が困り……。」

「そんなのいくらでもあるだろ。485系使って「つばさ」でいいじゃないか。」

「いくらなんでも、それはないでしょ。」

「あのお。内回りに「スーパーはくと」で外回りに「スーパーおき」か「はまかぜ」出せばいいじゃないですか。」

「ちよつと待て。今外回りに貨物列車出したんだからさあ、あれを徹底的にいじればいいじゃないか。」

青木あおきさんが口をはさむ。

「えっ、EF510（レトサン）の後にEF210（モモカマ）出して、EF81（コチカマ）の重連でED76（ナロカマ）の単機みたいなことするんですか。別に嫌とは言いませんけど、ずっとあれをまわしているっていうのはちよつと。」

「えっ、いいじゃないですか。面白いですし。」

「でもEF510（レトサン）から始まるっていうのはちよつとっと思っんですよ。そういうことするならなおさら「3099レ」か「3098レ」みたいなことするべきだと思います。」

「また面倒くさいこと思い付くなあ。」

この後ナヨロン先輩から教わったことだが、「3098レ」と「3

099レ」は日本一長い距離を走る貨物列車らしい。走行区間は福岡ふくの札幌さっぽろまで。途中日本海縦貫線にほんかいしゅうかんせんという短絡路線を通ってもその走行距離は2000km以上になるといふ。

「ていうか、貨物だったら他にもいじりようありますよねえ。機関車変えるだけじゃなくて貨車変えてどうにかするっていうのも。」

「確かに一つの手だけど、変えるの面倒くせえじゃん。」

「おいこら。鉄道マニアがそんなこと言っているのかよ。」

「じゃあ、僕が変えるでやっていいですか。」

「ああ、それだったらやってもいいけど、何にする気だ。タキ。ワム。トラ。」

「タキ。」

「了解。並べろ。つってもその隣に困るんだよなあ。そうなるにあの「トワイライト」もいじらないと。」

「EF210（桃太郎）に牽引させて、東海道線っていうことにしちやえばいいじゃん。」

「それ言ったらほとんどの列車そうなるじゃないですか。209系ケイレクの隣にEH200（ブルサン）のタキ走らせて根岸線ねぎしせんとか。その隣にE231系エイニサチ走らせて湘南新宿ラインしやうなんしんじゆラインとか。」

「んなこと言ったらはじまんねえだろが。」

「あのう。外に113系とか行けばいいんじゃないでしょうか。しばらく黙っていたが、ポンと手を叩いて、

「その手があったか。」

「そこ感心されても……。」

その後もこんなギャグみたいな決め方をしながら、走らせる車両を決めてホームに並べる作業。こんなことをしている間にも時間はどんどん過ぎて14時30分になった。

「さて、そろそろやるかなあ。」

「えっ、ナヨロン先輩あれ冗談じゃないんですか。」

「冗談なわけないだろ。やると言ったらやる。次の周回で、内回りキハ56（キハゴロ）と外回りキハ22（キハニニ）を停車させる。

やるぜ。」

そういつて車両の入った箱を詮索。箱を三つ取りだして箱を開けた。中には小ぢんまりとした白い車両が入っている。色はそれぞれ違って一つは赤、二つ目は緑、三つ目は紫だった。そのうち二つ。赤と緑をいつもの手つきで線路の上に置いて気動車の到着を待つ。気動車が到着するとポイントを直線に変更。

「箕島^{みしま}。運転変わって。」

珍しくナヨロン先輩がコントローラーのつまみを握る。すると、一気につまみをまわした。停車していた車両は勢いよくホームを飛び出していった。

「あつ。ナヨロンのやつ「ライトレール」走らせてやがる。」

モジュールに比べてとてもちっちゃい車両を善知鳥^{ぜんちどり}先輩が発見する。

「ナヨロン。それはあたしの専売特許よ。勝手に使うな。」

「うるさい。ときにはいいだろ。」

「おい、名寄^{なよろ}。新しい仲間。」

「おお。万葉線^{まんようせん}。」

内回りを止めて同じ線路上に青木^{あおき}さんから貰った車両を置く。この車両は「ライトレール」とよく似ているが、少し違う。置き終わると再びつまみをマックスにした。すると、今度は外回りと駅の反対側に止めて紫の「ライトレール」を置いた。当然、こちらも置き終わると暴走させた。

なぜか走らないけど、この「ライトレール」の暴走は子供たちには好評のようだが、部員には好評ではない。むこうの管轄の人が出てきて、レールの上に手でトンネルを作った。

「あつ、バカ。取るな。」

「ハクタカ。そっちの「ライトレール」取って。」

「永島^{ながしま}。「ライトレール」死んでも守れ。」

なんなんだろうか。この状況。

「ハクタカ取るな。」

「ヤダよ。人には散々編成違うとか言っというて自分はこんなことし

てるんだから。」

「いいだろ。間違つてないし。」

「そこ違うだろ。根本が間違つてますよ。」

ハクタカ先輩は走ってきた内回りの赤い「ライトレール」の速度に合わせて、トンネルを作った右手を滑らせる。滑らせるのと同時に「ライトレール」を掴んで、レールの上から外し、自分達の周回へ持つていった。

「ちくしょう。一つ持つてかれた。楠くすのき そっちに取られたの取り返して来い。」

「絢乃あやの。取つたらお前の恥ずかしい話クラスにはらすぞ。」

「この。バカタカ。」

「ちよつとアヤノン邪魔。取れないじゃん。」

「ちよつ、どこ触つてるんですか。」

「永島ながしま。箕島みしま。死んでも守れ。」

と言つた時にはもう遅い。紫色の「ライトレール」は善知鳥うつくし先輩に取られてしまった。

「サヤ、「ライトレール」取つたぞー。」

「オツシヤー。」

「よーし。こつちもやるぞ。」

「家でやるときにはないすさまじさだね。」

萌もえが話しかけてきた。確かに。家でやっている時はこんなことはない。ただ普通に車両がゆつくりと走っているだけである。もちろん、新幹線はゆつくり走つてないが。

「確かに。でも、楽しくていいよ。こういうこともあつて。」

「ハハ。・・・ナガシイが持つてきたやつ大活躍だったね。」

「ああ、ちよつと持つてきすぎたかなあつて思つてたけど、そうでも無かつたよ。先輩なんかもつと持つてきてもらった方が良かったかもなあつて言つてたくらいだし。」

「駿兄しゅんせいちゃんの223系も持つてきてたけど、あれどうするの。横倒しになつちやつたし。」

「あれも部活のやつ。顧問のなんだって。」

「へえ。顧問のやつねえ。って顧問の先生持ちすぎじゃない。どのくらい持つてるのよ。」

「数えてなかったから分かんないけど、うちの父ちゃんくらい持つてるよ。」

「あつ、じゃあ結構持つてるんだね。」

「……。」

「今日部活の先輩といろいろ話してたけど何話してたの。」

「次にどれ出すか話し合ってた。」

「へえ。」

「まあ、それも話してたけど、電車の雑学とかもいろいろ話してた。」

「へえ。例えば。」

「「雷鳥」のパノラマグリーンとパノラマグリーンじゃないやつの見分け方とか。SLのこととか。話してた先輩俺の知らないことも知ってたもん。ついてくのが精いっぱいだった。」

「ナガシイ、でもついていけなくなることもあるんだ。それなら私があの人と話したら全然じゃん。」

すると、後ろから声をかけられた。

「トモ。よーす。」

「駿兄ちゃん。来たんだ。」

「あつ、南さんお久しぶりです。」

善知鳥先輩がいつものテンションより冷えた口調で話しかけてくる。

「えっ、知り合いですか。」

「知り合いも何も、俺はこのOBなんだけど。」

「ウソ。」

「ウソって、ナガシイ気付いてなかったんだ。」

「ああ、今初めて知った。」

このころには全員気付いた模様で3年生と青木さんが寄って来て何かいろいろ話し始めた。

「ナガシイ。バカ。」

「ああ、そうだったのか。暁あかつきフェスタに行ったときとかどっからか現れてくるから、なんでかなあって思ってたんだけど……。」

「おいおい。いくらなんでも鈍すぎ。」

「ていうか。駿しゅん兄ちゃんくんの遅かったな。」

「なんかいろいろやってたんじゃないの。そうでなきゃおかしいって。ふつうならここに直行する人なんだから。」

「……。それもそうだな。」

「ナガシイ。いつになったら帰れるわけ。この後に片付けやるんでしょ。」

「ああ、18(6)時くらいだと思うよ。でも。この部活予定表通りにやらないからなあ。いつ終わるか分かんない。」

「それダメでしょ。」

「ハハ……。まあね。」

この時木きのノ本のもは二人の様子を見ていた。二人とも笑顔を交えて話しているのだが、なぜかその顔がいつもと違うように見える。ただ話しているだけなのに、ただ話しているように見えないのだ。

(永島ながしまには坂口さかくちさんの存在が大きいんだ……。坂口さかくちさんも言っていたこと。お互いを理解してるからあすこまでの自信になるんだ。でも、それを理解してるなら、なんであのことを永島ながしまに言えないの。)その思いだけがのった。

15時。文化祭終了。そのあと部展、クラス展のグランプリ、優秀賞が発表される。クラス展の結果はグランプリ3年6組。優秀賞2年5組。部展のグランプリは吹奏楽部。優秀賞は生物部だった。「あー。去年は優秀賞だったけど今年は優秀賞すら取れないってホントゴミだな。吹奏楽部のばか野郎っ。」

「まったくだ。」

「サッカーボールが表抜いたんじゃないのか。」

「え。なんで。」

「チート使ってたのがばれたんじゃないのか。」

「あれのどこがチートよ。部員のやつと後輩のやつかき集めて一気にどっさつと投票しただけじゃん。」

「はたから見ればチートみたいに見えるってことか。」

「まあ、そういうこと。」

善知鳥先輩とサヤ先輩は息を大きく吸って口に手を当てて、

「クソサッカーボールのばか野郎ー。」

「バカ。職員室に聞こえるだろ。」

「なんで。聞こえるように言ったにきまつてるじゃんねえ。」

「そうそう。このくらいしないと意味がない。」

「意味がないの前に全員片付ける。」

青木さんが仕切って、片付けさせるように促す。

「ところで、この箱4箱誰のだ。」

「あつ、それ永島の。」

「あ。すぐ片付けます。」

(萌はもう帰ったんだな。)

心のどこかでそれを思った。17時片付け完了。この後はアド先生のおごりで一人一人にペットボトルが配られ、500ミリリットルのジュース、お茶を全員で飲み干す。それを飲み干し終わると、

「よし。野郎ども。次は臨地研修だー。」

サヤ先輩が気合い入れに叫んだ。

その声に続けて、先輩たちが。1年生の大半もそれにつられて返事をした。

その帰り、正門を出ると予想してなかった光景を見た。

「萌。まだいたの。」

「いいじゃん。一緒に帰っちゃダメ。」

「ダメじゃないけど……。まだいるとは思ってなかった。終わるの分かんない部活が終わるのってふつうまってるかなあって。」

「まっっちゃダメとかっていうことはないんだし。ていうか、そんな話どうでもいいし、帰ろ。」

「おう。」

さつきから頭の中に響き続けているものがある。坂口さかくちから語られた道のり。あれは固い愛の証か、固い絆の証か。

今回みなみしゅんからの登場人物

南駿 誕生日 3月15日 血液型 O型 身長 176

cm

24列車 暴走 富山ライトレール（後書き）

こういうのってないことは承知です。
作者が狂っててすみません。

なお、今回で文化祭のエピソードは終了です。これから1回別なレ
をはさんで夏の大イベント臨地研修の話になっていきます。現実と
大きく違っても読んでくれる人には感謝感激です。

まずは高1の終了まで根性で書き上げるといった以上自分の精神力
をもって根性で完成させていきたいと思えます。

25列車 難読質問

6月14日。文化祭の片づけ。モジュールを随時量に運んで、車両のほうは図書館準備室に入れた。その片付けが終了すると、2階昇降口のちようど下にあるピロティに集合するよう言われた。

「よし、諸君。これからみんなを広報課と総務課と模型課に分けるからちよつと待っててね。」

前にナヨロン先輩が言っていた班決めである。だが、形式上その形をとるだけで、活動上関係ないらしい。

「えーと、まず醒ヶ井は総務課でいいだろ。後は、……。」

「少なくとも永島は模型課だな。」

「佐久間はなんかメカニック関係得意そうだし、広報課でいいだろ。」

「残りのミツシイとハルナンはどうするんだよ。」

「残りってそれだけじゃないだろ。中学生だってそうだ。ああ、あと諫早も模型課だったな。」

「なんか有能なやつが引き抜かれてるような気がするけど。」

「気のせいだつて。」

「じゃあ、箕島は総務課で、は広報課……。」

「木ノ本広報課っておかしいだろ。木ノ本もどっちかって言ったら模型課じゃないのか。」

「おう、ナヨロン。さっきから人引き抜きすぎ。」

「分かったよ。じゃあ、あとはそっちで決めて。もう引き抜く当てもないから。」

「じゃあ、模型課はもう人回さなくていいね。」

「ちよつと待て。せめて3人。3人は模型課来てほしいんだけど。」

「引き抜く当てあるじゃないか。」

「それじゃあ、ハルナンも模型課で、アサタンが総務課で、ソラタンが広報課でいいね。」

「ああ、それでいいよ。」

会議が終わったらしくサヤ先輩がこちらを向いた。するとそれぞれにどこどこに行けと指示を出し完成まで持って行った。

「よし。そっちの一番左のやつが総務課。真ん中が模型課。そしていちばん右が広報課だ。とりあえず何班にいるっていうのは覚えといてちょよ。」

そういうことだそうだな。

「で、これからの部活のために全員に書いてほしいものがあるんだけど……。」

サヤ先輩はさつきから持っていた紙を全員に配った。その紙にはこんなことが書いてあった。例えば「ロングシートとクロスシートどちらが好きか」、「このJRに一言」など。他にも「川内」の読み方、48という数字でピンと来るものなど50個の質問が書かれていた。

「この質問に回答してくれ。出来たら、俺に渡して。これを俺たちの部員紹介のページにアップするから。」

「はい。」

渡された問題に取り組む。内容は様々。最初は初歩的物から始まり、あとになればなるほど少しずつ内容が難しくなっている感じもする。

「なあ、永島。これなんて読むかわかるか。」

木ノ本が聞いてきた。シャープペンがさしている文字は「川内」。

「あつ、それ東北の都市と同じ読み方するよ。」

佐久間が口を挟んできた。

「確かにそうだな。」

「東北の都市。何、盛岡とか仙台とか。」

「今思いつきり答え言ったよ。」

「えっ、ウソ……。」

「答えは簡単なほうだな。」

「簡単なほうかぁ……。なるほど。そう読むのね。」

思いついたらしく、その答えを書いた。書き終わると、

「なんかこういうのって紛らわしいよね。こちら辺で言ったら新居町あらいちを「しんきよちょう」って読んじゃうってところかなあ。」

「あれ駅の読み方「あらいちよう」じゃなくて新居町あらいちだからな。さらに紛らわしいぞ。」

「あれなんてまだまだ優しいほうだろうな。難読駅なんて日本中探せばいくらでも出てくる。同じ九州新幹線きゅうしゅうしんかんせんの難読駅といえば「出るに水」って書いて出水いすみとかっていうのもあるね。他に僕が知ってるのは・・・これかなあ。」

紙の白紙を使って「長万部」と書いた。

「なにこれ。「ちようまんべ」とかって読むのか。」

(この読み方って絶対坂口さん知ってるよねえ。)

「いや。これふつうに読むってこと考えちゃいけない。難読だから。佐久間さくま分かる。」

「え。これの読み方なんてわかるわけねえよ。」

「醒ヶ井さめがい、箕島みしま。これの読み方わかる。」

「知るかつ。」

「えーと、これって何「まんべ」だったっけ……。ダメだ。「長」の読み方がわかんねえ。」

醒ヶ井さめがい、箕島みしまの順に回答を得た。

「何やってんだ。」

後ろから善知鳥先輩うしろが覗き込んでいた。

「これの読み方わかるかなあってやってたんです。」

善知鳥先輩うしろは「長万部」の文字を見るとすかさずナヨロン先輩を呼んだ。

「ナヨロン。これなんて読むかわかる。」

ナヨロン先輩にはすぐに分かってしまったみたいで鼻で笑っていた。

「簡単じゃん。「長万部おしやまんべ」だよ。「カシオペア」とかの停車駅だよ。」

「ナヨロンそういう方面からのこういうのは得意だからなあ。」

「よし、俺からも問題作ってやる。これなんて読むかわかるか。」
書いた漢字は2文字で「青木」。

「えっ、ナヨロン先輩。これバカにしてるんですか。」

「全然。これぞ簡単すぎて難しいっていう問題だぜ。阪神にはこう書いてすつごく意外な読み方させてる。まず、この答えは封じしておくか。全員これ「あおき」って読むって思ってるだろうが、これは「あおき」って読まない。」

「はっ。これ「あおき」意外に読み方あるのか。」

「バカ。善知鳥は黙ってる。」

読者の皆様にはこれの答えを教えておこう。もうすでに出ています。分かってる人はもう言うまでもないでしょう。

「さあ、どうだ。」

「ダメです。「あおき」意外思いつきません。」

箕島がギブアップするのを待っていたかのように全員ギブアップ。

「読み方は簡単なんだけどなあ。」

そういうとナヨロン先輩は青の上に大の字を書いた。

「こいつは「あおぎ」って読むんだぜ。他にもこういうのはどうだ。」

今度は「杉津」と書いた。

「これは「すぎづ」。」

「違うんですよねえ。これってもっと別な読み方でしょ。」

「ああ。」

「僕。これは分かります。「すいづ」ですよね。」

この問題には箕島が回答した。

「ああ、これ答えられちゃうと持ちネタがないなあ。俺が知ってる難読駅って言ったならこれくらいかなあ。」

「ナヨロン。それ嘘だよねえ。」

「箕島は歴史関連が得意そうだ。それだったら「水城」とか出して
もすぐ分かっちゃうだろう。」

「……。」

「いや。水城みずぎはふつうか。それだったら原田はらだのほづがわかりづら
かなあ。」

「なことどっちでもいいわ。ていうより、みんな書けた。」

「あ、はい。お願いします。」

「みんな早っ。」

「どうやら終わってなかったのは醒さめヶ井めがだけだったみたいである。

それが全員書き終わったところでアド先生からまた新たな発表が
あった。

「えーと、今日から部長が北齋きたさい院君いんから鷹倉たかくら君くんに変わります。部長
としての仕事はまだ引き継がないようですけど、新しい部長ですの
で、みなさん歓迎しましょう。」

みんなは拍手でそれに応対した。

「よっ。ハクタカ。よいよでしゃばって教えられるとも思ってるの
か。」

「思ってませんよ。むしろでしゃばって教えたのは善知鳥じゅち先輩せんぱいじ
やないんですか。」

「って違うか。でしゃばって教えるのはアヤノンか。」

「えっ、何であたしになるんですか。」

「だってしそっじゃん。」

「絢乃あやのは絶対にそういうことしません。」

「なんでハクタカがかばうんだよ。さすがにアヤノンす……。」

「それ以上何も言わないでください。」

「えっ、どうして。」

「いいから、何も言わないでください。」

数日後。岸川きしかわ高校こうこう鉄道てつどう研究部けんきゅうぶのホームページを開いてみた。

(この「N・EX」ネックス。ナガシイだよなあ。これも本当に好きだよね
え。)

そのページには結構面白いことが書いてあった。

25列車 難読質問（後書き）

全体的に文章が説明文であることを謝罪します。
作品上そうなってしまうところがあるのでご了承ください。

関係のない話ですが、今自分が作っている原作は高1の11月頃の内容です。まだまだ原作も発表分も先が長いなあ……。
そんなのでも読んでくれる人には感謝。
読者のために根性で頑張ります。

……後書きがほとんど同じ内容ですみません。

26列車 まとまらない(前書き)

現実と大きく違う個所が多々あります。すみません。

26列車 まとまらない

正式な部員と認められた。そのような感覚に浸っているのもわずかの間。これから僕たちは本当にイベントに体を傾けていく時期になった。その鉄道研究部一大イベントというのは毎年恒例臨地研修である。

「サヤ、今年どこ行くこうか。」

善知鳥先輩がサヤ先輩にどこに行くこうかと聞いた。

「そうだなあ……。去年は東北だったし、おとしは四国だったしなあ。アヤケン、ナヨロンはどこがいい。」

「九州でよくない……。」

ナヨロン先輩が提案する。

「おっ、ナヨロンさえてる。」

「うっさい。」

「九州かあ……。うん、いいかも。」

「よし、みんなで九州に行こう。」

「じゃあ、僕からそうアド先に言っとくよ。」

「サヤお願いね。」

「で、どうする。九州って言うてもどこに行くんだよ。」

「行くなって……。博多か小倉あたりだよなあ。」

「エー。」

「エーって……。病むこと確定なんだから文句言わない。」

「だって精神的に病ませるのはどうなんだよ。ハクタ力達はともかく1年生は耐えられないだろ。まああたしも耐えられないけど……。」

「そんなこと言うてたらどこにも行けないだろ。それにその心配はないよ。」

「どうして。」

「木ノ本は撮り鉄だからそんなこと考えなくていいだろ。永島は電

車が好きだから入ったんだから問題ない。他は・・・、どうにでもなるからいいや。」

「ナヨロンってそういうことよく一発で見抜けるな。」

「見抜いてないよ。勘なんだから。」

「そんなことはどうでもいいよ。」

「じゃあ、博多行ってくつてアド先に言っただいいな。」

「まだ、言っただいいな。」

「善知鳥が嫌だつて言うからだろ。」

「はいはい、分かったから早く電話してよ。」

今日の定例会はこれで終わった。

(また遠いところまで行こうとするなあ。)

そう思っているのはアド先生だ。この頃は遠いところに行かない。

「まあ、できるだけ抑えましょう。」

独り言を言った。抑えるというのは旅費。これができれば学校への申請は簡単である。

6月17日。今日は放課後に部活がある。今日からは夏の臨地研修についての話し合いだ。

「今年どこ行くんだろうな。」

僕から見える人全員にこの問いを試してみた。

「できれば東北がいいな。」

「四国かな。」

「やっぱり北海道だろ。」

「どこでもいいよ。」

木ノ本、箕島、佐久間、醒ヶ井の順に回答があった。言っただいい僕もできれば東北がいい。

「ああ、どこになるんだか気になるなあ。」

すると教室のドアが開いた。全員の顔がそつちを向く。

「先生じゃないんだから、みんなでこつち向くなよ。」

見ると楠先輩だった。もちろん顔はあきれていた。

「絢乃先輩。去年は東北のどこに行つたんですか。」
荷物を置こうとしている楠先輩に木ノ本が聞いた。

「去年は確か……。」

「「ばんえつ物語号」に乗ってきたよ。」

今度は楠先輩の後ろで声が出る。声の主はハクタカ先輩だった。

「ハクタカ先輩達って結構いい所行ってますよね。」

「そうかもな。」

ハクタカ先輩はそう言って去年の旅行の説明を始めた。

「去年は東京まで各駅で出て、夜新宿から出る「ムーンライトえちご」に乗って新潟まで行って、その後「ばんえつ」に乗って、戻ってきたんだよなあ。」

「それより「ばんえつ物語号」ってどんな感じでした。」

木ノ本が興味ありげに聞く。

「それは……。」

「ダメだよ、そんなこと聞いても。だってハクタカ「ばんえつ物語号」の中で爆睡してたもん。」

「ええ、なんで爆睡してたんですか。」

「「ムーンライトえちご」の中で徹夜してたんだってば……。」

（よくやるなあ。）

「それでも、最初くらいは覚えてますよねえ。」

「それも無いね。座った瞬間に寝たから。」

（何やってるんだか……。）

この話が終わるころには3年生も中学生も集合していた。全員が集まるとすぐに本題に入った。

「今年はみんな博多の病院に行くぞー。」

「オー。」

テンションの上がる先輩達。なんで博多にまで行って病院に行かなければならないのか。

「あんなあ、普通に言えって。」

「そうそう、いくら1年生が鉄研色に染まったからって伝わらない

だろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がツツコンでいたが、何か通じてきた。「それって、今年の臨地研修は博多はかたに行くってことですよねえ。」思ったことお口にしてみた。

「おお、さすがナガシイ。」

何となく分かりたくなかった。でも、九州きゅうしゅうに行けるのはうれしい。

「よし。んじゃあ工程言うぞー。」

またサヤ先輩たち恒例のあれが後にはまっているのだろうか。

「まず八カグチに6時45分集合。7時06分に出るふつうで豊橋とよはしまで行って、豊橋とよはしから7時49分発の特快米原行きに乗って米原まいはらで乗り換え。米原まいはらから9時50分発の新快速で大阪おおさかまで行って、大阪おおさかで昼休憩。昼ご飯食べたくないやつは食べなくていいぞ。それで12時00分発の新快速播州赤穂行きに乗って途中の相生あいおいで降りる。相生あいおいからふつうに乗って途中の糸崎で乗り換え。いと先から「シテイラナ」とかっている……。」

「略すなよ。」

「いいじゃん「シテイラナ」で。そいつに乗って広島ひろしまで降りたら17時55分発の「レルスタ」で博多はかたに19時06分だ。」

「だから略すなつて。」

「もうどうでもいいわい。次行くぞ。2日目は自由研修で、全員で乗るやつはオリオンとかつていうバスの21時40分発のやつ。こいつに乗って大阪おおさかが多分7時30分。三日目は大阪おおさかに着いたら自由で全員で押しかけるのは15時30分発の新快速しんかいそく。これで米原まいはらに着いたら米原まいはらで乗り換え16時59分発の特快とっかいに乗って豊橋とよはしに18時59分。そのあとはふつうであーって浜松はままつに戻ってくるっていう工程こうりょうだぜ。」

「そんなんで通じだのかよ。」

「多分通じた。問題ない。」

「多分つて……。おい。」

今ここにその工程を聞かされた。

「それでもつて、2日目と3日目は自由行動があるから、その班を決めてくれ。」

何とも展開の早い部活である。

その後、善知鳥先輩の言っていた自由行動の班を決めた。班は北斎院、善知鳥班。名寄、箕島班。綾瀬、醒ヶ井班。鷹倉、楠班。佐久間、諫早班。そして、永島、木ノ本、空河、朝風班となった。この班で行動し、いろんなところに行ってくる。班が決まると次はその中身を立てる。

「どこ行くつうか。」

「そうだな。九州行けるんだし、いろんな所行きたいよな。」

「いろんなところつて言つたつて駄だろ。俺駅以外そんなに行きたいつて思わないし。」

「それは私も同じ。城廻とかは箕島が喜びそうだけど、私たちはそつういうがらじゃないしね。」

「向こう行くんだつたら九州特急とか見れるか。」

「納得だ。お前好きだもんな。ほれてるものが違つと思うけど。」

「それ言つたら空河だつて同じだろ。キ八にほれてるじゃん。」

「。。。。。」

「ほれてる、ほれてないつていう話じゃないだろ。今はどこに行くかだろ。全員どこに行きたいんだよ。」

「正直博多から離れたくないつていうのが本音ですな。」

「博多だとディーゼルが見れない。熊本とかそつちに言つて「ゆふいんの森」とか「くまがわ」とか見たいなあ。」

「私は「かもめ」と「つばめ」と「有明」と「ハウステンボス」と

「みどり」の写真が撮ればいいなあ。」

回答は朝風、空河、木ノ本の順。

「そんな都合のいいプランなんてあるかよ。」

「そうだけど。つうか、まだ永島がどうしたいかつて聞いてないよ。」

「俺……俺は鳥栖とかに行つて寝台特急とか向こうに行く特急撮つてたいなあ。」

「全員なんか写真撮りたいっていうのは変わらないんだな。」

「そうだな。」

「でも、具体的にどこに行きたいかっていうのは出てませんよねえ。」

「それはもう出てるも同然じゃないのか。朝風は本音を言うと博多から離れたくない。空河はディーゼルカーが撮ればどこに行こうが関係ない。木ノ本は特急。俺は寝台特急と特急。それで、朝風が博多から離れたくないっていう理由は寝台特急の「富士」と「彗星」と「あさかぜ」、「出雲」、「瀬戸」意外完全網羅できるからだろ。」

「永島さんよく分かってます。」

あたりを見回して時刻表を持っている人を探す。

「醒ヶ井。時刻表貸して。」

「前にあるだろ。それでいいじゃん。」

「お前のほうが近いんだからお前がそつち使えばいいじゃん。」

強引にも醒ヶ井が使っている時刻表をもらつて最初のほうにあるブルーのページをめくつた。これの前には新幹線。真ん中に新幹線と特急の接続。後ろのほうには特急のダイヤ。一番後ろには寝台特急の時刻が記載されている。僕が開いたのはブルーのページの一番後ろ。つまり、寝台特急の時刻表が記載されているページだ。

白の青の境目のページを開くと載っているのは「カシオペア」「北斗星」「はくつる」の時刻。次のページをめくると左のページから「出雲」「瀬戸」「北陸」。右のページに「あけぼの」「ゆうづる」「日本海」「トワイライトエクスプレス」の時刻が乗っている。さらにページをめくると見開きに大きな時刻表が現れる。左ページは下り。右ページは上りの時刻。載っているのは「富士」「はやぶさ」「さくら」「みずほ」「あさかぜ」「あかつき」「彗星」「なは」。

「これで分かるな。」

「今思ったけど、寝台特急フルトレって結構いっぱい走ってるんだな。」

「今でも定期列車が18往復36本。不定期が2往復4本設定されてますからね。」

「計40本か。多いなあ。」

「そんなでもありませんよ。過去には「明星みちほし」と「ゆうづる」がそれぞれ7往復14本設定されていた時代がありますから。」

「えっ。それだけで14往復28本。多すぎじゃない。」

「確かに多すぎですね。そのあと「明星みちほし」は4往復8本。「ゆうづる」は5往復10本に整理されてますから。」

「それでも多いだろ。」

「そんな話今はどうでもいいだろ。それよりこっち。いつか仕上げなきゃいけないんだから。」

「そうだった。ごめん。」

「別にいいよ。木ノ本きののほんの場合そういうこと話してたほうが楽しいだろ。久しぶりなんだし。盛り上がればいいじゃん。」

「盛り上がるのはこれが終わった後。そう決めました。さっさと終わらせちゃおう。」

「だな。」

今度は見れる寝台特急しんだいとうきゅうの整理だ。実際に行動ができるのは7時30分から8時以降。その時に博多に来る寝台特急しんだいとうきゅうは物の見事でない。

「あつ。寝台特急フルトレのそんなに空気を読んでくれないみたいだな。」

「寝台特急フルトレのKY。」

「まあ、KYケーワイって言っても時刻表がこの通りですから。」

「そうですねよ。どこかに行ってからまたとれるかもしれないじゃないですか。」

「そうだな。」

僕はしばらくその時刻表を見つめ続けていた。これは……。

「これって3日目にまわしちゃえばいいんじゃないか。」

「どういうことだよ。」

「3日目にまわすと東京発着とうきょうはつちやくの寝台特急フルトレは見れないにしても大阪発おおさか

着の寝台特急は見れるっていうこと。」

「ああ、なるほど。」

「でもそれって大半を捨てるってことですよねえ。」

「だってそうしなきゃダメだろ。いくらなんでも5時31分の「なは」はまず撮れない。」

「撮れないこともないんじゃないか。早起きすればいい話だし。」

「それはそうだけどね。」

「木ノ本さん。電車に12時間乗った後にまたホームに行ける自信あるんですか。」

「自信はないけど。ふつうに考えてできるってことじゃん。」

「やめとけて。木ノ本まだ体が慣れてないだろ。歓迎旅行の時も20(8)時からホームにいてずっと寝てなかったんだろ。電車の中で爆睡だったじゃねえか。」

「そうでないところもあつた。これからずっとそれしてけば……。」

「いつか体壊すぞ。やめろ。」

「……。分かったよ。今回はやんないことにする。」

「で、話し戻すけど、「さくら」や「はやぶさ」や「みずほ」まで待つてたら広い範囲行動できない。」

「「さくら」と「はやぶさ」と「みずほ」が博多はかたに来るのって何時だよ。」

「全部9時台。そんなじゃ「さくら」が一番早くて、「はやぶさ」が一番遅い。」

「でも9時ならまだいろんなところいけるよねえ。」

「確かにそうですけど、もうちょっと現実つてものを考えたほうがいいんじゃないんですか。大体「さくら」、「はやぶさ」、「みずほ」が時間通りに来るっていう保証はないじゃないですか。」

「それは安全神話の日本が何んとか……。」

「何ともならない時だつてあるってこと。事故と天災にはどこをど

うあがいても勝てない。」

「そうですね。もし寝台特急フルトレが事故を起こさなくても貨物が事故を起こしたら同じことですよ。」

「そう。だから、今回は東京発着とうきょうはつちやくの寝台特急フルトレは切り捨てていいと思う。ここでも見れるんだから。だったら見れない大阪発着おおさかのやつを見たほうがいいだろ。」

「……。」

「それもそうですね。普段見れるやつ見たって機関車きかんしゃが変わってるだけだし。」

「でも、機関車きかんしゃ変わってるんだったらそっちも見たくない。こっちじゃ見れないんだしさあ。」

「確かに見れないけど……。」

全員黙り込んだ。ここ浜松はままつで見れる機関車きかんしゃはEF66をはじめとする直流専用ちよくり専用の電気機関車でんきかんしゃ。九州きゅうしゅうで見れるのはED76などの交流電りゅうでん気機関車きかんしゃ。EF66やEF65には青を基調とした塗装。ED76は赤をまとっている。それだけでも違うのだが……。

「ダメだ。好きなもの同士集まりすぎてるからこういつときまともなねえ。」

結局今日は何も進まなかった。

26列車 まとまらない(後書き)

今回から臨地研修シリーズの話です。

ストーリー中に出てくるみたいに寝台特急がいっぱい走ってたらなあ。新幹線より乗ってて飽きません。

27列車 立案(前書き)

残酷な発言がございます。

27列車 立案

翌日。

「今日も2日目、3日目の打ち合わせかあ。なあ、木ノ本きのもと。なんか考えてきた。」

話題を木ノ本きのもとに振ってみた。

「考えてみたんだけどさあ、昨日けつ鳥栖とすに行くっていう話に最後なつてたじゃん。だったら鳥栖とすまで行ってそこでしゃさつでもすればいいと思う。」

「しゃさつ。」

木ノ本きのもとの言葉にあった「しゃさつ」という言葉が気になった。まさか……。

「おい。まさか人殺すなんてしないよなあ。」

「するわけないじゃん。永島ながしまならすぐに通じると思ったけど、通じなかったかあ。」

「なんだよその言い方。まるで俺が鉄道バカみたいに聞こえるじゃないか。」

「実質そうじゃん。」

「まあ、否定しないけど。で、何それ。」

「車両撮影しゃうしやうしえい。略して車撮しゃさつ。」

「……。紛らわしい略語作ったなあ。車両撮影しゃうしやうしえい。略して車撮しゃさつかあ。」

「そう。すごいだろ。」

「どこもすごくないけどな。」

「それをスパツというなよ。」

「そんな話はどうでもいい。で、どんなの考えてきたの。俺はその工程知りたい。」

「まず、8時12分の快速かいそくで鳥栖とすまで行く。後は車撮大会しゃさつたいかい。戻ってくる列車は鳥栖とすを15時23分に発車する快速かいそく。そのあと16時0

9分発の博多南線に乗って博多南まで行って総合車両所を見ってみる。それで帰りは18時04分の列車っていう感じなんだけど。」

「……。」
「なんか反応してよ。」

「別に悪くないんじゃない。それで通してみる。」

「通すのはいいけど、まずは朝風と空河の反応見てからだろ。」

「多分反対しないと思うけど。」

「いや、空河が反対しそうで怖いんだよ。空河ってディーゼル好きだろ。私の計画の中ディーゼル出てこないから……。」

「鳥栖で「ゆふいんの森」も見れる。それがキハ71だかキハ72だかは知らないけどな。」

「なんだ。なら問題ないじゃん。」

「だから、きつと大丈夫だよ。朝風が見たい寝台特急も見れるしな。」

「このことを早速空河たちに振ってみた。」

「なんか反対とか。こんなところ行くなんてゴミじゃんとかっていうところない。」

「別にはないです。「ゆふいん」見られるだけでも十分ですから。」

「ないです。木ノ本さんがとうございます。」

「いやあ。それほどでも。」

「浮かれてんな。通らなきゃこれボツ。また1から作り直さなきゃいけないんだから。」

「計画を手帳サイズのノートに書いてアド先生に提出してみた。すると……、」

「なんだよこれ。鳥栖まで行って写真撮って戻ってくるだけかよ。ダメだしたのはアド先生ではなくサヤ先輩だった。」

「えっ、ダメですか。」

「木ノ本が聞き返す。」

「ダメってわけじゃないんだけど、行動が小さいっていうのかなあ。俺たちは門司港のレトロうんたらとかっていうところまで行くことと

思ってるんだよ。」

「永島。門司港ってどー。」

「えっ。門司港って……、」

鉄道知識が0に等しい木ノ本にはどういふ説明をしたらよいのか。

ちよつと考えて、

「山陽新幹線の小倉って知ってる。」

「小倉……小倉。」

どうもわからないみたいである。他に通じる言い方は……、

「九州渡つてすぐ。」

「……イメージわかないけど、何となくわかった。その近く

なのか。」

「うん。」

「そつちの話は済んだか。」

するとサヤ先輩はさっきの説明を続けた。……いや、違う。

「俺たちそこに行くまで「クソニック」に乗ることになった。」

「「クソニック」って……。サヤ先輩その呼び方やめましょう。」

「いいだろ。別に。「ハイパー」に問題起こす「やつらに乗るよりは

ました。」

これには首をかしげた。僕が知っている中で「ハイパー」がつく電

車や車両が見つからない。それがわからないようだと思したようで、

ナヨロン先輩が耳打ちしてくれた。

「783系。あれの愛称「ハイパーサルーン」。」

(なるほど……)

「サヤ先輩。話が脱線してます。」

「えっ。あつ。話それた。ごめんごめん。」

「ところで、この計画は変えたほうがいいってことですか。」

木ノ本はそう聞いていたが、僕にはもうこれでは通る気はしなかつ

た。

「もういいよ。また計画練ろつぜ。」

「なつ、永島。」

木ノ本きのもとは僕を呼び止めようとした。しかし、さっさと席に戻った僕を見ると僕たちのほうへもどってきた。

「聞こえてたと思うけど、この計画じゃあ通らなかった。なんか他にいい案ある。って言ってもすぐには出ないよなあ。」

「……。」

「永島ながしま。」

考え込んでいるさなか誰かに呼ばれた。僕を読んだ人は佐久間さくまだった。振り向いてみれば僕のすぐ後ろにいる。

「何。」

「お前らどこに行くってなってる。」

「鳥栖とりすに行こうってという話になってたけど、どうも通りそうになかったから鳥栖とりすに行くことはやめた。お前らはどこ行くの。」

「「つばめ」に乗って熊本くまもとまで行ってくる。」

「「つばめ」。」

班全員の声がそろった。「つばめ」は博多はかたと西鹿児島にしがきごしまを結ぶ特急しゅうとくきゅうの名前。使われている車両は787系という車両で全体がシルバーに塗装されている。外見は何となくロボットを連想させそうな顔をしている。

「あ……あれに乗るのか。」

「ああ、それもここだけの話……で乗る。」

「おい。それはやっちゃダメだろ。」

「考えてることが幼稚ちゅういといつかないか。見つかったらどうすんのよ。」

「え。見つからなければどうということはない。」

「……。」

「いや、そういう問題じゃなくて……。」

なお、今ここで話されていたことは絶対に真似しないでください。犯罪はんざいです。

「熊本くまもとって言ってたなあ。熊本くまもと行って何するんだよ。」

「あすこって路面電車走ってるじゃん。それにでも乗ってこようか

なあと思つて。」

(熊本……)

「へえ。そうなんだ。」

佐久間とも会話はここでお開き。自分たちの計画に戻つたが、何も進行しないのは変わりない。なら……

「先に3日目の計画作つちまおうぜ。」

「そうだな。2日目迷つてたつてしようがないもんな。」

「じゃあ、3日目どうするか……」

全員頭を回転される。中に浮かんでくるのは昨日言った「あかつき

「彗星」「なは」をこの日に見る。

「まず、寝台特急を見るのは必須だろ。」

「そうだな……。ん……」

「一つ気がかりなことが浮かんだ。もしこれが本当だったら……」

「バスが大阪に着くのつて何時だつて。」

「ゴミバスが大阪に着くのは7時30分ですよ。」

「……」

「どうかしたのか。」

「まずい。俺たち寝台特急にも見放されたかも。このままいつたら

「あかつき」と「彗星」は見れない。」

「え。行つてる意味がちよつとよく分かんないんだけど。」

「おいおい。これくらい理解しようぜ。」

「木ノ本さんにもわかるように説明します。まず「彗星」の大阪到着が7時16分。「あかつき」の大阪到着が7時24分。」

「あ。なるほど。そういうことが……。つて。えー。」

「死ねばいいですね。そのバス。」

「ほんとだよ。でも、バスのおかげで間に合うかもしれない。」

「なんで。」

「よく考えてみてくださいよ。鉄道は1分1秒でも遅れたらいけない。その代りにバスはそれに縛られない。どうしても高速道路の道路状況に左右されるからです。つまり、渋滞が続いていれば7時3

0分以降の到着になるということ。もし道路がスカスカですいすい通れる状態なら到着は7時30分より早くなる。」

「つまり、朝風あさかせが言いたいのは道路がスカスカの状態であることを祈つとけってこと。」

「まあ、そんな感じですよ。僕が思うにバスはゴミですから。」

バス好きの人ごめんなさい。

「よし。もし渋滞はまったらいらぬ車ロケランで破壊するか。まず木ノ本きのもとがそれを言った。」

「ダメですよ。ロケランで破壊したら残骸が残るじゃないですか。」

「何。残骸を残さないで車を吹き飛ばす方法でもあるのか。」

「核爆弾に決まってるじゃないですか。いらぬ車はすべて核爆弾で破壊する。」

「それ、私たちまで被ばくするからやめような。」

「分かった。残骸が残らなきゃいいんだろ。」

「うん。まあ、そうだな。って永島ながしまも核爆弾で破壊するとかつていうこと思いついたのか。」

「いや。核爆弾だとしても俺たちが被ばくするじゃん。バスにクレーンをつけていらぬ車を放り投げる。今は車社会車社会とかつて言ってるけど、これからは鉄道社会になるんだぜ。地球にたまりすぎた車を一扫するにはもってこいのイベントじゃないか。」

「それ余計時間かかります。世界の車一掃するなら、全部の車の床下にプラスチック爆弾ディーエヌディーかTNTを下にくっつけて、ある段階で爆破する。こうすればエンジン死ぬ。燃料タンク死ぬ。基盤死ぬの3弾攻撃が可能になる。」

車好きの人ごめんなさい。

「それやったら全員鉄道利用に切り替わるな。」

「鉄道利用に切り替わってもどうせ新幹線しんかんせん利用でしょ。」

「なんか不満なのか。朝風あさかせ。」

「不満に決まっています。そんなことしてもどうせ早い乗り物にしか流れないんですから。もっと旅を楽しむとかつていうこと考えない

んですかねえ。だから現代人は視野が狭いんですよ。この年で言うのもなんですけど、僕は昔を見直す必要があると思いますね。」
（この年って。まだこいつ12だぞ。言うことはすでにおっさん化してる。）

「さつき視野狭いって言いましたけど、僕本当に現代人は視野狭いと思うんですよ。なんでそんなに早くいききたいって思うことだってありますから。」

「早くいって何が楽しいってことだな。」

「そうです。今は楽しいなんてどうでもいいっていう人がたくさんいるから新幹線しんかんせんがもうかって、それに並行してひっそりと生きている路線がどんどんさびしくなっていく。」

「でも、その対策は見つからないってことだよなあ。」

「そうなんですよねえ。どこどうやったらまがった心が折れるのか。その答えが見つからない。」

「そんな話どうでもいい。さつさと3日目上げちまおうぜ。」
そのあと話し合って3日目の計画を立てた。結果は車両撮影やうりょうたつえいの王道となった。

部活終了後。

（はあ。今日はすっかり遅くなっちゃったなあ。結局2日目の私の案はボツ。他にどんな計画立てるっていうのよ。はあ。）

心の中で溜息したかしないかの時。誰かにぶつかった。思いっきり頭と頭が衝突した。

「痛っ。」

思わず声が出る。おでこをこすりながら、

「ごめんなさ……。」

目を開けてみると、どこかで見たことのある顔だった。

「坂口さん。」

相手も目を開けると、

「木ノ本さん。」

お互いの名前を呼びあった。

27列車 立案（後書き）

今回は本当に謝罪するレだと思えます。

と言っておきながら、主人公たちがあんなことを言っているレのほうはなんか楽しい気がします。

話は変わりますが、このレの前までの文字数を原稿用紙の4000字で割ってみました。その結果原稿用紙に空白なく文字を埋めても338枚相当になることが分かりました。いつの間に関分ってこんな
に書いたんだろう・・・。

28列車 進路の密勅

頭をぶつけた彼女は坂口さかくちだった。先日行われた文化祭でもう顔は知っているが、こうして会うのは初めてだ。

「ごめんね。ちゃんと前見て歩いてなかったから。」
坂口さかくちがまず謝った。

「いや。分かるよ。ここに来たら絶対あっち向いて歩くのがふつうだからなあ。」

ここは遠鉄百貨店と浜松駅はままつ前のMAY ONEの間メイワン。遠鉄百貨店側から見て左手側に遠鉄バス浜松駅はままつ前。右手側には浜松駅はままつの1番線が顔をのぞかせている。坂口さかくちも木ノ本きののもともここを通る時は必ず浜松駅はままつ側を見たまま歩き、何か列車が来るといふアナウンスが聞こえたら足を止めてくるまで待つ。それが4月からの日課になったのだ。

「あつ、やつぱり木ノ本きののもとさんもやるんだ。」

「ここを通るときにタダで通るなんてことできるかよ。」
するとホームからアナウンスが聞こえてきた。しばらくそのアナウンスに耳を傾ける。その声はこういつている。

「間もなく、1番線を、貨物列車が、通過します。黄色い線の内側までお下がりください。」

「貨物かあ。どうせEF210（桃太郎）だろうなあ。」

「そうとも限らないんじゃない。EF66とかEF200が貨物列車引くことだってあるし。それにEF65だってゼロじゃないよね。」

（ほんと。前会った時もそうだったけど、坂口さかくちさん進路間違えたんじゃないのか。このレベルだったらふつうに岸川きしかわに来ていいレベル。今鉄研やつても十分通用する。）

「じゃあ訂正。高い確率でEF210（桃太郎）だ。」

1・2分その場で貨物列車の通過を待つ。すると豊橋側とよはしから甲高いホイッスルの音が聞こえ、前面が青で、パンタグラフの形がV字形

になっている機関車を先頭に貨物列車が通過していった。

「EF210（桃太郎）。」

「違うよ。EF200だよ。今は。パンタグラフがV字形になってたでしょ。EF210のシングルパンタはああいう風になってないよ。」

（パンタグラフだけで機関車の違いが分かるってどういう人……）

いつか自分もそうなるんだと薄々感じながら、いま隣にいる同じ女子鉄を見つめる。

「どうかした。私の顔に何かついてる。」

「いや。そんなことないけど……。ていうか、どっか座って話さない。ずっと立ってるってつらいでしょ。」

「そうだね。どこ行こうか。」

「そこら辺のベンチでいいだろ。」

これは坂口のほうは嫌だったらしい。

「だってお腹すいたもん。それとも、家にこちそうが待ってるの。」

「それない。ちよっと待って家に電話する。」

坂口さかくちに断わって家に電話し、夕食をどっかで食べていくという確約を取り付ける。その後坂口さかくちと一緒に近くのマックスに入った。

テーブルに座ると対岸に座ろうとしている坂口さかくちの姿が目に入る。

そして、文化祭で言った言葉が再生された。

（私……。将来は運転手になりたいと思ってるんだ……。）

その時彼女はこういった。永島ながしまも将来は運転手になることを見据えているのだらう。そして彼女もそうなりたいと思っている。こういう状況なら同じ岸川きしかわに通学するのがぶつうのはず。なのに、なぜ彼女は岸川きしかわではなく宗谷そんやに通学しているのか。そのことがどうしても気になった。

「なあ、何で永島ながしまと同じ岸川きしかわじゃなくて、宗谷そんやに通ってるんだ。」
いつの間にかその口が勝手に開いていた。

「ナガシイがさ、私の夢をかなえるためには宗谷そんやに行くのが一番だ

って言われたから。」

(理由はそれだけ……)

「なんで。坂口さかくちさんが成りたいのは電車の運転手でしょ。今それに一番近いことができるのは岸川きしかわじゃない。なのに。なんで宗谷そうやなんだよ。」

「……。」

坂口さかくちからの回答はなかった。また言葉をつづけようとすると、

「あのさあ。木ノ本きののもとさんならいえることかもしれないけど、将来自分自分が電車の運転手になりたいって言える。」

「……。そ……それは。」

ほんの少し前の自分が思い浮かぶ。少なくともその時の自分にはこんなことは言えなかった。

「私には……ナガシイには口が裂けても言えるようなことじゃない。ただ……。ストレートに言えばいいんだけど、どうしてもこれはなんか言っちゃいけないような感じがする。」

「なんでだよ。」

(永島ながしまが見てたのは坂口さかくちさんの表面表面だけなんだ。だったら早くその気持ちに気付かせてあげなきゃ。永島ながしまは……私が入部を決めたときこういった。何に興味持とうがそんなの関係ない。なら、何に成ろうがそんなの男女関係ない。そもとれる。)

「あんたの彼氏はこういつてたぞ。何に興味持とうがそんなの男女関係ないって。同じことだろ。何に成ろうがそんなの関係ない。何ためらってるわけ。本当になりたいって思ってることなら話すべきだろ。」

「……。」

また坂口さかくちからの回答はない。しばらく黙り続けて、

「本当のことだから、いつか話さなきゃいけないとは思ってる。でも……、ナガシイにはずっと嘘ついてきたことになる。普段そう見えなくてもナガシイ嘘とか嫌いなもの。ずっとナガシイをだまし続けた、私を簡単に認めてくれると思う。」

(あいつならそんなこと気にしないと思うのに。やっぱり古い付き合いだから。それならこういう状況でどういう答えが返ってくるかはわかるはず……。なるほど。返ってくる答えが怖いから言えないんだ。)

「怖いんだな。」

「うん……。」

坂口さかくちの声は一段と小さくなった。

「分かるよ。」

同じような境遇にずっと立たされていた自分を語りたくなる。

「私もずっとそう思ってた。私は成っていいのかって。周りの大人はさあ、みんなその考えに拍車をかける感じでそんなのなるなか、もつと女の子らしいことしなさいとかって言ってくる。どんどん周りに道を崩されて、ついにはそんなのになっちゃいけないって思えてもきた。でも、ちゃんと見方もいるんだってわかった。私の母さんもそうだけど、ちゃんと自分が好きなように導いてくれる人もいる。今の私はあいつのおかげでいるようなもの。」

「……。」

坂口さかくちは黙ったままにいる。木ノ本きのもとがさらに続けようとすると、

「もういいよ。」

坂口さかくちがその先の言葉を遮った。

「ナガシイが言ったこと半分は本当だった。閉じこもってなければ私と同じって。でも私も同じだったんだなあ。ずっとその重圧に押しつぶされて言えなかった。」

萌もえは自分に言い聞かせるように独り言を言った。言い終わると瞬きをして、

「木ノ本きのもとさんのおかげで私も迷いが晴れたと思う。ナガシイの言うことは当たってる。これからはもう迷わない。自分が思ったように進む。」

「……。」

「でも……。思ったように進むって言っても私はどこに進んでい

いのかわかない。浜松はままつにある国際観光こくさいかんこうとか大原おおはらとかに行つてもろくなものにはなれない。だから、木ノ本きのもとさんにナガシイの進路のことを詮索してもらいたいんだよねえ。」

「ずっこけそうになる回答こたへだった。」

「なんで。すぐに永島ながしまに話すとかじゃないの。」

「今話して何がどう変わるのよ。私がただその進路に行きたいって言つても変わるのは3年後。だったらそこまでにやること、知つておきたいことがあるの。」

（確かに。坂口さかぐちさんには鉄道関連の進路でどんなものがあるかなんてわからない。そのために永島ながしまの詮索……）

「調べてほしいのはナガシイの進路のこと。進路がわかれば後は私
が何とかする。もちろん、その時に言わなくちゃいけないことも話
す。それに、もしそれまでの間に話すきっかけができればその時
い
う。」

「でも永島ながしまの進路がわかつて、行きたいって思つてる学校がいく
つもあつたらどうするの。」

「そこは、大丈夫。ナガシイは行く学校は必ず一つだけに絞る。そ
こ以外行く気ないから。」

これも疑わしい情報だ。でも、永島ながしまが岸川きしかわを単願で受験したとい
うことは……。ならば坂口さかぐちがこういうことも分かる。

「だから、答えが出るのは少なくとも3年生の春。その時までに進
路が決まつてなかつたらその段階でそれは言う。」

「でも、そこまでは永島ながしまには話さないってことだよなあ。」

「それはそうだけど……。でも、進路のことなんて今から考えて
る人なんて私以外いないと思つし。」

（そういう問題じゃなくて……）

「それに、私を本気にしてくれたのは木ノ本きのもとさん。私、今までこん
なに本気でこの進路のことなんて考えたことなかった。でも今は違
う。夢を実現させるためならなんだってする。でも、そこまで行く
工程を知らなかつたら何にもならない。協力してほしいの。」

「……。」

ため息が出た。心のどこかで、押されきった感覚があるからだ。

「分かった。同じ進路を志す仲間として協力する。」

「決まり。じゃあ、メアド交換しよう。」

坂口はポケットから携帯電話を取り出した。形は何かどこかで見た

ことがある。……永島の携帯電話と同じなのだ。

「あれ、同じ携帯。」

「あっ、そうなんだ。ナガシイの場合性能とかそういうので携帯選
ばないからなあ。多分形だけで見ればこれかなあって思ったんだけど、マジで同じとは思わなかった。」

「……。」

(坂口さんには永島の思考回路全部がコピーされてるのか。)

「て、そんなことどうでもいい。」

自分が言いだした言葉に歯止めをかけて、赤外線受信の機能を起動させる。

「ああ、あと。私のことは萌って呼んでいいからね。」

自分も携帯を出そうとしているときにそう言われた。

「木ノ本さんって何て呼ばれたい。部活の中じゃハルナンだったよねえ。でもハルナンは嫌だよねえ……。じゃあ、榛名ちゃんでもいい。」

「……。なんでもいいよ。つうか、いまその話関係ないでしょ。」

この後二人はアドレスを交換し、進路が確定するまで永島には秘密で計画を押し進めていくことを正式に決めたのだ。

翌日。宗谷学園では……、

「うーん。確か今日浜北で入れ替えた編成が1001で、上島で入れ替えたやつが2003で、八幡で入れ替えた編成が1007と1005で、乗ってきた編成が2004と2002。今日は1001と1005と2002が車庫に入って、2003と1007と2004がふつうに走る……。」

今日はなぜか独り言を言っている。それが気になって黒崎が話しか

けた。

「今日はどうしたの。なんかさっきから1001がどこの言ってるけど。」

「えっ。ああ。帰りに乗る電車何かなあって思って。」

（やっぱりそれなんだ。）

「帰るときに乗る電車なんてわかるの。」

「そんなの簡単だよ。たくさん乗ったらどういう運用してるか一発で分かるし。」

（それが一発で分かるって。相当イッテルよなあ。）

「でも、遠江急行だけはわかんないなあ。あれ先頭の右側のところに小さく編成番号が書いてあるだけだから。あれさえわかればどういう運用してるかわかるのに。」

「……。」

話には到底ついていけないと思いその場を離れた。

「15時42分に来るのが2003で、54分に来るのが1007。16時06分に来るのが2004。部活もやってないからそこまで待つのはちよつとなあ。」

「……。」

席がちよつと離れている萌の友達。端岡に今のことを振ってみた。

「ねえ、夏紀。萌どうしちゃったのよ。」

「何。何か変なことでも言ってるの。」

「変なことって言えば、少し変かなあ。さっきから1001がどうのこうなのか一人で喋り捲ってるし。」

「……。」

「ねえ、早くどうにかしたほうが……。」

「いいよ。あのままです。」

端岡から返ってきたのはまずそれだった。

「多分、何かに目覚めたんだと思うなあ。元気がないってちよつと心配してたけど、あれだったらすぐに立ち直るね。」

「……。なんだよそれ。萌が独り言多い時は元気っていう一種の

「バロメーターか。」

「そんな感じかなあ。」

「何に目覚めたんだろうなあ。」

黒崎が端岡に聞いた質問の回答は蘭田から返ってきた。

「きつと電車の運転手だよ。」

「えっ。まさか。あれって男の子が成るもんだろ。ふつう女の子が就くような……。」

「確かに。女の子が就くとしたら新幹線の乗務員とかだろうな。」

「でも、今ならそんな関係ないんじゃない。ていうかそこで差別とかしてたら絶対問題になる。それに私たちに偏見があるかもしれないじゃん。」

「……。そうだな。」

「ああ、もういいや。2003(こいつ)で。」

「……。」

28列車 進路の密勅（後書き）

ちよつと強引過ぎたかなあ・・・。
でも、アマチュアの小説ですし、アマチュアみたいなまわし方って
いうのもアリなんですよねえ・・・。

本編中で結構バカにしていることが多いですが、現実でも同じという
ことは全くありません。

29列車 工程 テスト

その日の放課後。岸川学園では・・・、

「今日は2日目の工程上げちまうぞ。」
僕がみんなをまとめる。

「ところで、みんな何か考えてきた。」

「全然浮かびません。ディーゼルに乗ろうとするとしても。」

「大体形は考えてきたんですけど、自分が納得いくようには。」

「あつ。考えるの忘れてた。」

「まあ、木ノ本の場合無理ないよなあ。昨日考えてきたのがボツになつたわけだし。そんなにポンポン考えが量産できるような人じゃないしね。」

「・・・。」

何か今日は永島と話しづらい。萌があそこまでしたい理由が自分の中では一つしか見つからないからだ。自分のほうははるかに彼女より短いのだが、そう思ったことがあるというのは事実だからだ。しかし、話さなくてはならない。鉄道の話に置いて口数が少ない自分は異常。心配かけまいと思つて口を開いた。

「そんなの誰でも同じだろ。あれ、相当自信あつたんだから・・・。
。そういう永島は何か考えてきたのか。」

「全然。」

(即行否定かよ。)

「でも、昨日佐久間が熊本行つて言つてたじゃん。あれの行先だけパクって行こうかなあと。」

「行こうかなあつて。熊本にですか。」

「パクっててことはずっと各駅ですよねえ。」

「ああ。それで、いちばん最後のほうは木ノ本の案も少し入れた。

で、これで本当に回れるのかわかんねえから、今から時刻表で調べらつてわけ。」

「こら。ちゃんと調べてから来いよ。つつかちゃんと考えてきてるじゃないか。」

「まあまあ。そう怒らずに。じゃあ、醒ヶ井。時刻表貸して。」

「だから。前にある時刻表取ってくればいいじゃん。」

「お前のほうが前の時刻表に近い。それに取りに行くの面倒だし。」

（さすが。金持ち出身の人だなあ。）

「いいよ。私が取ってくる。」

これをやり続けていてもらちが明かない。そう思った木ノ本が時刻表をとってくる。その時刻表を渡されて、

「えーと。鹿児島本線、鹿児島本線。えーと。あつた。」

見つけて開くのをやめたところ、開かれたのは鹿児島本線「上り」のページ。このページは「上り（八代・門司港）その3」となっている。前にページをめくって、鹿児島本線「下り」のページを出す。

「えつと、まず。8時11分発の快速荒尾行きで、荒尾が9時26分。」

小倉方面からきている快速列車は大牟田の一つした。荒尾という駅でその先に時刻の表示がない。これはここ荒尾が終点だという証。当然列車を乗り換える必要がある。荒尾をさした指を右に動かす。右側に行けばいくほど時刻は遅くなる。一本「特急つばめ」を挟んで9時44分。普通列車八代行きがある。これに乗ると途中熊本には10時32分。この先八代まで行こうと思えば八代まで行ける。だが、あえてここでとめることにしよう。

「熊本まで来て10時32分かあ。この先どうするんだよ。」

「熊本って市電があるんだよ。」

「しでん。」

木ノ本にはそれがわからなかった。まだ元の知識量に戻ってない。

「路面電車ですよ。木ノ本さんそんなことも分かんないんですか。」

「空河。後でシバカレたい。」

「嫌です。」

「その話は置いて、それ乗りつくして、帰りはどうしようかなあ。全部乗りつくすって言ってもそんなにかからないよなあ。なら、13時57分発の普通鳥栖行きに乗って……。」
出る言葉がなくなった。終点鳥栖到着は16時05分。長いのだ。
「これ快速運転やつてくれませんかねえ。」
「やつちやくれないだろうな。」
「この間だけでも「つばめ」とか「有明」とか使いましょよ。」
「金かかるからやめよう。よし。そこでこれに乗ってつて、鳥栖が16時05分。これで言つて一番早く行ける列車が快速小倉行き。こいつに乗つていくと博多に16時58分。これに一番早い博多南線は……。」

ページを白い部分の真ん中あたりから前よりの青いページに変える。東海道・山陽新幹線の下を探っていたが、博多南線の表示はどこにも見つからない。散々探して、いま開いているページは「東海道・山陽新幹線上り その7」。仕方がないので、ページを前に送つて青いページよりも前のページを開いた。ここにはいろんな情報が乗っている。それはホテルや臨時列車の時刻など様々。しばらくめくつていくと東京首都圏の拡大された路線図が出てきた。もう1ページめくると北海道がでかどかと載っているページ、次は東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方という風に分かれている。これの九州地方が乗っているページを出して、博多南線をおつた。

(444ページ)
ページ数を記憶して、そのページまでページをめくる。そのページには左上に小ぢんまりと博多南線が載っていた。
「これで一番早い博多南線が17時29分で、博多南着が17時39分。これで返つてくるときは……。19時04分のやつでは方が19時14分。完璧。」
とりあえずこんな感じで頭の中にあつた案はこれでようやく実体化した。

あとはこれをアド先生に提出するだけ、

「はい。分かりました。」

この反応は通ったということと受け取っていいらしい。

「永島君。3日目はどうするつもりですか。」

「えっ。3日目は大阪か新大阪に缶詰めのもりですけど。」

「ナヨロンじゃあるまいしよくやろうとするな。死ぬぞ。やめとけ、やめとけ。」

そういったのはサヤ先輩だ。

「人を鉄道バカみたいに言うなっつうの。」

「そう言っただって何の説得力もないわ。どこからどう見たって鉄道バカじゃないか。」

「……。」

「おいおい。二人ともやめろ。」

アヤケン先輩が仲裁に入った。

「ナヨロンはどこからどう見ても鉄道バカっついうの認めるよ。」

「本人否定してるところであっさりというな。」

「そして、サヤは鉄道好きの天然の実際好きって認めるよ。」

「実際好きってなんだよ。」

「……。」

「まあ、そんな話どうでもいいや。でも、このプランからすると、Red Diesel」とか見ないんだな。」

「レディー」。

この言い方には疑問を持った。まず何を言いたいのかが分からなかった。

「あの、名寄先輩。」

何か心当たりがあるらしく、空河が名寄に話しかけた。

「もしかして「キハ200」のことですか。」

「すっ……すごいなあ。通じるやつがいた……。」

さすがにこのことまでは予想していなかったようだ。面喰っていた。

キハ200というのはJR九州のディーゼルカーである。この車両は働く線区ごとに色分けされており、赤と青と黄の3色がある。

今、ナヨロン先輩の言ったのは赤いキハ200のこと。他の色は「Blue Diesel」「Yellow Diesel」とあだ名をつけているようだった。

6月24日。佐久間の班が原案を出し、これで全部の班の自由行動の計画が出された。これでテスト前の部活は終了。次の部活はテストが終わってからになる。ここまでくれば一時は安心していいそうである。後はただ、その日が来るのを待つだけだと言っていた。

7月上旬。そうそうテストだ。

「なあ、宿毛。ここ教えてくんない。」

数学？の教科書を持って宿毛のところまで行く。

「お前なあ。数学じゃなくて国語勉強しろよ。国語。」

「いいじゃん。国語なんてどうにでもなりそうだし、それにこれわけわかんねえ。」

「分かんないとかって言うっておきながら、理解してる。お前に多いパターンじゃないか。」

「そ・・・それで教えてくれないとでもいうのか。」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・。」

「じゃあ、教えて。」

「はいはい。」

(学年トップが縋り付いてる・・・。)
そう思いながら、宿毛とのやり取りを見た。

1時間後・・・、

「宿毛、今度はこれ教えて。」

「はっ。それ教えるもんかよ。覚えるよ。お前の短期記憶最強なんだから。」

「いいじゃん。なんか問題出して。」

「問題かあ。じゃあ、生殖細胞ができるときの分裂の名称。」

「減数分裂だろ。」

「正解。次。相同染色体どうしが平行に接着するようになった染色

体は。」

「えーと……。二価にか染色体せんしよくたい。」

「正解。問題出すまでもないだろ。」

「いいからもっともっと。分かんないから。」

「ウソじゃん。」

ずっと問題を出し合って7分後。

「あ、覚えらんねえ。」

「ウソつけ。覚えてるだろ。永島ながしま。今回も生物100点取ったら殺すからな。」

「大丈夫。今回は取れないから。」

「嘘くさいんだよ。」

「ハハハ。」

「ハハハじゃねえよ。まったく。」

また1時間後……。同じことを繰り返して今日は終了。次の日も同じだった。そして数日たつと……。、

(ゲツ。)

「おい。俺に縋り付くからこういうことになるんだよ。縋り付かなくやよかつたものを。」

耳元で宿毛すくもが悪魔みたいな声でささやいた。

「結構できてたと思ったらまたこの結果だもんなあ。なんで宿毛すくもが上じゃないんだよ。」

「知るか。俺のほうはあれだけ勉強してきた結果がこれっていうふうに腹が立つ。」

「。。。。。」

「まあいいや。次で抜けばいい。」

「だな。次で抜かれればいい。」

(一番上つてというのがよっほど気に入くないみたいだな。)
その昼。。。。、

「今回も学年トップって宿毛君すくもっていう子なのか。」
木ノ本きののほんがその話題を振った。

「あつ。木ノ本まだ知らなかったんだ。」

木ノ本の対岸に座っている箕島が口を開いた。

「宿毛っていう人が学年トップっていうのは嘘なんだよ。本当の学

年トップは……。」

箕島は視線を永島のほうに向けた。

「それ言うなって。」

「マジ。学年トップってこいつなのか。」

「そつだよ。」

疑問には佐久間が答えた。

（マジかよ。今までずっとバカっていう方面で同類って思ってたのに。そもそもなんでそんなに頭いい人が岸川に来てるわけ。）

「まあ、ほかの高校狙う気もなかったし、行くの面倒くさかったし。

」

「ここは面倒じゃないんだ。」

「うん。ここはね。遊ぶために学校来てるし。」

「そりゃ目的が違うだろ。」

「まあ、いいじゃん。人それぞれ目的が違うっていうのはふつうだ

し。」

（こいつの場合それがふつうって言うてもふつうじゃないように聞こえる。）

その日の放課後。ソフトボール部。

（ダメだ。なんかやる気しない。でも、夏の大会も近いんだし、どうにかついて行かなきゃ。でも……。なんだろうこの気持ち。今までそんなにきつくなかった練習がこんなにきつく感じるのは……。）

この頃木ノ本の表情がともうらやましく思えるのだ。

29列車 工程 テスト（後書き）

ようやくとここまで来ました。

結構現実と違うところはあるは目をつぶりたくなるほどでした
かねえ・・・。

30列車 浜松〜米原

8月8日。ついにその日がやってきた。

(今日から行ってくるのかあ。)

それを思いながら萌にメールを打った。

「今日から、博多に行ってくるよ。」

文面はそれだけにした。

6時21分。浜松駅の改札前に到着する。集合時間は6時45分。

まだたつぷりと時間がある。

「おーす。永島……。」

木ノ本が既にそこにいた。

「木ノ本早いな。」

「だって4時に目が覚めたんだもん。」

「早っ。」

「早って。しょうがないだろ。」

「……。」

「お前ら、早すぎだぞ。」

横から声がした。ナヨロン先輩だ。

「ナヨロン先輩。おはようございます。」

「つつか、永島気付かなかったのか。同じ列車に乗ってたのに。」

「あっ、そうだったんですか。」

「張り切ってるなあ1年生諸君。」

今度は善知鳥先輩の声だ。

「そう言う善知鳥も張り切ってるなあ。」

「だって博多(HKT)いけんだよ。そりゃあワクワクするって。」

「まあ、新幹線ではいけないけどな。」

「ああ、そこだけ嫌だな。」

「……。」

6時40分までの間にサヤ先輩と佐久間以外は全員そろった。

「サヤのやつ何してんだろ。」

「いつものことだろ。サヤって時間通りに来た例ないじゃん。」

アヤケン先輩と善知鳥先輩（うつくし）がまだ来ないサヤ先輩に文句を言っていた。その会話を聞いている傍ら（かたわ）でナヨロン先輩がその姿を探した。

「あつ、来た、来た。おい、サヤこつちだぞ。」

そう呼ぶとサヤ先輩が走ってきた。

「ナヨロン。俺そこまでバカじゃないぞ……。」

集合場所まで来るとそう言っていた。
6時51分。佐久間（さくま）が6分遅刻してきた。だが、これで全員集合する。全員の集合が確認できるとアド先生が全員に「青春（せいしゅん）18切符（きつぷ）を渡した。

「18切符」を渡されるといさんでホームに向かった。よく聞くことだが、「18切符」には年齢制限があるみたいなことを思っている人が多いらしいがそんなことはない。それを補足しよう。ここから7時06分発。普通岐阜行き（ふつぎふ）に乗車する。ホームに上った時間は6時55分。まだその列車は4番線にいない。

「永島（ながしま）。」

ホームに上がると佐久間（さくま）が聞いてきた。

「何。」

何のことだろうと思った。

「列車まだ。」

「……。」

何を言うのかと思えば……。

「まだに決まってるだろ。乗る電車が出るの7時06分だろ。まだ11分あるし。」

醒ヶ井（さめがい）のツツコミが入った。

7時05分。4番線に列車が入線してきた。東京方面（とうきょうほうめん）に顔を向けていると、黄色っぱいヘッドライトの車両がこつちに入ってきた。

「311系だ。」

入って来る列車を知っている僕はただつぶやいたつもりだった。だ

が、そうとう声が大きかったらしい。皆からはどうしたというような顔で見られてしまったが、そんなことは関係ない。

「へえ。311系っていうんだ。211系かと思ったよ。」

これには驚いた。撮り鉄の木ノ本なら分かっていると思っただからだ。

「えっ。木ノ本じゃないんだ。」

「私、こういう奴あんまり知らないんだ。313系は分かるんだけどね。」

と言っていた。

311系が4番線にブレーキ音を立てて止まった。停まって1秒くらい経つとドアが開く。その開いたドアから降車する客を待つて車内に乗り込んだ。車内は半分くらいの混みだった。311系の転換クロスシートはほぼすべて埋まっており、僕達は仕方がなく、ドア付近に固まった。

「4番線ドアが閉まります。ご注意ください。」

「東海道線、下り、普通列車岐阜行きです。ドアが閉まります。ご注意ください。」

ピンポン、ピンポン。発車前のやり取りが聞こえてくる。ドアが閉まると311系はカックンと揺れて浜松駅を発車した。ここから終点博多までは12時間の工程である。

7時38分。まずは豊橋までコマを進めてきた。ここ豊橋では特別快速米原行きに乗り換える。そのために移動をしなければならぬ。そのためにドアの前にスタンバイした。

7時39分。豊橋に到着。311系が入線したホームは7番線。

ここからダッシュで隣の5番線に行く。

ピンポン、ピンポン。ドアが開いた。ドアが開き切るのを見計らって飛び出した。

7番線を見ると始まったばかりのマラソンのように人でいっぱいだった。

(サヤ先輩達は。)

考えながら足を動かす。何秒たっただろうか。ハクタカ先輩の姿を

とらえた。その後ろ姿をおつて階段を駆け上がる。階段も人ではないだ。走つて上るのは少しきついくらいはいるだろうか。ハクタカ先輩の姿を見失わないように走つてその後を追つた。

階段を上るとハクタカ先輩の姿が左に消えた。特別快速の発車するホームは5番線。5番線は7番線の北側にある。僕も階段を上りきると左にかじをきつた。そのころにはハクタカ先輩は5・6番線に通じる階段を降りようとしていた。その階段へ僕も急ぐ。ここの階段はほんの少し空いていた。人のかいぐり、階段を駆け足で降りた。階段の中腹。踊り場まで来ると5番線に停まっている特別快速が姿を現した。その時、ハクタカ先輩がそこに吸い込まれるように入つていった。

5番線に停まっていたのは313系という通勤電車だった。この車両はJR東海の通勤電車その顔と言っても過言でないほどの車両が在籍している。今のつた車両は5000番台という区分で、車両と車両の間に車体間ダンパを装備している。そうそう、さつき降りた311系はこの313系が登場する前の特別快速に充当されていた車両である。そのため、この二つは内装が非常によく似ている。車内に乗り込むと開いている席を急いで探した。もう40%（パーセント）くらいの席が埋まっている。乗り込んだドアから一番近い席に腰を下ろした。

「永島さん。隣いいですか。」

空河に声をかけられた。ずっと僕の後ろをおつていたのだろう。僕は「窓側がいい」と言つて空河に譲つた。

7時49分。313系のドアが閉まり、軽快な音とともに動き出した。列車は車体をよじつて上り線から下り線へと入つて行った。

この時に途中停車駅の案内があつた。

蒲郡、岡崎、安城と停車していく。安城まで来ると立っている客が僕達の前の視界を遮つた。このころになると、何となく席を立ちたい気分になつた。

「んっ、ナガシイどうした。」

「いや、何となくなつていたくなつただけで……。」
「座つとけつて。こつから長いぞ。」

サヤ先輩の言うとおりだ。まだ1時間くらいしかたつていない。
「いえ、サヤ先輩達も座つといた方がいいですよ。」

「いいよ。後輩に言われて座る先輩がどこに……いた。」
サヤ先輩の顔が引きつっていた。見てみるといつの間にか善知鳥先輩が僕の座っていたところに座っていた。

「いいじゃん。立ってるの疲れたんだから。」
「いや、そうじゃないだろ。」

「いえ、いいです。僕は次ので座りますから。」
「永島、そう思つとかないほうがいいぞ。」

僕から見ると左側にいたナヨロン先輩がそう忠告した。

「えつ、なんで。」

「関西の新快速つて結構需要あるみたいだから、座れないかもよ。」

「223系なら座れなくてもいいつて。」

（何、すべては車両。）

「ふうん。永島つて223系好きなんだな。」

「はい。僕が一番好きな車両ですから。」

「じゃあ、一つ聞いていいか。」

「なんですか。」

「223系なら「関空快速」か「新快速」か。どっちがいい。」

「断然223系 - 1000番台です。」

その後ナヨロン先輩とはこんな話になつた。

8時37分。名古屋に到着する。名古屋では客の入れ替えがあり、僕は自分の席に戻つた。善知鳥先輩はというと開いた他の席に移つていった。

木曾川あたりに差し掛かつたころだつただらうか。隣をグレーとオレンジのラインが目立つ車両が隣を通つた。

（「しなの」かなあ。でも、なんでここに……。）
頭の中に考えを巡らせていた。

9時09分。大垣おおがきに到着。ここで後ろにくつついていた313系を切り離して、さらにその先を目指した。この列車が終点米原まいばらに到着したのは9時48分だった。そして、この先にコマを進めるためには2分後に発車する新快速足姫路行きしんかいそくひめじゆに乗車しなければならなかった。

30列車 浜松～米原（後書き）

今回は結構説明文が多くなってますみません。後これまでより作風が固いと思われませんが、読んでくれる人には感謝。

31列車 裏切りと「トワイライト」と死亡

9時48分。米原まいばりに到着。2番線に入線すると反対側3番線にはすでにシルバーの車体かまが構えていた。構えていたといってもドアが開いているわけではなかった。

（発車時刻でもないのに、なんでドアが閉まっているのだろうか。）
と思いながら、313系から降りた。隣に行くと、なるほど納得できた。隣にいる223系に乗り込む人は一樣にドアの横にあるボタンを押して乗車していった。ここでは半自動はんじどうでドア開閉かいへいを行っているらしい。

9時49分。僕の班が全員いることを確認した。

9時50分。ティントウーン、ティントウーン。開いたままだったドアが一斉いっせいに閉まった。ドアが閉まると甲高い息抜きかんだかのような音がした。ブレーキが解除かいじょされる音だ。この音が頭の遠くで聞こえるようになると、床下のモーター音を発し始めた。音階おんかいが少し変わるうとしているころには既に米原のホームを後にしていた。

傍らかたわに「300X」エックス「WIN350」ウイン「STAR21」スターが見えてくるころ、大阪までの途中停車駅ちゆうちゆうていしやえきが告げられた。この案内の途中に新快速は右にかじを切り、新幹線しんかんせんの高架橋をくぐって、次駅彦根つぎえき ひこねへと急いでいた。

「ナヨロン先輩。さっきのこと聞いとけばよかったと思いました。」
足の裏が少し痛かった。

「だから言っただろ。新快速は結構需要があるって。大阪までこのままだっと思っていただけの方がいいぞ。」
ナヨロン先輩にはそう怒られた。

この先、この新快速に揺られること83分。11時13分に大阪おおさか駅えきに滑り込んだ。この列車にはそんなに長い間乗っていたという感覚かんがなかった。むしろ、新快速の方が新幹線しんかんせんよりも速いのではないかと錯覚さつかくしたくらいだった。

ホームに降り立つと衝撃的な事実が目飛び込んできた。

(ウツ・・・ウソだろ・・・)

後ろに連結されていたのは僕の好きな223系。1000番台。

(そんな・・・。1両後ろだったら、こいつに乗っていたのか・・・)

何も言うことができなかった。

11時15分。1000番台の後姿を見送って、全員が集合しているところに行った。

「聞け諸君。12時発の新幹線に乗るからな。みんなここに集合しろよ。」

善知鳥先輩が右手を上げてみんなに教えている。

(新幹線・・・。新快速じゃなくて・・・。)

「それでは、皆さんお昼にしてください。ええ、ここには11時5分ごろに集合してください。」

アド先生の説明を受けて解散した。

「なあ、善知鳥。今お前新快速じゃなくて、新幹線って言ってただろ。」

「まあいいんじゃないか。俺達には間違えられても通じるし、どんなバカでもここから乗る列車は新幹線じゃないってわかるから。」

耳の遠くで聞こえている。

「永島、「トワイライトエクスプレス」見に行かないか。」

誰かにそう話しかけられる。

「永島。」

木ノ本が僕を覗き込んだ。その時になって今話しかけてきたのが木ノ本だと分かった。

「なっ・・・何。」

「何じゃないよ。「トワイライト」見に行かないかってこと。」

「ああ、「トワイライト」かあ。うん、見に行こう。」

僕はすぐに賛成した。

11時30分ごろだっただろうか。大阪駅の10番線に「寝台特

急トワイライトエクスプレス」が入線してきた。編成はEF81-113号機を先頭に10両の24系寝台客車が続く。この列車も寝台特急と呼ばれているため、ブルートレインの仲間である。しかし、その車体はブルーではなく深緑で、ブルートレインと呼ばれた時の面影は車内で寝ることができない以外残っていない。

「永島。これ乗りたいって思わない。」

「ああ……。」

（できれば萌と一緒に……。）

いつか乗りたいと思いつながら、先頭のEF81を携帯に収めた。

「木ノ本達も来てたのか。」

その声が「トワイライトエクスプレス」の方からした。ナヨロン先輩とアヤケン先輩だった。

「はい。」

「トワイライトエクスプレス」。いつか乗りたいよなあ。」

「やっぱり乗るんだったら、一番後ろですか。」

「そうだな。乗るんだたら一番後ろだな。」

一番後ろの車両はスイートルームと言って「トワイライトエクスプレス」に二つしかない部屋の一つがある。

「まあ、その前に名寄は彼女ができるかどうかだけだなあ。」

「うっさい。」

「木ノ本、俺たちは行くのか。」

「あつ、うん。ナヨロン先輩達も早く戻ってきてくださいね。もう集合まで5分くらいしかありませんよ。」

木ノ本がそう言っているのが聞こえた。

4番線に足を運んでいると向こうから走ってくる人影があった。サヤ先輩と善知鳥先輩だった。

「あつ、ナガシィ……トワイライト」今停まってる……。」

「はい、停まっていますよ。」

「そう、ありがと。行くぞ。」

「サヤ待つてよ。」

そんな後姿を見送った。

「サヤ先輩達って何してたんだろ。」

「さあ。お昼でも食べに行こうとして、それで失敗したみたいな感じだよなあ。」

そう話しながら、4番線に通じる階段を上った。

12時00分。大阪を発った。ここからはまた223系新快速にお世話になる。この新快速は播州赤穂行き。途中で乗り換えをしながらでも相生まで行くことができる。

この列車に乗り込んで見ると、座れる席が全くなかった。僕たちはアド先生の誘導で空いているごくわずかな席に座った。僕が席に掛けるときにはドアが閉まり大阪を発車していた。この新快速に乗って30分くらいがたった。兵庫を通過したくらいだっただろうか。ふとした拍子に意識が飛んでしまった。

目が覚めた。今走っているところがどこなのか。それが気になった。外に目を向けてみる。当然のことだが、僕の知っている建物は一つもなかった。次に、車内に目をやった。僕の位置から見て左斜め後ろ。佐久間、諫早、空河、醒ヶ井が固まって座っていた。だが、全員寝てしまっている。

(他の人はどこにいるんだろ。)
と思つて車内を見回す前に次の停車駅が目に入った。

(かつ・・・加古川。)

「ご乗車ありがとうございます。加古川ー、加古川です。・・・」

(イカン。神戸発車してから寝ちゃった。)
そう寝てしまった自分を悔やんだ。

僕の座っている2号車の座席には夏の太陽がギラギラと入ってきている。まだ臉が重い。こういう状況だとまたいつ寝てしまつか分らない。そのため、ドア付近の椅子の背もたれに取り付けてある補助椅子に掛けようかと思つた時、加古川に到着した。

加古川では何人もの客が降りていった。そのうちの一人が荷物を

忘れて取りに来ていたが、取りに来た直後にドアが閉まってしまふという災難に遭っていた。

加古川を発車すると僕は補助椅子の方に移った。

補助椅子を前に引き倒して座る。

「なんじゃこりゃ。」

つい声が出てしまった。この補助椅子には何か空洞の様なものを感じた。座るとそこにクッションがないかのように沈みこんだ。そして、そこには金網の様なものしかないという感覚しか生まれなかった。

13時01分。姫路に到着。ここから新快速は堂々(どうどう)の12両編成から8両編成になる。僕達の乗っている基本編成がそのまま播州赤穂まで行き、おいていかれる付属編成は新快速か普通として大阪方面に折り返していくのであろう。13時06分。新快速播州赤穂行きが姫路を発車した。

途中の相生に着いたのは13時24分だった。降りて見ると何とも小さな駅である。とても新幹線の停車駅とは思えないくらい小さかった。相生のホームに降り立つとまた乗り換える。13時30分発。普通三原行きに身を任せて途中の糸崎まで揺られる。車両は113系だった。

「体質改善車かあ。」

停まっていた113系を見てナヨロン先輩が言っていた。

「ダイエットって。」

「だってこの車両は延命手術を受けてダイエットに成功したんだよ。」

「あのナヨロン先輩。それダイエットじゃなくてリニューアルって言っんじゃないんですか。」

「体質を改善したら、全部ダイエットしたんだよ。」

読者の皆様にとってはこんなことどうでもいいだろう。しかし、僕達にはどうでもいい問題ではない。これから2時間以上普通に揺られるのである。いくら電車好きといっても2時間以上普通に乗って

いるというのは抵抗がある。これが新快速とかだったら話は変わるのだが……。

13時30分。相生を発車する。この列車で前述したとおり2時間以上揺られるのだ。

何分だっただろうか。岡山に着いた。

（まだ岡山かよ。）

心の中でそれを嘆いた。いくらなんでも長過ぎる。これなら、サヤ先輩が言っていた博多まで行って、病院に行くという意味が分かった気がした。

さらに1時間がたった。今いる駅は大門。まだ1時間以上乗車していなければならぬ。ふと周りを見回してみた。ほとんどの人が眠りに就いていた。

（できることなら、俺も眠りたい……。）

そこから41分が経過した。ようやっと乗り換え駅、糸崎に到着する。

（やっとここまで来たのかあ。）

降りると同時にため息をついた。ここからは少しは楽になるのだろうか。16時14分発の「快速シティーライナー」に期待することにした。

だが、その期待もすぐに打ち砕かれてしまった。「快速シティーライナー」に充当されている車両はさつきまで乗っていた113系。好きでも嫌いでもないが、また同じ車両というものには抵抗がある。

16時14分。「快速シティーライナー」糸崎発車。

そこから何分経っただろうか。瀬野まで来た。ふと外に目をやると見たことのないオレンジ色の電気機関車が止まっていた。

「なんだ。これ。」

誰かに問いかけたわけではないが、ナヨロン先輩が反応してくれた。「EF67。瀬野峠用の後押し機関車だよ。「セノ八チ」って聞いたことないか。それがこのことだよ。」

「「セノ八チ」。」

首をかしげた。

「ああ、知らないんだ。永島なら知ってると思ったんだけどなあ。そうか。永島でも知らないことがあるのか。」

自分に言い聞かせるように言った。

「山陽本線を敷設した山陽鉄道が、ここだけは経済性を優先しましようつて作つちやつたんだよ。そしたら、22.6%（パーミル）の急勾配になつちやつてね。この勾配は山陽本線を走ってる貨物列車は上ることができない。だからああいうのが走るのを手伝つてくれてるってこと。」

そう教えてくれた。

この列車が途中の広島に着いたのは17時28分であった。

31列車 裏切りと「トワイライト」と死亡(後書き)

まだまだ。この先は飛ばせたからいいですけど。。。。

32列車 ようやっと

広島ひろしまのホームに降り立つた。全員の顔は疲れ果てていた。と言ってもすぐく元気な人もいた。

「ようやっと新幹線しんかんせんに乗れる。」

善知鳥ぜんじう先輩が体を伸ばした。

「やっと「レールスター」のお出ましかあ。」

(100系も見れる。)

「はい、皆さんいますね。それでは乗ります。私の後に付いてきてください。」

アド先生の誘導しんかんせんで新幹線の改札を通り抜ける。ここからは本当に楽ができる。そして、僕が今まで乗ったことのなかった山陽新幹線さんようしんかんせん広島しま博多間はかたを乗車するのコンプリートも達成できるのだ。

17時35分。新幹線しんかんせんのホームに立った。この構内こうないに響き渡る音。それらが新幹線しんかんせんというにおいを僕に運んできている。そのにおいを堪能たんのうしていると誰かだれが僕の背中に手を当てた。

「永島ながしま。17時49分発の「こだま」があるぞ。もしかしたら100系じゃない。4両編成へんせいつて出てるし。」

(「こだま759号」・・・。間違まちがいない・・・。100系だ。)

4両という表示が僕の心を支配した。

17時48分。「こだま759号」が12番線に入線してきた。

黄色きせきつぼく光る鋭すどく、キリットした細い目。100系。この車両しやうりやうが4両や6両となってしまっている編成があるというのは未だいまに信じられない。100系は16両で白く美しい車体に2階建てが連結しんかんせんされた新幹線車両である。僕としてはそっちの方が好きである。もしかしたら、どんなものよりも好きなかもしれない。

「100系じゃん。」

佐久間さくまが隣でそう言っていた。

興味きょうみがないわけではないが、僕の前に姿を現した100系は何と

なく好きになれなかった。

「ああ……。」

鈍い反応しかできなかった。

17時49分。「こだま759号」博多行き発車。100系が発車する後姿を携帯に捉える事が出来た。その後ろ姿は僕の思っているカツコよさよりも、悲しさと寂しさが入り混じった顔をしていると思った。

(なんだ。今は……。)

この時、僕は100系が何か訴えているように聞こえて仕方がなかった。

17時54分。さつき100系が発車した12番線に「ひかりレールスター573号」博多行きが入線してきた。8両編成の700系新幹線は、JR西日本独自の設備がある。その一つが備えられている4号車が僕達の乗る車両だ。

17時55分。「レールスター」は何の揺れもなく発車した。広島を出るとすぐさま外に目を向けた。さつき感じたことが何度も、何度も頭の中に思い出された。好きなやつほど伝わってくるこの気持ちは何なんだろうか。それだけが頭の中に広がり、何も考えられなくなった。

19時00分ごろ。「間もなく終点博多です。」とアナウンスが入った。これで今日は終了ホテルに行つて、あとは休むだけである。そのはずである。

19時06分。博多に到着。ようやくと来たのである。

「皆さん。これからホテルの方向に向かいますが、バスがあるそうです。乗りたい人は乗ってください。」
アド先生がそう教えてくれた。

「よし、3年生は全員乗るぞ。2年生と1年生諸君は歩いてこい。」

「おい。少しは後輩に譲るとかしてやれよ。」

「いいだろ。あたしは早く部屋に入って寝たいんだよ。」

善知鳥先輩の振る舞いははっきり嫌ではあるが、1年生にはとても反抗できそうもない。

「頼んだぞ。ハクタカ、アヤノン。しっかり連れてこいよ。道迷ったりするなよな。」

といてバスに乗る人はそっちへそれていった。それていったといつても行ったのはアド先生とサヤ先輩と善知鳥先輩だけなのだが。

「はあ、善知鳥先輩もあじゃなきやいいのになあ。」

「後で絢乃がそう言ってたって善知鳥先輩に言いつけていいか。」
「絶対言つなよ。」

「まあ、言いたい気持ちは分からんわけじゃないな。あの性格がなければハイテンションでも問題ないんだけどなあ。」

「おい。それより俺達もホテルに行くぞ。」

「ああ、待って……。つうか、ホテルどこにあるか分かってんの。」
「

会話をずっと聞き流していたが、

「えっ。」

「ナヨロン分かってる。」

「分かってると思う。」

「だよなあ。誰か分かってる人いないの。」

「アケ先輩大丈夫ですよ。どっか歩いてればたどり着きますって。」

「いやそうは言っても……。」

「いいんじゃないんですか。迷いながら、歩いて行くのも。」

「いや、それ問題でしょ。なんで、そういうこと考えてないんですか。それも全員。」

「ナヨロン先輩。地図見ればいいじゃないですか。」

「ああ、地図は貰った次の日にゴミと間違えて捨てちゃった。」

「おい、何捨ててんの。」

「なあ、ハクタカ。あたしのバッグに地図入ってると思うから出して。」

「はっ。自分で出せよ。」

「えつ。いいじゃん。バッグある方向にいたんだから。」
「なんじゃそりゃ。」

絢乃先輩が背負っているバッグのチャックを開けて中を探す。

「……。あつ、あつたぞ。」

「ありがとう、ハクタカ。」

ナヨロン先輩のほうに歩いて行って、

「ナヨ先輩。これ見てくださいよ。」

「地図あったんだ……。アヤケン、見て。」

「おい。ふつう地図読めるだろ。」

「うっさい。」

僕と木ノ本は少し会話に入った。そして箕島たちはというと啞然とした顔でこのやり取りを聞いていた。

歩き出すと晩御飯の話になった。

「永島、木ノ本。一緒に博多ラーメン食べに行こうぜ。」

佐久間に誘われた。

「博多ラーメンねえ……。」

「別に、そんなの食べに行かなくてもいいじゃん。」

「はっ。博多まで来てラーメン食べてかないってどうよ。」

「夕ごはんなんでコンビニで十分だよ。それに、博多ラーメンなんて浜松でも食べれるだろ。本場がどうとは思わないな。」

「そう言わずに、食っとうぜ。」

「私はいいよ。そこにローソンあったからそれでいいし。」

「あつそ。永島は。」

「夕飯食う気しないからいいよ。」

「ああ、そうかい。なんで二人とも食い物にルーズなんだよ。」

博多の街を歩いて何分くらい経っただろう。ようやくと宿泊するホテルに到着した。もらったカードキーの示す部屋にすぐに入った。夕飯を食べに佐久間達が出ていったことと僕の部屋に遊びに来たこと以外は平和にベットの上で休んでいた。

21時39分。だんだん瞼が重くなってきた。そして、いつのま

にか寝てしまった。

32列車 ようやっと(後書き)

今回は短かった・・・。

本当ならそのご当地グルメを食べたいと思うのがふつうですが、
そういうことに興味ない人もいますと思いました。

こういうことと思うのは・・・だけかなあ。

あと皆さんに報告します。累計アクセス回数1000突破いたしました。
ユニークのほうは201・・・。やっぱりネタがネタだった
かなあ・・・。

33列車 聞けない

ふと目が覚めた。体を起こし、猫のように体を伸ばす。

(今何時だ。)

と思つて携帯の端末を開いた。

(5時48分かあ。)

もう少しで6時だ。もう寝てしまうのは二度寝の原因になると思つて、少しの間部屋の中でゆっくりした。その間にメールが一通来た。確認してみると、木ノ本からだつた。それともう一通来ていることに気付いた。誰なのかと思つて確認してみる。

(んっ。)

迷惑メールとかいう奴でもチェーンメールとかいう奴でもなかった。だが、すぐに閉じてしまった。

6時55分。そろそろ朝御飯を食べに行こうと思つて下の階に行つた。今日は前に考えた自由行動を実行する日である。

「オッハー。ナガシイ。」

途中エレベーターで下に行こうとしている時善知鳥先輩とばつたり会つた。

「おはようございます。」

「そんな堅苦しくなるなって。」
肩を叩いて気持ちをほぐそうとする。

「そいえば、ナガシイ達どこに行くんだっけ。」

「熊本です。」

「そっか。熊本かあ。何も無いこと祈つといた方がいいよ。」
僕にはこういつた意味が分からなかった。

7時41分。僕達の班はいつでも出発できる状態になった。といっても乗る列車まではまだ31分ある。その間ホテルのロビーで暇をつぶし、7時50分ごろ。ホテルを発つた。

5分くらい歩いて、博多駅に来た。在来線の改札口を通り、僕達が

のる快速荒尾行きを待った。8時07分。快速荒尾行きが博多駅の5番線に入線した。すぐに車内に乗り込み自分達の席を確保した。席を確保すると、みんなが入線した車両を取りに行った。この快速に充当されている車両は813系。JR九州のベシック通勤電車だ。

「赤い子」だったな。」

木ノ本が車両を取りに行ってきた僕達に向かってそういった。

「赤い子」。

「だってそうだろ。前面赤いじゃん。」

「ああ、納得。」

納得していいのかどうかは分からない。でも、一つ言えることがある。僕と木ノ本が考えていたことはさほど変わらないということだ。

その後、この列車が発車する8時11分まで「特急ソニック」、
「特急かもめ」に充当されている885系、813系と並ぶ通勤電車811系などを見た。ひっきりなしに電車が来るといのは、博多という九州の中核だからだろう。そう思った。

この快速列車は南福岡まで各駅に停まる。そして、南福岡を過ぎると快速運転になり、鹿児島本線の主要駅にしか停車しなくなる。

雑談をしている間にも、813系は南福岡までコマを進めてきていた。ここ南福岡ではちょっと長い間停車していた。昔はこんなことも気にも留めなかったのに。今となつてはこの小さな停車にも意味があるというのを理解できる。

「あつ、「つばめ」だ。」

ずっと外を眺めていた朝風がつぶやいた。僕もその方向へ目線移動す。すると視界にシルバーの車体が特徴の787系が通過していくのが見えた。

「佐久間、あれに乗ってつたのかなあ。」

ふとそんなことを思った。

その後は「つばめ」が通って行った方向とは逆の方向に目を向けていた。ずっと景色を眺めていたのである。今でも流れていく景色

を見ることは楽しいと思っっている。しかし、なぜこれが楽しいのかと聞かれると答えられなくなる。たぶん、理由にできない楽しさがあるのだろう。南福岡の次。春日を通過すると春日の前に広がる広場が目に入ってきた。たくさんの人が何かの準備をしていた。たぶん、お祭りか何かだろう。準備中の屋台と上に架けられた提灯を見て直感した。

春日を通り過ぎると見るものが何も無いわけではないが、ボーッとしている以外することがなくなった。ゲームとかはしないの思っているだろう。ゲームなんて電車に乗ってするものではない。僕は電車に乗ってすることは景色を楽しむことだけではないと思っっている。暇ではないかと思っっているかもしれないが、案外暇ではない。

9時16分。快速列車に揺られるのはここまでである。ここは終点の荒尾ではなく一つ手前の大牟田。ここで列車を乗り換え、目的地の熊本まで行く。

「まずはここまで来たな。」
大牟田のホームに降り立って体を伸ばす。

「なんで、荒尾まで行かないんですか。」

空河はこの途中下車について疑問に思っっているようだった。

「荒尾まで行っても、ここで降りても同じだからさ。」
僕はそう説明した。

「永島さん。次の「特急つばめ5号」がやってきますよ。」
電光掲示板に目をやっていた朝風が教えてくれた。

「おお、787系が見れるじゃん。写真撮ってこよう。」
「まあ、熊本に行つてからでも見れるんだけど・・・。」

見れるんだけど。いずれ見る列車である。いつ見ようが関係ないか。そうは思っただが携帯は撮りださなかった。もつとしっかりと収めるためである。

9時27分。1番線に「特急つばめ5号」西鹿児島行きが入線してきた。綺麗なシルバーの車体。これが9両連なっている。到着するとホームにアナウンスが流れる。

「大牟田ー、大牟田です。」

「クドイー。」

空河がこのアナウンスを聞いてこういった。さっきも聞いたのであるが、何か言い方がクドイ。

「ああ、確かにクドイなあ。」

「まあ、お客さんに分かりやすいようにしてあるだけだからしょうがないだろ。」

「いや、それは分かるんだけどね……。」

9時27分。「特急つばめ5号」西鹿兒島行き発車。787系の後姿を見送つて、僕はまた自分達がのる列車を待った。

何分か経つと1番線に僕達の乗る9時40分発。普通熊本行きが入線した。

「今度はどんな子かなあ。」

入線してくる車両を凝視する。

「うーん……。赤いようで赤くない子」かなあ。」

「どういう奴だよ。」

「だってそうじゃない。」

「確かにそうだけどさあ。」

「赤いようで赤くない子」。

中学生の方にはすぐにこの呼び方が浸透した。

今「赤いようで赤くない子」と僕が命名した車両は815系。8

13系や811系と同じ通勤電車ではあるが、編成は3両、4両編成ではなく2両編成。僕は地元を走っている遠州鉄道、通称「赤電」のでっかいバージョンを見ている気になった。

ドアが開き、車内に入った。815系の車内はこれまで乗ってきた813系とは違い横1列に座席が並んでいた。こういうシート配置のことを「ロングシート」と呼ぶ。いくら鉄道に興味がないとはいえこれくらいのは覚えてほしいものである。

「変わったロングシートだな。」

木ノ本が「ロングシート」に目をやった。

「確かに変わってるな。」

そういうのはこれが今までに見たことのある「ロングシート」ではないからだ。僕達が思っている「ロングシート」はベンチが並んでいるようになっていてるもの。しかし815系の「ロングシート」は椅子が横1列に礼儀正しく並んでいる状態だった。「こんなことを考えているとすぐに席が埋まってしまふ。」と思い腰をかけた。

9時40分。普通熊本行きが大牟田を発車した。どのくらい席が埋まるか分からなかったが発車するとその答えが出た。席は埋まるどころか空いているのが目立つくらいだった。

「次は、荒尾ー、荒尾。」

大牟田を発車するとお約束のアナウンスである。

「荒尾では、ホーム側の全てのドアが開きます。」

「何今の……。」

「ふつう言うか。あんなこと。」

浜松の方では聞いたことのないアナウンスを聞いた。

荒尾駅に近づいた。

「間もなく、荒尾ー、荒尾です。荒尾ではホーム側の全てのドアが開きます。」

「さっきのあれといい、これもクドイですねえ。」

「全部開くんだったら、言わなくていいじゃん。開かない駅だけ言えればいいのに。」

「これって、現実にそういう駅があるってことだよなあ。」

「じゃあ、乗ってる間に全部開かない駅があるっていうの。」

「たぶんあるんじゃない。」

「それだったら面白いなあ。」

ドアが開かない駅がある。そのことだけに期待した。

「次は南荒尾ー、南荒尾。南荒尾ではホーム側の全てのドアが開きます。」

次は違った。

「次は長洲ー、長洲。長洲ではホーム側の全てのドアが開きます。」

次も違った。

その後も全部開かない駅があるかと思っていたが、「一番前のドアのみ開きます。」の様なアナウンスは僕の記憶では来なかった。

10時15分ごろ。

「間もなく植木ー、植木。植木ではホーム側の全てのドアが開きます。」

「いい加減にしてくれませんかねこのアナウンス。」

「何言っても無駄だろうなあ。この列車ワンマンだからアナウンスは全部コンピューターがやってる。コンピューターぶっ壊さないと黙らないね。」

「もういいでしょう。」

「うん、どうでもいいよ。つつか、「ホーム側の全てのドアが開きます」って完全にウケ狙ってるだろ。」

（いや、ウケ狙ってるはないと思うけど・・・。）

「1枚目と3枚目のドアが閉まります。ご注意ください。」

「んっ。どうかしたのかなあ。」

「何か通過する（おいぬく）んじゃないんですか。ほら、本線の出発信号機が青になってますし。」

朝風が本線の信号を指した。

数分経つとさつき大牟田で見た787系が放たれた矢のごとく通過していった。僕達のいる進行方向右側の席からは西鹿見島へと急いで行く787系が見えた。その姿を見えなくなるまで僕達はその姿をおった。

787系が通過してから1分くらいがたった。僕達の815系も植木を発車する。ここ植木を出ると終点熊本までは4駅である。

さつきと同じくすることがないのは変わらない。僕はボーッと外を見ていた。

（萌もつれてきたかったなあ・・・。）

「えっ。」

なぜか木ノ本が反応した。心の声ではなく、本当の声になっていた

ようだ。

「なっ・・・何か言ってた。」

（顔が赤い・・・。）

「別に、何も言ってたなかったけど。」

「そっ・・・そう。ならいいや・・・。」

（知ってるよ・・・。私よりも好きな人いるって・・・。でも、す

ごいもんだよなあ。学校離れちゃったらふつつ終わるって。永島ながしまと

坂口さかくちさんの間は一言じゃ語れない恋だよなあ・・・。そう言えば、

坂口さかくちさんから永島ながしまの進路聞きだしてって言われてるけど、まだ考え

てないよなあ。いや、考えてるはずがないかあ・・・。）

10時32分。熊本くまもとに到着とちやくした。

33列車 聞けない（後書き）

エクセルの書いてある設定表を見てみたら、アヤケン先輩と永島は眼鏡をかけていました。文中にその描写がなくてすみません。

なお、今回みたいに場所が変わるところということもあるんだということはよくある話だと思います。この話みたいになら「すべてのドアが開かない時にそう言えよ。」とも言いたくなることがたまにありませんか……。

34列車 熊本市電

10時32分。熊本くまもとに到着とちやくした。

「さて、こつからどうしようか。」

「とりあえず、市電しでんに乗ってこないか。だいたいここにきて乗る目的めくがそれしかないだろ。」

「そうだったな。んじゃあ行こうか。」

皆みなを促うながして改札口かいはくぐちを抜ぬけた。

「市電しでんに乗るのはいいですけど、どこまで行くんですか。」

「とりあえず、終点しゆてんまでだろ。」

「そうだな。」

「全区間ぜんくわん乗りつくしはできないにしても、一番長い系統けいとう乗りつくししようか。」

熊本くまもとの駅舎えきやを出て最初に飛び込んでくる路面電車でんていの電停でんていに向かう。

「あっ、あの車両しやうりやうは。」

空河そらかわが入ってきた白い車両しやうりやうを指差さしした。

「超低床車ちうていそう（LRT）かあ。」

「何系なにけいとかそういうのは分からないけど、ああいうのもあったなあ。」

「話わしながら、電停でんていまで足を運はんだ。」

電停でんていまで行くと、最初さいしゆに来た健軍町けんぐんまち行きゆきの路面電車でんていに乗り込んだ。車内くるまうちに乗り込むとほぼ一番乗り状態じょうたいだった。僕ぼくたちは誰も座まっていない運転席うんてんせきの後ろうしろの席せきを占拠せんきよした。

「超低床車ちうていそう（LRT）に乗れて感激かんじきです。」

「これだけで感激かんじきしてもどうだろうか。」

「そんなことより、財布さいふの中身確認ちゆうしんかんにんしたか。」

「なんですか。財布さいふならちゃんと持ってますし、パクられてもい
ませんけど……。」

「そうじゃなくて、150円ひゃくごじゅうごしつかりあるかってことよ。もし50

0円とかで運賃出したらお釣りが返ってこないぞ。」
「あつ、そつか。」

皆財布の中身を調べた。その後両替をしたのは僕と空河だけであった。木ノ本と朝風はちゃんと150円あったらしい。

路面電車で揺られて42分。熊本市電の終点健軍町に到着した。

「ちょうどいい時間だし、お昼にしない。」

「そうだな、どつかマックスでも探して食べちゃうか。」

「いや、マックスはどうだろうか。せめてでもコンビニだろ。」

「うーん、そうか。空河、朝風。どつか行きたい所ある。」

「僕は昼が食べられればどこでも。」

「僕もどこでもいいです。」

(これだ……)

「うーん、仕方がないからそこらへんでコンビニでも探すか。」

「探すつて言ってもどうするんですか。ぱつと見、このあたりにはコンビニとかもないと思いますけど。」

「あつちのアーケードの方とかないのかなあ。」

「ないと思うけどなあ。パチンコ店ならあるけど……。」

「じゃあ、どうすんのよ。」

「さつきマックスがありましたけど。」

「ああ、じゃあそこにするか。」

というわけで健軍町の一つ手前健軍交番前まで歩いて行くことにした。しかし、そこにたどり着いてみると、

「なあ、永島。こんなに人たくさんいて、入りたいつて思うか。」

「うん、確かに思わないな。」

「ここまで並んで物を食べるっていう人の気がしれませぬね。」

「ここまで並んでると、食べる気を失せますねえ。」

「うーん、じゃあどうしようか……。」

「まず、ここから出よう。それから考えればいいよ。」

なのでここにいたのは10分くらいだったかもしれない。

「そう言えば、交通局前とかつていうところに車庫があったら。あ

れ見ていかないか。」

「ああ、いいね。空河、朝風。どう思う。」

「別にいいですよ。」

「はい。」

全員一致。交通局前で途中下車することにした。

「そういや、乗務員の交代もここでやってたよなあ。」

「ああ、そうだったな。」

そういう雑談をしながら、交通局前まで戻ってきた。

「案外暇なところだな。」

「何言ってるんですか。木ノ本さんの提案でしょ。」

「いや、そうだけどさ……。」

「でも、熊本市電っていっぱい車両あるんだな。一枚くらい写真撮って行くか。」

遠くに留置されている熊本市電の車両を携帯に収め、すぐに交通局前に戻った。

「で、こつからどうするつもり。」

「そうだな……。」

「もういいですよ。熊本駅戻っちゃいます。」

「熊本城とか行かないのか。」

「楽しめる人は楽しめますけど、僕たちじゃ楽しめませんよ。」

「まあ、それで集まったようなもんだしなあ。」

「んじゃ、熊本に戻って昼飯でいいか。」

「それでいいよ。」

「確か構内にコンビニありましたよね。」

「ああ、あったね。」

「それで決まりでいいか。」

結局健軍町までいった意味は熊本市電に乗りたかっただけでしかなかった。

熊本に戻ってきて、お昼を食べて12時47分。ホームに入り、車両撮影を行うことにした。たぶん僕たちなら乗りきることができ

るだろう。

「永島ながしま、13時07分に「特急くまがわ」って言うのが来るけど、これ知ってる。」

「くまがわ」。知らないけど。」

「あつ、それキハ185で運転されてる特急です。」

「空河そらがわ詳しいなあ。」

「この位常識ですよ。木ノ本きののほんさん。」

「あれ、キハ185ってJR四国の車両じゃなかったっけ。」

「確かに四国の車両です。でも九州に走っているキハ185は九州が買ったやつなんです。」

「へえ。そうなのか。」

「空河そらがわ、本当に詳しいな。」

「これでも知らない方ですよ。僕が一番知っているのは北海道ほっかいどうのデイズルカーですから。」

「そこまで知ってれば困らないって。」

13時07分。「特急くまがわ」を撮影。その後は4・5番線に行つて、僕達のがる列車をゆっくりと待った。

「おい、隣に「つばめ」が止まってるぞ。」

「あつ、本当ほんとだ。」

「撮りに行かないのか。」

「もう、間に合わねえよ。」

「ああ……。それもそうだな。」

それから何分経つただろうか。

「永島ながしまさん。あすこに787系いますけど。」

「どうせ、「有明」か「つばめ」だろ。」

「いや、そうじゃなくて……。」

僕の肩かたを叩たたいて、こっちに来てという動作をする。

「ホームに入らずに止まったままなんです。」

34列車 熊本市電（後書き）

研修の2日目。これって作ってくと研修じゃなくて完全な旅行になるんですよ。まあ、実際がそうだったというところもありますから・・・。

35列車 トラブル

それから何分経っただろうか。

「永島ながしまさん。あすこに787系いますけど。」

「どうせ、「有明」か「つばめ」だろ。」

「いや、そうじゃなくて……。」

僕の肩かたを叩たたいて、こっちに来てという動作をする。

「ホームに入らずに止まったままなんです。」

「ホントだ。何やってんだろ。」

「ちよつと。大事な放送が聞きとれないだろ。静かにして。」

木ノ本きののもとは耳に手を当て、構内放送に聞き耳を立てた。しばらくすると、耳にあてた手を下した。

「なんて言ってたんですか。」

「よくは聞きとれなかったけど、人身じんしんじ事故じこだって。」

満面まんめんの笑えみを浮かべていった。

「へえ、人身事故かあ。」

「なんだ。人身事故か。」

「人身事故ねえ。」

しばらく沈黙ちんもくがあった。

「……はっ。人身事故。」

「事故つてやばくないですか。」

「列車遅れるんじゃないんですか。」

「いや、電光掲示板見てみたけど遅れてないよ。」

「そんなになつて何分くらい。」

「7分つて書いてあるけど。」

「上りが7分つてことは事故があったのは下り線ですね。」

「なーんだ。下りなら、関係ないじゃん。」

事故が下り線であったということを知ると全員安心した。本当は安心してはいけないのかもしれないが……。

結局僕達がのる列車は10分くらい遅れて熊本くまもとに入線してきた。

「行きは「赤いようで赤くない子」。帰りは「黒い子」かあ。」
入線してきた817系に部活内でのあだ名をつけた。

「今度は「赤電」が黒になったバージョンかあ。」

「永島さん。早く来てくださいよ。席とっておきましたから。」

空河の呼び掛けに応じて、僕達も817系に乗り込んだ。

そのころ名寄なよひ、箕島班みしまはというと、

「名寄先輩どうするんですか。」

「ああ、ハマっちゃんたな。」

「ハマっちゃんたじゃなくて……。」

「なんでこう俺たちの行くところは何かあるんだ。」

名寄の口調はいつになく荒かった。

(そんな文句言ってる場合ですか……。)

綾瀬あやせ、醒ヶ井班さめがいはというと、

「アヤケン先輩どうするんですか。」

「まあ落ち着けて。」

「おちついてられますか。事故にハマったうえ、列車遅れてるんで

すよ。」

「そんなことより、この景色いいと思わないか。これをモジュール
にしたらどうだ。」

アヤケン先輩は窓の外を流れる景色を見て手を右から左に動かした。

「アヤケン先輩。」

「何。」

「僕の話まともに聞く気ないでしょ。」

「ないよ。」

(こら。)

鷹倉たかくら、楠班くすのきは、

「なんであたし達の行くところはこうやって何かあるのかなあ。」

「嫌われてるんじゃないの。」

「そうかもしれないけどさあ。」

「そんなことより寝とけて。まだ先長いんだぞ。」

「ハクタカに寝とけて言われても、安心できなよ。」

「なんでだよ。線路のポイントが変な方向向いてない限り、死にはしないんだから安心して寝ろって。夜行バスの中で寝れなくても、知らないからな。」

「いや……。そうじゃなくてね……。つうか、それハクタカの方だろ。」

北斎院、善知鳥班はというと、

「サヤ、熊本の方で人身事故あったんだって。」

「はっ、ザマア。」

「いや、帰りの心配……。」

「いいよ。いざとなったら新幹線使っから。20分でワープできるぜ。」

(あんだねえ。)

佐久間、諫早班はというと、

「おい、あすこにN7(エ又なな)がいるぞ。」

「それ、浜松でも見れるじゃないですか。」

「あつ、それもそうだな。」

会話を聞いていて分かるだろう。一番平和なのは佐久間の班である。

13時57分発の普通鳥栖行きに乗り込んで植木までやってきた。

「うわ。下り最悪だな。」

「「つばめ」停まつてし。」

「佐久間さんも熊本きてますよねえ。」

「ああ、事故のことかあ。「つばめ」が遅れてるもんなあ。」

「大丈夫ですかねえ。」

「大丈夫だろ。心配しなくていいよ。」

その後はこの「817系」に揺られて鳥栖駅まで向かった。

その間に木ノ本達は寝入ってしまった。僕はというととりあえずこの班の班長として責任を全うしなければいけないと思い、眠いのを

我慢して起きていた。

817系に乗って何時間経っただろうか。次がようやくと大牟田である。さすが鹿児島本線の普通列車。13時57分に熊本を発車して、終点鳥栖の到着は16時09分。さらに、ここに人身事故による遅れが拍車をかけた。

途中、久留米だか、なんとかかという駅に長時間停車した。本当なら、「つばめ」が追い越していく模様で、電光掲示板にはその案内が出ていた。しかし今になってはそんな表示何の役にも立たない。

結局あの時の停車もかさんで、終点鳥栖に着いたのは、定刻より30分近く遅れていた。

「こつから快速かあ。長かったなあ。」

「寝てたのに、そんなに長く感じてないだろ。」

「うん。そうかもね。今度は永島が寝れば。」

「バツ、バカ。電車に乗って寝れるかよ。」

「まあ、そういうと思ったけどな。」

817系から降りて、対面のホームにいる811系に乗り込む。

「最後は「白い子」なんだな。」

「これで九州の通勤電車、ほとんど乗車しちゃったな。」

「へえ。九州って思ったより電車少ないですね。やっぱ大半はディ

ゼルなんですね。」

「これが最後ですか。」

「一言ずつ言って、車内に入った。」

車内は思っていたより空いていた。4人掛けることができる転換クロスシートに座って発車を待った。

発車すると、全列車お約束の車内放送である。

「鳥栖駅からご乗車のお客様、快速小倉行きです。この先、基山、原田、二日市、大野城、南福岡、・・・。」

「なお、この列車は途中春日に臨時停車をいたします。」

「はっ。」

全員の声がそろった。

「あれ。朝、春日に停まりましたっけ。」

「んっ。停まらなかったと思うけど。」

「思うんじゃないくて、停まってない。」

「なんで停まるんだよ。朝通過してっただから通過してけよ。」

「まったくだ。」

「あんな駅停まる必要ないじゃん。」

「何のために停まるんだろうなあ。」

朝風の言った何のためにというのが引っ掛かった。とりあえず今日

一日のことを整理してみる。すると……。

「もしかして……。」

皆の視線が僕に集中する。

「お祭りのために停まるのかも。」

「祭りのため。」

「うん。車内見てみても分かるけど、浴衣着てる人がいる。浴衣着てる人がいるってことは、どっかでお祭りがあって、それに行く途中だっっていうこと。そして、朝春日を通過した時にお祭りかもしれない準備してた。」

「はい、その祭り死ぬ。」

「そのためだけに停まるんですか。」

「たぶん……。いや、絶対。」

「マジすか。ただでさえ遅れてるのに、そんな駅に停車してる場合かよ。」

当然、どんな文句を言おうが春日に停車することは確定なのである。文句も言うのはやめにしてと言いたいところだが、その春日駅が近づいてくると、また文句の嵐になった。しかし、過ぎてしまえば文句の嵐も治まった。

春日の次は南福岡に停車する。ここに停車すれば、戻ってきたという感覚が持てる。

「やっと南福岡か。戻って来たなあ。」

「ああ。」

南福岡停車。ドアが開いた。

すると、またここでもアクシデントがあった。

「あの男の子どうしたんだろう。」

木ノ本がそうつぶやいた。一人で泣いている男の子が気になったらしい。

「んっ。ただ親とはぐれただけだろ。」

「永島、お前頭ちゃんもある。」

あきれられてしまった。

「どうかしたんですか。」

「ちよつと黙ってくれない。聞きとれないんだけど。」

こういうことがあると何でも聞き耳を立てたくなるというのは一種の癖なのだろうか。僕も同じように聞き耳を立てた。

「Ｔシャツの・・・が・・・刺さってるねえ。」

「これ取り替えて・・・。」

「・・・わかりました。」

車掌と駆けつけてきた駅員が話している。

このやり取りが終わると、そこから視線をそらした。

「なんて言ってたんですか。」

「んっ。Ｔシャツのなんかがどうとかって言ってたけど・・・、よ

くは聞きとれなかったよ。」

「そうですか。」

「はあ、終わったんだったらさっさと発車しろって。」

「まあまあ。」

「お待たせいたしました。」

「待たせ過ぎだよ。」

「快速小倉行き発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」

ドアが閉まるとため息をついた。

「どうした。色々ありすぎたからため息でも出ちゃったか。」

「ああ。それもあるけど、善知鳥先輩が朝言ってたことがようやうと分かった気がした。」

「なんて言ってたの。」

「んっ。何も無いことを祈いのってね。」

「ああ、納得なうとく。」

博多はかたに到着とちやくすると、改札かいさつを出た。

35列車 トラブル(後書き)

事故は実際ありました。

今になってこのときあったことをちゃんと書きためておくべきだったなあと後悔しています。

36列車 夜行バスで

博多はかたに到着とちゅうちやくすると、改札かいさつを出た。

「どうする。17時29分発の博多南はかた行きに乗ろうと思えばまだ乗れると思うけど・・・。」

腕時計を見て今後の予定を話した。

「もついいよ。どこにも行きたくないもん。」

「空河そらがわは。」

「別にいいです。」

「朝風あさかせは。」

「新幹線しんかんせんだったらいつでも見れますしね。」

「で、永島ながしまは行きたいのか。」

「別に。」

「んじゃ、入場券にゅうじょうけん買って入って、新幹線しんかんせんでも車撮しゃまっするか。」

「140円払ってまで車撮しゃまっに行くんですか。」

「もう動きたくないですよ。」

「そうだろうなあ。私はまだ行けるんだけどみんながダメじゃあな

あ。

「えっ。俺もダメじゃないけど。」

「・・・。」

「で、どうする。」

考え込んだ。皆みんなの体力はすでに限界に達している。これ以上無理をさせることもないだろう。

「んじゃあ、終わりにするか。」

17時25分くらいだろう。僕達の自由行動はここに終了しゅうりゅうした。その後、バスの発着する筑紫口つくしぐちの方に足を運んだ。

「永島ながしま。」

筑紫口をもうちよっとで出ようとした時、誰かに呼ばれた気がした。

「永島ながしまさん。」

声のする方向を探してみる。

「あつ、あすこ。」

木ノ本が上を指差した。長い階段とエスカレーターの向こうにいるのは佐久間と諫早だった。僕達はそこまで続くエスカレーターを上り、上まで行った。

「佐久間来てたんだ。」

「人身事故とかって大丈夫だったか。」

「えっ事故って……。」

「……。しつ、知らないの。」

「ああ。そっち事故あったの。」

「あつたよ。おかげで列車は遅れるわ、春日とかいうところに臨時停車がするわで散々（さんざん）だったんだからな。」

（いや、臨時停車の方はそのせいじゃないと思うけど……。）

「それいつくらいにあったの。」

「たぶん13時30分とか、それくらいだよな。」

「そんなとき俺ら、熊本にいないからね。」

「はっ。」

「さつさと「つばめ」で帰ってきてたから全く関係ないよ。」

（それ、普通で行ってた俺らがバカみたいに見えるじゃないか……。）

「でさあ、「つばめ」途中で……で乗ってきた。」

「何やってんだよお前ら。」

僕と木ノ本の声がそろろう。

「フハハハハハ。スリル満点で楽しかったよ。」

あきれて言葉も出なくなった。

「スリル満点だろうがなんだろうが、何やってんだよ。」

「前々から、やるやるとは言ってたけど、本当にやるとは……。」

ここで言っていることは読者の皆様には実行してほしくない。

その後は21時に出る夜行バスまでゆっくりと待った。今度は待つ時間が長い。そして、僕は夜行バスの中で寝れるのかと思ってい

た。正直言つと僕が乗り物で一番嫌いなものがバスなのである。
「なんで「ムーンライト山陽」とか「ムーンライト九州」じゃないんだよ。」

同じ文句を言っているのは木ノ本である。なお、説明が遅れたが、「ムーンライト山陽」は下関までなので博多には乗り入れない。

「ホント、バスって死ねばいいと思う。」

「バスってどこがおもしろいんですかねえ。僕には全然分りません。」

朝風が話しに入ってくる。

「それプラス格安でしょう。」

空河も入ってくる。

「そうだな。アドの爺のことだから格安のやつだよなあ。」

「夜行バスと「ムーンライト」だったら、まだ「ムーンライト」の方がましですねえ。」

「だな。夜行バスって乗ったら最後監禁されないといけないからな。」

「もう、走るホテルじゃなくて走る牢屋だよ。あんなの乗ったら死んじやう。」

「走る牢屋って。そこまでひどいのか。」

「ひどいってもんじゃありませんよ。ゴミです。ゴミ。」
すると、怒ったような口調になつて続けた。

「僕一度に夜行バス乗りましたけど、寝れるようなもんじゃありません。床下からのエンジン音はうるさいし、縦や横に揺れまくつて寝れません。で、寝れなかつたら外見ればいいやつて思つて外見ようとする、車内に明かりがちらつて他の客が眠れないだの。うるさいですよ。」

「朝風いいこと教えてあげようか。」

今度は後ろで声がした。この会話を聞いていたのだらう。ハクタカ先輩が立っていた。

「いいか、夜行バスって、麻酔薬を常備して乗るもんだぞ。あんな

の中で寝られる人は神経がおかしいんだ。」

「うっ、そこまで言うか・・・。」

「えっじゃあ、ハクタカ先輩って眠り薬持ってきてるんですか。」

「んっ。ああ。麻酔薬ないと眠れないって。バスに乗った段階でこれ飲んじやえは発車する時にはたぶん寝入れると思うから。」

「そんなの持ってきてたんだ。」

「うるさいな。ないと眠れないんだよ。」

「えっ、ハクタカ先輩って不眠症ですか。」

「違う。バスがゴミだから眠れないだけ。」

「違う」の言葉の後は胸を張って言っていた。そして、「ゴミ」を強調していた。

21時20分。自分達が乗るバスに乗り込み、発車を待った。

21時51分。発車時刻から1分が経った。まだバスはエンジンをフル回転させていない。その後5分経っても、10分経っても、15分経っても発車する気配はなかった。

「なあ、朝風。バスってこんなにトロイもんか。」

木ノ本が前の席にいる朝風に話しかける。

「トロイもんですよ。これだからバスは嫌いなんです。できれば「寝台特急」とか「寝台特急」に乗りたかったですけど。」

「まあ、乗してくれるわけないな。」

「そうなんですけどねえ。」

「そんなに寝台特急に乗りたいのか。」

木ノ本の隣に座っている楠が朝風に聞いた。

「はい。寝台特急にはこんなのない良さがいっぱいありますから。」

「（こんなのに（バス）ない良さ・・・。）」

「うん。朝風、君は立派だよ。」

「でも、なんでそんなこと聞くんですか。」

「んっ。ああ、ちょっと気になったただだから。」

22時15分。ようやく九州福岡を発った。

バスは発車するとすぐに高速道路に入った。高速道路に入るとすぐに車内灯が消される。車内灯が消えるのはいいのだが、どうにもならないものがあった。バスのエンジンである。この床下から聞こえてくる電車のモーター（吊り掛け）よりもひどいこの音はどうにかならないのだろうか。ずっと思っていた。しかし、こんなこと思ってもどうにもならないのは分かっている。その夜、僕はこれのせいで眠れなかった。

36列車 夜行バスで（後書き）

これはひどすぎでは・・・。

言動は確かにひどいですが2日目終了。次からよっしゃと最終日に入れる。

37列車 大阪にて

時計を見てみる。指していたのは2時56分。

(あと4時間くらいどうすればいいの……。)

今この時間まで起きていたことは初めてだ。どっかで記憶が飛んでくれればいいのだが、なかなか思っているようにならない。僕はいつになったら眠れるのだろうか。下手をすると電車の中で寝てしまふことになる。どうしてもそれだけは避けたい。

後ろを見てみる。僕は夜行バスの真ん中くらいの通路側の席に座っている。後ろは真つ暗だった。霧に包まれているわけではないのだが、何だか怖く感じた。そんなに臆病なつもりではないのだが……。

それから何分経つただろうか。夜行バスはどこかのサービスエリアに入った。車内灯がつけられたが、起きたのは僕だけだった。

バスの外に出て伸びをする。ずっとバスという監獄の中にいたのだ。エコノミー症候群になる人の気持ち分かる気がする。

「ああ、眠い。」

ふと声が漏れた。

(「こんなんで耐えられるのか。」
自問自答した。)

5時00分。今いるところがどこかは分からない。バスの進行方向に夏の太陽が昇り、バスの中を少し明るくした。

(早く着いてくんないかなあ。)

今がとても暇な僕に5時という時間は牙をむいていた。

6時34分。大阪の中心部に到着する。本当はこんなに早く着かないのに……。

「皆さん。ここに14時30分に集合してください。」

バスを降りて少し歩いたビルの下で集合場所の説明がある。この集合の説明を受けたら、また自由行動だ。

「永島。」「きたぐに」でも撮りに行くか。」
木ノ本が誘ってくれた。

「うん。早く行くこうぜ。」

「あのう、「銀河」も見れるんじゃないんですか。」

「ああ、「銀河」もあつたか。」

説明しよう。今話しに出てきた「銀河」とは、東京〜大阪間を走っている夜行列車の名前である。24系客車という「寝台特急」に使われている車両が充当されている。また、日本に数少なくなつてしまった急行列車の一員でもある。

もう一つの「きたぐに」とは、大阪〜新潟間を走っている夜行列車の名前である。この列車も「銀河」と並ぶ急行列車で、今も定期運行をしている貴重な存在である。この「きたぐに」に充当されている車両は583系。日本ではもうこれでしか味わうことのできない3段寝台も備えている。なので、この意味でも貴重な存在なのだ。

「何言ってるんですか。「銀河」撮れるわけないでしょ。大阪着7時19分なんですから。」

朝風が入れ知恵する。

「あれ、「銀河」ってそんなに到着する（くる）の遅かつたっけ。」

「ええ。それに7時19分に大阪にいたら「彗星」をゆつくり見ることができませんよ。」

「うーん。「銀河」か、「彗星」か……。」

考え込む。

「僕だったら断然「彗星」ですね。「銀河」だったら浜松でも見れますから。」

朝風が言う。

「夜遅いけどな……。やっぱり「彗星」かな。「彗星」は大阪でないと撮れないからなあ……。」

「て、お前らがそんなことより、まず「きたぐに」だろ。」

やれやれ。僕がこの仲を仲裁していなかったら「きたぐに」も見れなくなってしまう。

大阪駅4番線に到着すると、

「「銀河」、撮れないのかあ。」

木ノ本は不機嫌な顔をしてぼやいている。

「まったく。「銀河」も「彗星」もKYなんだよ。」

(いや、「銀河」や「彗星」に「空気読め」っていう方が無理なんじゃ……。)

「そんなこといいじゃないですか。「きたぐに」が見れるんですから。」

ちよつと考えてから、

「それもそうだな。」

「銀河」のことは吹っ切れてくれたのだろう。笑いながら、カメラを取り出していた。

6時49分。4番線に「急行きたぐに」が入線する。入線してく
る間、「きたぐに」をずっと見ていれなかった。黄色く光るヘッド
ライトがとても眩しかったからだろう。「きたぐに」はゆつくりと
入線し、僕達の少し手前でブレーキをきしませ、停車した。

「583系かあ。一度は乗ってみたいですね。」

朝風は目を細めて、583系の体を触っていた。

「朝風、ちよつとどいて。」

その声を聞くと朝風が583系から離れた。朝風の姿がカメラに映
らないことを確認して、シャッターをきった。

「よく撮れたか。」

シャッターをきり終わると木ノ本が話しかけた。

「まあ。」

「へえ。」

木ノ本は携帯を覗き込むと、

「彼女が誰かに送ってやれよ。」

彼女という言葉に面喰った。

「バツ、送んねえよ。つうか、送ったところで分かんねえよ。」

「それもそうか。」

冷やかしだろう。木ノ本は少し笑っていた。

「あつ、そうだ永島。」「きたぐに」に使われてるあの車両。なんていうんだ。」

木ノ本のその言動にはよろめいた。知らないはずはないんだけど・

「さつき朝風が言ってただろ。583系って。」

「へえ583系っていうんだ。私はてつきり「雷鳥」とかの485系だと思ったよ。」

「まあ、無理もないよな485系と583系ってよく似てるもんな。」

「よく似てる恰好してて、中身がすごく違うんだろ。ああ覚えづら

い。」

その後独り言のように、
「ダメだ。結構長い間電車と離れてたから、記憶が何かと混ざつち

やってる。」
と言っていた。こういうわけは、自分の趣味を長い間隠していたからである。4月の時に言っていたが、僕ら以外で木ノ本の電車好きを知っているのは親と親友だけらしい。そして、その数は10人もいないと言っていた。

「まあ、そのうちまた覚えるって。国鉄ほど覚えやすいものないから。」

「ナヨロン先輩からの受け売りか。」

「まあ、そんなとこ……。」

その後は「きたぐに」も車庫に回送されるまで写真を撮り続けた。そして、回送される時は全員でその後ろ姿を見送った。

JR西日本色の583系が隣を通り過ぎていく。

「行っちゃいましたね。」

朝風が名残惜しそうに言った。

「できれば、国鉄色の方がよかったなあ、俺あれの方が好きなんだけど……。」

その国鉄色という色は窓周りが青でそれ以外のところがクリーム色
になっている塗装だ。

(こいつ、彼女いるのに「好き」とか「嫌い」とかふつうに言うて
るよな。絶対、彼女に勘違いされるぞ。)

「どれくらい。やっぱ彼女くらいか。」

「そんなの比べられないよ。」

腕組をして目を閉じた。

「一つ言えるのは、100系以下だつてことだな。」

「100系好きだな。」

「うるさいな。好きなんだからしょうがないだろ。」

(・・・)

勘違いされるかどうかは別として話を進めよう。

「永島さん。今度は何車撮するんですか。」

「うーん、ちよつと待ってね。」

ポケットから臨地研修のために持ってきたカンニングペーパーを取
りだした。このペーパーには電車の発車時刻だけが記されている。

「えーと次は・・・、「彗星」だ。」

「「彗星」来たー。」

朝風のテンションがハイになる。僕にも分からないわけではない。

読者の皆様に説明しよう。「彗星」とは、新大阪と九州の南宮崎

を結んでいる寝台特急の名前である。使用客車は24系寝台客車で、

さつき見た583系が充当されていた時代もある。

「「彗星」かあ。名前のにはカッコいいよな。」

「それどういう意味だよ。」

「まあ、そりゃおいといて・・・、新大阪まで移動しないとイケな

いのか。」

「でる方法だつたら、いくらでもありますけどねえ・・・。」

「「サンダーバード(とつきゅう)」「使わない。」

「はっ。佐久間バカだろ。」

ここにいる全員の声がそろつ。

「そんな一区间だけ「サンダーバード」使っつて。新快速しんかいそくや快速かいそく、ましてや、普通ふつうでも所要時間しよようじかん変わらないのに……。」
空河そらがわが文句を言っつてると、

「分かつてる、分かつてる。使わねえよ。」

「んじゃあ、7番か8番線に行くか。」

木ノ本きのもとが全体を促してくれる。こういうときは撮り鉄として頼りになるのだろうか。それとも……。

「ちょうどいい列車がないのか。」

来てみるとこのありさまであった。ほんのちょっとではあるが、発車かいそくする列車を待つことになった。

「早くしないと、「彗星すいせい」来ちゃうじゃん。もう電光掲示板でんこうけいじばんにも出てるし……。」

「まだ、大丈夫だつて。」

7番線を諫早いさはやが指差した。

「すぐに発車する列車あるじゃないですか。一区间だけだし、我慢がまんして乗りますか。」

諫早の指の先にはステンレスの通勤電車が止まっていた。207系という車両だ。

「そうだな。ここは207系あれに我慢して乗るか。」

「はあ。しょうがないなあ。」

「7番のりばから、普通……。」

「ヤベ。もう発車しちゃうじゃん。」

「早く乗るぞ。飛び乗ろうが、滑り込もうがなんでもいいから。」

4枚あるドアに流れ込んだ。さすが、この時間帯かんさい(通勤ラッシュ)だと思った。車内は人でいっぱいだ。関西かんさいの人も多さをあからさまに見せつけられた。

37列車 大阪にて（後書き）

この物語には自分の理想も含まれています。特にこんなにたくさんのあれがあつたらなあ・・・。

自分でも創作で鉄道会社を作ったりしていますが、そこに必ずあるのはあれなんですよ。寝台特急という響きだけで夢を感じます。

38列車 車撮

5分後。新大阪しんおおさかに到着。新大阪しんおおさかに停車すると押し出されるようにしてホームに降りた。

「ヤバかったなあ。あの人の数。」

「ヤバすぎだよ。関西つてもっと車両増やせばいいと思うんだけどなあ。」

「そういうわけにもいかないんじゃないんですか。」

「まあ、そうだろうけど……。」

「前来たことありますけど、あすこまで人が多いのは通勤ラッシュだけで、昼とかそういう時間帯はそんなに混んでませんよ。」

「へえ、そうなのか。」

「の前に、朝風あさかぜっているんな所行きすぎじゃない。」

「あつ、バレました。」

「おい。そんなことより「彗星すいせい」だろ。」
諫早いたはせに怒られてしまった。

「早くしてくださいよ。もう後5分くらいしかありませんから。」

「んじゃ、聞くけど、「彗星すいせい」って何番線に入線くんだよ。」

「12番線です。このホームは13・14番線ですから、隣です。」
中学生の方が情報通じょうほうつうだ。高校生の方がしきられてしまっている。

「分かった。早い所行こう。」

降りたホームから階段を使い線路の上に行く。さらにこの上は新幹しんかん線ホームだ。だが、今は新幹線しんかんせんなどにかまっていられない。早い所「彗星すいせい」を達成しなければ。

11・12番線に降り立つ。ここは特急専用ホームだ。11番線には紀勢本線きせいほんせんの「特急とっきゅうくろしお」「特急スパーくろしお」「特急オーシャンアロー」と「関空特急かんくうとっきゅうはるか」が、12番線には山陰本線さんいんほんせんの「特急とっきゅう北近畿きたきんき」「特急とっきゅう文殊もんじゆ」。また北陸本線ほくりくほんせんの「特急とっきゅう雷鳥らいちゆう」「特急サンダーバード」が発着する。そして、大阪と九州各地を結

んでいる「寝台特急あかつき（あかつき）」、「寝台特急彗星」、
「寝台特急なは（なは）」と「寝台特急トワイライトエクスプレス
（Twilight Express）」、「寝台特急日本海」が発
着する。

7時22分。

「12番のりばに、当駅どまりの、列車が、参ります。黄色い線の、
内側まで、お下がりください。」

アナウンスが入る。「寝台特急彗星」の接近がここに告げられた。

全員の顔が曲がって何も見通せない大阪方面を向いた。

7時23分。大阪方面から甲高い汽笛が聞こえた。

「EF65（ぼく）は今日も元気です。」って言ってるみたいだ
な。」

「ああ、そうかもな。」

そして、姿をあらわす。前を見ている黄色い二つのヘッドライト。

真ん中に掲げられている寝台特急の象徴。ヘッドマーク。そして、

その後ろに続く7両の青い車体。新大阪〜南宮崎間を結んでいる「
寝台特急彗星」だ。

入ってくる「彗星」を僕達はシャッターの嵐で出迎えた。「彗星」

は僕達がそんなに移動しないよう加減して停まったのだろうか。ゆ
っくり、ゆっくりとスピードを落とし、ギギギギギギという鈍い音
を立てて、停車した。

（一度でいいから、運転してみたいなあ。）

心の中でその日が来ることを願った。

「一度でいいから、運転室中に入ってみたいなあ。」

僕の傍らで木ノ本がそうつぶやいていた。

「早い所撮ってくださいよ。「あかつき」がすぐに来るんですから。」

僕も木ノ本も我に返って、

「あつ、そうだった。ここまで来て撮り損ねたんじゃ来た意味がな
いよ。」

(ヤベ、お土産一個減るところだった……)

我に帰った後は「寝台特急彗星」を牽引してきたEF65-1123号機と、ヘッドマークのアップ。24系のトレインマークなどなど。ざっと撮れる部分は撮り終えてしまった。そして、僕達が満足したことを見計らったのか。「寝台特急彗星」は新大阪駅から走り去った。

「お疲れ様。」

その後ろ姿を見送りながら、つぶやいた。女の子がテイベアに話しかけると、何ら変わりはないだろう。ただ、話しかけている対象が違うだけである。話しかけると、電車が「ありがとう。」と答えしてくれる気がするのだ。

「さて、今度は「あかつき」だな。」

「ああ。「あかつき」も仕留めてやる。」

仕留めるとい言葉に朝風があきれる。

「仕留めるって……。動物じゃないんだから……。」

「よし、どこからでもかかってこい。」

聞く気のない木ノ本を見て、

「永島さん。木ノ本さんって、カメラ握ると10歳くらい若返りますよねえ。」

「んっ。そうなのか。」

「そうなのかって……。木ノ本さんだけじゃなくて、永島さんもそうなんですからね。……。」

その後朝風が何と言ったかは分からなかった。

「あっ、やっぱりそう見えるんだ。」

「……。あの……。自覚したことないんですか。」

「ないけど、友達からよく言われてたから。目だけ子供のままだって。」

「……。」

「そんなことより、「あかつき」のためにスタンバらなきゃ。」

固まったままにいる朝風を促して、「寝台特急あかつき」の停止目

標まで足を運んだ。

7時29分。大阪方面にこっちに向かってくる二つのライトが姿を現した。それに向けてカメラを構える。

「間もなく、12番のりばに、寝台特急、「あかつき号」、京都、行きが、参ります。黄色い線の、内側まで、お下がりください。」

7時30分。EF65-1120号機に牽引された、14系寝台客車13両が新大阪に滑り込んだ。

「・・・」

木ノ本は一人12番線の大阪側の突端で固まっていた。

7時30分。

「12番のりばから、寝台特急、「あかつき号」、京都、行きが、発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」

「寝台特急あかつき」の発車が告げられた。このアナウンスが終了すると、14系の折り戸が閉まった。ブルーの車体についていた赤いランプも消える。

「ポッ。」

「あかつき」が短く挨拶をした。「もうちょっと、頑張ってくるよ。」

「とっている気がする。」

(頑張つてね。)

心の中で「あかつき」を送り出す。そのやり取りをしているうちに、「あかつき」はゆっくりと走り出した。傍らを通って行くEF65のモーターがうなりを上げる。何とも腹に響く地声である。

この地声の後は、足から伝わる振動と耳にする勇ましい音を聞いて「あかつき」のラストスパートを見送る。

ラストスパートを見送り終わると木ノ本と合流した。

「なーあ、永島。」

「何。どうしたのか。」

「あかつき」シクッタよ。」

「あつ、そういうことね・・・。」

するとため息をついて、

「私「あかつき」に嫌われてるのかなあ……。」

「……。」

「どう言えばいいのだろうか。それに困る。」

「うーん。木ノ本は「あかつき」のこと好きかも知れないけど、カメラが拒否ってるかも。」

「えー。「レフちゃん」が「あかつき」のこと嫌いなもの。」

「レフちゃんって……。」

「ようし、決めた。今日から「レフちゃん」を特訓させるぞ。」

（特訓って……。）

「あの、木ノ本さん。言いづらんですけど、それ一眼レフを特訓しても意味がないと思いますが。」

「うるさい。撮った写真がブレるのは「レフちゃん」がゴミだからだ。だから、そのゴミ要素をなくせば大丈夫だ。」

ちよつと救助を頼みたい。

それから、ちよつどいくくらいの朝御飯を食べて、9時26分に到着する「寝台特急なは」に備えた。

「「なは」が来るのって何時ですか。」

「9時26分。」

「あつ、そんなに遅いんですね。」

「まだ、遅い方じゃないだろ。「さくら」が東京に着くのが11時29分だから、そういう意味では「さくら」が一番遅いよ。」

「「さくら」も遅いけど、「はやぶさ」と「富士」も遅いよ。東京着は遅くないけど、西鹿兒島着と南宮崎着は15時10分と13時23分だから。」

「そんな時間について何するんだよ。」

「だから、飛行機とかに客が流れるんですよ。あんなのどこがいんですかねえ。」

朝風が腕組をする。

「飛行機はただ速いだけだし、夜行バスはただ安いだけだし、車は窮屈なだけだし、自分で運転するから疲れるし……。」

(まだ、自分で運転してませんよねえ。)

「まあ、そこは人それぞれだから……。ただ速いだけに見せられる人もいるかもしれないし……。」

「これだから、地球温暖化に貢献するんですよ。」

朝風は寝台特急の話になると燃える。というのが今回の臨地研修で分かったこともある。

朝御飯を食べ終わるとすることもない。それも人それぞれなのが……。

「12番のりばに、「特急、雷鳥、5号」、金沢、行きが、参ります。……。」

この放送を聞くと木ノ本が12番線の京都側に飛んでいった。今度こそ失敗しないためだろう。僕達もその後ろを追う。

「雷鳥」って485系ですよねえ。」

空河が聞いた。

「ああ、そうだな。」

「雷鳥5号(5ごう)」ってパノラマグリーン連結してましたっけ。」

「知らねえよ。俺そこまで守備範囲じゃない。」

「ただ、一つ言えるのは……。今木ノ本が行った方向はもしパノラマグリーンが連結されてるとしてアウトだったこと。」

「あれ、パノラマグリーンって大阪側でしたっけ。」

「大阪方だよ。」

「そうでしたっけ。」

「そうだよ。」

「あつ、僕てつきり金沢側だと思ってました。」

「まあ、デビューした時に金沢方にあつたからな。無理もないかも。」

後ろから。カン、カン。コン、コン。軽快に新大阪のレールをたたく。その音がだんだん自分の方に近づいてくる。

チラツと後ろを振り向く。

僕の視界しかいに三つのヘッドライトをつけた顔がある。

(早く行かなきゃ……。)

そう思い走り出す。すると、すぐに追い抜かれる。追い抜かれてもなお、その後を追う。ついにその速度に追いつき、僕が抜き返そうとしている時には、485系は鈍い音を立てて止まるころだった。

先頭には既に木ノ本きのもとがスタンバイしていた。

「あれ、「雷鳥」ってパノラマグリーン連結してたよねえ。」

「連結してるよ。」

「もしかしてこれハズレかな。」

そうつぶやいていた。

「ハズレかもしれないけどさあ……。」

と言った時「雷鳥」の発車が告げられる。

「もう発車かよ。早いなあ。」

と言うと、カメラ片手に12番線の京都側の突端とつたんに走って行った。

僕も顔を「雷鳥」に向けて見送る準備をした。別れるときになるとどんな列車でも名残惜しい。

「雷鳥」は信号が青のことを確認すると、ゆっくりと新大阪を発った。軽く継目を叩いて、重く継目をたたく。少し重々しいのはモーターを積んでいるからだろう。4号車、3号車、2号車。そして、金沢行きかなざわの最後尾。1号車が通過した。

(んっ。これは……。)

1号車が横を通った時あることが脳裏うづらのに映し出された。

「パノラマグリーンってふつうのやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつうのほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。……。」

これは文化祭ぶんかさいの時にナヨロン先輩が教えてくれたことだ。

今自分の隣を走って行った車両の特徴しゅとくはナヨロン先輩に教えてもらったこと全てに当てはまったのだ。

(間違いない……。)

今から携帯ケータイを出しても間に合うはずがない。それなら……。今は恥はずかしいだのなんだの言っている場合ではない。

「木ノ本きのもと。後ろだ。後ろがパノラマグリーンだ。」

大声で、構かまえている木ノ本きのもとに情報を提供した。

木ノ本きのもとの横を485系が通り過ぎる。

しばらくすると、木ノ本きのもとが高く手を上げた。親指を立てている。口が動いていたが、何と言っているのかは分からなかった。

また、合流すると、

「ありがと。永島ながしまのおかげで失敗せずに済んだよ。」

とお礼を言っていた。

「失敗しっぱいされちゃ困ると思ったからな。」

「でも、向こうに行く奴だったとはなあ。テールライトだったのが惜おしかったなあ。」

「何だと、貴様きさま。せつかく教えてやったのに……。」「

「まあまあ。」

空河そらかわが止めに入る。

「で、今からどうするんですか。まだ1時間以上ありますよ。」

「ベンチとかに座ってればいいだろ。」

「絶対座ってられませんって。車両たびが来る度にどっか行っちゃいますよ。」

「よ。」

「ハハ、それもそうだな。」

結局、「寝台特急おおさかなは」車まで新大阪ざいらいせんの在来線ホームで待つことになった。その間に「雷鳥4号」が来たが、ハズレだと言って撮りには行かなかった。

9時25分。

「12番のりばに、当駅どまりの列車が、参ります。黄色い線の内側までお下がりください。」

「ようやつと来たな。」

「でも、車撮しゃしむつとかで時間使ってそんなに長くなかったじゃないですか。」

「来たぞ。」

「寝台特急なは」姿を視界に捉えた。

この後、「寝台特急なは」が回送されるまで撮影を続け、「なは」が撮り終わると、佐久間達と別れた。佐久間と別れた後何をしていたかと言うと、ほとんどの時間をホームで過ごしていた。具体的に何をカメラにおさめたかというと、「特急オーシャンアロー」の283系。「特急北近畿」の183系。「特急くろしお」の381系。「特急はまかぜ」のキハ181系などなど。大阪に集結するJR西日本の車両のほとんどを撮りつくした。さすがに12時を過ぎると精神的にもまいってしまい、大阪のベンチに腰掛け、来る車両を眺めていた。

38列車 車撮（後書き）

・・・。

ようやくと臨地研修にも終わりが見えてきました。

何とか頑張ってきましたが、まだコメントが一つもないという状況が続いています。書いてくれると本当に助かります。

それとも話が話で書きづらいですか・・・。

39 列車 寝たら死ぬぞ

14時30分。朝言われた集合場所に赴いた。

「サヤ先輩と善知鳥先輩何してるんですかねえ。」
「サヤ先輩が疲れた言い方で今二人を待っている状態である。」

「特にサヤの方は時間守った例がないもんな。」

「それ8日の朝も言っていました。」
「しばらくするとサヤ先輩達が戻ってきた。」

「ちゃんと時間を守ってくれないと困ります。」

とアド先生に叱られていた。まあ、当然のことだろう。

「遊ぶのもいいけど、程々にな。」

アヤケン先輩がそう言っているのが嫌でも聞こえてきた。

14時43分。大阪駅のホームに再び戻ってくる。今日何時間見たホームだろうか。ハッキリの光景を見るのは嫌になった。だが、来る車両によりその光景も新鮮になる。

14時58分。いくら車両でも新鮮に感じられなくなった大阪駅を後にする時間がやってきた。

最後に乗るJR西日本の車両である。その車両に目を向けた。

(マジ。。。)

飛びはねたくなった。僕達の乗る新快速長浜行きは223系-1000番台だったのだ。

「運が良かったな、自分の好きなやつに乗れて。」

後ろでナヨロン先輩が僕の肩を叩いて言ってくれた。

乗り込むと人でいっぱいだった。12両編成のはずではあるが、こんなに混むものなのだろう。

ティントウーン、ティントウーン。14時59分。223系のドアが一齐に閉まる。15時00分。223系がブレーキのストッパーを外した。ここから米原まで81分。浜松まで264分の行程のスタートである。

新快速は130km/hで米原を目指す。14時55分発の快速
米原行きとは途中の長岡京でこぼう抜きした。京都までコマを進め
ると乗客の入れ替えがある。ここで運転席の右斜め後ろ。一番前の
補助席を確保した。

その後は、運転手と同じ目線で前を見つめていた。12両編成と
いうこともあって僕の視界は人で遮られていない。そのためゆつく
りと前の視界を楽しむことができた。走っている途中、何本もの旅
客列車と数本の貨物列車とすれ違い、そのたびに空河と「何か来た
な。」と言いつつ合っていた。

16時20分。

「ご乗車ありがとうございます。米原、米原です。」
このアナウンスで耳に残るものがあった。

「なお、ドア付近にございます、ドア開閉ボタンを押して、お降り
ください。」

「ドア開閉ボタン。」
ドア付近にあると言っていたボタンを探した。見つけると何とも分
かりやすいものである。

「僕が押します。」
空河が緑色の「開く」ボタンに手を添えた。

「おう、任せたよ。」

16時21分。米原の6番線に入線。停車するとドア開閉ボタン
の上にあった黒い部分に赤くドアという文字が浮かんだ。この合図
で空河がボタンを押した。

ティントウーン、ティントウーン。聞きなれた音を立てて、ドア
が両側に開く。開き切るのを待たずに、ホームに飛び出した。

ホームには他のドアから降りた人もいる。真ん中のドアから降り
るアド先生を視界の隅に捉えてから、階段のある方向へ歩いて行っ
た。

次の列車は16時30分発。普通大垣行きだ。この列車はすでに
8番線に控えている。それに向かって階段を駆け上がり、人の波を

かいくぐって8番線に向かう。新快速から大垣行きおおがきの普通列車の乗り換えは案外多い。行く手を阻はばまれながら向かった。

8番線に來るとオレンジ色のラインの入った白い車体があった。

117系という車両であることはすぐに分かったが、中身はよく知らない。

（117系かあ。）

と思つて片側に2枚しか付いていないドアから乗り込んだ。車内をざっと見まわしてみれば、ほとんどの席が埋うまっていた。その中で空いている席を見つけ、そこに陣取しんとつた。

「おい、永島ながしま。そこ私と変われよ。」

顔を上げてみれば、木ノ本の顔おののせのがそこにあつた。

「なんでだよ。」

「私、新快速しんかいそくの中でずっと立つてたんだからね。足が棒になつてから変わつて欲しいなあつて事。」

「……。」

「なあ、お願いだよ。」

「分かつたよ。」

木ノ本きのもとに席ゆすを譲り、僕は立つことにした。この列車は途中醒さめヶ井がいの、近江長岡おつみながわかと終点大垣おおがきまでの各駅かくえきに停とまつて行く。さっきまでの新快速しんかいそくとは違いゆつくりとコマを進めていく。そのため、この区間はクソがつくほど長く感じてしまう。

「あーあ、さっきまでスツゲーカットンで来たのに……。」

さっきの223系の姿が脳裏のうりによみがえる。確かに大阪おの、米原あのは早すぎるのだ。110.5kmキロを81分で結んでしまうのだ。他だつたら考えられない距離きょりを通勤可能区域つうきんかのういきにしてしまつてゐるのだ。

「まあ、しょうがないだろ。」

「そりゃ、分かつてますけど……。」

諫早いさはがさつき発車した柏原かしはらの方向に目を向けた。

17時04分。117系に乗車するのはここまでだ。大垣おおがきに到着とちやくする直前局地的な雨に見舞われたもののホームの屋根の下にいる僕

達には関係のないことである。

17時09分。今度はJR東海の新快速の出番である。この313系の新快速で終点豊橋まで揺られる。僕は途中の木曽川までは起きていた。木曽川を過ぎると空いている席にフラフラと歩いて行った。ちょうど楠先輩の隣が空いている。

「楠先輩。隣いいですか。」

「んっ。いいよ。」

窓側に行きたいと言ったわけではないが、楠先輩は窓側の席を開けてくれた。

「ナガシイすごく疲れてるみたいだけど、大丈夫。」

「大丈夫です。」

「そう。なら・・・い・・・。」

楠先輩の声がはるか遠くで聞こえていた。

18時30分くらいだろうか。

「・・・シイ、ナガシイ。」

身体をゆすつているのは誰だろうか。

「どうしたんですか。」

「ああ、榛名。次で乗り換えだから起こそうとしてるんだけど、起きないんだよ。」

楠先輩の隣に目を向けると窓に頭を押し付けた状態で寝ている永島が視界に入った。

（夜行バスの中で寝れなかったって言うてたもんな。ここで嘔き出たか。）

「なんかいい方法ないかな。」

「ちよつと考えてから、」

「入れ知恵してくれる人だったらいるかもしれない。」
携帯電話を取り出し、ある人にメールを送った。

1分後その内容の答え返ってきた。

「ナガシイが寝ちゃった時は、くすぐってやれば一発だよ。」
メールはこうなっていた。

(マジかよ。)

「で、どうだって。」
楠くすのきが聞いた。

「ああ、知ってる人が言うにはくすぐってやれば起きるって。」

「はっ。くすぐるって……。」

「んっ。どうかしたんですか。」

「いや、どうもしないけど……。」

「じゃあ、早くしてくださいよ。」

「間もなく終点豊橋とよはしー、豊橋です。乗り換えのご案内をいたします。

……。」

車内に聞きなれたアナウンスが流れる。

「もうすぐ豊橋とよはしに着くんですから早くしてください。」

なかなかやりだそうとしない楠くすのきを急せかす。

「榛名はるな、変わって。」

「えー。」

「早く。お願い。」

「わ……、分かりました。」

楠くすのきと場所を変わり、永島ながしまの横に行く。

(本当に起きるんだよねえ。)

ために彼女の言っていたたたき起こす方法を試ためしてみた。すると、

「な……。何。」

(起きた……。)

「豊橋とよはしだよ。降りるんだから、早く準備しろよ。」

「あっ、もう豊橋とよはしかあ。」

と言って伸びをした。だが、一つ引っ掛かることがある。

(今の起こし方って、萌あいつしかやらないはずだけだなあ。うーん……。

まあいつか。)

18時38分。313系は終点豊橋とよはしに滑り込み、僕達はここまで運んでくれたことに礼を言い313系と別れた。

次に乗る列車は18時50分発。新快速浜松行きしんかいそくはままつゆ。これが、最後

である。

「はあ、ようやっと戻ってきたー。」

「そうだな。」

「永ながかったですね。特に今日。」

「本当だよ。ほとんどの時間ホームにいたんだもん。」

「そうか。私はそんなに永くなかったと思うけどなあ。」

「そりゃ、木ノ本きのもとが月に何回もそういうことしてるからだろ。」

「おい、醒さめヶ井がいくん君が知らないかい。」

アド先生が僕達に聞いた。

「ナニナニ、サメちゃんがどうかしたって。」

いつの間にか善知鳥じゆん先輩達が僕の後ろに立っていた。

「まさか、乗り遅おくれたとかかっていうことないよな。」

「いや、降おり忘れたかもしれなげ。」

「精神せいしんが負けたか。」

「おい、みんな手を合わせる。」

「えっ。」

ハクタカ先輩に言われるがまま、名古屋なごや方面に手を合わせる。横目で3年生を見てみると同じように手を合わせていた。ざつと確認したところ、手を合わせてないのは楠くすのき先輩と箕島みしまだけだった。佐久間さくまはというと、ここにはいない。別の車両にいる。

「バカ。何かつてに後輩殺してんだよ。」

「えー、後輩殺しちやいけないよ、ハクタカ先輩。」

するとアド先生の携帯ケータイが鳴った。

「サメちゃん今どこだつて。」

「今、蒲郡がまじおじにいるそうです。」

「あいつバカだな。降り忘れて313に蒲郡まで連れてかれたのか。」

「

「なんだ、死んだんじゃなかったのか。」

「ハクタカつて後輩殺すの好きだな。」

列車の中でこういうことを話しながら、終点浜松に19時24分に

着いた。

「ウーン。アッ。」

313系から降りて、ほかの乗客の邪魔にならない位置まで行って伸びをした。

「戻ってきたー。」

改札を出て、ようやく解散のはずだったが、醒ヶ井がいなくなるとそういうわけにもいかないだろう。そう思っていた。

「1年生と中学生は帰ってもいいよ。サメちゃんだったらあたしたちで何とかするから。」

善知鳥先輩にそう言われたが、帰るつもりもなかった。

「いえ、いますよ。」

「そうか。じゃあ、今ここに残ってる人は私と同類だな。」

満面の笑みで言っている善知鳥先輩が少し怖かった。

「醒ヶ井のやつ電車の知識0だよなあ。」

ナヨロン先輩が分かりきっていることを言う。

「へえ、私と同じかあ。でも、私は帰ってこれたけど。」

「あのなあ、それは俺がいたからであってだなあ……。」

「大丈夫。何とかなるって。私でも何とかなってるんだから。」

「サヤ、諦める。何言っても無駄だ。」

「このやろう……。」

その後20時13分まで浜松駅の在来線改札前で醒ヶ井を待った。

この時間から推測すれば、豊橋どまりの新快速と浜松まで直通する新快速を乗り継いできたようだった。

「お帰り。サメちゃん。」

「まったく。2日目みたいに精神的に死んでくれば面白いのに。」

アヤケン先輩が2日目に精神的にまいっていた時のことを言う。

「まったく。本当に死んでくれば面白いのに。」

「アヤケン先輩もハクタカ先輩も心配じゃなくてそんなこと考えてたんですか。」

すかさず醒ヶ井のツッコミが飛んだ。

「はいはい、人を勝手に殺さない。」

「あつ、面白がつてる途中なのに。」

（あーあ……。）

ハクタカ先輩と楠先輩は醒ヶ井が来るとすぐに帰って行った。まあ、ハクタカ先輩にしてみれば強制的に帰らされたと言った方がいいだろう。

「よし。サメちゃんも帰ってきたことだし、私達も帰るか。」

善知鳥先輩が伸びをする。

「はあ、ようやと終わるかあ。よし、遠江急行班も帰るか。」

ナヨロン先輩が帰ろうと言う。

「はい。」

「じゃあ、アド先生。さようなら。」

「あつ、永島君。18切符返してくれないかな。」

「あつ、はい。」

うっかり忘れるところだった。

「あれ、ナヨロン先輩は返さないんですか。」

「んっ。俺は何かと使うからね。」

アド先生に今回お世話になった18切符を渡す。

「後、返してもらうのは醒ヶ井君だけだね。」

この言葉を後ろに受けながら、歩いて行った。

39列車 寝たら死ぬぞ（後書き）

臨地研修がようやくと終了しました。これからは9月などまた活動に入っていきます。

一つ思いましたが、これって説教してるように見えますかねえ。説教してると思った方には謝ります。
とにかくここまで読んでくれた人には感謝。

40列車 終了

臨地研修終了から数日。

「へえ、行って来たのかあ。榛名達ってホントに楽しそうだな。」

「さくらも来ればいいのに。」

「いや、私は練習あるし……。」

「そうか。そうだね。練習頑張ってこいよ。」

かるくさよならを言って別れる。

（榛名……。私ソフト部辞めて、鉄研いくことにしたから。友紀も榛名も分かってくれるよね。）

木ノ本の後姿を見送りながら、遠くで聞こえる足音を聞いた。

そして、僕は何をしているかと言うと、離れにある模型部屋に来ていた。

「智って本当にここ好きだな。」

「いいじゃん。駿兄ちゃんだってここが好きなんですよ。」

「まあ、人のことは言えないか……。」

しばらくの間、自分の前を走る鉄道模型に目をやり、その迫力に惚れる。

「そいや、行って来たんだろ。どうだった。」

「夜行バスは寝れるようなもんじゃない。」

「それだけかよ。」

「先輩が言っただけですけど、夜行バスは眠り薬を持って乗るもんだつて。なんかそれが分かった気がした。」

「ハハハ。それ鷹倉の言い分だろ。」

持ってきた383系「しなの」の模型をレールに置きながら笑う。

「まあ、いいじゃねえか。楽しかったんだから。萌にもそのこと言っただらどうだ。」

「もう言ったよ。」

「だと思った。」

その後は持つている模型を走らせることだけにひたつた。

ずっと離れにこもっていた生活が終わる9月1日。40日。多分それくらい。久しぶりに岸川学園きしかわに向かった。

自転車をひたすら西にこいて遠州鉄道えんてつの芝本踏切を通過。また少し自転車をこいで行くと高架橋になっている遠江急行とくじやうが見える。駅舎の下は程よい大きさのスペースがある。ここは駐輪場として活用されている。よっぱど東風が強くない限り雨は降りこまない。高架橋が大きな傘の役割をしている。ちょうど真ん中あたりに自転車を置いて、鍵をかける。鍵をポロシヤツの胸ポケットに入れて、カードタッチ式の改札を通り抜け、階段を上がる。

「よーす、永島ながしま。」

階段を上がったところにいたのは宿毛すくもだった。

「おーす。」

「ちゃんと来たな。お前のことだから、家でずっと模型いじってて学校に来ないかもなあって思ったよ。」

「人をひきこもりみたいに……。俺そこまでひどくないからな。あくまで暇なときに遊んでるだけ。」

「暇な時つて。毎日遊んでるようなもんだろ。毎日同じ遊びしてて飽きないのか。」

「飽きないんだからいいじゃん。楽しければそれでよし。」

「永島ながしまらしいなあ。そういうのは……。」

しばらくホームから目の前にある線路を見下ろして、

「なあ宿毛すくも。今日つて授業あつたつけ。」

「あるわけねえだろ。お前バカか……。バカかじゃないか。バカだったな。」

「ないか。よかった一瞬忘れたかと思った。……。話変わるけどさあ、ここから乗るのやめない。」

「どうしてだよ。」

「いやあ。浜松はままつ行った時混むから。ずっと乗ってて分かったんだけど、鹿島側かしまに乗るのが一番賢いかもって思った。」

「あつちだつたら混まないのか。」
「大体ね。」

言い始めたか言い始めなかったぐらいの時に列車が接近してくるというアナウンスが入った。40秒ほどたって西鹿島のほうから列車がやってきた。10日ぶりに見た車両はなんかどこかで見たことのある車両に思えた。

(311系……。改めてみると似てるなあ。兄弟。)

高架橋の線路の継ぎ目を「チャチャ、チャチャ」と軽快にたたく音に混じってだんだん低くなっていく音が入る。

(2000系。第6編成。)

入ってきた車両の浜松側1枚目と真ん中2枚目のドアの間を見る。そこに書かれていた数字は「2106」。遠江急行が所有する2000系という車両グループ。第6編成の制御車。この数字だけまでここまで読み取ることができる。もちろん、ここまで読み取れるようになったのは岸川高校に通い始めてからだ。他にどんな付番をしているかというところの第6編成の場合浜松側から2106+2206+2306+2406と付番されている。それぞれの車両の意味は制御車+電動車+付随車+制御電動車。それぞれの数字でそのことを示している。

さて、少し話がそれた。2000系は小さくキーという音を立てて停車。僕たちの前には2406の一番西鹿島寄りのドアが前に来た。ドアが開くと同時に視覚障害のある人のためになる音が出る。車内に乗りこんで僕から見て左手に体を持っていく。こつち側には4人ほどが座れるロングシートがある。一方反対側はというとこちらと同じロングシートがある。違うのは長さだけである。

「宿毛。宿題片付けた。」

一番乗務員室に近いところに座る。

「ああ、生物の宿題ははつきりどうでもいって思ってたほんの数ページしか片づけてないけど、他のはちゃんと全部やった。」

「真面目なんだな。」

「……。何。永島は全部終わってないのかよ。」

「読書感想文以外全部終わってる。」

「……。お前。読書感想文一度も出したことないよなあ。」

「だって面倒だし。それに四ツ谷のあれ見ると読む気にもなれない
つて。」

「だな。あれ見て読む気になる人がおかしいと思うよ。俺だってあれほとんど読んでないし、落ちて当たり前って思ってるけどなあ。」

「……。」

「永島……。」

反応のない永島のほうを見てみると、永島は乗務員室のほうを向いていた。どこに目をやっているのか多少気になる。その視線の先をおってみるとメーターがいくつもあった。その中で真ん中にあるメーターがアナログとデジタルで82km/hと示していた。

（ああ。これ見てるのか。）

心の中でつぶやいた。

しばらくはしって芝本の次駅南高島に停車。数十秒の停車後発車。

そして次駅美蘭に停車。しばらく停車して、また発車。ちよつと走

つて小楠に停車した。

「永島。乗り換えないのか。」

宿毛が席を立ちながら言う。

「いいよ。たまにはゆっくり行こうぜ。急行混むし。」

「本当に人ごみ嫌いだな。」

「それもあるけど……電車に乗ってきてドア付近に固まる人も好きじゃないんだよねえ。特に朝のラッシュの時とか。ドア付近メチャクチャ混んでるのにシートのところはすいてる。これある意味のいじめじゃない。」

「いじめつて。誰対象に何をやってるんだよ。」

「えっ。降りる人対象に降ろすまいとしてる。」

「……。」

「でも、東京とか大阪とかさういうことないんだよなあ。ここだけ

だよ。ドアに固まってそこから動かないの。」

「だから、東京と大阪とここを比べられても……。」

「ああ、あと時折クソKYなやつもいるよなあ。電車の番号が見えないつうの。前通るんじゃないやねえって。」

「だから……。」

そんな話をしていた。

その頃……、

(ヤバい。今日も間に合いそうにないや。また遠鉄かよ。でもまあいいか。帰りはふつうに分かるんだし。)

小ぢんまりとしたスーパールの駐車を横切って西側にある搬入口らしきところを自転車で通過。すると線路が自分の右隣にくる。ちょっと走ったところに駐輪場がある。そこに自転車を置いて、駅に向かった。

(今7時02分。よかった30系じゃなくて。)

内心そう思った。

ホームにはすでに友達がいた。端岡という人である。

「夏紀。よーす。」

「あつ、萌。」

「ああ。新学期そうそう遅刻かと思ったよ。」

(今この時間で遅刻を心配するのもどうかと思うけど。)

「遅刻って。まだたつぷり時間はあるじゃない。」

「いや、たつぷりあるように見えてたつぷりないんだよ。7時04分の電車が行っちゃったら次は7時16分。12分待つのもつらいし、その列車の車両30系だよ。」

「だから何。」

「だから何って。4両編成中にドアが8枚しかない車両に乗りたいたいと思う。この朝メチャクチャ混む時間に。」

「……。」

(ほんと。萌と永島君って同類だわ……。)

今日9月1日はこんな感じでスタートした。まだ、2学期の鉄道研

究部は指導しないが、そのうち指導する。僕は授業が始まる次の日より、その日のほうが待ち遠しい。もちろん。このときにはそれしか考えてない。

9月中旬。9月11日。お昼休み。

「今日部活あるって。さつきアド先生がそう言った。」

「へえ。2学期も今日からスタートか。」

「永島ながしま。今日は塾でいけないって言うって。」

「ああ、今日は髪切りに行かないと。」

「ごめん、今日はいけそうにないから。」

木ノ本きのののもと、醒ヶ井さめがい、佐久間さくま、箕島みしまの順に回答を得た。

「バカたれ。それ伝えるの全部俺だぞ。」

「いいよ。私もいるし。醒ヶ井さめがいは女の子と遊んで、佐久間さくまが床屋に

行つて箕島みしまは……。」

「とても話せる内容じゃないから……。」

「なら家庭の事情と。」

「おい。ちよつと待て。俺が休む理由女の子と遊ぶってどういっ

とだよ。」

「だって、醒ヶ井さめがいって彼女募集中だろ。彼女募集するために自分か

ら行くんじゃないのか。」

「誰がそんなことするか。」

「分かった、分かった。」

僕がその中を仲裁する。

「理由は「じゅくじょ」と遊ぶな。」

「おい、余計ひどくなってる。」

「大丈夫。響きは悪いけど漢字は塾に女だから。つまり同じ塾に行

っている女の子。」

「……。」

「じゃあ、そう伝えておくから心配しないで。」

「心配だわ。ボケ。」

そんなこんなで放課後。

「さてと、私も早くいこうかなあ。」

独り言を言っ、カバンを腕に通した。さっさと立って教室から出ていく。

「……………」

「留萌。私たちも行くか。」

「えっ。うん。」

（榛名。この頃とっても楽しそうだよなあ。私もああいう風になりたい。なら……………」

心ではそう思っ、体が言うことを聞かなかった。

いつものようにグラウンドに出て、練習をした。

（はあ。なんで言えないんだよ。私のバカバカバカ。ただ友紀にそうしたいって言えばいいだけの話じゃない。なのに。なんで。こんなに言いづらくなってるのよ。）

「留萌。そっちに行ったぞ。」

そう言われた時にはもう遅かった。ボールは自分の足の間を通り抜けて行っってしまった。

「おい、今のボール取れないんじゃないぞ。どうしたんだ。」

「……………すみません。」

（留萌……………まさか、これって木ノ本の影響。だったら……………）
普段と様子が違う。このことはソフト部の誰もが気付いていることだろう。しかし、ここまで思っているのはおそらく自分ひとりはずだ。

（久しぶりの部室だなあ。）

そう思っながら、体育館の外側にあるドアに手をかけた。

「ちよつと。木ノ本さん。」

誰かが自分の名前を呼んだ。その方向を見てみると誰かが息を切らして、こちらに向っ、てきている。

「永島いる。」

その人はそばまで来るとそう言っ。

「永島^{ながしま}。あいつだったたら部室にいると思うけど……。」
「ちよつとそこまで連れてって。」
彼はそう言った。

部室のドアを開けてみると先輩たちがいた。相変わらず集合だけは早いのである。

「おーす。ナガシィ。よく来た。夏休みに間死んでなかったか。」
「死んでませんよ。楽しいですから。夏休みの間は家の模型いじり放題。」

「……。」
そう言い切ったか言い切れなかったぐらいの時だった。部室のドアが開いた。振り向いてみるとそこにいたのは木ノ本^{きののほん}と宿毛^{すくも}だった。

「宿毛^{すくも}。どうしたの。」

「永島^{ながしま}。教室集合。」

「えっ、何で。」

「いいから。理由は後で話す。」
宿毛^{すくも}はそういうと僕のバッグを持ってすたすたと走っていった。僕はそれを取り返そうと宿毛^{すくも}の後を追った。

「永島^{ながしま}連れて行かれちゃったよ。」

「ついに四ツ谷^{よつや}が本気を出したか。」

「嫌すぎるなあ。」体育館から出て、駐車を横切り、北校舎と南校舎の間を通り抜け、昇降口を通る。宿毛^{すくも}はそのまま教室のほうに行ったらしい。昇降口から右にかじを切って突き当たったら左にかじを切る。教室のドアに手をかけようとした時、クラスの人が全員何かやっているのが目に入った。

「永島^{ながしま}。いくらできるからって抜け駆けはダメだぞ。」

そう言ったのはクラス担任の四ツ谷^{よつや}先生だ。四ツ谷^{よつや}は何かプリントらしきものを僕に手渡した。

「それにひたすら書け。200ページになるまで。」

「……。」

(四ツ谷^{よつや}の夏休みノート200ページと補修は本当だった。)

そう思いながら、自分の席に行つてシャープペンを走らせる。これはとてもきつい。今までノートを出した回数実に0回。クラスの中には宿毛すくも以外に今でもこの死の学習ノートを出している人はいるらしいがその数は多い日で5冊。少ない日は2冊。もう出さなくてもいいのではないかという提出率だ。

何を書いていいのかわからない。だから、自分の持ちネタを書くことにした。これで少しはその痛みが和らぐ。書いているとだんだん右手と右腕が痛くなってくる。少し手を休めながら、自分にしか聞こえない程度の声で歌を歌いながら、乗ってやる。でもこの行数は多い。ためにその行数を数えてみた。

「1、2、3、4、・・・56、57、58、59、60・・・」
(数えるんじゃないかった。)

書く気が一気に失せた。しばらくシャープを置いてそのままにいる。ドアを開ける音がして、四ツ谷先生よつやが教室から出て行った。するとこれまでシーンとしていた教室は少しにぎやかになった。先生という重圧がなくなったからだろう。

「永島ながしま。お前バカだろ。」

隣の宿毛すくもが話しかけてきた。

「の前に教室に集合つてこのことだったのか。」

「ああ。四ツ谷返よつやつたやつ全員連れ戻して来いって言ってな。俺が同じ中学だからっていう理由で連れ戻しに行けって言われたわけ。」
「なるほどなあ。でも、やっててこんなにダルイもんでないだろ。」

「あるわけねえだろ。俺も夏休み分50ページくらいは片づけたけど、それだけでも死んだ。」

「やる量がハンパじゃないんだよ。ノート一日5ページやってくるそんな勉強バカいるかつうの。」

「いるかもしれないぜ。一番やったやつは佐久間さくまで185ページって言つてたからなあ。」

「佐久間。何気にすごいなあ。」

「うん。俺もそれには感心した。」

「宿毛。これどこどうやったたらごまかせるかなあ。」

「ごまかすって。どうやってごまかす気だよ。」

「えっ。宿毛が今までやってきたノートを自分がやりまして言うって提出する。」

「お前。セコイ。」

お互いシャープを走らせながら、文字を書いた。

「そっぴやあ、お前さっきから何書いてるんだ。」

「電車の駅とか名前とか。」

「そんなの覚えて何になるんだよ。」

「電車の勉強。」

「学校の勉強しろよ。」

「だってしたくないもん。あんなのやったって使っかっていうのはほんの少ししかないんだからさあ。だったら自分の趣味覚えたほうが100倍楽しい。」

「ある意味うらやましいなあ。そう考えれる頭が。」

「どういう人間でもそっぴやあということ考えるよねえ。ふっつ。」

「考えるけどさあ。」

「ああ。部活いきてえ。家帰って模型いじりてえ。誰だよ。夏休みノート200ページとか言ったやつ。」

「それ。四ツ谷の前で言ったら殺されるぞ。」

「あ、そっぴやあ。殺されたら元も子もないから、じゃあ、ボイコットして帰るか。」

「ボイコットねえ。実際帰ってる人もいるけど、それやったらつげが怖いだろ。」

「ですねえ。俺はそこまで度胸ある人じゃないし。」

話しながらも、数行は埋まっっていく。

「今まで何行書いたのかなあ。」

「数えるなって。また書く気失せるだけだぞ。」

「……。13。まだ13行しか書いてないの……。もういいや。」

やーめた。」

「だからやめろって言ったのに。」

「でも……。とりあえず出されたものはやるかあ。」

「……。永島。」

「何。」

「時折お前のことが天才なのかバカなのかどっちなんだって思うときがいつばいあるんだけど。」

「じゃあ、そこは俺イコールバカって思っててください。」
どこかで聞いたことのあるような声を出した。

「……。」

18時。

「はい。それじゃあ、終わってください。」

「ようやっとこのノート地獄から解放される。」

「あれ、200ページ終わるまでやるんだって。」

「無理じゃん。あの60行のやつが200ページ……。1200行。今日終わったのが60行。単純にあと200日かかる計算じゃん。ああ、気が狂う。そこまで持たせるための鉄道ネタないし。」

嘆きながら門まで歩いて行った。

「あれ、永島。部活にはいかないのか。」

「四ツ谷のおかげで行く気失せました。」

「ある意味究極の兵器だな。」

「兵器かあ。その兵器を核爆弾で破壊すれば……。あ、でも核爆弾だけじゃまだ手ぬるいか。戦艦大和と武蔵からの艦砲射撃とB-29からの爆弾攻撃。これでこの学校は壊滅する。ハハハハ。」
(残虐化した。)

「あ。ついでに要らない車も処分するか。」

「……。」

40列車 終了(後書き)

昨日でユニーク数「成田エクスプレス」(253)になりました。なんかうれしいです。ちょっと前は223でした。このままいったら485で止まったりして・・・。

補足します。タイトルが終了となってもまだ終わりませんよ。

41列車 補修 掃除

9月14日。

「ああ。今日もノートの補修かあ。ボイコットしていい。」
「って言ってもしてないだろうが。」

「いや、そうなんだけどさあ。……。ああ、やっぱり昨日実行しておくべきだったかなあ。学校を核爆弾で破壊する。」
(言うことが怖いなあ。)

「でも、それやったらおれたちまで被害出るだろ。そこはどうするんだよ。」

「なら、学校の周りにシールド発生装置置いて、まず学校以外をシールドで覆う。次でB-29をここまで飛ばしてきて、核爆弾リトルボーイ500発を投下する。そのあとは大和と武蔵やまとむさしでお祭り。すばらしいショーじゃないか。」

「確かに。それができれば素晴らしいショーだけど。まずリトルボーイ500発ってどうやって集める気だよ。」

「気合。」

「もつと現実性のある答えにしようぜ。せめて。」

「あつ。の前に自衛隊が正当防衛にやってきちゃうか。」

「やってきちゃうなあ。」

「よし。やってきたら撃ち落とすか。」

「永島ながしま。そういう怖いことさらつと言わない。」

この日も18時までやって全員を解放。その翌日も同じ。だんだん残る人が減っていった。残る人が減っているのは四ツ谷よつや先生がいな
い時を見計らって帰っている人がいるからだ。

「帰ってる人多いなあ。宿毛すくも今やってるので何ページ目。」

「198ページ目。」

「マジかよ。もうちょっとで終わるじゃん。俺なんかまだ3ページしか終わってないのに。」

「どっかで打ち切りになつてくれないかなあ。」

「でもさあ、宿毛すくもそこまで行つて明日で打ち切られたら死にたいよねえ。」

「ああ。マジでそうしたい。」

翌日。

「……………」

「……………」

「永島ながしま。昨日言ったこと本当になつたな。」

「ああ。でも、終わってくれてありがとうだね。」

「そういわないでくれよ。200ページ昨日でやり終わった俺の立場がなくなるだろ。」

「まあ、ドンマイ。」

「そういわれてもなあ。慰めにもなんねえよ。」

「……………とまあ。俺は部活あるから行つてきます。」

「永島ながしま。今のお前が本当にうらやましい。打ち込むものがあつていいよなあ……………」

永島ながしまがいたと思つた方向を見てみると、すでに永島ながしまの姿はなかった。

（……………あいつらしいな。）

ふと永島ながしまの机の上を見ると、筆箱が置きっぱなしになっていた。

（あいつ。また家で筆箱がないってパニックッテ探し回るんだろうなあ。届けてやるか。）

その頃部室では、

「四ツ谷よつやのノート地獄からようやっと解放されたか。おい。衛生兵。

早くナガシイながしを看病してあげて。」

善知鳥ぜんちょう先輩は楠くす先輩のほうを見て叫んだ。

「あの。衛生兵つてもしかしてあたしのことですか。」

「アヤノン以外誰が衛生兵なのよ。早く治療道具もつてきて。」

「そんなのどうでもいいですから、ふつうでいてください。」

僕が善知鳥ぜんちょう先輩の暴走を止め席に着く。

「永島ながしま。お疲れ。」

後ろからナヨロン先輩が話しかけてきた。

「なんか数日見ない間にやつれたな。」

「そんなにやつれてますかねえ。」

「うん。目が死んでる。」

「……。」

「まあ、永島ながしまならすぐに回復するか。こういう方面ならお前は困らないからな。」

褒められているのか、バカにされているのか。

「永島ながしま。これ。」

木ノ本きのもとが僕に向かって紙を投げた。それに目をやると今後の活動予定が書かれている。なお、今日の日付はどこにも書かれていない。先輩たちが作った活動日なのだ。

「永島ながしま。それ当てにしてたら死ぬぜ。」

「もう半年もたちますから、予定表が当てにならないっていうのは分かってますけど……。なんで書いてない日までやるんですか。」

「いいだろ。楽しければそれでいい部活なんだから。」

「……。まあ、そうですね。」

そのあとはいつもと同じバカ騒ぎ大会。今日は部室が少し汚くなっているといったので、掃除をやった。でも、ただの掃除ではない。

「この四ツ谷よつみや死ねー。」

「バカたれ。言うことが違う。くたばれ。700系。カモノハシ」

「なんでカモノハシがくたばらなきゃいけないんですか。かつこいというのには少しかけ離れてるかもしれないけど、かわいいじゃない。」

「あれのどこがかわいいんだよ。俺には全然わからん。ていうか、善知鳥ちゅうちゅうカモノハシの意味わかってるか。」

「え。オーストラリアにいる動物のことでしょ。あれかわいいじゃん。」

「なるほど。カルチャーギャップな。確かにあれはかわいいかもしれないけど。リアリティのカモノハシはかわいくない。」

「もういいからそんな話。手が止まってる。」

「おーい。誰かゴミ捨てに行つて。」

「おーい。これ必要なやついるか。．．．ゴミー。善知鳥じちうこいつもダストボックス行き。」

「はい。サヤの手経由ダストボックス行きです。整理券をお取りください。」

「あの。これゴミですか。」

「バカ。この部活では迷つたら信じたことやればいいんだよ。1秒迷つたらごみ箱に捨てる。」

「アヤケン違う。迷わずに捨てる。」

「分かりました。これからは迷わずに捨てます。」

「ナガシイ。この発泡砕いてください。お願いします。」
善知鳥先輩がちょっと小さめの発泡スチロールを構える。

「んじゃあ。E233のゴミー。」

「えっ。あいつゴミじゃないだろ。」

「サヤは際物好きなんだからゴミじゃないだけ。俺あれ好きじゃない。」

「だから。ナヨロンはいつまで電車が恋人つて言ってるんだよ。」

「はっ。俺がいつそんなこと言ったんだよ。」

「だって今E231系は好きじゃないつて言ったじゃん。」

(しょうもない間違い方だな。)

「バカ。俺はE231は好きとも言わないし、嫌いとも言わない。」

「じゃあ、なんだつたら好きつていうのよ。」

「えっ。C62(シロクニ)。」

「お前はあれのどこに萌もええてるんだよ。」

「萌もえてねえよ。」

「．．．。」

「サヤ先輩。アケ先輩。ナヨ先輩。あなたたちのせいでゴミが散らかつてます。」

「あー。バカたれ捨てる。全部。鉄研部員の手経由ダストボックス

方面、ダストシユート行きです。整理券をお取りください。整理券をお取りください。整理券をお取りください。危険物は核爆弾以外持ち込んでいいです。」

「そんなことどうでもいいですから。」

「はい。アヤノン。これ持って。」

善知鳥先輩が楠先輩くすのの手に二つずつゴミ袋を持たせる。

「朝の忙しい主婦。」

「ハハハハ。」

「何笑ってるんだよ。バカタカ。お前が捨てに行けー。」

「はい。アヤノンこっちこっち。もつといいのあった。」

今度は楠先輩くすのに8つゴミ袋を持たせる。もちろん、全部もていない。三つずつ果てに。一つは左腕で抱えるように。最後は口にかませた。

「スーパー朝の忙しい主婦。」

「どっからこんなにゴミ袋集めたんですか。ゴミありすぎでしょ。」
しゃべったので口にくわえられていたゴミ袋が落ちる。

「落とすな。試験にも落ちるだろ。」

それを聞くと次は左腕に抱えていたゴミ袋を。最後は両手でつかんでいるごみ袋の手を放す。

「ハクタカ。まだ近くにいます。」

「さっきゴミ捨てに……。」

「はい。いますよ。」

「ちよつとゴミ袋三つもってきて。」

「よーし。ハイパー朝の忙しい主婦にしてやる。」

「やめてください。」

そう言った声が泣きそうだった。

「……。」

「こんなことで18時まで。」

「よーし。後はだれがこのゴミ袋を向こうまで持ってくか。」

「バスケ部いるから。直通運転できないな。」

「確かに。今ゴミ袋が11あるわけだし全員で分担しても一つは持ちことになるんだよなあ。じゃあ、やっぱりジャンケンで決め……」

「それ嫌です。」

ハクタカ先輩がまずダツシユ。善知鳥先輩の足元に置かれているゴミ袋を二つ持って階段を駆け下り始めた。

「あつ。ハクタカ。フライング。」

善知鳥先輩も二つ持って部室から出る。

「はい。後は朝の忙しい主婦さんお願いします。」

「お願いされません。」

「バカ。い……今の確実に腹に入ったぞ。内臓飛び出るかと思っただじゃないか。」

「あつ。ごめんなさい。」

「はあ。しょうがない。残りは俺たちで分担するか。」

「お先に失礼しまーす。お疲れ様です。」

僕と木ノ本と楠先輩はそれを聞くとさっさと荷物を持って部室を後にした。

「よし。俺たちも帰るか。」

「待て。貴様らは絶対返さん。」

「なんでだよ。ナヨロンだけで運べばいいじゃないか。」

「一人だときついんだよ。」

残りは残された3年生が処理することになったらしい。

41列車 補修 掃除（後書き）

書いてませんでした。が、筆箱はちゃんと永島のところに戻ってきましたよ。

話は変わりますが、この小説は変に場面転換が多いと思います。恐らく僕自身の癖なのだと思います。この頃原作作って嫌って言うほどよく感じます。

そういう散らかったものでも読んでくれる人には感謝。

42列車 どうしたい

それから一週間。今は9月20日から9月23日までの4連休の真っただ中。9月21日。

「あれ。今日は留萌練習来てないけど。どうかしたのか。」
部活の先輩が室蘭にそう聞いた。

「えっ。」

練習の時はそんなのどうでもいいという感じだったが、昼になって全員それに気づいたらしい。

「練習休むってことあいつなかったのになあ。今のところ出席率100%（パー）だったのに。」

「でも、ちよっとこの頃ダルそうなところあったよな。」

「ついに噴き出たかあ。ふつつなら噴き出ないと思うんだけどねえ。」

「……………」

「まあ、毎日練習で体調崩したってこともあるかもしれないだろ。」

室蘭。今日練習終わったら今日どうしたか聞いてくんない。」

「ああ……はい。」

（留萌……まさかとは思っけど……。）

心の中で思っているだけにしておいた。

19時。練習終了。全員友達と帰ったり足早に帰ったりするやつと帰り方は様々。室蘭はある程度のところまでは足早に帰って、携帯電話を取り出した。メール機能を起動させて、あて先を留萌にして内容を書いた。

「今日練習来なかったけど、大丈夫。風邪？」

返信はすぐにあった。

「ごめん。忘れてた（汗）」

文面はこうなっていた。しかし、練習は毎日ある。そして、この文面からして、博多先輩が言っていた体調を崩しているということは

ない。

（忘れるようなやつじゃないと思うんだけどなあ……。）
今度は思ったことをそのまま文面にして、返信する。

「忘れるようなやつじゃないだろ。毎日練習してるんだし、ちゃんと来いよな。休みたいのは分かるけどさあ……。」

またしばらくたって留萌からの返信が返ってくると思っていたが、その返信がなかなか返ってこない。いつもならすぐに返ってくるのだが……。

（なかなか来ないなあ。もう返事来てもいい時間なのになあ。なんで……。）

その頃留萌は……。
（なんて返信すればいい……。自分の中でイメージはできてるのに言葉にできない。）

返信の内容に苦しんでいた。いつもならすぐに言葉が浮かんでくるのだが、今日はそうはいかない。なぜか言葉にする部分がくすぶっている。

「……。」
（言わなきゃいけない。それは分かっている。それだけなのに……。）

（忘れてたって言ってもやっぱり風邪だったのかなあ。ちょっと心配だし、電話してみるか。）

今度は電話帳を開いて、留萌の電話帳を出した。
携帯電話が鳴る。

（誰だろう。）
端末を覗き込むと携帯番号と室蘭友紀の名前がおどっていた。
「友紀からだ。」

言葉に出すつもりはなくても体が言うことを聞かない。携帯をとって決定ボタンを押して、耳元に当てる。

「留萌。」

電話の向こうから室蘭の声がする。

「さつきメールしたけど、返事とか返ってきそうにないから電話しただけだけどさあ。大丈夫。」

「うん。大丈夫だよ。心配かけちゃってごめん。」
留萌るもいのほうはいつもの応対をしたつもりだった。

（元気がない……。留萌るもいはいつもと同じようにしようとしているのかもしれないけど……。やっぱり何かおかしい……。そういえば、このごろ留萌るもい、木ノ本きのもとのことなんか友達じゃないように見ているのは……。もしかして、本当に。）

「友紀。」

「留萌るもい。正直に答えて。ソフト部辞めたいと思ってるの。」

「……。」「
自分が言いたいことを向こうから射抜かれる。」

「何。なんでそんなこと言うの。別にやめたいなんて……。」「

「どんなに自分の気持ちを隠せてもあたしにはわかるよ。」

「……。」「
「やりたくないんだろ。だったら辞めろよ。」

そういうと返事は返ってこなくなった。さらに言葉が続ける。

「このところ木ノ本きのもとのこと気にしてるのには気づいてたけどさあ、本心じゃあ鉄研行きたいんだろ。辛いソフト部続けてるより、そっちにいたほうが自分にとっては楽しいんだろ。」

「そんなこと言わなくても……。」「

「今だからそういいたいよ。そんな気持ちで部活に来る人なんかと練習したくないから。」

言葉のたびに声が大きくなる。

「このごろ鉄研に言った木ノ本きのもとのことがうらやましいんだろ。自分もいつかは木ノ本きのもとたちと一緒に笑いたいって思ってるんだろ。でも、今のままじゃそれができない。」

「……。」「

「素直になつて。留萌るもいはどうしたいわけ。」

「……。」「

しばらく黙りこんだ。

「友紀ゆきって何でもお見通しだね。」

「……。」

「もしかして、私が岸川きしかわに言った本当の理由も。最初から。」

「ああ。オープンキャンパス行って以来なんか変わったところがあるとは思ってたよ。」

「そう……。なら、友紀ゆきは……。」

「認めるも何もないって。行けよ。」

「……。」

またしばらく黙っている。

「友紀ゆき。ありがと。友紀ゆきのおかげで目が覚めたよ。私ってバカだよねえ。これだけのこと言うだけなのに、何十日もかかって……。」「やっぱり女子鉄って複雑なんだな。あたしには何もわからないけど、これだけ迷うんだからな。」

「ハハ。」

「でも、留萌るもいの母さんたち鉄研行ってくてこと許してくれるのか。」

「そんなの今考えても仕方ないよ。これからどうにでもする。」

「そう……。留萌るもい。また戻ってこいよ。」

そう室蘭むろいが言葉にする。すぐにその意図が読めなかったが恐らくこっぴどいことだろう。

「戻って来いって。もうソフト部に戻ることはないと思うけど。もしかして友紀ゆきもバカになったの。」

「……。そ……。そうだな。」

「ハハ。友紀ゆきにもそういうところあるんだ。」

「……。」

「じゃあね。友紀ゆき。」

「ああ。」

そう言って電話を切った。

(バカはどっちだよ。言葉足りなかったかなあ。)

ふと、自分が高校受験するときのことを思い出した。

「友紀早く、早く。見れなくなるよ。」

「何こんなところまで連れてきて。何か珍しいもんでも見れるわけ。」

連れてこられた場所は新幹線の線路沿い。新幹線は盛土でいまいる道をまたいでいる。

右からキーンという音がしてくる。すると木ノ本と留萌が手を合わせて、

「友紀が岸川に受かりますように。」

するとあたりを轟音がつつんだ。ちよつと視線を上げると黄色い車両が通り過ぎていくのが見えた。

「これで友紀はきつと岸川に受かるね。」

「えっ。どうして。」

すると二人は自分のほうを向いてニツと笑う。

「今見たでしょ。黄色い新幹線。あれ「ドクターイエロー」っていうんだけど、またの名を知ってる。」

当然知るわけがない。

「「幸せの黄色い新幹線」っていうんだよ。これで友紀には必ず幸せなことが起こるんだよ。」

（単純というか、子供というか・・・。）

「友紀っていま私たちのこと子供っぽいなあって思ってるでしょ。でもそれでいい。それぐらいじゃなきゃ面白くないし。」

その時自分の後ろでそう言ったのが留萌だった。

（戻って来いって言ったのは電車が好きなことを隠してなかったあの時。あの時になって戻って来いってこと。子供っぽいって思われるくらいになって戻ってくればそれでいい。）

42列車 どうしたい(後書き)

東海道・山陽新幹線沿線だったら「ドクターイエロー」。
なら、東北新幹線などの沿線だったら「East I」が同じ立場
になりますね。

43列車 新たなクルー

9月23日。夜。

「何。話つて。」

いつかは通らなければならぬところである。いつもは共働きで家にいないことが多い。だからこの申し出を言うのが今日になった。

「私。ソフト部辞めようと思つてる。」

いきなりこんなことを言うとは絶対反対される。それは承知だ。

「ダメに決まつてるでしょ。さくら分かつてるの。」

「分かつてるよ。でも……。今のままじゃいつか行き詰まるのは自分でもわかつてる。だからいつそのことやめて、違つ部活に入部しようと思つてる。」

「違つ部活つて。何に入るつもりよ。」

「鉄道研究部。」

「ふうん。それで、部費とかまた集めなきゃいけないものとかあるの。」

「部費は年間で14000円。私が入部するときは10月ぐらいからだと思つからまずは7000円。後年に1回いく臨地研修代が20000円くらいかかる。」

「また、そんな……。」「

話し始めようとした時、

「みずほ。お前席外せ。」

お父さんが部屋に入ってきた。

「あなた。」

（父さん。）

「みずほは席外せつて言つただろ。聞こえなかつたか。今この話にお前は邪魔なだけだ。」

「。。。。。」

それを聞くとみずほはさっさと席を立ちどっかにいった。

「さくら。まず聞くぞ。本当にやりたいって思ってるのか。」
うなずく。

「そうか。分かった。やる気があるならそれでいい。」

「いいの。」

「ああ。その代りやる気がなくなったらさつさとやめる。そんな部活入ったって仕方ないからな。……。さて、また俺の懐が寒くなるなあ。」

「えっ。部費とかも出してくれるわけ。」

「……。節約すればそれくらいどうにでもなる。」

「父さん。そんなことしてくれなくていいよ。バイトするから。」

「。。。。。」

そういうとすぐにリビングを出た。

思わず飛び跳ねたくなった。

その話が終わるとみずほがリビングに戻ってきた。

「あなた。。。。。」

「いいんだよ。あれで。ずっと親の敷いたレールなんて走りたくないだろ。ようやっとやりたいものが見つかったんだ。それを反対するなんて親としておかしいだろ。あれでいい。」

「。。。。。」

「俺はもう寝る。」

「えっ。寝るってまだ。」

「明日早いんだ。」

そう言っつてさつさと寝室のほうに歩いて行った。

翌日。

「えっ。さくらがソフト部を辞めるっ。」

朝学校に行っつて一番最初に聞かされたことがそれだった。

「またどうして。」

「まあ半分は木ノ本のせいって思っつたほうがいいよ。あんたが鉄研に入っつてなかつたら留萌だっつてこういうことはなかつたんだけどさあ。」

「なんで私のせいなのよ。どんな部活に入ろうが自由じゃないんだ
つけ。」

「そりゃそうだけどさあ……。」

噂をしていると留萌が教室に入ってきた。

「あれ。榛名早いじゃん。浜松駅で「富士」と「はやぶさ」撮って
来るんじゃないかったの。」

「その前に何でソフト部辞めるんだよ。」

木ノ本は留萌に当然の質問をする。

「……もうする気がなくなったから。じゃダメかな。」

「……。」

「木ノ本。そういうことはあまり詮索しないでおいて。」

すると室蘭は耳元で、

「中学の時にソフト部辞めてったあんたと同じ気持ちだと思うから。」

と耳打ちした。

(中学の時の私と同じか。……)

「分かった。理由はそれでいいよ。」

「ところでさあ、話変わるけど、いちばん早い部活っていつ。」

一番答えづらい質問である。活動日は決まっていない。プラス先輩
たち。特に善知鳥先輩が増やす部活がいつあるかなんて分からない。

「いや、いつあるかなんて分からないし。」

「なんで分かんないのよ。鉄研だろ。」

「鉄研でも分かんないもんは分かんないんだよ。」

すると誰かが木ノ本を読んだ。ドアのほうを見ると永島がそこに立
っている。

「永島。何しに来たんだよ。」

「いやあ箕島に教科書借りようと思ってさあ。箕島いる。」

「今日あいつ日直だし今はいないよ。」

「あつ。そうなの。……後、善知鳥先輩が言ってたけど、今日部
活あるってね。」

「そう。了解。」

木ノ本きのもとがそう言っているときドアのすぐ近くにはらわれている日課に目を通した。木曜日は国語総合、数学？、芸術、芸術、英語？、生物？。

「ダメだこりゃ。今日ないのかあ。」

「えっ。何借りに来たの。」

「現代社会。」

「ああ。そうなのか。ドンマイ。」

ため息をついて帰っていった。

「今の人って誰。」

席に戻ると留萌るもいが問いてきた。

「同じ鉄研仲間。昼になったら紹介するね。箕島君みしま以外。」

「で、今日活動あるの。」

「ああ、今日はあるって。だから先輩たちも後で紹介するから。」

今の心配は先輩たちの力オスさに留萌るもいがついていけるかどうかだけだ。

昼休み。

「今日から鉄研に入る友達の留萌るもいさくらちゃん。」

「へえ。「さくら」かあ。」

「永島ながしま想像してるものが多分違うと思う。」

「あっ、バレた。」

「バレバレだよ。」

（さっきの人この人かあ。）

「じゃあ何。もし名前があずさだったら想像するものが183系かE257系イか知らないけどあの「あずさ」になるってこと。」

「まあ、そんなところかなあ。」

「て、話脱線してる。」

木ノ本きのもとが話の脱線を訂正して、部員の紹介を進める。

「永島ながしまの隣に座ってるのが佐久間君さくま。佐久間君さくまの隣が醒ヶ井君さめがい。後は中学生と2年生と3年生だから。」

「ねえちよつと聞いていい。よく榛名から3年生は全員おかしいて聞いたけど、本当にそうなの。」

「うん。そういうところ多い人の集まりだよ。」

（こいつ。今はつきり言ったなあ。）

「まあ、今日部活あるんだし、その時になればわかるよ。」
「というわけで、放課後。」

「今日から皆さんの鉄研部に入る留萌さくらです。よろしくお願ひします。」

「留萌さくら。留萌さくら……。うーん。あつ。あだ名はルモタンでいい。」

善知鳥先輩がまず勝手にあだ名を考える。

「えっ。あだ名なんて。ふつうにさくらでいいです。」

「さくらじゃふつうすぎるもんねえ。サヤ。」

「また不法侵入部員かあ。」

「あの。入ってきた人がヒクからそういうこと言うのやめましょう。」

「……。」

「さくら。これが鉄研の先輩たちだけど、ついてこれる自信ある。」
木ノ本が耳打ちした。

「多分無理。」

「ですよー。紹介するけど、今さくらにあだ名つけたのが善知鳥
茉衣先輩。サヤって呼ばれた人は北斎院大智先輩。その奥にいる人
が名寄真佐哉先輩。通称ナヨロン先輩。多分話するならナヨロン先
輩が一番いいと思うけど。そして、そのナヨロン先輩の隣にいるの
が綾瀬健人先輩。通称アヤケン先輩。で、今ここにいないけど現部
長の鷹倉俊也先輩と桜の隣にいる女の人が楠絢乃先輩。」

「そうか。本当にすごいインパクトのある部活だな。」

「ハハ。そうでしょうね。」

「ていうか、あの永島の適応能力ってすごくない。あんな先輩たちとぶつうに話せてるわけだし。」

「いや、あんな先輩って。永島ながしまだつて善知鳥じつてい先輩とはあんまり話さないよ。永島ながしまがよく話すのはナヨロン先輩のほうだから。」

「ふうん。ナヨロン先輩ってなんかジャンルとかあるの。」

「車両鉄だからねえ。それもディーブな。」

「へえ。あたしと同じだね。」

「いや、同じって思うのはどうかなあ。さくらSL分かる。」

「分かんないけど。なんで。」

「ナヨロン先輩そこまでわかるから。」

「へえ。すごいなあ。」

永島ながしまと話しているナヨロン先輩のことが何となく神に見えてくる。

「何かほかの人はそういうことないのか。」

「えっ。アヤケン先輩は物作りが得意で、部活のモジュールも結構作ってるらしいけど、完成するとその呼びわりがゴミになるとか。」

「何それ。」

「サヤ先輩は電車が好きなのはわかるんだけど、時折間違うとか、鈍感とかそういうことがあって、善知鳥じつてい先輩は新快速しんかいそくを新幹線しんかんせんって言っちゃったり、「ムーンライトながら」の373系を313系と言い間違えたり……。」

「な……。それって間違うようなやつじゃないよねえ。どこをどう間違えたら特急列車が通勤電車になるのよ……。あつ、そうか。「ホームライナー」とか373系使ってるか。それで言い間違えるのね。」

「いや、善知鳥じつてい先輩そういうこと全然分かんないから。」

「……。ようするに天然ってわけね。」

「そう。天然。」

「おい。そこさっきからあたしのこと天然って丸聞こえだぞ。アヤノンの次のいじられ対象にするぞ。ルモタン。」

「えっ。どういうこと。」

「つまり、楠くすのき先輩の次にいじられる人。」

「いや、それ分かるけど、いじるって何するつもり。まさかコスプ

レ。」

「今のところいじるでコスプレはないから。」

「……。」

「コスプレかあ。いいかも。」

「……。」

「じゃあ、コスプレするんなら何が……。」

そう留萌るもいに聞こうとすると

「ここをメイド部にするなー。」

男子全員が声をそろえて言う。

「演劇部にもしないでください。」

楠先くすのき輩も続けた。

「分かったよ。全員なんでそういうこと嫌いなのかなあ。」

「文化祭の時に被った制帽だけならまだ許しますけど、それ以上は

許せません。」

「それ以上って制服もダメなのか。真似て作ったやつ。」

「そういう方面だけに凝りすぎ。」

「だってあたし家庭科以外得意な教科ないし。」

「だからって懲りすぎ。」

「……。」

（私この部活でやってけるのかなあ。）

鉄道研究部という船にまた一人クルーが加わったのだ。

数日後。宗谷学園では……、

「あれ。何か入ってる。」

下駄箱のスリッパの上に何かが乗っていた。

今回からの登場人物
留萌るもい寛太 留萌るもいみずほ

43列車 新たなクルー（後書き）

この部活動に萌えはありません。

44列車 差出人ヘッドマーク

宗谷学園では・・・、

「あれ。何か入ってる。」

下駄箱を開けてみると何かのスリッパの上に乗っかっていた。取り出してみると手紙だった。差出人は結構几帳面な人らしく封筒の中に入っている。封筒を裏にしてみるとイニシャルがあった。HM。

「差出人ヘッドマークさん。」

なんとなくギャグってみる。

「これが逆なら差出人ミュージックホーンさんになるんだけどねえ。」

封筒の封を切つて中の手紙を取り出す。文面は・・・、

「突然こんな手紙を出してすみません。今日もし、放課後何も用事がなければ3時45分に体育館裏に来てください。待ってます。」となっていた。

「明らかにラブレターじゃん。このヘッドマークさん、私に彼氏いること知つて送ってきたのかなあ。」

「ラブレターだつて。」

振り向いてみるとそこにはそのだ蘭田とくろさな黒崎がいた。そのだ蘭田のほうはラブレターという言葉に反応したのか目を光らせている。

「そんなのに首ツッコむなよ。」

「えっ。梓あずなだつて気になるでしょ。もしこれが梓あずなの大好きな鳥とり峨家君がやだつたら。心配なんですよ。」

そう言われるとくろさな黒崎の顔が真っ赤になる。

「ベ・・・別にそういう意味じゃないつてば。それに、あたしは・・・」

「ねえ、萌もえどう思う。」

「図星だよねえ。」

言い返せなくなったようだ。目線をそらした。

「まあ。梓あすなは心配しなくても大丈夫だよ。差出人はヘッドマーク。鳥峨とりがや家君のイニシャルはTDだもんね。」

「よかったねえ。梓あすな。彼氏は浮気してなくて。」

「う……うるさい。」

そうはいっても、今こう言った自分が恥ずかしくなった。全員の視線がこつちを見ている気がしたからだ。

「ちよつと場所変えない。」

「じゃあ、美術室行こうか。」

「私入っていいの。」

「分かった。教室に変えよう。」

「教室なんかでこんな話できないじゃん。」

「それ言ったら美術室でもこんな話できないだろ。」

「……。」

「よし。やっぱり教室で話そう。男子全然いないし。早い人でも8時だし。」

というわけで、教室に来てみると普段しまっている鍵が開いていた。そしてなかには男子が一人。

「……。」

「どこに行っても話せない話題じゃないか。」

黒崎くろさきが声を潜めて話しかける。

「じゃあ、小声で話せばいいじゃん。」

「多分それ無理。男子もそうかもしれないけどさあ、こういう話って話してるうちに声が大きくなってって、ヒソヒソ話にも何にもならないんじゃない。」

「ですよー。」

「そんなこんなで放課後……。」

「結局これの差出人が誰かも分からなかったけどさあ、本当に行く気。」

「うん。だってこの人のこと好きじゃないし。まあ、嫌いでもないけど。それに……今日は15時42分も54分も16時06分も

1000形だったからある意味助かった。」

（この人に会いに行く真の目的はそっちかよ……。）

（この人かわいそうだな。）

そう思いながら萌の後をつける。お互い気になるのだ。萌が体育館裏に入り込んでいくと誰かが立っている。それも初めて会う顔ではない。クラスの萩雅紀という人だった。

「坂口さん……。」

（萩君。確か萩君の下の名前って雅紀だったか。差出人ヘッドマー
クさん。）

「あ……あの。こういうこといきなりいう……。」

「ああ。ごめんね。私好きな人いるから。」

（単刀直入……。）

「あつ。そうなんだ。」

「そうだから。萩君とは付き合えない。ごめんね。」

「……なら……。」

そのあとにどう言葉が続いたのだろうか。萩はすぐに言うのをやめて坂口の横を歩いて行った。歩いていくと坂口の後ろをついてきた蘭田と黒崎の姿が見えたようで、視線をそらした。その姿が見えなくなるまで坂口に駆け寄った。

「まさか差出人が萩君だったとはなあ。」

よってきた黒崎がまず口を開いた。

「えつ。梓今頃。あたしはこのインシヤル見てすぐに萩君かなあつて思ったけど、あたしの知ってる萩君の字じゃなかったから自信持てなかったんだよねえ。」

「だから。安希はそういうことに首ツッコまない。」

「ていうか。萌にも好きな人いるんだ。」

「えつ。」

萌自身すべてが筒抜けだったとは思わなかった。

「なんだ全部聞いてたんだ。」

「うん。まあ。どうしても気になって。」

「まあ。分からないわけじゃないけどねえ。」

「ああ。せっかくだから携帯ケータイに録音しとけばよかったかなあ。」

「だから。安希あきはそういうことしないの。」

「大丈夫だよ。梓あずな。安心して。鳥峨家君とりがやがコクツたり梓あずながコクツたりするときは全部携帯ケータイに録音して、綾あやに送るから。」

「やめる。ていうか、何であたし限定。」

「ダメじゃないでしょ。」

「ダメに決まってる。綾あやなんかそれに送ったらクラス中に広がっちゃうじゃん。」

「大丈夫だつて。あさひが広げたときは学年中だったじゃない。それに比べれば規模は小さいよ。」

「いや。それあったからトラウマになってるんじゃないの。ていうか、学年中に広がった話つて何。」

「聞かなくていいし、教えなくていい。」

黒崎くろさきはそう言ったが蘭田そのだはそんな黒崎くろさきそっちのけでべらべらしやべりだした。

「中学の時に林間学校みたいなの行った。」

「うん。行った。」

「ナイトウォークラリーとかやった。」

「うん。」

「梓あずなってこう見えてもお化けとか全然ダメでさあ。ナイトウォークラリーやってる途中に同じ班の人がお化けの真似して梓あずなのこと脅かしたのよ。そしたら梓涙目あすなになって叫んでさあ。それで友達のほうはドッキリ大成功みたいなこと言ってるじゃない。それ聞いて少しは梓あずなも落ち着いたんだけど、さっきのショックが強烈だったみたいでさあ。腰抜かしたのよ。」

萌もえの傍らで聞いている黒崎くろさきの顔がどんどん赤くなる。

「それで、みんなでどうしようってなつてた時に鳥峨家君とりがやが「俺が集合場所までおぶつてく」って言ってね。」

「このバカ安希。」

「それで助けられたことあるんだ。」

「そう。それでそのあとどうも梓鳥峨家君あすひとしがやのことが気になったみたいでさあ。でも、コクレないままなんだよねえ。」

「……。」

「ふうん。」

黒崎のほうに目線を向けると、

「見るなー。見るなー。見るなー。」

真っ赤な顔で叫んだ。

「ところで、萌もえが好きな人って誰。」

「えっ。この学校の人じゃないよ。」

「何、別の学校。」

「うん。今岸川きしかわに行ってるんだけどねえ。梓あすひ見たことあるでしょ。

鳥峨家君とりがやに似た人。」

「えっ。あつたつけ。そんなこと。」

「あつ。覚えてない。なら、いいや。」

「岸川きしかわって言ったらソフト部だよねえ。でも男でソフト部はないか

ら……。」

「鉄研部てつけんに入ってるよ。」

「鉄研部てつけん。うわあ。その人オタクだなあ。」

「本人の前で言うのと怒るんだけどね。」

「何マニアっていえってか。今更どうでもいいだろ。大体オタクも

マニアもただ呼び方が違うだけじゃない。」

「ハハハ。でもそこは考慮してあげて。」

「よし。じゃあ本題に入るけど、その人とはいつからの付き合いな

の。」

考えるまでもない。

「付き合いっていうわけじゃないけど、その人と知り合ったのは小学校1年生の時。最初のころはその人全然しゃべらなくて、なんか1年生らしくなかった。ずっと一人で外眺めててさあ。」

「何。窓によさりかかってボーっとしてるって感じ。」

「うん。そんな感じ。授業中も先生の言うことまとも聞いてない
って感じでさあ45分の授業中に必ず8回外に目をやるんだよ。」
「何か規則性みたいなのもあったのか。それともその人の癖。」
「規則性みたいなのはなかったなあ。最初は癖って思ってたんだけ
ど、観察してる中でその人が外を向くときは必ずカタンカタンって
いう音がしてるってことが分かったんだよねえ。」

（さすが鉄研だな。）

「それで席が前後ろになった3学期に思い切って話しかけてみたん
だよ。そしたら今までのイメージだと想像できないくらい明るくて
さあ。電車のことふったらそのあとは電車のこと語りっぱなし。最
初は電車のことわかんなかったけど、そのうち私にもわかるように
なってさあ。最初はこんな感じ。」

（それで今がこれかあ。）

「じゃあ、そのあとはどうなったんだよ。」
「そのあとはその人の家に鉄道模型のレイアウトがあるんだけど、
そこで1日中遊んだり、その人の従兄に浜松駅まで連れてってもら
ったりしてもらった。そんなこんなで中学まで過ごしてさあ。その
人には好きとはいえなかったんだけど、今でもあいつ以外に彼氏創
ろうとは思わないなあ。」

「好きって気持ち確認してないのか。それ絶対終わってるだろ。」

「そうかなあ。私そういうこと思ったことないんだよねえ。」

「なんで。」

「なんでかはよく分かんないけど……。」

「……。」

少し萌から離れる。

「なんでよく分かんないのに好きのまままでいられるんだよ。」

「梓だったらよく分かるんじゃないの。鳥峨家君が持つてる雰囲気
とか。多分そういうのじゃないの。」

ヒソヒソ話から切り替えて、

「じゃあ、もう一つ聞くけどさあ。なんでその人にそんなにこだわ

るの。」

すると歩みを止めた。すると蘭田たちのほうを向いて、

「それこそ好きだからだよ。」

それだけ返答する。

「なんかそれだけじゃないような気がするんだよねえ。」

蘭田が疑ってかかった。

「なんか将来その人と一緒になるとかって思ってるのかなあ。」

ドキツとした。もちろんこのことを知っているのは木ノ本しかいな

い。それをなぜ蘭田が知っている。もちろん、蘭田と木ノ本に接点

はない。木ノ本は浜松市の芦原地区。場所で言うと浜松工場のある

あたりに住んでいる。蘭田は浜松市の高島。場所で言うと遠江急行

芝本駅付近に住んでいる。

「一途にそうなる時を待ってるって感じしない。」

「……。」

「あつ。梓に聞いてもダメかあ。梓も鳥峨家君と一途な恋愛してる

んだからなあ。」

「黙れ。」

（まさか。安希ってみんなの思考回路高性能コピー機。ああ、いつ

か私もナガシイの思考回路高性能コピー機になるのかなあ。）

ふとそういつ考えが生まれた。

44列車 差出人ヘッドマーク（後書き）

今はこういふことってしないですかねえ・・・。
でも、こういふことがあるからこそ創作なんですよねえ。

45列車 乗務員服（前書き）

発言だけです……。。

45列車 乗務員服

9月の末。岸川学園きしかわでは体育祭が行われる。

「もうすぐ体育祭かあ。やらなくていいのに。」
ため息が出る。

「本当だな。体育祭やる暇があるなら、車撮に行つてたほうがまだまし。」
木ノ本きのもとが続ける。

今日は部室に集合がかけられている。そのため部員全員が集められているのだ。

「肝心の善知鳥うつくしがまだ来てないけど。」

「前やらせたコスプレレースでもやらせるんだろ。俺出るの嫌だからな。」

「なんでだよ。ナヨロンは3年連続で出ればいいじゃん。お前のあれ結構似合つてたぜ。」

「恥ずかしいんだよ。クラスの全員がいる前であの格好は。」

「確かに。俺ももうあの恰好だけはしたくないなあ。」

アヤケン先輩も続ける。すると部室のドアが開いた。

「お待ちせー。」

息を切らしている善知鳥うつくし先輩の姿がそこにある。片手には岸川きしかわのバッグではなく紙袋を提げている。

「善知鳥うつくし先輩。それなんですか。」

「えっ。ああ。これ。」

そういうと紙袋の中に手をつ込み帽子を取り出した。ただの帽子でないのはすぐに分かる。

「ジャーン。」

そういうとあからさまに僕の頭のをかぶせた。前かぶせられた時と同じような感覚がある。前オープンキャンパスに来たときにかぶせられた制帽だ。

「……これって運転手とかの制帽ですよねえ。」
木ノ本きのもとが問う。

「そうだよ。膳所ぜんせさんが持ってたやつ借り手あたしたち用に作ったやつ。男子のやつばっか大量生産してたからほとんど男子のだけど、女子のものもあるよ。ほら。」

「……」
「いくら得意教科が家庭科しかないって作りこみすぎ。これ凝って
いすぎるんだよ。」
サヤ先輩が口をはさむ。

「しょうがないじゃん。部活やってる日以外暇なんだもん。」

「高校3年生になってそう言うのはよそうぜ。」

「あおう。善知鳥うんちゅう先輩。これをどうしろと。」

「えっ。決まってるじゃない。体育祭の文化部対抗リレーの時これ
かぶってレースに出るのよ。」

「……」
「当然1年生がね。」

ちよつとの間自分に渡された制帽を見る。

（これをかぶって走るのかよ。）

「ああ、あと体育祭の時は冬服持って来いよ。」

「えっ。暑いですよ。」

「バカ。伝統事業だぞ。ワイシャツ着て、ネクタイしめて、冬のズ
ボンで走る。これ鉄研てつけんの定番だからな。」

（知るか。）

（やっぱり私入る時期間違えたかも……。）

（よく絢乃あやの先輩これやったよね。）

（……。）

（マジかよ。）

（なんで冬服。ふざけんな。）

「そういえばさあ、去年の体育祭の部活どう対抗リレーって誰が出
たっけ。」

善知鳥先輩が問題を振る。

「えっ。去年は俺とナヨロンとアヤケンとハクタカと膳所さんと上野さんが出た。」

その問いにはサヤ先輩が答えた。

「あれ。アヤノン出てなかったっけ。」

「出てないよ。制服の上がワイシャツでネクタイでも下はどうしたってスカートなんだからさ。それ以前にアヤノン出たくない出たくないってさんざん言ってたじゃん。それで膳所さんと上野さんが出たくない人を無理に出させるなって言ったんだぜ。」

「あれ。そうだったっけ。」

「去年のことぐらいちゃんと覚えとけよ。」

「まあいいわ。で出るやつは・・・、ナガシイとミツシイとサメちゃんとユウタンとイサタンとソラタンとアサタンは出ることに決定か。」

「おい。多すぎ。6人で十分だつて。6人で。」

「あの。僕実行委員で運営とかの方に回らなきゃいけないので、多分出れません。」

箕島が断りを入れる。

「じゃあ、これで6人じゃん。これでいいよ。」

「ちよつと待つて。」

そういうと善知鳥先輩は木ノ本と留萌に最接近した。

「ハルナンとルモタンは出たくないの。」

「出たくないです。とてもじゃないけど恥ずかしすぎて・・・。まず留萌が答えた。

「恥ずかしいって。将来運転手とかになったらいやでもこの格好しなきゃいけないんだよ。」

「いや、そうじゃなくて。友達の前でこれをかぶらされるっていうのが・・・。」

「去年アヤノンだつてそう言ったつて。」

（なんの説得にもなつてない・・・。）

「ハルナンは。」

「私だつて出たくないです。」

（そりゃそうだよなあ。部活入るときにも女子が入っていいのかって思った部活だよ。こんな格好できるわけない。蘭らんにもみられるじやん。）

「なんだ。二人とも出たくないのかあ。よし。ちよつと男子全員外に出てくんない。」

「何やらせるつもりだよ。」

「着替えさせるの。だから男子全員外に出てって言ってるの。それとも、女の子の裸が見たい変態どもしかいないのか。」

「。。。。。」

「ハイハイ。とりあえず全員外でろ。」

サヤ先輩が促して、部室の中は善知鳥先輩しんちうと楠先輩くすのきと木ノ本きのもとと留萌るもいだけになる。

「さてと、男子がいなくなったところで着替えさせるか。えーとま
ずは、アヤノンから。」

「なんでまたあたしからなんですか。」

「いいだろ。こういうときはいつもアヤノンからって決まってるんだから。」

「そんな方程式ありません。」

「ていうか善知鳥先輩しんちう。冬服もないのにどうやって着替えさせるつもりなんですか。まさか下着だけになれとは言わないですよねえ。」

「それは言わないよ。これを見る。女子の制服はあたしが大阪おおさかに行っている間に作ったんじゃない。徹夜して。」

（恐ろしい能力だな。）

その頃部室の外では・・・、

（さつきからの会話筒抜けだよ。）

「アヤノンってうざいんだなあ。あたしよりちよつと胸大きいでしょ。ハルナンはどう思う。」

「そこに注目しないでいいです。」

「早くこれ着る。」

「絢乃先輩似合ってますねえ。」

「本当は今ここにいる全員にも見られたくないんだけど……。」

「ちよつと写メらせて。そしてこの写真をハクタカに送る。」

「やめてください。こんな格好バカタカにも見られたくないです。」

「よし。次はハルナン。アヤノンそれ脱いで。でハルナン。ハルナンもポロシャツ脱いでね。」

「さらつと脱げて言わないでください。」

「何。もしかしてノーブラ。ノーブラじゃ見られたくないよねえ。」

「そういうわけじゃありません。」

「……。」

「ああ。耳が痛くなる。」

「……。」

「なんか鉄研の男子肩身狭いですね。」

「ナヨロン先輩に振ってみる。」

「そうかもな。善知鳥がハイテンションすぎるんだつて。まあ、あのハイテンションだけならムードメーカーとしての作用は抜群なんだけどなあ。」

「ナヨロン先輩は相当迷惑そうな顔をした。」

「うわ。ハルナンもあたしより胸大きい。もしかしたら鉄研一貧乳かも。」

「これ絶対外まで聞こえています。」

「……。」

「善知鳥のやつ。後輩はお前の着せ替え人形じゃないつうの。」

「また10分くらいたつと部室に入っていいといわれた。部室に入ってみると留萌がさっき言っていた格好をしている。服の色は黒だから冬服だろう。」

「サヤどう思う。」

「まあ。かわいいんじゃない。」

「とうの留萌は顔が真っ赤だ。こっちを見ないでと言わんばかりに目

線をそらした。

「……。」

こういう描写はちょっと前に自分も経験したことがある。ちょっと前といってももう1年位前のことだが……。

「ナガシイ。ちょっとこっち向いて。」

「えっ。」

振り向いてみるとそこには萌もえと端岡はしおかと磯部いそべの顔がある。

「うわ。萌もえマジでナガシイ君デコっちゃってるよ。」

「顔つきがちょっと女の子よりだから一見したら女子に見えるかも。」

二人がそう言っている。

「何。俺の顔に何かついてるのか。」

「えっ。まさか、ナガシイ君気づいてないの。」

そういうと磯部いそべがカバンから手鏡を取り出し、

「あっ。」

鏡に映っていた自分は目のあたりまでかかっていた前髪をヘアピンで分けられていた。その時萌もえが僕の後ろに回って後頭部のあたりを指でなぞった。

「気づいてないとは思わなかったよ。ナガシイって結構鈍感なんだね。」

そう言われて後頭部に手を当ててみる。すると何か髪を束ねられている感覚がある。当てた手をずらしていくと束ねてある根元があることに気付いた。

「おい。萌もえ。これいつやった。」

「朝のバスの中。ナガシイ寝たまんまで起きないんだもん。」

ということは……。今は16時。つまり僕は7時間以上このままでいたことに気付かなかったのである。

「お……お前。」

「ハハハハ。怒らないでね。」

「……」。怒りたくなるわ。ていうか。俺、この格好で写ってる写

真つてないよなあ。」

そっちのことが心配になった。この格好はよく家ではされているが、外でやられたのはこの時が初めてだ。

「さつき法隆寺で、学級写真撮ったわけだし、卒アルにはこの格好で載ることになるね。」

「こらー。」

「ハハハハ。ホテル着くまで取らないですよ。」

こういわれた時。僕は初めて萌もえと話してて恥ずかしいと思った。

「・・・シィ。ナガシィ。」

「えっ。」

「何ポーっとしてるの。制服のルモタンにうつとりしてたのか。」
横から怒ったような顔で善知鳥先輩の顔がのぞいている。

「してませんよ。」

(ていうかさくらにほれてたら問題だよなあ。永島ながしまの好きなやつさくらじゃないし。)

「ウソだろ。」

「ウソじゃありません。」

こういうときには口調が少し焦るだろう。しかし、なぜか口調が焦らなかった。淡々と返答して、

「いいんじゃないですか。似合ってると思うし。」

「よかったな。ルモタン。みんな似合ってるって。」

「・・・。」

「さあ。もう一度男子全員外に出てよ。これからルモタン脱がすかよ。」

善知鳥先輩に押し出される形で部屋の外に出る。

「さあ、ルモタン脱いでね。脱ぐの大変だったらあたしも手伝うよ。」

「

「別に手伝ってもらわなくても・・・ちよつ。善知鳥先輩パンツま
で脱げちゃいます。」

「大丈夫だよ。脱げちゃうって言うても現実脱げてないから。」

「そういう問題じゃないでしょ。これじゃあ善知鳥先輩が変態なんじゃないかって思っちゃうじゃないですか。」

「何。アヤノン。あたしは変態じゃないぞ。女子が女子を脱がしてどうするんだよ。」

「どうするんだよって・・・。今現実にそれをやりましたよねえ。」

「スカートは板から次は上か。ワイシャツ脱ぐときはあたしの視界に入らないように脱いでね。もしそうしなかったらブラ取るから。」

「そういうことが変態に等しいです。」

「だってみんなあたしより胸大きいんだもん。なんかイタズラしたくなるんだよねえ。」

「・・・。」

もちろん着替えているときの会話も筒抜けだった。

45列車 乗務員服（後書き）

どこの鉄道会社もそうだと思いますが、乗務員の制服は男女ともワイシャツ・ネクタイ・上着・ズボンなんです。もちろん夏服・冬服の違いはあります。

46列車 体育祭

数日後……。

「ああ。体育祭かあ。ダルイイ。」

大きなため息をついた。

「ハハハ。また家で模型いじってたいって言うのか。」

宿毛すくもが隣で笑っている。

「それしたいよ。学校にあんな大きなレイアウト持ち込めないからさあ。」

「確かに。持ち込めないな。まあ、持ち込めたらそれはそれですごくいいけど……。」

「そういえばさあ、俺何と何と何に出るんだっけ。」

「それくらい覚えとけよ。」

教室に行つて体育祭の選手名簿を開く。僕の名前は100メートル走と騎馬戦に名前が入っていたが、騎馬戦は補欠だった。

「騎馬戦補欠かあ。まあ補欠でせいせいしたけど。」

「騎馬戦お前弱いもんな。中学の時は開始5秒くらいで落ちたっけ。」

「うん。まさか後ろにすぐ回り込んでくるやつがいるとは思わなかったもん。」

僕は手を頭の後ろに回して窓辺まで行く。窓から外を見てみるとグラウンドが見える。外は当然のことだが体育祭の準備が進行している。

「それもそうかもしれないけど、お前の場合はケンカとかああいうやつやりたくないだけだよなあ。」

「……まあそつちのほうが大当たりだね。」

すると教室のドアが開く音がした。入ってきたのは同じクラスの女子。

「早いなあ。いつもこの時間に来てるわけ。」

「ああ。玉名さんこそ今日はやけに早いな。」

「別に体育祭張り切ってるってわけじゃないよ。ただ、朝なら誰もいないかなあって。」

「朝早く来るなら7時40分前に来ないと。」

「えっ。そんなに早いのか。眠くならない。」

「眠くなったことはないな。勉強の時だけは別。永島の場合は夜見たい番組とかないし、それでさっさと寝ちゃうって感じだけ。」

「ふうん。まあ。人それぞれってことだね。あたしなんか今日の2時に寝たから眠くてしょうがないよ。」

「よく起きてられるなあ。」

「はたから見たらそんな感じだよねえ。永島君って結構夜遅くまで勉強してるって感じるけどそうじゃないんだ。」

その言葉には宿毛も僕も開いた口がふさがらなくなった。

「玉名さんそれ偏見。こいつテスト前あんまり勉強してないでクラストップだし、これまで四ツ谷のノート一度も出したことないぞ。」

「えっ。マジ。」

これには玉名さんもびっくりしたらしく目が点になっている。

「な。うざいだろ。普段こんな感じのオチャラケでクラストップだぜ。」

「いやあ、それほどでも。」

(褒めたつもりはないんだけどなあ。)

「・・・でもさあ、永島君って性格悪くないし女の子から結構モテてるんじゃないかなあ。」

「確かに。性格は悪くないな。」

「なんだよ宿毛。その言い方は。」

「冗談だって。性格も含め全体的に悪くないって。実技を除けば。そう言い合っているところを見ていた玉名が笑いながら、

「永島君ってなんか一つ一つの行動が笑えるからさあ、他クラスでも噂されてることもあるよ。」

「なるほど。この頃風邪ひいたかなあって思ってた根源はそれかあ。」

「……。」

「俺って女子と話したことはあってもモテたことないからなあ。女子からなんか言われたりされたりしたってことはヘアピンつけられたことがあるとか、でっかい子供って言われたりとか……それくらいかなあ。」

「へえ。いじられキャラなんだな。」

「うん。俺結構いじられてるから。」

「それって全部坂口じゃないか。」

「しょうがねえだろ。俺いじるのあいつくらいしかいないんだから。」

（鉄研の女子と以外話してるところ見たことないからなあ。でも、その人と恋愛っぽいことはしてるんだ……。って十分モテてるじゃないですか。）

「ごめん。ちよつとクラティに着替えてきたいんだけど。」

「いいよ。行つて来い、行つて来い。」

そういうと玉名はクラスティーマットとハーフパンツを持って教室を出て行つた。恐らくトイレで着替えるのだろう。数分するとクラスティーマット姿で教室に戻つてきた。

ドアが開く。その音で僕は寝た姿勢から体を起こした。

「永島君。寝てたの。」

「寝てないけど、立ってるのダルかっただけ。」

「えらい違いだよなあ。お前に鉄道が付いただけであれだけ変貌するんだからさあ。」

「鉄研やつてる時の永島君と普段勉強してる時の永島君ってギャップすごいよねえ。まず部活やつてる時と勉強してる時と声違つし。」

「そう。俺はそんなこと意識してないけど。」

（意識せずに変えられるんだからすごいよねえ。）

なんか話が詰んだように黙り込む。

「なあ。そろそろ外いかねえか。」

「宿毛君すくも気が早い。まだだれも来てないじゃん。」

「そうそう。8時25分くらいになつたら行けばいいって。」

「永島君ながしまは気長すぎ。」

8時20分までの間に僕も宿毛すくももクラスティーシャツに着替えた。それから運動場に自分の席を持って移動し、1年5組の所定の位置に席を置く。その頃には集まっていなかったメンツも集まった。運動場は色とりどりのクラスティーシャツが埋めている。それぞれのところどころで色が違ってカラフルだ。

それに目をやっているとな誰かが僕の肩をたたいた。肩をたたいた人は新城しんしろという人だ。当然だがクラスメイトだ。

「お前100メートル1位とれよ。」

そう話しかけてきた。確か新城しんしろは200メートル走とホームルーム対抗リレーにエントリーしていた。相当足が速いということだろう。

「1位は取りにいかないけどビリも取にいかない。そこそこ頑張るよ。」

「そこそこって。お前クラス1位だろ。それくらい頑張れよ。」

「ヤダ。運動だけは頑張りたいくない。」

そう返答しておいた。

9時。開会式で体育祭が始まる。最初は100メートル走。さつさと終わらせてあとは休む算段。結果は8人中4位。半分くらいがちょうどいい。

そのほかの種目で5組はそこそこの成績。良くも悪くもないという中間を走る競技もあつたが頭一つ出る競技もあつた。そんなこんなで午前中の部は残すところ部活どう対抗リレーだけになった。最初は文化部。その次に運動部がやる。

言われていた冬服をクラスティーシャツの上から着る。いくら残暑がなくなつたとはいえこの格好になるとさすがに暑い。まだブレザーがないだけましなのだが・・・。

「よーす。持ってきたなちゃんと。」

善知鳥先輩ぜんちうがいつの間にかこっちに来ていた。後ろには同じく冬服

に着替えた醒ヶ井、諫早、空河、朝風の姿がある。

「これで全員そろったな。よし。行けー。」

善知鳥先輩に押される形で入場門のところまで行かされる。

「あつ。言い忘れてた。これがバトンよ。汚さないでよね。ちゃん
と走るときはこれしてよ。」

持ち出したのはやはり制帽。その制帽のつばの上にはヘルメットの
ような留め具が収納されている。よくここまで作りに凝ったもので
ある。第1走者は諫早。これをかぶると嫌でも国鉄の職員に見える。
「よし。これでよいい、ドンって言った瞬間にチャカをぶっぱなす
か。」

「それで俺の前に言ったら殺すっていうんだろ。」

空河が続ける。

「いや、動いたら殺すっていうんだろ。」

朝風が続ける。

「それプラス止まったら殺すっていうんだろ。」

ついでに僕も続けた。

「八方ふさがりじゃねえかよ。それ。走っても殺されるし、動いて
も殺されるし、止まっても殺される。」

「いや。それって自分が動いてなかったらいいんだろ。チャリとい
う選択肢があるじゃないか。」

醒ヶ井まで話に入ってきた。

「なんでですか。チャリ使ったら自分が動いちゃうじゃん。」

「考えてみる。確かに動いてるけど動いているのはチャリであって
自分じゃない。」

「よし。そう来たらロケランに吹っ飛ばすか。」

「違う。プラスチック爆弾で吹っ飛ばすんだろ。」

「いやいや。チャリの動力源をチャカでヘッドショットするんでし
よ。」

「いやいや。核爆弾で吹き飛ばすんだろ。」
「すこい会話だ。話した順番は諫早、空河、朝風、僕の順番。」

「あなたは俺たちを殺す気か。」

中学生全員が声をそろえてツッコんだ。

レース開始。順番は諫早、醒ヶ井、空河、朝風、僕、佐久間の順番。諫早がまず10人中4位につけ、醒ヶ井も10人中4位。空河のところでも一度5位に落ちたが、朝風が快進撃。3位につけ、僕のところでも3位をキープ。最後に佐久間ががんばって2位につけたが、パワーダウンで4位に落ち、そのままゴールした。

終わると制服の中に熱がこもってとても暑い。汗がじわじわにじみでてくる。

「あー。暑い。」

「永島君。ちょっとそのままです。」

「えっ。」

その声が出たほうには朝話していた玉名さんともう一人別の女子が立っている。

「ちょっと写真撮らしてもらっていいかなあ。それあんまり見れないし、結構似合ってるし。」

結構似合っているというのは頭にかぶったままでいる制帽だろう。

これはさつき佐久間が僕にかぶせてきたもの。さつきから頭に照り付けてくる太陽を少しさえぎれるならという思いでかぶったままでいるのだが……。

「マジ。これ暑すぎて死ぬんだけど。」

「そこをなんとか。」

「……。はあ。分かったよ。」

「こいつと一緒に撮らしてもらっていい。」

玉名がそう言うてきた。いくら坂口が勘違いしないからってそれはまずい。それだけは断った。写真を撮影が終わったところで元のクラスティーマットに戻る。本当に暑い。クラスティーマットの中と外の空気を少し入れ替えて、かぶったままでいた制帽を善知鳥先輩に返しに行く。その間はもちろんかぶったままで。

校舎側にいる3年生の観覧席に回って善知鳥先輩を探す。探し始

めて数秒すると見つかった。

「善知鳥先輩。これ返しに来ました。」

そう言うのと、

「えっ。部活の後輩。」

善知鳥先輩のクラスの人と思われる人が群がってくる。

「そうだよ。」

「かわいい。」

「……。」

「なんか小学生がそのまま高校生になったって感じ。まさかの飛び級とか。」

「こんなに背の高い小学生いるか。いくら背が高いつて言ってもうちよつと小さいだろ。」

「あ……あのう、これ……。」

「あつ。うん。ありがとう。」

「ちよつと待ってよ、茉衣。せつかくだから写メらせて。」

「あつ。そういえばあたしもナガシイの写メ取ってなかった。」

(だからなんでそういう話になる。)

しばらく3年生にいじられまくって、自分の席に戻ってきたころには午前の部は終了していた。

午後の部はと呼ばれしない。騎馬戦はずっと補欠扱いのままだったので呼ばれることはなかった。後は男子・女子のホームルーム対抗リレーくらい。その応援をやって体育祭は終了した。

「はあ。終わった。今の時刻は15時30分。いつものやつじゃ帰れないね。」

「そうだな。まあ、体育祭がいつもと同じ時間に終わると思っ
ないけど。この後終礼があつて着替えて解散だろ。まだ15分くら
いはかかりそうだな。」

「うーん。帰るやつは1000か2000か。そっちのほうが心配
だな。朝1000系だったし。」

「心配することか。それ。」

その頃3年生は・・・、

「今日のあれなんだけどさあ、あれ正直体操服のままでもよかった気がしない。」

「おい。おれ知らないぜ。それ1年生が聞いたら絶対キレるぞ。」

「サヤ。そこはあえて知つといて。」

左手に善知鳥じゅんちゅうが縋り付く。

「ちよつと離せ。」

「知っておくつて言うまで・・・。」

「はいはい。分かったよ。」

善知鳥じゅんちゅうがサヤの左手を離すと、

「んじゃ、俺は知らない。そついうことで。」

「あつ。知つとけー。サヤのゴミー。」

なお。これが終了してもまだ新体力テストの持久走のほうが残っているのだ。

今回からの登場人物

たまな
しんしろ
玉名 新城

46列車 体育祭（後書き）

こんな小説でも作ったことに意味がある。この世にあるすべてのものは何らかの形で意味を成す。たとえそれがどんな意味を持つとも。

47列車 持久走

後期に入って最初の金曜。10月2日。

「今日は持久走かあ。」

隣に座っている宿毛がため息をついた。今は遠江急行1000系第4編成の中。

「そうだな。お前制服の下に体操服着てるのか。」

「着てねえよ。その代りっていう感じでシャツは着てるけど。」

「それって駄目だよなあ。校則的に。」

「……。かたいこと言うなって。ていうより俺は持久走よりも四ツ谷が今日もノート出せって言わないかっていうほうが心配。今日はやってきてないから。」

「あつ。まだそれやってたんだ。」

「我ながらよく続いていると思うよ。」

「……。」

今日はまず学校ではなく持久走を行う。岸川学園では新体力テスト持久走は学校ではなく別な場所で行っている。浜松球状の近くにそのグラウンドがあるらしいが。

その場所は江急上島が一番の最寄り駅。その数百メートル東に遠州鉄道の上島がある。上島で1004から降りて、改札を出て、駅の外に出る。駅を出るとすぐに道にぶち当たる。その道は幹線道路から外れているので車の数も少し少ない。

「そつえば、今日ふつうに金曜日だったな。」

その光景を見た宿毛が自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

グラウンドのある方向に歩いていくとすぐに坂がある。その坂を上ると片側2車線の道路が現れる。確か名前は飛龍街道だったはずだ。僕は道には全く詳しくない。覚えている道といえは家から駅まで行く道と学校まで通う道だけである。

数分すると目的地であるグラウンドが見えた。そこにはまだだれ

も来ていない。来ていたのは陸上部の人だけ。クラスの陸上部員希望君も来ていた。すると希望は僕たちのことが目に入ったみたいでこちらに歩いてきた。

「よーす。お前ら早いなあ。」

誰もが言ってくる第一声がこれなっている気がするが……。

「ああ。電車混むしな。」

「学校もいつもこれくらいに来てるのか。」

「うん。そのあとの混むから。4号車でも。」

「……なるほどな。さすが鉄研だ。」

そういうと希望は後ろの観覧席らしきところを指して、

「あつちの席のところ俺たちの座る場所があるからそこ行つときな。」

と言った。

希望が言ったところに行つてみると1組から順番に紙が貼つてあった。ここに座れという意味である。全席指定であるというのはちよつと気に食わないが……。

8時30分になるまでの間に1年生が集合しきつたと思う。でも、自分がそう思っているだけに過ぎない。ふつうに遅刻してくる連中はまだいる。その人たちの集合が終わつてようやくと本題である持久走に入った。

最初は当然のことだが準備運動。準備運動をしたら一周走る。もちろんアップなので飛ばす必要はない。それが終わると観覧席に戻つて人休憩。その頃には最初に走る特進コースの男子が準備していた。

「はあ。走るのダルい。」

「だるいとも言つてられないんじゃないか。これクリアしないと体力テストいい結果なんかでないぜ。」

「結果なんてどうでもいいよ。だって走れば問題ないんだもん。途中で歩いたりしなければいいだけじゃん。」

「……根本はそこかもしれないけど。」

「1年5組と1年6組男子の前半。移動しなさい。」

アナウンスが入って僕の周りにいる男子が席を立ち始める。

「俺たちも行くか。」

宿毛すくもが促した。

観覧席からフィールドに降りて、今走っている1組男子・2組男子・3組男子の前半の邪魔にならないようにトラックの真ん中に入る。

「1位は間違いなく希望のぞみだよなあ。」

独り言を言った。

「希望のぞみかあ。そうだろうな。早そうだもん。」

そう言っていた会話は希望のぞみには聞こえていたらしい。

「そうとも限らないってことはこの世の中多いんじゃないか。俺の予想じゃ1位は新城しんじょうだな。」

「なんで。」

「俺どちらかというと短距離だから。長距離苦手なんだ。だから1位は新城しんじょう。」

なんか意外だった。

3組男子の後半と4組男子が走り出したところで次が僕たちの番。それまでの間僕は宿毛すくもと話していた。その中身は何のたわいのない話。その話の間にこのグループのトップがゴール。記録は5分を切つたらしい。しきりにそういうのが聞こえた。

次は僕たちの番だ。スタートラインに並ぶように促される。

「これってビリっていうのとトップっていうの嫌だよなあ。」

「お前はクラストップなんだからこれでもクラストップ取りに行けよ。そうすれば女子にモテモテだぜ。」

「そんなことしたくねえよ。目立つから。」

（いや。今でも十分目立ってると思うけど・・・。）

その会話を交わした直後。スタートの号砲が鳴った。

それと同時に全員が走り出す。この中では比較的前のほうにつけた。そのあとは前の人を見据えてただ引っ張られていくだけ。どこ

までついていけるかは持久戦だ。

1周で400メートル。2周で800メートル。1500メートルある持久走はこれを3周と4分の3周する。ゴールは観覧席の一番南寄り。ここまで走って順位表をもらい先生に提出する。それが僕たちのタイムとなる。

1周目は少々速いペース。2週目からペースがだんだん落ちてきて、3周目ではへとへとの状態。これは自分の配分が悪いだけだ。そう自分に言い聞かせた。何とか走り切ってゴール。タイムはゴールする前にチラツと見た。5分58秒。

ゴールすると態勢が崩れた。ももに手を置いて息を整えようとするが、こんなすぐに息が整うわけない。足を動かそうとすると思うように動かない。とても足が重いのだ。そんな足で何とか記録員のところまで行つて9と書かれたカードを提出。そのあとは周回遅れの邪魔にならないように観覧席側に戻る。

戻っている間に宿毛すくもが話しかけてきた。

「はあ。ながしま永島。お前何位。」

「9位。」

「そうか。7位。」

「そもそも体力テストで勝負つて無理じゃん。俺よりお前のほうが成績いいんだから。」

「そうでもないだろ。数十秒くらい差があるんだつたら別だけどこんな僅差で得点が違つてことはありえないんじゃないのか。」

「ありえねえけどさあ。ボール投げとか俺致命傷なのが多いしそういうところで逆転とか無理つてこと。」

「ハハハ。」

とところどころ途切れながら肺の中に酸素を送り込む。僕は靴のつま先をずりながら観覧席のところまで行つた。

「はあ。疲れたー。」

自分の荷物が置かれて席に座ると大きな声を出した。

「他がびっくりするだろ。ちょっと抑えろつて。」

「はあ。」

宿毛すくもがそう言ってもとうの自分にはその気はさらさらない。吐く息のついでに声も出した。

「ああ。この後授業だろ。」

「そうだな。」

「ああー。だるーい。なんで持久走走った後に授業あるんだよ。なくていいじゃん。帰らせる。」

「……今日部活とかないのか。」

「ないよ。」

だが、すぐにあることに気付いた。

「あつ。て。明日だった。なんで今日ないんだよ。」
すぐにだれた。

11時ごろ。ようやっと持久走が終了。ここから返れると思うのは大間違い。何度も言っているが午後は授業があるのだ。

「永島ながしま。学校までどうやってく。やっぱりバスか。」

宿毛すくもが提案してきた。路線バスはこれまで出雲工業いづみこうぎょうのオープンキャンパスに行つて以来使つたことがない。実に一年以上路線バスに乗っていないのだ。観光バスはというと臨地研修の時に乗つた。そんな話はどうでもいいか。

「なんでバスなんか使つんだよ。混むじゃん。」

「そういう理由でバス使いたくないって落ち。」

「うん。」

「……あつ、そう。じゃあ学校まで歩いてくのか。」

「まあ歩いてくけど……。」

(そう言えば上島かみしまから涼ノ宮すずのみやつて3分かかったなあ。そんなに距離があるようには見えないけど結構あるのかなあ。だったら上島かみしままで戻つて電車で行くつていうのも手かあ。……。まてまて。確か今日は1000系に乗ってきたんだよなあ。もしここでまた1000系が来たら。それに当たらないためにはこのまま歩いていくほうが賢いかあ。)

「まあ、どうした。」

「なんでもない。よし歩いて行こう。」

(これ絶対何か考えてたよなあ。)
いつものこと。そう思った。

1組から順番に会場を出ていく。会場の西側はちよつとした坂になつてゐる。その坂を上りきると道が西へ延びてゐる。それを曲がらずにまっすぐ行くと学校に通じてゐる道に突き当たる。その交差点を左に曲がる。近くには櫛町西のバス停がある。そこにはさつき出て行つた人たちの姿もあつた。バス停には帰りの岸川高校前みたいに人があふれてゐた。

「あすこまでしてバスに乗る気が起きるのが信じられないな。」

(おいおい。)

「バスは二酸化炭素を吐き出して地球温暖化に貢献してるんだぞ。そんなのに乗るなあ。」

(そこまで言うか。)
「……。地球温暖化に貢献してるって。確かに二酸化炭素を排出してるならそういうことになるかもしれないけど貢献って。俺が思うにその貢献度数が一番高いのは車とかバスじゃなくて飛行機だと思つが。」

「よし。じゃあ、飛行機を核爆弾で……。」

「お前の破壊論は核爆弾以外ないのか。」

「えっ。他にもあるよ。ロケットランチャーとか対戦車ライフルとか火炎放射器とかマシンガンとかレーザーキャノンとか。」

(こいつにまともなんて言葉はないかあ。俺がバカだった。)
ずっとこんな話をしていたわけではないが、話をしながら学校を目指す。学校へ歩いている間に数回バスに追い抜かれていったがそのバスはほとんど岸川の生徒で込んでいた。そのたびに僕は「地球温暖化に貢献している。」という話をした。

そんなことで30分ほど。岸川学園に到着した。1年5組のクラスにすぐに向かった。クラスには自転車で先に着いてゐる佐久間の

姿もあつた。

「永島^{ながしま}。お疲れ。」

「ああ。疲れたよ。」

「そうだ。お前何位だった。」

「えつ。9位だけど。ていうか佐久間^{さくま}もともと陸上部だったんだし、

お前のほうが速いんじゃないのか。」

「そんなことないって俺は21位。」

「ウソ。俺より遅いんだ。」

「お前気づいてなかったのか。俺たちがゴールした後に佐久間^{さくま}が走つてたこと。」

その時を思い出してみる。

「あつ。そういえばそうでした。」

「。。。。。」

「俺時々わからなくなるんだよなあ。本当は天才なのか。それともバカなのかって。」

「ハハハ。」

「だからそれはバカって。。。。。」

「まあ、そうなんだろけど。」

僕の言葉を遮るように宿毛^{すくも}が言った。

「ハハハ。早いところ弁当くつたらどうだ。」

「ああ。そうするよ。」

「あつ。」

その声に反応して佐久間^{さくま}と宿毛^{すくも}が僕のほうを見る。

「弁当持ってくるの忘れてた。」

「。。。。。」

「それヤバいじゃん。」

「まあいいや。昼くらい一度抜いたって死にはしないからなあ。ハハハ。」

「。。。。。」

(どういう考えで生きてるんだ。こいつは)

これで新体力テストも終了。次は明日ある部活だろう。

今回からの登場人物
のぞみ
希望

47列車 持久走（後書き）

ある教科担当の人は言いました。

「テキスト（文字）」としてとらえるよりピクチャー（絵）としてとらえたほうが覚えやすい。」

最もですね。この中に登場する車両・列車はすべて実在した。または実在しているものです。今はインターネットで簡単に調べられますから、本作のテキスト（説明文）をピクチャー（写真）としてとらえてください。写真を見たりすれば、少しはどこを説明しているのかつかめるのではないんでしょうか。

48列車 ミーティング

10月中旬。テストを潜り抜けて、また部活どう再開。

「よし。今日からまた部活どうだー。」

いつものハイテンションは善知鳥先輩だ。

「そうだな。部活動がない日ってなんかイライラするからなあ。これでそのイライラもなくなるかあ。」

サヤ先輩もそれに共感しているようだ。するとドアが開いた。

「手を上げる。」

そう言っ入ってきたのは諫早だ。

「何度も同じ手は食いませんよ。」

「じゃあ……。死んでください。」

「イサタン声変わりすぎ。」

「お前が死んでくださいっていうと本気のように思えて怖いわ。」

「そうですか。」

そう言っているときまたドアが開く。今度はナヨロン先輩だ。でも、

ナヨロン先輩はすぐにドアを閉めてどっかに行った。

「バカ。久しぶりに来たんだから部活やってけ。」

善知鳥先輩が返ろうとするナヨロン先輩を止めに部室を出ていく。

しばらくするとナヨロン先輩を連れて戻ってきた。ハクタカ先輩と楠先輩も一緒だった。

「だから、いつも冗談って言ってるだろ。」

「久しぶりにやられるとね。そんなこと忘れちゃうのよ。」

「そりゃ、いろんな意味で問題だ。」

「そういえば今日アヤケンは。」

「アヤケン今日学校休んでるよ。」

「へえ。死んだのか。」

「そう死んだ。」

「アヤケンのやつ。死んでんじゃないよ。」

「あのうそれ言うのはちょっと。」

楠先輩が「死んだ」という言葉を使わないように促そうとしているがそんなに効果は上がっていない。

「ハクタカ先輩。さっきから言ってる死んだってあっちの意味ですか。」

「簡単に言うと「休んだ人」。欠席したらイコール死んだことにされるから気をつけるよ。まあ、俺は善知鳥先輩が死んでくれたほうがよっぽどありがたいけど……。」

「大丈夫だよ。あたしたちがいるのもあと半年ないんだから。」

（そう言われればそうだな。ナヨロン先輩と話せるのもあと半年なのかなぁ。言われてみればこの半年だけでも電車のこと結構教え込まれたなあ。223系のことこそうだけど、もっと別の車両のことも……。編成も……。）

心の中で今まで萌と楽しく模型で遊んでいた時とは違うということも思った。

「そついえば先輩たちみんな進路とかがって決まってるんですか。」

楠先輩が遊び人の先輩たちのことを心配したが、その必要はなかったらしい。サヤ先輩はすでに名古屋の中京観光専門学校合格している。善知鳥先輩は岸川学園のグループ大学。瀬戸学院大学への進学を、ナヨロン先輩は進学先だけは決まっただけであとは受けるだけだそう。そして今日死んでいる……いや、休んでいるアヤケン先輩は瀬戸学院大学を志望しているそう。

「中京観光って東京の帝京観光のグループですよええ。」

「グループっていか姉妹校っていう感じだな。」

「結構いいところ入りますねえ。」

「いいところって。頭がないからAOで受験したんだろうが。そこだったら実力に受けられつうの。」

「うるせえな。いいだろ。合格しなかったら元も子もないんだし。」

「……。」

そんなことを言い合っていると

「みなさんお集まりですね。」

ドアから顔をのぞかしているのはアド先生だ。なんか久しぶりに見た気がする。いつもホームルームの時にあっているのだが……。

「まずは座ってください。ミーティングをします。」

そう言つてアド先生は部室の一番奥にある机まで歩いて行って腰を下ろした。座ると手に持っていた紙を全員に配布し始める。サヤ先輩からその紙をもらつて目を通す。中身はこれからの予定。いつものことだが、この通りにやつたためしはない。

「みなさん見て分かると思いますが、11月の1日と3日のあかつき暁鉄道が主催するあかつき暁フェスタとせとがくいん瀬戸学院大学とおりおちよう折尾町の展示が入っています。しかし、せとがくいん瀬戸学院大学とおりおちよう折尾町の展示が11月の14日にかぶっています。」

おりおちよう折尾町という言葉を聞くと先輩たち全員の顔がゆがんだ。何か嫌なことでもあつたのだろうか。その顔をしている先輩たちをほつたらかしてさらにアド先生が続ける。

「この14日の展示を分けたいと思います。」
「そういうと、」

「よし。なら3年生全員とハクタカは大学の文化祭言つてアヤノンと1年生全員でおりおちよう折尾町の展示やればいいと思います。」

まずうつく善知鳥先輩が口を開いた。

「なんであたしだけおりおちよう折尾町なんですか。嫌ですよ。」

「なんで。たくさん子供いるじゃん。」

「だから嫌なんです。」

「うつく善知鳥先輩。独壇場で決めるのはやめてください。」

ハクタカ先輩が口をはさむ。

「ていうかおりおちよう折尾町にそんなにいらないだろ。」

サヤ先輩が続けていった。

「そうか。子供がいつぱい来るんだし監視がたくさんいたほうがいいだろ。」

「……。」

「じゃあ、何。9人いる高校1年生と中学生で折尾町の展示をやる
つてことですか。」

「はい。」

僕たちは何も話すことが泣くことが決まっていく。その結果は・・・
となった。

「次。先に行われる暁フェスタの展示について話します。11月の
1日と3日にかけて行われます。会場は暁鉄道の天竜暁駅です。こ
この事務所の2階。3年生・2年生ならわかりますね。ここで行い
ます。」

これまで言われている暁鉄道とは昔国鉄二俣線と呼ばれていた路線
を第3セクター化して発足した鉄道会社である。地元を走っている
鉄道の3つ目にあたるが遠州鉄道と遠江急行とはまた別。市や県が
出資してこの鉄道を経営している。この路線を走っている車両はデ
イゼルカーでほとんどの列車がそれ1両で動いている。ディーゼ
ルカーは最新であるが建造物には築70年くらいになる建物が多く
一部は国の有形文化財に指定させているくらいだ。由緒正しい鉄道
と言っても過言じゃないだろう。当然。僕たちが展示を行う場所と
していま言われた事務所もその文化財の一員である。

「また階段急なあすこかあ。」

「しょうがねえだろ。それ。」

「話す前にちゃんと聞いてくださいね。」
楠先輩が3年生を抑える。

「ありがとうございます。それで次。瀬戸学院での展示ですが、教
室は3021教室です。ここで行います。これも2年生は分かっ
てますね。そして、折尾町の展示ですがこれは折尾町公会堂の1階で
行います。これも2年生ならわかってますね。」

アド先生はハクタカ先輩に確認するみたいに言った。するとハクタ
カ先輩は他人事のように視線をそらした。

「ちよつとそれはどういことかなあ。」
そう言い終わると、

「それってまた新幹線しんかんせん使つかうってことですよねえ。」
ナヨロン先輩が口を開いた。

「はい。そういうことです。」

(永島ながしまは分かるとして、他だよなあ。少しはそういうことできる人がいたほうがいいかあ。)

「じゃあ、新幹線しんかんせんのメンテナンスやったほうがいいんじゃないんですか。」

そう聞いた。

「あつ。じゃあ、明日お願いします。」

「はい。」

ちよつと明日という言葉は効いたらしい。

今日はこれからの展示と予定の確認。それだけで終わった。

48列車 ミーティング（後書き）

ようやくと半年たちました。あと半年分は根性で上がっているので、残り分を根性で上げたいと思います。

しかし、高校生のエピソードが終わると実質×ネタが尽きてしまうんですよねえ。自分の経験が少ないからしょうがないのですが・・・結構長い時間皆さんを待たせる結果になると思います。しかし、このストーリーはいつか完全に完成させます。

49列車 いじるとA編成とB編成(前書き)

これは濃いです。

49列車 いじるとA編成とB編成

翌日。土曜日は10時15分に授業が終わる。授業が終わると即行で部室に行ったが、開いてなかった。部室の前でちよつと待つ。

「いい加減に自分で鍵取り行くとかしてくんないかなあ。」

僕の姿を見て呆れているのは楠先輩である。

「ああ。じゃあ取り行ってきます。」

「もういいよ。次からそうしてくれれば。」

「ていうか楠先輩は鍵取りに行つてないんですか。」

「取りに言つてないから今ここでこうしてるんじゃない。」

ため息をついてその場に腰を下ろした。

「永島。」

僕を呼ぶ声とともに現れたのは木ノ本と留萌だ。

「おー。二人とも鍵ある。」

「ありません。」

その言葉で僕も楠先輩も一気に力が抜けた。その場にしゃがみ込む。

そのすぐ後に箕島が現れて部室を解放した。その数分後には醒ヶ井

とナヨロン先輩も集合した。

「ふう。永島。木ノ本。留萌。箕島。醒ヶ井。俺たちは寮に行くぞ。」

そう言つてナヨロン先輩が立ち上がる。

「えつ。それあたしここに一人になるじゃん。」

「分かったよ。来たいなら来てもいいから。」

「あつ。でも今日やるのつて車両いじりですよねえ。」

「ああ。」

「じゃあ。やっぱりやめます。」

「……よし。じゃあ俺たちは行くか。」

促されて部室を出た。

寮に着くとまずはいつもの部屋と思つたが、ナヨロン先輩は文化

祭前に入った部屋のほうへ歩いていく。階段を上って右に曲がるとすぐのところにプレートがある。それをどかして、自習室1の鍵を開ける。どうやらアド先生から預かってきたらしい。その部屋には布団の敷かれていない2段別途と教員用机と折りたたみ椅子が2脚置かれている。この部屋に15箱ぐらいの折り畳みケースが収納されている。

ナヨロン先輩はまず2段ベッドの下に置かれている折り畳みケースに手を伸ばした。そのの一つをとって木ノ本きのもとに手渡す。外に運んでと指示を出されて、外に運び出す。それを何度か繰り返して、ようやくと新幹線しんかんせんの箱を引っ張り出した。新幹線しんかんせんの箱は2つ。この量からすれば少ないほうだろう。その箱を運び出し終わるとこれまで出した7箱をもとに戻す。それがすんだら今度は教室をいつもの学習室に変えた。

「よし。まずはどれでもいいから一つとってけ。」

そう指示される。その指示で僕たちは新幹線しんかんせんの車両ケースを一つ取り出す。もちろん僕はそう指示を受けると真っ先に100系のケースを選んだ。

「永島ながしま。それ「グランドひかり」だぞ。いいのか。」

「……。」

よく背表紙の文字を見ていなかった。ただ100系ということだけしか見ていなかった。

「……。」

「どうも不満そうだな。えーと。」

ナヨロン先輩がケースに入っている車両ケースの背表紙を確認しながら指をずらしていく。

「ほれ。こつちがよければこつちにしろ。」

「あ……ありがとうございます。」

今更ながらやさしい人だと思った。「グランドひかり」はナヨロン先輩と交換という形で僕のところに100系のJR東海編成がやってきた。ちなみに「グランドひかり」はJR西日本の編成である。

「よし。まずはこれの先頭車をとって、車輪を見る。」

ケースを開けてケースの一番上に入っている車両を取り出す。白くどがった鼻。横に入るつり目のヘッドライト。窓を包み込む青いライン。0系の登場時と同じ大きな窓。そして、模型でも貫禄のある車体。これらすべて100系の特徴である。

「永島ながしま。好きだから見とれるのはいいけど・・・、ちゃんと聞いてくれよ。」

そう注意された。そのあと全員顔を見渡していると、

(同類がここにもいた。)

「留萌るもい。0系が好きだから見とれるのはいいけどちゃんと聞いてくれよ。」

留萌にも同じ注意をした。今視界に飛び込んできたことだが、木ノ本きのもとが手に取った車両は500系「のぞみ」。醒ヶ井さめがいは700系「ひかりレールスター」。留萌は0系「こだま」。箕島みしまが300系「のぞみ」。そして僕が100系「ひかり」だった。もの見事に東海道とうかい・山陽新幹線さんようしんかんせんで活躍する車両たちであった。

「よし。まずはこいつらを裏返せ。」

ナヨン先輩が「グラランドひかり」の先頭車を180度回転される。逆さまになった「グラランドひかり」は天井が床を向き、床が天井を向いた。僕たちもそれに倣い持っている先頭車を逆さまにする。

「そうしたらここを見る。」

そう言っただけで先輩がスカートのすぐ後ろ。つまり運転席の真下にある台車を指差して、その車輪の軸を抑えて持つ。

「この車輪をゆっくりと回して、黒いところを探せ。」

どういふことだろうか。意味は分からないが言われた通りやってみる。すると僕の持っている100系はほとんど黒い。車輪全体が黒くなっている状態で、車輪の銀が顔をのぞかせているところが全体の10パーセントくらいしかない。

「そして、黒いところが見つかったらこれを使って車輪をきれいにする。この作用の繰り返しだ。」

ナヨロン先輩はレールクリーナーと綿棒を持ち出す。今の今までレールクリーナーは線路にしか使わないと思っていたがそういうわけではないらしい。レールクリーナーは鉄道模型のほとんどのものの掃除使用することができるそうだ。

僕たちは1本綿棒を手に取り、レールクリーナーを順番に綿棒につけてまわす。そして車輪に綿棒の頭を当て、綿棒を当てた反対側の車輪を指でゆっくり回す。1周するとさっきは10パーセントくらいしかなかった銀の部分が大部分を占めるようになった。当てた綿棒を見てみると真ん中らへんに長方形の黒い塊がついている。汚れが取れた証拠だ。この作業を何回も繰り返して一つの台車をきれいにしていく。綿棒は1両につき一本。もしくは台車1つにつき一本消費するくらい。ほぼ浪費状態だ。僕が2両目の車両の台車をきれいにしていると、

「どこまで進んだ。」

ナヨロン先輩が自分の作業をしながら聞いた。全員今やっている車両をこたえる。醒ヶ井は「レールスター」の3号車。留萌は0系の2号車。木ノ本は500系の4号車。と回答。

「分かった。じゃあ、今やってる車両で一度作業やめろ。」
そう指示を受けた。

その車両が終了するとナヨロン先輩は次の説明を始めた。

「次は模型のM車のクリーニングな。お前らもその箱の中で一番重い車両探してみる。」

そう言われる。僕はすぐにどれがM車かわかった。上から数えて3番目。3号車がM車だ。木ノ本には少し難題だったみたいで教えてときかれてきた。留萌と醒ヶ井はちゃんと見つけられたようだ。

「全員見つけたな。まずは同じように裏を見る。」

これまでと同じように裏返す。車輪は今までの車輪とは違い真中は軸剥き出しではない。代わりに目に入ってきたのはギアだ。

「これで今までのやつと違って分かるよな。この車輪をきれいにするにはまずこれを取り外さなきゃいけない。そのためには……。」

「車両を横倒しにして持ち、車両を持っていないほうの手を台車にかける。そして力を加える。」

「はーっ。ってあれ。はずれねえ。おい言うこと聞けーっ。・・・まだ聞かねえなあ。・・・はーっ。」

独り言を言いながら台車と車体を割くようにして台車をとった。台車には何やら付属品があるみたいで、緑色の小さな棒もくっついてきた。

「今やったみたいにお前らもやってみる。」

今ナヨロン先輩がやったみたい僕たちもやってみる。台車は案外簡単に取りれた。そんなに力入らないみたいだ。

「よし。取れたら木ノ本きのもとはこの棒をまわしながらさつきと同じ手順で。永島ながしまと留萌るもいと醒ヶ井さめがいはさつきと同じ手順でやれ。そうすればきれいになる。そして、戻すときはさつきとは逆をすればいい。」
そう説明を受けた。

さつきと同じ要領でこのギア台車もきれいにしていく。それが終わったら今度は掃除を行っていない車両のメンテナンス。それが終わったら次の車両に行く。

「へえ。「ドクターイエロー」もあるんだ。」

そういうと留萌るもいが覗き込んできた。

「んっ。どれどれ。って。それ0系タイプじゃん。これがいたのって2000年以前の話でしょ。懐かしいなあ。」

「あれ。こんなのいたっけ。」

「いたよ。浜松工場はままつこうじょうの新幹線しんかんせんなるほど発見デーで見たことないの。」

「ごめん。記憶にない。」

「・・・。」

「今700系だもんなあ。俺はあっちよりこっちのほうがいいかなあ。」

「永島ながしま分まかわつてるじゃん。今の「ドクチャン」ってなんか好きになれないんだよねえ。まあ見たらテンションあがるのは同じだけだ。」

「えっ。それふつうじゃないの。」

「ですよねえ。健康そのものですから。」

「ハハハ。留萌るもいって結構車両に詳しいって善知鳥じゅんから聞いたけど、どれくらい知ってる。」

「今そんなに知らないんですよ。中学の時に一気に忘れたっていう感じで。ああ、でも新幹線しんかんせんの試験で使われてたA編成とB編成ビとそれを新幹線しんかんせんの救援車にしたことくらいはちゃんと知ってますよ。」

「そうか。お前A編成エとか好きじゃないのか。」

「A編成は2両だけだし、0系と結構イメージ違うでしょ。B編成ビも同じ理由でそんなに好きじゃないんです。かわいいけど……。」

「まあ。A編成エよりB編成ビのほうがましってか。」

「どういうことですか。」

木ノ本きのもとにはこの意味が分からなかったようだ。

「A編成エってあの丸い鼻のところビが光ったんだよ。B編成ビは光らなかつたけど。」

「えっ。マジ。」

このことには僕もびっくりした。あれは最初から光らないものだと思っていたからだ。

「マジだよ。昔は白花のトナカイみたいな感じで鼻を光らせてたの。だけど光らせないほうがいいっていう考えに多分至って、量産車である0系にはそのシステムがないわけ。」

「一つ利口キになった。」

「確かB編成ビですよねえ。当時最速の256km/hキ出したのって。」

僕も話に参加した。

「ああ、そうだよ。綾瀬あやせと鴨宮かものみやの実験線キでな。」

「でも、なんかもつたいたいなんて思いませんか。0系も260km/hキまではメーターふつてあるわけだし試作車のB編成ビでも260km/hキは出たはずなんですけどねえ。どうせならあと4km/hキ頑張キって出しちゃえばよかったのに。」

「出せないB編成の事情でもあったんじゃないか。あれ計測してる時に蛇行動も観測したみたいだし、これ以上出すのは危険だって判断したんじゃないか。」

「説得力ないですね。」

「うん。ないな。」

さつきから僕たちが話しているA編成・B編成とは新幹線の試作車。現在の新幹線の礎を築いた車両である。容姿は0系とよく似ているがヘッドライトが縦に楕円形ではなく横に楕円形であること。運転室の窓が湾曲していたことなど。細部に0系との違いがある。またA編成は前述したとおり2両。B編成は4両と量産車である0系よりも身軽。さらに塗装にも違いがあり、A編成は車体の裾に細く。B編成は窓周りに太い青いラインが入っていた。この2編成による各種試験のうち1964年10月1日に東海道新幹線として開業するのである。なおこの2編成は営業運転には就かず東海道新幹線開業後は生涯を通して救援車としてもしもの場合に備えていた。しかし、安全神話の新幹線に救援車の出番はなく、いい意味で一度も出動せずに「ドクターイエロー」にバトンを渡したのだ。その後車両は廃車されているが今でも鉄道の博物館などでその模型を見ることが出来る。

「・・・。」

しばらく黙って自分たちの作業を進める。

「そうだ。留萌、お前C編成って知ってるか。」

ナヨロン先輩が振る。

「C編成。」

この反応は分からないということだろう。

「なんですかそれ。初めて聞きましたけど。」

「これも試作車なんだけどな。A編成とB編成は有名だけどC編成は兄ちゃんたちに隠れてそんなに知られてないんだ。容姿はほとんど0系に似てるっていうけど6両編成っていうのが0系と違ってるかなあ。」

「へえ。そんなのあったんですね。」

「……。そりゃ反応薄くなるよねえ。うん。うん。」

自分に言い聞かせるように言っていた。

49列車 いじるとA編成とB編成(後書き)

この話を作った後に調べましたが、B編成は救援車ではなく線路関連の計測車になっていました。訂正します。

A編成の救援車もB編成の計測車も今日の「ドクターイエロー」と同じく黄色に青のラインをまいている塗装でした。

昨日パソコンのほうのアクセス数で1000突破しました。

ユニークは300を突破。だんだん数が増えていくのは嬉しいですが、このごろアクセス数は低迷したり、のびたりで安定していません。

ユニークアクセス数はアクセス数よりは安定しているのですが・・・

50列車 文化財へ(前書き)

初掲載の作品で連載して50話です。
このシリーズの最後までまずは頑張ります。

50列車 文化財へ

日曜日。午前中に曉あかつきフェスタに持っていくモジュールを学校のハイエースに詰め込む。そして午後。

「はい。みなさん集まっていますね。」

アド先生が全員の顔ぶれを見る。今日ハクタカこと鷹倉俊也たかくいしゅんや先輩とアヤノンこと楠侑乃くすのあやの先輩はいない。今日は僕たちだけで活動する。

「はい。みなさん、今日は天竜曉てんりゅうあかつき駅に行きます。みなさん荷物を持って私の車に乗ってください。」

そう指示を受けた。とするとハイエースのほうはどうなるのか。

「あとう。バンのほうはだれが……。」

「バンは山科先生やましなに運転してもらいます。なので心配ありません。

それでは行きます。」

いつものように体育館から出て、正門から入ってすぐのところにある駐車場に車がいくつかとめてある。その駐車してある車のうち1台にアド先生が歩いていく。

「マジ。アド先生の車ってウィッシュじゃん。」

醒ヶ井さめがいが言った。

「へえ。あれウィッシュっていうだ。」

僕は関心が内容に返事をした。その時アド先生は真ん中のシートを倒して後部座席に人が乗れるようにしている。

「はい。乗ってください。」

そう言われて一番最初にウィッシュに乗り込んだのは木ノ本きののほんだ。続いて留萌るもいが乗り込み、助手席には箕島みしまが乗り込んだ。残った醒ヶ井さめがい、佐久間さくま、僕はというと真ん中の座席におしくらまんじゅうで乗り込んだ。

ふと外を見てみた。

「それじゃあ、山科先生やましな。バンのほうよろしくお願いします。」

「はい。分かりました。」

すらりと背の高い先生が返事をした。彼が4月から名前しか聞いていなかった山科先生だそうだ。アド先生の呼ばれ方からして部活のみんなからはヤマ先生かシナ先生という呼ばれ方をしているはずだ。その人がバンに乗り込んだことを確認すると、アド先生も自分の車に乗り込み、ウィツシユのエンジンを起動する。まず最初にウィツシユが動き出し、山科先生の運転するバンが僕たちの後を追っている形で天竜峯まで赴いた。

ゆっくり運転されるハイエースに合わせて40分ほど。普段から見慣れている光景が僕の前に広がる。と言ってももうここは天竜峯地区。いろんな意味で見慣れたといえば見慣れた光景だ。飛龍大橋という天竜川に架かる橋を渡ってすぐの交差点を左に曲がり、またすぐのところにある交差点を左に曲がる。その道に入ったらまたすぐのところを今度は右に曲がり、さつきよりも少し長く走ったところでまた右に曲がる。すると僕たちの前には木造の建物と扇形の車庫が広がる天竜峯構内に入ってきた。

僕たちの乗るウィツシユは木造の建物の北側を通過して、峯鉄道のディーゼルカーが止まっているすぐ隣に車を止める。ハイエースはというと木造の建物の入り口の前に止まっている。その光景を見た人が木造の建物の中から出てきた。

「どうも。こんにちは。」

アド先生の姿を見るなりその人は話しかけてきた。

「こんにちは。今回もよろしく願います。」

「こちらこそ。よろしく願います。」

アド先生は僕たちのほうを向いて、

「紹介します。今回峯フェスタの運営を担当しています。富士史崇さんです。」

「よろしく願います。」

みんな声をそろえて頭を下げる。

「こちらこそ。よろしく願います。それでは安曇川さん。先日伝えました通り当事務所の二階に展示を行うということでお願

ます。」

この富士ふじという人に後ろに立っている建物が暁鉄道あかつきの事務所らしい。僕から見てみるとこの事務所には隣接して2枚の引き戸があることがわかる。その右側の扉の窓には事務室と書かれている。ここが事務室である証拠でもあるが……。とは言ったが文字は剥げていたためあくまでも推測ということだけでとっておいてほしい。

話が終わると僕たちを促して、バンに乗せた荷物を下ろし始める。まずは事務所の前に置いておくだけ。さっさと仕事は終了する。空っぽになったハイエースを見て、

「安曇川先生あつみがわ。これから中学生の迎えに行つてきます。そろそろ模試が終わつたころなので。」

とことわつて山科先生やましながハイエースに乗り込む。とその瞬間だった。アド先生の携帯電話けいたいでんわが鳴つた。

ここからは電話内でのやり取りです。

「もしもし。」

「あつ。アド先生。今どこにいるんですか。」

「あつ、善知鳥君うつくし。どこつていま事務所の前ですけど。」

「分かりました。私たちもすぐそつちへ行きます。」

と言つて電話は切れた。

「誰ですか。」

「善知鳥君うつくしだったよ。」

そついうと山科先生やましなはほつとしたような顔になつてハイエースに乗りなます。そしてすぐ出て行つた。それを見送つて、

「それではまずは荷物を2階に置いてきてください。そしたらここにあるものを上に運びます。」

そつ指示を受けた。

まずは荷物を2階に置いてくるため事務室の中に入る。僕たちが入つた扉は左側から。入るとすぐ目の前に急な階段がある。その隣の部屋をのぞいてみたが何があるのかはすぐに分かつた。僕の目線から見て左側に机。前のほうにはところどころにつまみがついてい

るパネルがある。このパネルにはこの天竜暁の線路配置が簡略化して書かれており、ところどころにあるつまみはおそらくポイント操作のために使う機会。ここからポイントを遠隔操作しているのだ。一瞬だけだったから認識できたのはこれくらい。階段を上がって左にある部屋に入る。部屋の天井の梁には進めて色の落ちた棒が2本貼り付けてある。一つは長方形と三角形を組み合わせたような形をしていて黄色い。もう一つは長方形のしっぽを三角形でくりぬいたような形をしている。そして黄色のものより少し長い。佐久間にはそれが気になっただらしく、

「永島。これ何。」

と聞いてきた。

「多分。これ腕木信号の腕木だよ。」

「うでぢ。」

これには木ノ本も声をそろえた。僕はどんなものかわかるように何かを出したい。そう思って窓のほうへ歩いて行った。確かエスエルの動輪と一緒に腕木信号もたっていたはずだ。

「ほら。あれだよ。あれが腕木信号。」

エスエルの動輪の隣に立っている腕木信号の腕木は黄色くこの天井にある黄色い色をした腕木と形も同じ。

「よくローカル線とかにあった信号だよ。今じゃほとんど見れないけどね。」

と説明を加えて、下に下りて行った。

下に下りていく間に箕島と留萌と醒ヶ井にすれ違った。階段はすれ違えるような幅ではない。箕島と留萌と醒ヶ井が通った後に僕が入れ替わりに下に下りた。ハイエースが止まっているところまで行くとアド先生にまず白いケースに入ったほうを運んでいわれた。その指示で僕は白いケースを2つ持って階段を上がる準備をする。上から木ノ本と佐久間が下りてきている。降り切るのを待って僕た2階へ上がる。2階へ上がるとまっていた箕島と留萌と入れ替え。醒ヶ井が2階の部屋で荷物を置いているところに遭遇する。僕も荷

物を置くとまた下に下りる。下からは佐久間と木ノ本が上がってきている。上がりきるのを待って、入れ替わりに僕が下に下りる。ずっとこの繰り返しだ。

2回この操作をやって下に下りると見慣れた顔がそこにあった。

善知鳥先輩とサヤ先輩とアヤケン先輩だ。

「サヤ先輩に善知鳥先輩にアヤケン先輩。どうしたんですか。」

「いやあ、私たち受験あきらめた組だから手伝いに来た。」

頭の後ろに手を当てて善知鳥先輩が言った。

「じゃあ。まずはこいつらを運ぶかあ。」

サヤ先輩はまだ残っている気の箱に目をやった。この箱の中には上野駅とその他S字モジュールが多数入っている。これらはそのまま持っていくには至難の業である。なので……。

「よし。お前ら1列に並べ。これから上野駅を運んでいくぞー。」

ということになった。並びは下から善知鳥先輩、木ノ本、留萌、醒ヶ井、サヤ先輩、佐久間、箕島、僕、アヤケン先輩の順。

「はい。まず上野駅13番線。」

「上野駅13番線。」

「上野駅13番線って……。」「カシオ」と「北斗星」が来るとこ

ろじゃん。」

「上野駅13番線かあ。」

「上野さんの上野駅。」

「……。」

「上野駅。」

「13番線ホーム。」

「ああ、上野さんのゴミだ。」

ただの伝言ゲーム状態。もちろん言葉のとおり伝言ゲームにもなっていないが……。

上野駅モジュールを運び終わると次はS字カーブ。

「次。S字のトップバッターは綾瀬川。」

「綾瀬川。」

「綾瀬川……まさか。」

「まさか……何。」

「アヤケンの綾瀬川。」

「……」

「綾瀬川。」

「綾瀬川。」

「あつ。俺の「特急ゴミ1号」。ダストボックス行き。」

こんな具合で運び上げた。最後に空になった箱は佐久間とアヤケン先輩が上まで運びますはひと段落。次は山科先生が次のモジュールを持ってくるまでないが、長机を上に乗ぶという仕事があった。それが終わるとぼーっと外を眺めていることができた。

それから30分くらいたつと山科先生が戻ってきた。

「さあ。シナ先生が来たぞー。行くぞー。野郎どもー。」

（中には野郎じゃない人もいるが……）

下に下りて諫早、空河、朝風を迎える。それが終わったら上に運び上げる。今度は白いケースだけ。どんどん上に運んで仕事を終了させる。これが終わると空河と朝風を連れてまた学校まで戻っていた。今度来るのはまた1時間後ぐらいだろう。

今回からの登場人物

山科雄哉（シナ先生）

誕生日 8月1日

血液型 AB型

身長 169cm

暁鉄道職員 富士史崇

50列車 文化財へ(後書き)

この「暁鉄道」は地元の「天竜浜名湖鉄道」をモチーフ。というかそのままです。ただ社名を変えてるだけにすぎません。

51列車 違いを述べよ

その間……、

「永島ながしまさん。今度持ってくる車両なんかいるものありますか。」
「諫早いははやがそう聞いてきた。」

「えっ。いる車両。……。諫早いははやって何持ってたっけ。」

「223系の2000番台のパンタを全部シングルにしたやつと223系6000番台の網干あみほしと宮原みやはら。221系のモーターぶち抜いたやつ。後は313系の2500番台と211系5000番台。813系と285系「サンライズエクスプレス」14両とキハ85「ひだ」と383系「しなの」ですけど。」

全部どういのかはわかる。

「やっぱりエントリーみやまは宮原みやはらの223系6000番台かなあ。また8両でお願い。後は……。」
自分の中で考えを広める。

（いえには223系1000番台と2000番台の新快速しんかいそくがそれぞれ12両である。だから223系のほうの問題はない。たけど大阪ならそれ以上も必要かあ。ならなおさら、207系と321系のエントリーエントリーも必要だけど、それは学校にあった。だから321系を持つてくる必要はない。他には253系「ネックス」とかのエントリーエントリーかあ。でも「ネックス」も学校の中にあつたよなあ。ああ、待て。確か学校のは動かない。やっぱり家から持つてくるしかないかあ。後は寝台特急フルトレ軍ぐんだけ……。何を持つてくるかなあ。迷うなあ。）

「あのお。他に必要なのは。」

「うん。あつ。やっぱり網干あみほしの6000番台もエントリーして。」

「分かりました。じゃあ、自動的に221系もエントリーですね。」

「えっ。」

そう聞き返すとこの会話を聞いていた留萌るもいが呆れたように話しかけてきた。

「永島はもうちょっと頭いいと思ってたけど、クソ天然じゃないか。いいか。網干あほしにいる6000番台は性能を223系レベルから221系レベルの落としてあるの。そして、普段日常的に130出して新快速しんかいそくの仕業には就かずにもっぱら普通で運用されてるわけ。その熱愛キスする相手が221系なの。」

（キスはキスでも熱愛って・・・。）

（熱愛キスかあ。うまいこと言うかも留萌るもいさんって。）

「あつ。そうだった。思い出した、思い出した。」

「やけに223系に詳しいなあって思ってたけど詳しいのは1000番台と2000番台だけなのか。」

「いやあ。ほとんどの車両はどこがどう違うかくらいしか分かんない。」

（こいつに313系の違いを行ったらパンクするよねえ。）

「だから100系も食堂車がついてたX編成エックスと小窓の試作車とカフエテリアのついたG編成ジーとダブルデッカー4つのV編成ブイと6両のK編成ケイと4両のP編成ピーがあることくらいしか知らない。」

（・・・。十分知ってるじゃないか。100系だけでそれくらい知ってれば一時はOKだよ。）

「じゃあ、永島ながしま。当然のことを問うけど14系と24系の違いって何かわかる。」

これは寝台客車のことだ。

「14系は分散電源方式で、24系のほうは集中電源方式。」

「・・・。なら481系と483系と485系と489系の違い。」
すべて特急車両。そしてすべての形式において同じ顔をした車両がある。

「そりゃもう簡単。481系が交流20000ボルトの60ヘルツで、483系が50ヘルツ。485系は60ヘルツと50ヘルツ両方に対応してて、489系は峠越えの時にEF63と協調運転するための機器が485系に追加されること。」

「・・・。なら、ED75の700番台とED79の違い。」

「えつ。」

これは知らない。そもそもED75の700番台って何……。

「うーん。ATCエナジーシーがついてるかついてないか……。」

「……ぶっちゃけたな。でも、言ってることは間違ってるわ。」

「さすがにEF65のP型とF型の違いまで言ったらわからないかなあ。」

「私が見る限り、少しは車両知識あるみたいだわ。基礎レベルの。」

「まあ。ナヨロン先輩と話して詳しくなったようなもんだし。最初は313系の番台区分なんか言われても全然わからなかったけどなあ。でも今なら少しは分かるようになったおかげさまで。」

「こいつ。いったい何に詳しい。」

「とごめん。話脱線しすぎたなあ。」

僕は諫早いんげんとも話に戻した。

「じゃあ、家から持ってくるのは6000番台の網干あほしと221系の網干あほしと6000番台の宮原みやはらでいいんですね。」

「ああ。それでいいよ。」

諫早いんげんとも一件はこれで終了した。

「永島ながしま。」

この話が終わったら今度は木ノ本きののほんだ。

「何。」

「私これ買ったんだけどさあ。」

と僕にKATOカーの車両ケースを見せた。横に書かれている文字は「EF510・500番台 北斗星色ほくとせいき」。

「あつ。お前これ買ったんだ。」

「うん。使っかなあって思って。」

「これで家から「カシオペア」を持ってくる必要はなくなつたなあ。持ってくるのであればEF81・133号機の「北斗星1号ほくとせいき」札幌行さっぽろきのほうか。」

「ああ。出来れば使いたいね。」

「で、そのためにこれをくみ上げてほしいんだけど。」
と言ってきた。ということはこれの前面には4つの小さな穴が開いているということだ。

「しょうがねえなあ。でも、いまピンセットみたいなのないし、明日学校で渡すでいいか。」

「・・・。それでいいよ。」

木ノ本の了承を得たのでこれは家に帰って組み上げることにした。でも、まだ家には帰れない。次の仕事をシナ先生が持ってくるからだ。

それから50分後。シナ先生の運転するバンが到着。時間は5時を過ぎている。だんだん外も暗くなってきている。そんな中でも作業をする。白いケースに入ったモジュールを2階に上げて作業終了。・・・ではない。まだ仕事がある。今度はさつき運び上げた机を並べる番。モジュールを運び込んだほうの机を凹おウの形にその隣を四角い形状にする。さつき運び込んだ机とは別に最初からここに置いてあった机もある。その机も一緒に並べる。またその作業の最中に佐久間さくまと醒ヶ井さめがいは運び込んだ階段のところに「いらっしやませ」の文字を張りに行った。はり終わったようようで佐久間さくまたちが戻ってくるか、変に笑っている。

「どうした。」

「ちよつと永島ながしま来てみ。」

佐久間さくまに促されて階段の下まで降りてくる。すると上を見ると言われたので上を見てみた。すると「いらっしやませ」はずが「らっしやいませ」になっている。

「なんじゃこりゃ。これじゃあ寿司屋じゃん。」

「だろ。やっぱりお前もそう思うだろ。」

（これで笑ってたのかよ。）

そんなこんなで18(6)時。

「あー。暑いー。」

醒ヶ井さめがいがブレザーをパタパタ動かして空気を入れ替える。制服の中

に熱がこもっているのだ。

「じゃあ、野球拳でもする。」

「……。じゃあ、最初はグー、ジャンケンポン。」

結果は醒ヶ井さめがいの負け。その後5連戦やって……、

「おい。早くパンツ1枚になれよ。」

「醒ヶ井さめがいここで脱ぐのか。それはもう変態だぞ。」

「あんたのパンツ1枚の姿なんか見たくないわ。」

「もういいんだよ。十分涼しくなったわ。」

その格好だが、ブレザーとワイシャツ以外脱いでいない。

「ねえ永島ながしま。醒ヶ井さめがいがパンツ1枚になつてくれないんだけど。」

「女子の前でそんな格好できるか。」

(そういえば。この部活つて女子いたんだな……。)

「醒ヶ井さめがい。ルールはちゃんと守らなきゃダメでしょ。」

「守も何も限度つていうもんがあるだろ。」

時間がだんだん19(7)時に近くなっていく、すると……、

「ねえ、アド先生。飯おごってくださいよ。」

「えっ。あ、もうこんな時間だ。」

時計を見たサヤ先輩が時間に驚いている。

「へえ。久しぶりにこの時間までいたような気がするなあ。」

アヤケン先輩も1学期の時が懐かしそうな顔をした。

「アド先生飯。」

善知鳥ちゅう先輩せんぱいいう。それに続いてサヤ先輩もアド先生に飯をおごるよ

う迫った。

「……。」

善知鳥ちゅう先輩もサヤ先輩も「アド先生飯。」と言いながら手を動かして作業を進行されている。何とも器用な先輩たちである。

「飯 ってなんだい。まずは仕事をしろ。仕事を。」

「やってますよ。だから飯。」

さつきから善知鳥ちゅう先輩は飯 としか言わなくなってきた。そのあとは5秒に1回の単位で「アド先生飯。」と繰り返している。

僕らもそれに便乗して、

「アド先生。飯。」

佐久間が乗ってさらに留萌と木ノ本も乗った。それにつられるような形で僕も乗る。

なんだかんだで19(7)時。

さっきの攻撃が聞いたのかは知らないがアド先生のおごりで夕食のラーメンを食べた。その後……。

「永島君。君は遠江急行の鹿島駅に送っていけばいいかなあ。」
と聞いてきた。

「いえ。遠江急行の芝本まで送ってってください。」

「……。はい。分かりました。じゃあ、当日は遠江急行の芝本に迎えにすればいいですか。」

「いえ。その時は遠州鉄道の芝本駅の近くにサークルエーがありますからそつちにお願いします。」

「分かった。ちょっとまたあとでまとめてくるから、詳しいことはその時でいいか。」

「はい。」

しばらく走って遠江急行芝本駅に来る。ここに自転車が置いてあるのだ。車を降りて、

「お疲れ様です。」

「永島。お疲れー。」

「永島。EF510。忘れないでよ。」

全員に見送られて、次は見送って別れた。

51列車 違いを述べよ(後書き)

このしも濃い。

模型の仕業を考える場合、妥協してはいけません。そもそも、模型
いじっている中で妥協して走らせているものほど格好悪いものはな
いのです。

52列車 マイナススパイラル

その日。家に帰ったらすぐに離れに引きこもった。ピンセットを片手にそして木ノ本のEF510北斗星色ほくとせいしよくを持って。

「ああ。面倒だなー。」

そう言ってクリアケースのふたをかける。中には衝撃吸収のマット。俗にいうプチプチマット。その下に青色の機関車が入っている。真ん中には流れ星。そして「EAST JAPAN RAILWAY イースト ジャパン レイルウェイ COMPANY」と書かれている。流れ星の隣にはほんの数ミリの穴が開いている。ここにナンバープレートをはめ込む。ほとんどの鉄道模型はこのようになっていて、この穴に適当な部品をはめ込むという方式。当然部品もとても小さい。くしゃみとかで吹き飛ばしたら一巻の終わりである。

そんな部品をカッターで切りだして、側面と前面の横に長い穴にナンバープレートをはめ込む。これくらいは説明書を見なくても分かる。ナンバーはEF510-501号機。家にあるEF510が502号機だからだ。他にも505号機と506号機のナンバープレートもあつたがなんか気に食わなかった。

ナンバーをはめ込み終わると次は前面に取り付ける手すりだ。この頃の模型はこの小さな部分まで別パーツになっているものが多い。そしてそのほとんどはユーザーが付ける。なくしてもいいように予備の同じパーツがあるが、なくしたら一巻の終わりであることに変わりはない。慣れてない人ならこれには1分くらいかかる作業。これを15秒くらいでやってのける。全部で4つ。しめて1分だ。

「ふう。出来たー。」

すべてはめ終わるとため息が出た。本当にしんどい作業なのだ。今までにこういう経験は少なくとも20回ある。1回目はよく覚えてる。「寝台特急あさかぜ」の牽引を担当するEF66の前面の手すり、ナンバープレート、ヘッドマーク、そして模型の連結器「カ

「プラー」を見栄えのいいものに換装かんそうしたことだ。2回目は「あさかぜ」の客車24系のカプラーすべてを見栄えのいいカプラーかんそうに換装かんそうしたこと。3回目は……。言っていたらきりがないか……。なお、この作業にはふつうに10分、5分はかかる作業。それを14両分やっていたら1時間などあつという間に立ってしまふ。それほどツボになる作業ではないが、そうしないとあとあと困るのだ。「さてと。」

そう言つて椅子から立ち上がった。机の上に置いてあるごみを捨てて、次は暁あかつきフェスタに持つていく模型の選定である。

車両庫に言つて自分が走らせたい車両を決める。もちろんのことだが新幹線しんかんせんを持つていくことはできない。持つていける新幹線車両しんかんせんは400系「つばさ」とE3系「こまち」と「つばさ」。そしてEアイast Iだけだ。それ以外が在来線を走るときは廃車か新車投入の時だけだ。

「えーと、「ネックス」と「北斗星ほくとせい」と……。」「箱の中をぐるっと見回してこの中にはもう目的のものがないことを確認する。次の箱に行つてキハ181系「特急はまかぜ」を、次の箱にいって「寝台特急はやぶさ」をその次の箱で223系1000番台を……。」「あれ……。」「ふと声が出た。

（あれ。1000番台どこだ。）
ふつうならこの箱に入っているはずの223系1000番台がどこにも見当たらないのだ。他の従兄の箱を探してもどこにもない。あつたのはコキ100形の1300トントt級貨物だけ。
（どこにあるんだよ。223系1000番台の新快速米原方面長浜行き12両……。仕方ない。1000番台の新快速姫路行き12両で我慢……。あれ……。新快速長浜行きだけじゃない。姫路めじろ行きもない。駿兄しゅんちゃんのやつといったどこにしまったんだよ。まさか、僕には走らせたくないから隠したのか……。いや、そん

なこと今までなかったか。それとも、自分の箱にしまっ
てないだけかなあ。」

そのあと30箱ある箱をすべて出して探してみたがどこにも駿兄
ちゃんの223系1000番台新快速姫路行きと米原方面長浜行き
は出てこなかった。

翌日。

「……。」

「永島。どうした。目の下にクマできてるぞ。」

宿毛が心配そうに聞いてくると僕は顔を机に伏せた。

「い……いえにあるはずの223系1000番台が見つからない

」。

「……。それだけ。それだけでこんなに落ち込むのか。」

「坂口に聞いてみたらいいんじゃないか。あいつなら何か知ってる

だろ。」

「そうだな。そうしよう。」

「永島。携帯もってこい。」

前には四ツ谷先生がそれをよこせというそぶりをしている。

「バカ……。」

「ホウエ。」

この声は自分でもどこから出たのか疑問に思った。

1時間後……、

「あー。今日俺ついてない。」

「……。」

宿毛のほうはなんて話しかければいいのかわからないみたいだ。

「こういう時坂口ならなんて声かけていいか分かんだよなあ。あい

つってこういう永島になんて会話するんだろうなあ。」

何かいい話ができるかどうか携帯を開いてうお座の占いを見てみた。

全体12位。

「ダメだ。とても話せるような順位じゃない。」

さらに話題に困った。

放課後・・・、

「ごめん。昼言い忘れてたけど、EF510出来た。」
そう話しかけてきたのは木ノ本きののもとだった。

「あつ。」

カバンの中に手を突っ込んでみる。今度はどこにもクリアケースが見当たらない。

「・・・。」

「忘れてきたのか。」

小さくうなずいた。

「そう。じゃあ、明日持つてきてくんない。」

「ああ。分かった。」

そう言つて僕は職員室に向かった。

(今日のあいつくらいなあ。どうしたんだろう。)

いつもと反応が違う永島ながしまが少し不気味に思えた。

職員室經由けいご芝本しばもと方面中瀬なかせ行き。家に着くと荷物を部屋に置き、私服に着替えて離れに行こうとした。かれこれ10年使っている勉強机の上に置いてある離れの鍵を持って離れに歩いて行った。

離れに來ると、中から物音がする。この離れの鍵を持っているのは宗一むねいちじいちゃんと隆則たかのり父さんと駿兄しゅんあにちゃんと僕の4人。じいちゃんは遠江急行とんかいの経営で忙しいし、父さんも同じように忙しい。なら・・・。

「開いてるぞ。」

中からその人の声がする。ドアをあると中に駿兄しゅんあにちゃんがいた。

「よーす智ともし。久しぶりだな。」

「駿兄しゅんあにちゃん今日は休みなの。」

「ああ。だからここにいるんじゃないか。」

「・・・。」

さつきから「チャチャ。チャチャ。」と模型が線路の継ぎ目をたたいている音と「シャー。」と線路の家を走っている音がする。その方向に目を向けてみると、シルバーの車体の車両が走っている。そ

れだけで僕にはこれがなんなのか分かった。

「1000番台(223系)。」

「ああ。ようやくと戻ってきた。こいつも長く出張してたなあ。」

「やっぱり駿兄ちゃんだったんだ。昨日探したけどなかった。」

「なんだ。使うつもりだったのか。そりゃごめん。こいつも今日パワーアップして帰ってきたばっかだから。」

「パワーアップ。」

その言葉が気になった。駿兄ちゃんの持っている1000番台は全車に室内灯を装備している。それに方向幕もすべて貼り付けてある。もうパワーアップする余地はないはずだ。

「どこがどうパワーアップしたっていうの。」

「だよなあ。ふつうだったらもうパワーアップするところはないよなあ。でもあつたんだよ。一か所。」

そういうと駿兄ちゃんは1000番台を止めて、4編成あるすべてのクハ222形(制御車)とクモハ223形(制御電動車)を背中合わせに並べて、

「今からパワーアップしたところを見せてやるよ。」
と言った。

「いったいどういうことだろうか。クハ222が4両並んでいるほ
うに回ってみる。駿兄ちゃんがそれを確認して、

「これがパワーアップしたところだ。」

と言ってコントローラーのマスコンと常点灯を一気に最大出力にした。

「あつ。」

その違いにはすぐに気付いた。これまで黄色いライトだったクハ222のヘッドライトが本物と同じように黄色と白にはっきり分かれていたのだ。

「すぐに分かるだろ。これまでのライトとはもうおさらばだ。全部
LEDに変えてもらったからなあ。」

「LEDって。これ駿兄ちゃんが家に持って帰って改造したの。」

そういうと駿兄ちゃんしゅんは笑って、

「そんなこと俺がするかよ。これ俺がネットで見つけた模型店の人がやってもらったんだ。1両1000円で。それが8両で8000円。送料とかも合わせて1万以上したぜ。」

(だから。だからなかつたんだ。)

「それってどこの模型店。」

「大阪のやつだよ。ていうかこの人起用だよなあ。8両もこうしてくれたんだから。これで運転楽しもうぜ。」

「・・・。なんで教えてくれなかつたんだよ。」

「本当はびつくりさせようと思つてな。」

「家に1000番台がないだけでも十分びつくりしたよ。」

「ハハハ。まあ、入つて来い。久しぶりに二人で運転やろうぜ。」

僕はすぐに中に入った。

「うん。もちろんそのお詫びとして1000番台走らせるからな。」

「はいはい。じゃあ、俺は813系でも走らせるか。」

「直流の隣に交流の車両が走るつてないでしょ。」

「模型だからできるでいいんじゃない・・・分かつたよ。じゃあ221

系にしとくわ。6両たす6両で新快速。」

「そんな組み合わせあるんですか。」

「昔はあつたんだろうぜ。昔は。」

「じゃあ、2000番台も走らせる。その隣に「雷鳥」走らせてや

る。」

(ここは草津から京都の間かよ・・・。いや。山科から京都かあ。

短っ。)

そんな感じで車両を並べる。走る線路は外側から485系「特急雷鳥」、223系2000番台新快速姫路行き、221系快速米原行き、223系1000番台新快速米原方面長浜行き。それを30分間展開して・・・、

「満足したか。」

「うん。久しぶりにストレス発散したー。」

(そりゃ、よかつたな。)

「で、2000番台(223系)の付属編成の行先を湖西線經由敦賀行きにして、基本編成を近江今津行きにしてほしいんだけど。」

「はっ。お前。これ変えるだけでも結構時間かかるんだぞ。」

「こら。そういうこと言わない。」

(チエー。智とちに付け込まれたなあ。当分はこれで雑用で扱われそうだ。)

「この野郎。後で覚えとけよ。」

「ヤダー。」

これで1000番台の一件も落着。次は暁フェスタだ。

52列車 マイナススパイラル（後書き）

今まで出てきた脇役のフルネームを考えました。

たまな 玉名 恵美
しんしろ 新城 隆彰
のぞみ 希望 輝
わたやま 和田山 俊彦

報告します。お気に入り登録が2になりました。なかなか調子がい
いとは言えませんが、頑張ります。

53列車 無線

10月21日。6時52分。遠州鉄道芝本駅……、

（はあ。今日も間に合わなかった……。2分差で出てくっついているものなあ。）

心の中でため息をついた。

列車は芝本を発車すると進行方向右手に分かれた線路と再び合流し、バラストの真新しい線路に入る。今芝本と次駅小林の間は高架化工事中。そのために仮線に付け替えられている。

（ああ。今日の組み合わせは2003と1005。この頃1005にしか乗ってないよ。いい加減にしてくれないかなあ。この車両好きじゃないんだよ……。つうか、毎日乗ってたらふつつ飽きるし嫌になる。）

心の中で不服を爆発させる。そんなことをしてもどうにもならないのは仕方がないことなのだが……。

すると……、

「遠鉄電車。遠鉄電車。こちら遠鉄……です。……。」
無線が入った。

（そういえば。この時間の列車つてよく無線入って来るけど……。でも、言ってることは最初の遠鉄電車と車両しか理解できないんだけどなあ。）

そう思った。そう思う頃には無線の受け取り側からの無線が入る。そしてそれにまた答える。

「おはようございます。16列車です。2004号、1006号。……。」

（2004）
「おはようございます。16列車2004号、1006号……。了解です。」

そのあと無線発信元からまた通達があつて無線が終了する。

(2004つて今はつきり言つてたなあ。何がなんなのかはよく分かるけど、16列車つて何分の列車だろう。この先で2004に合わないのはつきりしてるから、この後の列車よね。次の列車にしては無線が入るのが遅すぎるかあ。なら次はないわね。その次は30系だし、あるとすればそのあとかあ。)

さつきから語られていることについて説明しよう。遠州鉄道は地元浜松を走る私鉄。恐らく日本有数のバスのネットワークを作り上げていることで有名だろう。しかし、遠州鉄道にはバス以外に百貨店、タクシー、鉄道、建設会社と色々な幅がある。その中の鉄道のことを説明しよう。今乗っている車両は遠州鉄道が所有する1000形という車種の第5編成。新浜松側が制御電動車で西鹿島側が制御車。付番は新浜松側から1005+1505となっている。

この前にいて、1005をリードしているのが2000形の第3編成。付番は2003+2103となっている。1000形と同様新浜松側つまり数の小さいほうが制御電動車。数の多いほうが制御車となっている。そしてさつき無線の中で語られた2004と1006はそれぞれ2000形第4編成と1000が第6編成のことである。この中で一番新しいのは2000形第4編成。まだ工場から出てきてまだ1年足らずしかたっていない本当の新品である。

そして、逆に古いのが今乗っている列車の2本あとにやってくる30系という系列。顔は昔の湘南電車。窓が真ん中で2枚に分かれていて、ヘッドライトは車体の一番上にしかない。その中でも変わり種はいてモーターを1000形と同じものにし、ライトを下にずらし、二つ目になったものだ。しかし、ドアは1両に2枚しかついておらず、その中には片開きのもので存在する。そのため昼に通常営業に就くことはなく朝のラッシュ時のみ4両編成で働いている。(うーん。どういう意味だろう。)

どうしてもさっきの無線の内容が気になった。

この列車に乗っていくと途中浜北と上島と八幡で列車の交換をする。それはこの鉄道が単線であることが関係する。そこであった車

両は順に1007、2002、1003、1004だった。

(今日動くのは2002と1003と2003かあ。さっきの2004も気になるけど、2002だよなあ。)

今日帰りに乗る車両を決めながら学校への道を急いだ。

その日の放課後……

15時28分に出る列車に間に合ったのでそれをホームで待つ。

しばらくすると列車が参りますとアナウンスが入り、西鹿島側にしかじまから列車が上ってくるのが見えた。特徴は菱形パンタグラフ。

(あれ完全に1000じゃん。)

それだけで形式の判断はつく。しかし、それより掘り込んだことは分からない。それは近づいてこなければ……。

(もしこの時間が1000だったら次の来るのも1000かあついてないなあ……んっ。)

近づいてくる列車に耳を傾ける。そして左上にある形式を確認してみた。車両はパンタグラフに似合わない歌声を奏でながら自分のいるホームの反対側に入ってきた。

(2002・なんで。)

何が起きているのか少しわからなくなる。

(そうか。2002今年の猛暑で頭がどうかなっちゃったんだ。それであんなに血迷ったパンタグラフを。1001じゃないんだからやめてよね。これじゃあ余計複雑になるじゃん。)

止まる直前になって新浜松側しんはままつからも列車がやってくる。特徴はシングルアームパンタグラフ。2000形か1001か。これはもう賭けの領域である。

車番を見て思わずガツポーズをした。2000形第4編成。2

004。一番乗りたい車両だ。

「ヤッター。2004。」

この番号を見たらすぐに新浜松側しんはままつに向かう。列車に乗り事には変わらないのだが、乗る車両は制御車せいぎょしゃより電動車のほうがいい。理由は楽しいからだ。もちろん、乗りこんだらやることはこいつの歌声を

聴くことである。

列車のドアが開くのを待って車内に入る。乗りこんだところは電
動車の真ん中のドア。それでもまだ運転席に近づく。電車に乗って
いて真ん中の席ほど座っていてつまらないものはないからだ。

進行方向右側には先客がいる。その人の前に荷物を置いて、そこ
が空くのを待つ。それまでは辛抱だ。しかし、次駅助信すけのぶはこちら側
に降り口が来る。つまり、この席が空く確率も高いのだ。

車掌が笛を吹いて、

「ドア閉まります。」

と早口気味に言う。言い終わったら乗り込む乗客がいないことを確
認してドアを閉める。ドアは電子音を2回発して閉まるうとした。

「梓あすひ。早く電車来てるよ。」

どこかで聞き覚えのある声だ。その声を聴くとドアがまた開く。あ
わただしく電子音は2回余計になった。そして、よく見慣れた制服
を着ている女子が二人階段に一番近いドアから乗り込んだ。

「梓あすひ。安希あき。」

その二人は黒崎くろさきと園田そのだだった。顔を見るなり話しかける。

「よーす。」

二人は結構全力で走ったようで息切れしている。

「よかった。間に合って、これに乗り遅れたら12分待たなきゃい
けなくなるからなあ。」

園田そのだが制服内にこもった空気を入れ替えながら言う。

「はあ。安希あき。なんで大声出すんだよ。恥ずかしいじゃん。」

「いいじゃん。間に合わないよりは良かったです。」

「た・・・確かにそうだけど。」

「ハハハ。」

「そうだ。萌もえだったらどうする。もし電車に間に合いそうで間に合
わないっていう状況。萌もえだったら乗っちゃう。それとも乗らない。」

「えっ。車両による。」

「・・・。」

(当然の答えかよ。)

「今乗ろうとしてるやつが1000形だったら問答無用で見送るでしょ。まあ、次に来るやつも1000形だったらあきらめるけど・・・で、もし2000形だったらぶつうに乗る。」

(・・・。萌の判断基準はなんなんだかわからん・・・。)

その会話をしている間にも列車は坂を下つて、

「ご乗車ありがとうございます。助信、助信です。降り口右側です。助信でございます。」
とアナウンスが入った。

助信に停車し、進行方向右側の席が空いたので、黒崎たちを促してそこを占領する。次駅曳馬は降り口が反対側になるので、この車両からの下車は少ない。次の上島も同じでこの車両からの下車は少ない。一つ違つとすれば、八幡と同様入れ替えを行うということだろう。新浜松に向かう列車は1003だった。

(あれ。これつて朝見た・・・。これは折り返して15時54分の西鹿島行きになるから、次の2003が16時06分・・・。)
朝あつたことと自分の頭の中で整理する。

(この列車が2003の3本前。ていうことは・・・。昼遠州鉄道で走る車両は6本。つまり、2004はきょう2003の3本前であり3本あと。だから、朝言つてたあれをかけ合わせて・・・。これの3本あとだろ。だから6時52分の3本あと。7時28分。7時28分、西鹿島発7時24分のやつが帰りの15時30分になる・・・。じゃあ残りの16列車つていうのは。)

ただひたすら考える。自分の頭の中に時刻表を広げて、
(一番最初5時34分の始発が1列車とすれば・・・。次に出る5時52分が3列車。次が5列車で、36分が7列車。それで私が乗つてく列車は9列車つてことになるけど・・・これじゃあ7時28分の列車は16じゃなくて15になつちゃう。どっか間違えたかなあ・・・。あつ。)

これですべてがわかった。さっきから言われている番号は列車番号

というもので世界で運行されているすべての列車において番号がある。それはある法則の元付番されているが、ここでは触れないことにしよう。なお、列車番号は時刻表で下りと書かれているものには1・3・5・7などの奇数。上りには2・4・6・8などの偶数が付番されている。そして遠州鉄道えんてつの上り下りは新浜松行きしんはままつが上り。西鹿島行きにししかじまが下りである。つまり・・・。

「なるほどね。分かっちゃうと案外簡単。」
とつぶやいた。

「何が。」
さつきから考え込んだままだった坂口さかくちは普通に気になる。黒崎と蘭くろしみなぎの田のたが声をそろえて話しかけてきた。

「やっぱり毎日使うとこれくらいふつうに分かっちゃうんだね。教えてあげるよ。」

（また電車でんしゃのことだ。）
止める暇もなく坂口さかくちが続ける。

「この時間に来る列車は7時28分に芝本しばもとを発車する列車。6時52分の列車で上島かみじまで入れ替えるのが15時40分発。八幡はちまんで入れ替えるのが54分発。そして、6時52分の新浜松側しんはままつの車両が16時04分。次の7時4分の新浜松側しんはままつの車両が18分発。っていうこと。」

（何を言いたいのか全然わからん。）

「これで、いつどの時間に列車が来るのかわかる。いやあ、毎日使うんだし、それくらいの贅沢ぜいさくしたほうが楽しいよねえ。」

「・・・。」
それは贅沢ぜいさくっていうもんじゃないと思うが・・・。

「はあ。でもわからないところがあることには変わりないかあ。7時28分のやつって混むから嫌なんだよなあ。」
「という今度は、

「あれって自分の降りたい駅の出口に一番近いところに乗ろうとするっていうのがふつうの流れじゃない。だから一番降り口から遠い

ところから降りれば、混まなくなるんじゃないかなあ。」

「……。」
なんと回答していいのか。

「うーん。それって終点まで行く人は階段に一番遠いところに乗れ
っっていうことだろ。」

「うん。そういうこと。」

「……。」

黒崎くろさきと蘭田そのだは顔を見合わせた。どう回答していいのかわからない。

普段から遠州鉄道えんてつを使っているがそんなことなど考えたこともない。
やっぱり鉄道マニアとごくごくふつうの一般人とは考えることと見
ることが違うのだろうか。

「ダメかなあ。」

「ダメっていうわけじゃないけど、それってただ人を均等にしたい
だけだろ。」

「うーん。やっぱり終点まで行く人が多いってところかぁ……。
あつ。」

今度は何を思いついたのだろうか。

「混むと言えば、」

「混むといえは。」

「よく朝の列車ってドアに固まる人いるじゃない。あれって死ねば
いいと思う。ムチャクチャ腹立つんだよねえ。ドア付近メチャクチ
ヤ混んでるのに通路混んでないって。蹴り飛ばしたくなるわよ。」

「……。」

多分、坂口さかくちだったら乗客に対する文句で半日つぶれそうである。

53列車 無線（後書き）

この頃のアクセス数は後書きになんか共感しやすいものを書いた日
上がるという傾向にあります・・・。

54列車 進めます

10月24日土曜。今日はまた暁フェスタの準備だ。今僕たちは事務所の2階にいる。

「箕島君。そつちの「青木海岸」のモジュールをここに持ってきてくれるかなあ。」

アド先生が箕島に指示を出す。今ここにいるのは箕島と僕と留萌だけ。木ノ本は昨日から寝台特急の撮影に出かけたらしく、今は富士にいるという。醒ヶ井はただあることを知らないだけ、佐久間は面倒だから来てないのである。今日に限って出席率が悪いのだ。

「永島君。「青木海岸」の3枚目どこにあるかわかるかなあ。」

「あつ、ちよつと待ってください。」

そう返事して「青木海岸」の3枚目を探す。「青木海岸」とは文化祭の時に手伝いに来てくれた青木洋輔さんの作品らしい。それを示すものとしてタイトルに青木とはいつている。モジュールは海岸線を行く線路になっていてS字カーブが連続してある。ここを通るとき列車はうねうねと蛇のようにうねって通過していく。これが1両や2両といった単行では映えないが貨物列車など10両以上の車両が連なる長大編成なら映える。鉄道好きのちよつとしたこだわりだ。

「ありました。」

「青木海岸」の3枚目は白いケースに埋もれるような形で白いケースの中に入っていた。前に置いてある白いケースをどかして中の「海岸」を出す。それをアド先生のいるところに持ってって2枚目と4枚目につなげる。

つなげ終わった時アド先生の携帯が鳴った。着メロはクラシックらしい。と言ってもクラシックということ以外は分からない。どこかで聞いたことがある曲なのだが……。

「もしもし。」

アド先生のいつもの対応だ。

「はい。ああ。じゃあそこからずっと東に行つて、製材所のところをこつちに入つてきてくれるかなあ。」

誰かと話している。多分誰か加勢してくるのだ。

「はい。待つてます。」

そう言つて電話を切つた。こういう切り口だと善知鳥先輩うしろかもしれないが……。でも善知鳥先輩うしろが道を教えてというのがおかしい。

前にもこういうことがあつたからだ。とすると電話口の人が誰なのかわからなくなる。

「アド先生。新幹線しんかんせんつてこんな感じでいいんですか。」

留萌るもいがアド先生に聞いた。今留萌るもいがやっていることは2面4線の駅えきの設置。ここに新幹線しんかんせん車両を置いて、体験運転をさせようというのだ。

「うん。それでいいよ。だけど、そのコードどうにかならないかなあ。」

コードというのはポイントレールからのびているコードである。模型のポイントレールには手で操作するものと電動で操作するもの二つがある。電動操作のものはポイントレールからコードがのびていて、それを専用のコントローラーに差し込み、さらにそれを模型を動かすコントローラーに差し込んで給電する。手動の場合は当然だが、このような設備は要らない。また、さつき殿堂ポイントもあるといったが、電動ポイントも手動で操作できるため結果を言うと手動だろうと電動だろうとそんなことは関係ないのだ。

「そんなことできるわけじゃないですよ。これを根元から切るんだつたら話は別ですけど。」

「そうかあ。じゃあ、そのままにしといてくれるかなあ。」

「はい。」

ガタン、ガタンという音が近づいてくる。時折通る営業列車だ。

もし営業列車じゃなかったら、天竜峯構内てんりゅうほうこうちで行われている列車の走行テストだろう。ここから右手に見える扇形車庫の向こうに隠れてすぐに引き返してくる。外からする継ぎ目の音はこの二つのうちど

ちらかしか考えられない。

「アド先生。こっちはほうは電気系統ほとんど完了しましたけど・
・。」

「じゃあ、走行テスト行ってください。」

「はい。」

僕は持ってきたケースの中に入っている車両をどれでもいいから抜き出そうとした。でも・・・。探し始めるとどれでもいいやという考え方はどこかに吹っ飛んでしまい自分の好みで選ぶようになってしまう。ちょうど手に取った381系「特急スーパーやくも」を走らせることにした。「スーパーやくも」とはもちろん列車の名前であるが、岡山と出雲市を結んでいる列車の名前である。ここには「やくも」が走っておりその停車駅を可能な限り減らし速達でこの間を結ぶ列車が「スーパーやくも」なのだ。名前は消えてはいないがこの列車はすでに「やくも」に統合されて存在しない。懐かしいといえは懐かしい列車だ。

車両ケースの留め具を外して中を見してみる。下のほうにしまっていた先頭はパノラマグリーン車。大きな窓は前にせり出している。そして、車体の薄紫と窓上にある「SUPER YAKUMO」のロゴ。これがこの車両のキーポイントだ。

これの上から数えて3番目（4号車 モハ380形）をレールの上に乗せて、コントローラーの電源を入れ、ディレクションを前進に入れる。つまみを回すとすぐに「やくも」は発車してくれなかった。この箱には「なまじりままとし 榎辻将利 部活寄贈」と書いてある。買ってもらうってから何十回も走ったことは間違いない。コントローラーのつまみを半分くらいまわしたところでようやくと発車してくれた。一周難なくするかと思っただが、やっぱりつかえた。古いうえに電気をとりづらいのだ。何とか一周させて、駅まで戻した。裏にひっくり返してみると汚れが所々についているのがわかった。車輪にはほとんど同じ位置に汚れがついているところもある。これでは車両に電気が行かないことも分かる。ちょっと前に教わった方法で車輪をきれ

いにしてもう一度走行試験をやった。さっきつかえたところは減速したものの通り抜けられるようにはなった。

誰かが階段を上ってくる音がする。床がギシギシなるのだ。

「手を上げる。」

と言って入ってきたのは諫早^{いさはら}だった。

「あつ。なんだサヤさんいないんだ。」

ちよつと残念そうに言うと、

「永島^{ながしま}さん。持ってきましたよ。宮原^{みやはら}のMA編成と網干^{あほし}のV編成。

このごろ走らせてなかったから走行試験やっていいか。まあ、いいって言ってくれなかったら殺すけど。」

「諫早^{いさはら}君。ちよつとこれ手伝ってくれないかなあ。」

「黙れ。このハゲが……。あつ。ヤバい、言っちゃった。」

「おい。それはどういう意味だよ。」

ちよつと怒り気味の口調になる。

「ハハハ。サラって言っちゃわなないように気を付けないと。」

「はいはい。」

「走行テストだったら僕がやつとくけど。ここの通電テストもしたいし。」

「お願いします。えつと脱線したら……。」

「分かつてる。「なんで脱線するんだよ。バーカ。」って言っくけばいいんだろ。」

「はい。お願いします。」

と言ってアド先生が申し出た手伝いに入る。僕はKATOの2223系の箱を開けて、線路に並べる。モーターが入っているのは宮原^{みやはら}の車両は6号車（モハ223形）、網干^{あほし}の車両は8号車（モハ222形）になっている。まずは宮原^{みやはら}所属の「丹波路快速^{たんはじかいそく}」のモーターを線路に乗せる。こちらは何の支障もなく一周。次は網干^{あほし}所属の快速^{かいそく}加古川^{かこがわ}行き。こちらも何の支障もなく一周した。あとは各種走行試験。機関車を筆頭に貨物列車を運転する。今回の周回は解放ひとつない。ごく稀の線路状況になった。

そんなことをしている間にも時間は12時をまわった。

「それではお昼にしてください。また13(1)時になったら作業を再開します。」

アド先生はそういってお昼を食べに行つた。

「はあ。食べるもん持ってきてねえ。」

「おいおい。大丈夫か。」

留萌るもいが心配そうに聞く。

「大丈夫だよ。この頃の部活お昼は向こうで買うよって言うておきながら何も買わずに活動してるから。」

(なんか榛名はるなに似てるなあ。)

「省エネなんだな。」

「……。」

「そうだ。走りました。僕の6000番台(223系)は。」

「ああ。両方とも走つたよ。あれって行先見て思ったけど網干あみじにいるやつ。あれは前に221系の6両つなげて走るんだよなあ。」

「はい。」

「……。」

「どうかしたんですか。」

「いや。ただ。そうするんだなあって思っただけ。」

立ち上がって僕のカバンのほうへ歩く。チャックを開けて中のものを取り出す。今日は必要ないとは思つたが223系1000番台を持ってきている。

「うーん。1000番台ですかあ。」

「なんだ。1000番台より2000番台のほうがお気に入りか。」

「そういう意味じゃないですけど……。」
諫早いさはやは語尾を濁らせた。その時箕島みしまは模型にかからないところで弁当を食べ、留萌るもいは持ってきた車両の中身を開けては閉めてを繰り返している。

「なんじゃこりゃー。」

その留萌るもいがいきなり叫んだ。

「どうかしたんですか。」

「これ最後にいじつたやつ誰だよ。」

留萌るもいが持っていた箱には「TOMIX トミックス Series 381 L
ミニチュア ミニチュア Express エクスプレス SUPER スーパー YAKUMOやくも」と書
いてある。

「俺だけだ。」

なんか悪いことをしたように恐る恐る手を挙げてみた。

「なんだよ。これ。編成ムチャクチャじゃないか。国鉄の特急車両
はどちらかの先頭車にドアの位置を合わせれば正解なんだよ。こん
なムチャクチャな編成がどこにある。」

説明しよう。今ドアの位置は上から順番に右、左、左、右、右、左
となっている。

「それにパンタ車の位置だつてすごいじゃないか。これじゃあ編成
無視の領域を超えてるぞ。2号車のパンタ車の隣がパノラマグリー
ンって。こいつはいつクモロ380になったんだよ。」

説明しよう。この381系という車両はパンタグラフ車の次。もつ
と詳しく言うとパンタ車のドアがついているほうにパンタ無しなしの電
動車がくる。つまり下から2番目に入っているパンタグラフ車の右
隣。編成において先頭車にあたる車両の位置に電動車が来なければ
ならない。ちなみに「スーパーやくも」のパノラマグリーン車は電
動車ではない。

「んなこと知るか。俺が触つたのはMのパンタ車だけだ。それ以外
は何も触つてないぞ。」

すかさず抗議する。

「えっ。そうなのか。」

「そうだよ。」

「じゃあ、これ一番最後にしまった人つて相当バカだよなあ。ドア
の位置までムチャクチャだし、編成無視にもほどがあるし。」

そう言いながら下から2番目と3番目の車両を出してくるっと回転
させる。その状態で元に戻して、

「よし。これで完璧。」

と言って箱のふたを閉じた。その頃には僕が持ってきた1000番台(223系)にも気づいたようで、

「これ。関西の新快速じゃん。」
と言っていた。

「知ってるのか。」

こういう問いをするほうもおろかだろう。留萌は車両鉄。ここまで有名な車両は知らないはずがない。むしろ知っているのがふつうのレベルの車両である。

「知らないわけないだろ。こんな名車。でも・・・私は0番台のほうがいいんだけどねえ。」

ちよつと声を落とした。

「ああ。留萌って「関空・紀州路快速」のほうが好きなんだ。」

「0番台ってあのマアルイおめめのあれですよねえ。」
諫早が続ける。そういうと留萌は小さくうなずいた。

「そういえば、留萌って一番好きなの0系だったよなあ。だったら裏付けるかあ。」

自分の中で勝手に結論まで持っていく。

「なるほど。じゃあ、丸いヘッドライトしてるやついってけば大体好きな車両にあたるってことですよねえ。」

「・・・。」
留萌はしばらく黙っていたが、

「まあ、そういうことになるかなあ。だって四角いヘッドライトのやつってなんとなく男の子っぽいって感じしない。」

「・・・。」
しばらく考え込んだが、分からないわけではない。

「それにヘッドライトが丸いとかわいって感じしない。」
それも分からないわけではない。

「うーん。やっぱり俺には女の子の感覚って理解できないわ。俺は昔からつり目のほうが好きだし。」

「だから100系なんだろ。あれ試作車に至ればものすごい目
じゃん。」

「……………」

「……………まさかの知らないのか。
大きくうなずく。」

「なんの自慢にもならないぞ。」

というため息をついて、

「いいか。X0編成は窓小窓で……………」

「あつ。なんだ。そのことかあ。それだったらぶつづに分かる。
あれって量産車よりつり目なんだな。」

これでまた100系について賢くなった。

54列車 進めます(後書き)

書いてて思いました。

鉄道小説として風上におけなくてすみません。

報告します。11月21日を持って累計アクセス2000突破しました。

今のところアクセス数2059(11月22日7時47分現在)

ユニーク数340(11月22日7時47分現在)で

す。

これからもがんばって書いていきたいと思えます。

55列車 寂しくなる

午後……、

「永島ながしま。そつちの走行テストだいたいいいならこつち手伝ってく
ない。」

留萌るもいに聞かれた。

「分かったよ。」

そう言つて新幹線モジュールが展開している周回に入る。こちらは
在来線のモジュールが外に展開し、その内側に在来線が展開してい
る。在来線が乗っている机と新幹線が乗っている机の間は人が一人
カニ歩きをして通れるぐらい。ここでの作業は簡単なことではない。
そのため、在来線の運転設備は新幹線モジュールの中の設置し、新
幹線の運転設備は在来線の外に設置する。これからやる作業はここ
をその状態に持つていくこと。

在来線の机の下を通つて、新幹線の机の下を通る。頭をぶちそう
になるくらいの狭いところを通り抜けてくると、

「何もそこから通らなくても。そつちのほつがもつと広いじゃん。」

「それ先に言つてよ。」

「……。分かった。じゃあ次からそこから通つてくれ。」

とあきれられた。

新幹線モジュールはこのごろ部活で作つた盛土モジュールを何個
もつなげて組成する。しかし、そのモジュールの高架部分を盛土と
言つていいのは別だが……。盛土もりどというよりは擁壁ようへきと言つたほ
うがいいか。そんなことどうでもいいか。

この擁壁モジュールは前述する通り部活の時に製作した。中には
角材を適当な長さに切り落とした木材、もしくはすのこを2段重ね
にしたものが入っている。その上に板を敷き、釘で固定し、複線レ
ールを敷設。バラストをまいたものである。中には真ん中をその構
造にせず、高架橋になっているもの。鉄橋になっているものの2種

類がある。それをランダムに並べて、新幹線しんかんせんの周回を完成させる。二人でやったのでその完成は早いものだ。10分たたない間に直線部分だけの作業が完了した。

「アド先生。大体こっちはできましたけど。」

「はい。じゃあ、今度は配線やつてください。」

留萌るもいはこういわれても分からない。今回が初めての展示なのだ。

「ああ、俺が分かるよ。」

その作業は僕が変わった。

「永島君ながしまいいかな。このカーブレールにはこのようにフィーダーを差し込む部分があります。」

その部分をアド先生が指差す。そこは何かはこのようなものが入る形状になっていて、その先には等間隔にレールの底が見える。アド先生はさらに説明を続けて、四角く、下が詰めのようにになっているグレーの物体を手にとった。それには青と白のコードがのびており、その先には他のコードが結線できる形状になっている。

「これをここに差し込んでください。後はいつも配線をやる通りです。」

説明は終了。その説明の通りに高架用フィーダーを差し込む。差し込むと高架用フィーダーのほとんどの部分が隠れる。見えているところは取り外しの時に使う爪だけだ。このフィーダーの刺さった高架カーブを二つ作り対角線になるように配置する。残りはこれを必要としない。文化祭の時に行った作業だけで他のは完了。それを配置して集会を完成させる。周回が完成したら次は配線。配線が完了すると車両を乗せて走らせる準備をした。乗せた車両は外回り（外側から見て手前側）がE2（イーツー）系新幹線しんかんせん「はやて」。内側（外側から見て奥側）がE4（イーフォー）系「MAXマックス」。

「よし。行くぞ。」

と言ってコントローラーのアクセルを自分のほうに引く。今使っているコントローラーは発車と停車しかできない非常に非常に扱いやすいコントローラー。普段家で使っている「サウンドコントローラー」

の操作を非常に簡略化したものだ。

電源を投入するとE2（イーツー）系とE4（イーフォー）系は同時に同じ方向へ動き出した。

「なんで「MAX」がそっちに行くんだよ。「MAX」はそっちじやなくてこっちでしょ。」

僕の位置から見て左に動いたE4（イーフォー）系に留萌がキレる。

「まったくバカだな。」

「バカはどっちだよ。」

まずは留萌を抑えることだ。

「どつか配線間違えただろ。今は「はやて」しか動いちゃいけない。「MAX」も動いたってことはどつか配線が違う。」

「配線違うって。これでどこを直せばいいんだよ。」

「それこそ探せよ。」

留萌のほうはぶつぶつ言いながら、配線をチェックする。周回のほうには何も不具合がなかったらしい。とすれば……。

コントローラーが乗っかっている大の下に新幹線の給電する配線がある。そこを調べてみると案の定そこだった。配線は片方から伸びてきた線が分岐コード一つに集中していた。つまり左から来たコードは左の分岐コードに。右から来たものは右の分岐コードに刺さっていたのだ。これならすぐにそうなるのもわかる。もう一度留萌にコードを調べてもらい、正しくコードをはめなおす。これで「はやて」が動いても「MAX」は動かない。

試しなおすと今度はちゃんということを聞いてくれた。だが……。はめたほうは左に来たものが外回りで、今僕がいじっている右側が内回りになってしまったみたいだが……。これもどうでもいいか。

次は線路に並べてあるE2（イーツー）系とE4（イーフォー）系を別の車両に変える。次に留萌が引っ張り出してきたのは100系「グランドひかり」と500系「のぞみ」それぞれを実際より10両少ない6両並べて、オーケイが出たらコントローラーの電源を投入。

まず最初に走ってくれたのは「グランドひかり」のほうだった。

「こいつ変な音してるけど大丈夫か。」

発車したときから「グランドひかり」は「キューキュー」と音を立てて走っている。そして500系のほうはというと動いてすらいな

い。
「留萌^{るもい}。500系のほうって電気すらいつてないか。」

留萌^{るもい}がロケットのような500系の顔を覗き込み、

「電気は来てるみたいだよ。ライト付いてるし。」

今度はM車に回って、

「ちゃんとモーターも動いてるみたいだけど。動かないわねえ。」

さつきから空回りしかしてないようだ。

「ちよつとそれ貸して。」

留萌^{るもい}から500系を受け取り下を見てみる。でも……。どうなっているのかわからない。車輪はあのときれいにしたから汚れはついていない。それ以外に問題があるのだ。恐らくギアが一個かけているとかそういう問題だろう。

「ダメだ。こりや俺でも分かんない。500系はこれ動かないね。」

「そうかあ。東海^{とうかい}も嫌ってるけど、模型も嫌つてるとはなあ。この地方つて500系走るなつていう運動してる人でもいるのかなあ。」

「それは少なくともないだろ。うちにも500系あるけど、バリバリ動いてるよ。」

「……。」

しばらくその500系に見入る。

「永島^{ながしま}。これ知ってる。」

いきなり留萌^{るもい}が話題を振った。

「こいつ。来年東海^{とうかい}のほうに乗り入れなくなるんだつて。」

「えつ。」

留萌^{るもい}が悲しそうな目になる。

「そうですね。こいつは来年から8両になって山陽新幹線^{さんようしんかんせん}のほうで活躍すること……。」

なんかテンションが上がっている諫早を……、

「諫早。飛び降り自殺して。」
「言ってから続ける。」

「まあ、そうなんだけど……。永島はどう思う。」

なんか前にあつたことと似ている。確かあの時は萌に……。

「東海道新幹線から0系がいなくなるんだって。寂しいよねえ。」

と聞かれたはずだ。そしてその答えは……。、
「そうなのかあ。寂しいな。」
「だっただろう。」

「そうなのか。俺正直あいつは「のぞみ」のまま終わると思ってた。」

「……。そうだよなあ。私だつて信じたくないよ。500系の「こだま」なんて。あいつらしくない。」

確かに。500系らしくない。1997年に登場した15メートルにもなるロングノーズを有する500系。その体は全体的に丸くそれまでの新幹線のイメージから大きく離れた冒険者。合わせて9編成が製造され、初代「のぞみ」300系の運用から速達のものを受け持ち、東海道・山陽新幹線の東京博多間を最速4時間49分で結んだ。それが今度は追い抜かれる立場に転向するということだ。

「……。。」
「どう言葉を発していいか分かんない。だが、留萌には結構衝撃的な事実だろう。」

「前も500系見に行ったんだけどさあ、「まだ俺は走れるのに。」
「って言っているようにしか聞こえなかった。なんでだよ。もっと走らせてあげれば……。。」
「留萌の声はどんどん悲しさ一色に染まっていく。」

「……。。」
「声のかけ方も分からない。もし萌がこういう状態だったら……。。」
「僕は声をかけられないということになる。でも、どうすることもできな。」

「そうだな……。」

今はそれしか答えられなかった。何とか留萌るもいを元気づけてやりたいが仕事が残っている。

「でも……、仕方ないって言えば仕方ないんだよねえ。」

どうやらその結論に達したようだ。目つきは変わってないけど、今はこれでいいのかもしれない。

「……。そうだな。早く残ったこと終わらせちまおうぜ。」
車両を変えて、またテストする。

（500系が「こだま」になると……。0系がいなくなる。ついにお別れなんだ。）

TOMIXの0系の箱を見ているとその上に涙がこぼれた。工場で触った……。お父さんと一緒に運転席に入った……。そして、家族と乗った……。それが遠い過去になる。

（さようなら……。）

みんなには気づかれないように泣いた。

15時。今度は持ってきた車両で走るものの選定。

「えーと、373系は走ったと。」

車両ケースの中に箱を入れる。するとすかさず留萌るもいが中身をチエックする。中に変な編成になっている車両がないか見るためだ。

「永島ながしま。これの2号車（サハ373形）むき逆。方向幕があるほうに揃えなきゃダメだろ。」

「それだったら自分で直せよ。」

「……。はい。分かっています。」

「よしこれも完了。永島ながしま。そっち手伝うか。」

模型の周りに「手を触れないください」という表示を貼っていた箕島みしまが聞いてきた。

「ありがと。じゃあ、外回りの運転ついて。」

「わかった。」

諫早いさはやと一緒に車両を並べる。次に僕のほうに並べたのは223系2000番台。学校にあるものだ。行先は播州赤穂はんしゅうあこう。姫路ひめじよりさらに

西だ。これの5号車（モハ223形）を線路に置いたが、ピクリともしない。前ナヨロン先輩が言っていた寿命が来ているようだ。

諫早いさはさが外に並べたのはキハ95「ドクター東海とうかい」。走る分には走
るのだが、よく脱線する。

こんな調子で調べていくと一つだけハブニングが起きた。床に物が落ちる鈍い音がする。

「何か落ちただろ。」

箕島みしまがそう言つて外、内両方のコントローラーのノッチを切り、電車を止める。落ちたのはいま目に見える範囲にいる381系「スパーくろしお」ではない。とすると落ちたのは内回りを走っていた381系「スパーやくも」のほうだ。

「やくも」のほうだよなあ。」

「やくも」だったら今出口のほうにいるよ。」

留萌るもいがその方向を指差した。

ここは内側から向かうのでは狭すぎる。向こうの在来線ざいらいせんと新幹線しんかんせんの間ではないが、カニ歩きをしてようやくと通れるくらい。そこに走っているコードがさらに通りづらくしている。下を見てみると薄紫の車体が横たわっているのが見える。そして、運がいいことに横たわっているのは1両だけであることを確認したが……。状況を
見る限り運がいいという言い方は失礼だった。車両は上と下の両方に分離し、一つのギア台車が外れている。運が良かったというのはパンタグラフのほうだろう。破損は見られない。

それらを手にとつて来た道を戻ろうとしたが、外から留萌るもいが受け取り、僕はゆつくり車両のおいてあるほうに戻った。

「これはひどいなあ。」

諫早いさはさがそうつぶやいて、落ちた車両の部品をかき集めていく。しばらく落ちた部品に目を通していたが、

「ウォームアップギアがない。」

と言った。このギアはモーターからの動力を車輪に伝えるもの。両方の線路から受け取った電気でモーターが動き、その動きがシャフ

トという部品によって今ないと言っているウォームアップギアに伝えられる。このギアが回転することによってギア台車の車輪がある一定方向のみに回転するという構造になっているのだ。これがないというのは模型にとって致命的だ。もちろんどの部品が欠けても模型は動かない。

「探して。これないと動かないから。」

諫早に命令されて、床を探す。案外簡単に見つかった。それは大体2cmセンチくらいの大きさしかない。横幅はあつて5mミリくらいだろう。それを白い棒がのびていたところにはめようとする。しかし、うまくはまらない。

「はまれ、ボケ。」

と言って白い棒をもぎ取る。それをウォームアップギアの取付口につけて、はめ込む場所にはめ込む。そして、ギア台車を取り付けた何とも慣れた手つきである。そして、床と分離してしまった車体の外装を上からかぶせるように取り付ける。後は線路に乗せてまたテストをする。多少ぎこちないがちゃんと走った。

「それにしてもよくあんな細かい作業できるなあ。」

「あれくらいふつうですよ。223系のM車からモーターもぎ取ったりしてきたわけだし。ていうか、そこに感心するな。」

今日あつたとすればこのくらいだろう。他の車両も走行テストを行つて今日は終了。日曜日はやることもなく家の模型で遊び、次の土曜は最終の詰め。そして、11月1日が来た。

55列車 寂しくなる(後書き)

地元の鉄道が廃止になったりした時、どう思いますか・・・。
さっさと消えてくれと思いますか。それとも、まだ走り続けてほし
いと思いますか・・・。

56列車 やってます

11月1日。暁フェスタ当日。今日はその1日目。暁フェスタは2日をはさんで3日にもある。

「内回りは223系の1000番台。新快速12両でいい。」

「いやまだ早い。313系の新快速8両が妥当だろ。」

と話している。その相手は留萌だ。この中では留萌が一番鉄道に詳しいという位置づけになった。ナヨロン先輩が抜けたからだ。今日はそのナヨロン先輩も来ていない。進路のことで忙しいのだろう。

来ている先輩は善知鳥先輩と2年生だけ。サヤ先輩たちは遊んでいるみたいだ。その代りと言っては失礼だが、青木さんが手伝いに来てくれている。

新幹線の周回のほうはというと・・・、

「通りづらいなあ。」

机の下を通りながら醒ヶ井がつぶやく。

「分かりました。ロケランでそこ吹き飛ばすからどいて。」

「諫早ちよつと待て。いくらなんでも・・・。」

「ああー。300系が走っているところにロケランなんてうてねえ。」

「

「おい・・・。」

「あつ。青木さんこれ・・・。」

「ん。ああ。それかあ。それがどうかしたか・・・。」

木ノ本は白を基調とし、窓周りに青いラインが入っている車両を持って、留萌がいる周回まで歩いてきた。

「さくら。」

「何。」

「0系。」

「・・・。」

（0系・・・。かわいいそうだな。B編成。）

「悪いけど、私はそんな子供だましには引つかからないわよ。それのどかが0系なんだよ。」

車両は丸い鼻に楕円のヘッドライト。そして大きな側面の窓に湾曲した運転室の窓。運転室の窓には5本くらい仕切りが入っている。さらに、下は台車がちよつと見えるだけのところまでおおわれている。一方0系はというと丸い鼻に丸いヘッドライト。側面の小さな窓（もしくは横に広い窓）と中心を頂点に広がる運転室の窓。そして、むき出しの床下機器。ここまで違う。

「えっ。0系じゃないの。」

「確かに似てるけど違う。これは試験車のB編成だよ。」
すると木ノ本（木のね）は何か思い出したように、

「あつ。あの時いつてたB編成つてこれのことかあ。」

「そう。後これととり二つのやつがA編成なんだよ。なんでこんな簡単な違いが見分けられないかなあ。」

「うるさいなあ。まだ勉強中なんです。」

「さつさと覚えろ。学校の授業じゃないんだから。」

「。。。。。」

「まあまあ。それより次走らせるの決めようぜ。」

「次も東海だとしてだなあ。うーん。じゃあ、117系（イイナイイナ）でも走らせるか。」

「何。イイナイイナつて。」

「えっ。117系のおじいちゃんのことよ。あれつて0120-117-1117になつてるじゃん。」

（アメリカンホームダイレクト。。。。）

その頃（てんりゅうあかつき）天竜駅構内。。。。。

（久しぶりに見たなあ。これに見たのは小学校2年生以来かあ。あのときはこんな気にも留めなかったのに。。。。地元のわりに影薄いなあ。）

子供たちを乗せた下が茶色のディーゼルカーが転車台まで進んでく

る。今使っているこの転車台も国鉄二俣線時代からのもの。中に積まれた錘によつてそのバランスをとり今でも現役で動いている。もちろん今ここで方向転換するのは蒸気機関車ではなくディーゼル力。時代の流れでそこだけは変わってしまった。

「萌じやないか。」

と声をかけられる。その方向を向いてみると、

「駿兄ちゃん。」

「文化祭以来だな。」

とだけ言った。駿兄ちゃんも今転車台の上に乗りまわり始めたディーゼルカーに目をやっている。

「小学校2年生のときここに来たこと覚えてるか。」
眺めながら聞く。

「うん。覚えてるよ。あの時は……。」

「俺がお前らを迎えに行つた。それでお前らに体験運転させたんだっけ。でも、お前らの行動力には少し驚いた。」

「驚いたつて。ここには和田山さんに送ってもらつたんだよ。」

「知ってるよ。智からそう聞いた。」

と言つてまた転車台に乗つかつている車両を見上げる。電車はいつもホームからの高さでしか見てないから、こんなに背の高いものとは思わない。3、4メートルになる巨体を見上げた。その窓からは子供たちの楽しそうな顔がのぞいている。それに混じつて大人たちも。はたまたその中でカメラを構えている人もいる。ふつうはできない体験だからである。

「早く上に行つて智に会つてこいよ。久しぶりだよ。」

「……。そうだね。駿兄ちゃんも一緒に行こう。」

「俺がいたら邪魔だろ。お前が出てきたところで上にいくとするよ。」

「……。気遣つてくれなくてもいいのに。」

内心そう思いながら、事務所の急な階段を上つた。

その頃上では……、

「ハルナン。お客さんだよ。はなく撮影してあげて。」

「あつ。はい。」

あわただしく元の位置に戻って暁あかつき鉄道の帽子と制服を着た子供を撮影する。

「あつちも忙しいな。」

「……。」

「永島ながしま。このビデオもう終わったけど。」

佐久間さくまが話しかけてきた。今回の展示ではテレビも持ってきている。結構小さい薄型ではあるが型は古いだろう。そしてビデオデッキも持ってきている。中に入るのはビデオテープではなくDVD。デッキのわりにはしゃれている。そして今終わったといったのは家から持ってきた鉄道のDVD。今は言っていたものには世界の高速鉄道と日本の新幹線しんかんせんのことが流れていた。世界の高速鉄道では代表的なフランスの「TGV」ティージーブイ。ドイツの「ICE」アイシーイー。イギリスの「ユーロスター」などなど。日本の新幹線しんかんせんではおなじみの「のぞみ」、「やまびこ」などが収録されている。

「じゃあ、なんでもいいから適当に流しといて。」

佐久間さくまにそう言っつて、他のDVDを入れさせ、流す。一番最初に流れたのはバンダイのオープニング。ということは……。2000年かそれぐらいの時にあった「のりもの探検隊」というビデオだ。

「トップバッターは新幹線しんかんせん。ってね。」

ふと顔を上げてみれば、

「萌もえ。久しぶり。何しに来た。」

「見に来たにきまつてるじゃん。展示やるって聞いたから。」

僕は萌もえにここで展示があるとは教えていない。それでも遠州鉄道えんてつなどに張り出されるポスターで分かるか。

（誰たれ。そんなことどうでもいいか。）

「永島ながしま。次外にこの諫早いさはやの6000番台出すから、内側にお前の1000番台お願い。」

「ああ、分かった。」

自分のカバンを机の下にしまいこんでいる白いケースから引つ張り出し、中の223系1000番台の箱を引つ張り出す。これはちよつと前大阪まで出張してグレードアップしてもらったもの。その本領を發揮するときだ。

「えーと、それどつち行きになつてる。」

留萌るもいが6000番台とにらめっこをしながら僕に聞いた。

「米原方面長浜行き。」

「よし。都合がいいね。じゃあ、それを8号車のクモハ223から入れて……。」

「12両編成ですけど。」

「……分かった。12号車のクモハ223から入れて、そのあとは分かるよね。」

「ああ。」

僕は223系の箱を開けてまずは4両を線路上に出した。編成はとつても身軽。この4両で運転されるのは関西圏しんかいそくの新快速しんかいそくにおいて長浜ながはら・永原ながはら以北と。なので長浜ながはら・永原ながはら近江塩津おうみしおつ敦賀間つるがはこの4両編成のみが乗り入れる。これだけだと何とも頼りない車両である。(クハ2222+モハ223+サハ223+クモハ223。後ろはちやんと新快速米原行きしんかいそくまいばらになつてるのね。)

横に出ている行先表示を見て何もわかつてないわけではないということを実感する。

「まだあと8両もあるのかあ。ここからはまあ楽だからいいけど。」
姫路ひめじよりの先頭車クハ222形を線路上において、先に線路上に出した4両編成のほうへ滑らせる。クハ222形はその勢いでクモハ223と連結する。そのあとは同じように車両を滑らせ、モーターが入っている9号車(モハ223形)だけ連結し終えている車両のすぐ隣において連結。後は残った車両を線路に乗せて連結するだけである。連結が完了すると発車するときを待つだけである。

「久しぶりに見たなあ。ナガシイの223系。」

「そりゃそうだろ。3月以来お前の前で走らせてないんだから。そ

れに、こいつもお前に会えてうれしいだろうぜ。グレードアップして帰ってきたんだからなあ。」

その意味はよく分からなかった。

「永島。223系準備完了。」

「ああ。いつでもオーケイだ。」

箕島の問いに答える。

「留萌。そっちの223系は準備完了。」

「オツケー。いつ交代しても大丈夫よ。」

「分かった。じゃあ、次で変えるよ。」

と言って先にホームに入ってきた外回りの383系「しなの」を構内に止める。そして、両方のポイントを変えて、223系6000

番台と221系の快速加古川行きを発車させる。それと入れ替わり

に来た8両の313系5000番台と300番台の新快速を止めて、

ポイントを変え12両の223系1000番台の新快速米原方面長

浜行きを発車させた。

萌は発車していった1000番台(223系)を追って歩いて行

った。前と変わったところにはすぐに気がついたみたいで、

「ナガシイ。あれライトLEDになってるよね。」

と聞いてきた。

「やっぱりふつうに気付くよな。」

「あんな違い見分けられない人なんていないでしょ。知ってる人以外でも。」

「外でも。」

「ハハハ。そうだな。」

(永島の彼女か。結構話もあつてるみたいだし。こういうときはそ

んなに話しかけないほうがいいか……)

真ん中に止まっている「しなの」6両と8両の313系。まずは「

しなの」のほうをしっかりと閉まって、次に313系をしっかりと

まう。5000番台のほうは全部出払っているから変な心配をする

必要がなかったが、300番台が入っている0番台の箱は……。

(なんじゃこりゃ。制御電動車のクモハ313の次が中間電動車の

モハ313。そしてその次はサハ313で最後がクハ312・・・。
311系じゃないんだからこんな力オス編成つくるなよな。・・・。
311系でもこんなチンピラ編成つくってないか。確かにクモハ3
11の次位はモハ310だけど、パンタないもんな。)
さらに注意して観察してみると、

(サハ313の床下が・・・。これはひどい。)

話しかけないほうがいいと思っていたが、これは話しかけないとま
ずい。

「永島ながしま。なんだよ。このチンピラ。」

「チンピラじゃなくて、ゴミな。どうかした。」

「どうかしたじゃないよ。どう思う。この吐き気が出そうな編成。」
編成は留萌るもいの言うとおり吐き気をする編成だ。これがどうやって入
っているのかは前述したのでこれの正しい編成を教えよう。制御電
動車クモハ313、付随車サハ313、中間電動車モハ313、制
御車クハ312という編成だ。

「確かに。吐き気がするな。」

「それに見てよ。これ。」

留萌るもいはその2号車を取り出した。僕はその車両を受け取る前に違
和感に気付いた。

そのあと、僕はその車両を正しい編成に直し、再び営業に就いた。
イベントを開催している間には模型に触ってくる子供も多かったです。
ひどい時には走っている車両がすべて横転する事態だった。その被
害を被ったのは関西の電車321系だった。そのあとは新幹線しんかんせんの周
回わいがある在来線ざいらいせん周回わいにE3(イースリー)系「こまち」と「つばさ」
が走ったこと以外は何もなかった。

2日をはさんで3日。この日も目立ったトラブルはなく終了。展
示したモジュールを片付ける。ハイエースにはこの荷物の代わりに
人が乗るので乗り切らない荷物は随時運び出すとのこと。その片付
けが終了すると僕は迎えが来ていることわかってアド先生たちと別
れた。

和田山^{わたやま}さんは事務所の裏のほうに車をつけていた。そこまで車両の入ったバッグを背負っていく。車まで来ると、

「ようやくと終了かあ。」

萌^{もえ}がいた。

「なんですぐに帰ってないんだよ。」

「迷惑だったかなあ。」

「いや。そういう意味じゃないけど。ずっと待っててつまんなくなかったかなあってこと。」

「つまんなくはなかったよ。立ってるのには疲れたけどね。」

「・・・。何時間たってたんだよ。」

「自分でも分かんない。」

ちよつと車の外で話して乗り込む。

「坂口^{さかくち}様は家のほうまでお送りしますか。」

「坂口^{さかくち}様って。さまって呼ばなくていいって言ってるじゃん。ナガシイの家までいいよ。」

「かしこまりました。」

と言ってから車を出す。

僕と萌^{もえ}はその間電車の話で盛り上がった。これが普段の日常。好きなことをしている間はすぐに過ぎて、僕たちは家に着いた。車を降りて、

「萌^{もえ}。送ってくか。」

「いいって。大丈夫。家まで近いんだし。」

「そうだったな。100メートルぐらいしかないもんな。」

「じゃ。また展示あったら教えてね。」

「ああ。じゃあな。」

車をはさんで僕たちは言葉を交わした。

56列車 やってます(後書き)

電車に乗るとき編成ってふつうは気にしないと思います。しかし、気にする人は気にします。乗るときの重要だからです。選んで乗ったほうが得な時、少なからずあると思います。

話は変わりますが、これは一つ一つが長いため、携帯電話からのアクセスはそんなにありません。このごろアクセス数のみで考えれば低迷し続けていますが、読んでくれる人には感謝。

57列車 運んで 瓜二つ やっちゃった

11月6日。今日は体育館のステージ裏に置いてあったプラレールの山を青木さんたちが取りに来るといふ。

「だから、1年生が外に行つてグリーンベルトのところまで運んどいて。あたしたちが下すから。」

善知鳥先輩がみんなに命令する。今日いるのは木ノ本、箕島、僕、醒ヶ井。僕たちが外に出て体育館の裏に回るころには北側の窓の下に大きな紙袋が3つほどおかれていた。中を見してみると高架線用セツト。エスエルの大きな駅。スチームロコセツト。昔駿兄ちゃんの家で遊んだものなど。同じものがたくさん入つていた。紙袋を持ち上げてみると意外と重い。そのまま取っ手を持ったのでは重みに耐えられずちぎれてしまいそうなくらいだ。そんな紙袋、クリアケース。車両収納ボックス、プラレール・トミカの建物の箱を運んで何往復もしているうちに車が1台入つてきた。

その車から降りてきたのは青木さん含め3人。後の2人は知らない人だ。そのうち一人は青木さんよりも背が高くすらりとしている。もう一人は青木さんが所属する部活動・サークルの顧問という感じの人だった。

「こんにちは。」

「おいす。」

こんな感じで簡単に挨拶。車に乗つけて体育館の裏まで戻つてみると青木さんが善知鳥先輩と話している。

「だから、そんなの無いって言つてるでしょ。」

「本当にないのか。まさか無くしたとか言つんじやないだろうな。」

「それはないって。」

「何バカ言つてるんだよ。あるじゃねえか。」

「。。。。。」

「ちゃんと探せよな。」

と言ってから青木あおきさんは善知鳥じんちう先輩に人差し指をぴんと伸ばし、

「女子がそこまでいい加減っていうのもどうかと思うがな。」

「それがあたしのクオリティーよ。」

「なんでもいいわ。それパス。」

と言っで下ろされてきたのも紙袋。中身は何だかわからなかった。だから深入りしないことにする。

この作業が完了すると今日は解散。青木あおきさんたちとプラレールを乗せた車も僕たちが帰るころまでにはいなくなっていた。

その頃遠州鉄道の車内では・・・、

「鳥峨家君とりがやって遠州鉄道で帰ってるんだ。」

「ああ。家はこっちの芝本しほもとのほうに近いところにあるから。」

「ふうん。」

坂口さかぐちと話しているのは黒崎くろさきが好きという鳥峨家とりがやという人だ。顔つきはまるでナガシイ。うり二つなのだ。

（顔つきは似ててもナガシイとは大違い。私のタイプじゃないかも。）

「よく端岡はしおかたちと話してるの聞いてるけどさあ、電車のことよく知ってるな。女の子なのによく知ってると思うよ。」

「そうかなあ。これくらい分かってふつうって思ってるけど。」

「分かってふつうかあ。分かってる人から言くとそうなるよなあ。」

「・・・。」

（ナガシイからすれば・・・逆に分かってない人は何っていうよなあ。）

ふと頭の中で自分が好きな人の像と照らし合わせる。

「そういえば、坂口さかぐちって将来こういふのになりたいって思ってるのか。」

鳥峨家とりがやが急に話題を変えてきた。

「えっ。まあ。」

「そうなのか。やっぱり好きなものになるんだよなあ。」

（好きなものかあ。）

列車が減速を開始する。今乗っている2001は「フオーン」という音を発しながら速度を落としていく。40km/h位になると「フアー」という音に変化する。あとは停車までその音のまま。車掌が小走りに新浜松寄りの乗務員室の戻ってくる。車掌が乗務員室に入るころ列車は停車。胸くらいの高さにある銀色の物体に鍵を差し込んでレバーを上げる。そうするとドアのロックが解除され、ドアが開閉できる。この鍵がない場合ドアはロックされたままで開けることはできない。もちろん非常時を除けば。

自分がいる位置から見て右側の席が空いた。

「坂口さん座れば。」

(ナガシイだったら絶対俺がそっちにいくって言うのに。ちょっと面白みに欠ける。・・・)

「いいよ。鳥峨家君が座れば。」

「えっ。」

「いいって。これくらい慣れてるし。」

「・・・。」

鳥峨家は戸惑い気味に席に腰掛ける。そのあとは何も言葉を交わさないまま芝本まで走ってきた。

「オツ。2001。」

2001から降りてそう言葉を発する。

「えっ。2001って。」

鳥峨家にはこの意味は分からなかったそうだ。人差し指を立てて口の前に持っていく。

「フュー。シユシユシユシユシユフウイー。」

2001は静かに息を吐いて、その後は断続的にきれいな歌声を発する。ある程度のところまで行くとその声は太くなる。あるところではその声途切れて、ジェイント音をたたく音だけになる。また歌声を聞くころになると列車はポイントを越えているところでスピードを上げていくのだ。

「・・・。」

右手の人差し指と中指を立てて、おでこまで持つていく。持つて行ったら手首を使つて軽く一振り。「さよなら」と「ありがとう」の意を込めてあいさつだ。鳥峨家はそれがなんなのかわからないためキョトンとしている。こうなるのも無理はないだろう。これをやつてすぐに通じるのはナガシイと駿兄ちゃんだけ。よく駿兄ちゃんがやることをナガシイと自分で真似しただけなのだ。

「あつ。特に意味はないよ。」
と説明すると、

「・・・そうなんだ。」

ちよつと啞然とした表情だけは抜けてなかった。自分はすぐに駐輪場のほうに歩いて行つて鳥峨家を置き去り状態にして別れた。

「分からないわけじゃないんだけどね。さっきの意味。」
独り言を言つてさつき2001がいたほうの線路を見た、

11月13日。この日は寮で折尾町の展示に使うモジュールをハイエースに乗せる作業。翌日14日。この日に折尾町の公会堂にモジュールを搬入する。

「はい小楠貨物。」

「小楠貨物。」

今日はシナ先生も手伝いに来ている。

「了解。小楠貨物搬入です。」

「小楠貨物ね。」

全員で意味のない伝言ゲーム。もちろん伝言ゲームになつてないのは承知の上だ。ハイエースから必要な荷物を下ろして、次は机運び。公会堂の2階にある会議室つばいとところから長机を運んで下ろしてくる。これを何往復かして、モジュールを並べるところに置いていく。それが終わつたらさつき公会堂1階の隅に置いたモジュールを組み立てる作業。それが完了したらいつものように通電テストだ。

「あつ。電車が走つてる。」

公会堂のところには数人子供がいる。展示は今日ではなく明日だが好奇心旺盛な子供はそれがいつであろうと寄つてくる。会場はほん

の数人による展示会場になってしまつのだ。

「アド先生。内回り、通電オーケイです。」

EF210が一周してきたことを諫早が報告する。

「それじゃあ編成ものやってください。外回りのほうはどうですか。」

「……。」

外回りは留萌が担当しているが……、

「永島。これってどうやればいいの。なかなか乗らないんだけど。」

留萌が手こずっていたのはEF66を線路に乗つけることだ。3つの台車がついているEF66などの機関車はなかなかいうことを聞いてくれない。両側2つの台車が線路に乗っても真ん中の台車が線路に乗っていないかったり、真ん中の台車を乗せたことで他の台車が脱線してしまつたりするのだ。

「いいよ。俺が変わる。」

留萌からバトンタッチして、EF66の言うことを聞かせる。すぐに線路に乗つけて、発車させた。ぎこちなくところは電気がよくいっていないところ。そこをレールクリーナーできれいにすれば問題はない。

「木ノ本。そこレールクリーナーやって。」

「そこつてどこだよ。」

「その駅があるところ。」

僕は展示場のターミナルから右手（内側から見て）向かつたほうにある一番近い駅を指差した。

「綿棒とレールクリーナーどこ。」

「木ノ本さん。行きますよ。」

朝風がレールクリーナーを投げるそぶりをする。2・3回それをやつて木ノ本に投げる。木ノ本はそれをキャッチして、

「ナイスパス。」

と言つた。綿棒のほうは入っている箱ごと今の動作をした。

走行テストのほうはというと順調に進んでおり、今はターミナル

の左手すぐのモジュールまで来ている。一周したら列車を止めて、後ろに車両をくつつける。取り出した箱は「TOMIX Limited Sleeping Cars Series 14 type 15 AKATSUKI」。寝台特急あかつきの車両セットだ。これの特徴は一番下に入っているレガートシート車。寝台特急の中では異色の存在だ。これをEF66のすぐ後ろに連結し、そのあとに客車を続ける。全部並べきつたところでEF66を発車させる。

ターミナルから見て右斜め後ろ。「安曇川城」のコーナーに行つたところで事件は起こつた。

なニアプラスチックのものが落ちる音がする。その音とともに外回りのコントローラーを出力0にする。現場に行つてみると床には「寝台特急あかつき」の客車が3両ある。その傍らでしまったという表情をしているのが木ノ本だった。

「ヤバイ。どうしよう。」
事情を聴いてみる。どうやら木ノ本は使った綿棒をゴミ袋に入れるため中に入ろうとしたらしい。中に入るまでは順調だったのだが、起き上がるタイミングを誤ったらしく上にあるモジュールを押し上げる形になったのだという。恐らくそれで脱線し、元に戻つたところでさらにバランスを崩したのだらうというのが見解だ。

一つ一つを拾って元に戻しているとあることに気が付いた。「あかつき」の「オハネ15形（機関車から数えて5両目）」の洗面所よりのカプラーが欠けていることに気が付いた。本来ここにはこの字のようになつたカプラーがついていなければならない。欠けたカプラーは書き順で言うところ3画目しかない状態になっている。

「カプラーかけてるじゃん。」
僕が声を発した。

「何カプラーが欠けてる。」
その声に諫早が反応する。諫早は僕からその「オハネ15形」を取り上げると、

「このカプラー変えちゃいます。」
と言つてすぐに作業に取り掛かった。前自分が寝台特急しんだいとっきゅうの模型のカプラーを換装したような手順だ。あつという間にカプラーを交換し終えると「あかつき」の6両目にその車両を戻した。こうなったら再び発車だ。何周化して異常がないことを確認。他の編成ものを走らせて今日の作業は完了。車両は2階のさっきの部屋に置いて、僕たちは解散した。

今回からの登場人物

鳥峨家大希とりがや だいき 誕生日 10月1日 血液型 O型 身長 161

cm

57列車 運んで 瓜二つ やっちゃった(後書き)

自分が覚えている漫画のフレーズで恋愛ものを書く場合主人公たちがずれていたら、それにツッコむ人・ふつ々の恋愛をしている人を出したほうが面白いと書いてありました。

僕にはその普通が分からないのですみません。

58列車 カオスギヤケ

翌日15日。折尾町公会堂での展示。この日は折尾町のお祭り
で鉄研部としてはそれに招待される形で展示を行うのだ。もちろん呼
ばれたからには呼ばれたなりのことをしなければならぬ。その一
つが新幹線の運転体験である。これは中学生が担当することになっ
た。担当は空河と朝風だ。中で新幹線の車両の取り換えを行って
るのが留萌だ。そして新幹線を囲むように通している在来線の担当
は僕と箕島と諫早。木ノ本と醒ヶ井と佐久間は外回りの担当だ。

「今は373系が動いてるからいいけど、その次には何にするんだ。」
「まだ早いだろ。まだ走らせ始めて10分くらいしかたつてない。
もう5分10分走らせとこうぜ。それくらいになつたら考えよう。」

箕島は車両の入れ替えは基本20分単位。だから走らせる車両のバ
リエーションが減つたのだ。だからいつも持ってきている車両が走
らせないまま終わるということもある。特に国鉄車などは肩が狭い。
ナヨン先輩がいたときはよく遊ばれていたのに……。それだけ
ナヨン先輩のほうが進めるのが早かつたということなのだろうか。
家でいつもゆつたりと走っている車両を眺めているが、文化祭の時
に退官した速さを見ると今の速さがどうしても遅く感じてしまう。
その分何を走らせるのかのイメージをわかせることができるが、そ
の通りにならないというのがふつうになつてしまった。

「次は223系と321系でいいだろ。」

（223系つてあの播州赤穂行きだよなあ。）

「ああ。それでいいよ。」

今日は1000番台（223系）も持ってきていない。2000番
台（223系）の後釜はない。走るのかどうかは知らないが、これ
で走らなかつたら……。

「じゃあ、それ外回りに入れて。」

「ああ。」

箕島に手渡されて、箱を開ける。箕島は321系の1号車（クハ320形）を僕がいるほうに向けて並べている。

（編成無視っていうより、方向無視だな。）

心の中でつぶやきながらクモハ223形をレールに置いた。

それを回して、九州に行つて、北海道まで飛んで、東日本に飛ぶ。その次に国鉄に飛んだ。内回りを走っている車両は国鉄のキハ81系。日本のディーゼル特急界の礎を築いた車両で、全国にディーゼルト急のネットワークを広げていった車両の仲間だ。外回りを走っている車両は通勤電車72系。車両は茶色でドア博多開き。窓は3段窓になっている。この3段窓は空襲対策の名残なのだ。

「……。空河。外回りとめて。」

72系がいきなりガリガリガリという音が聞こえるようになった。

ガリガリつといつているのは脱線したかで、走っている速度のまま車輪が枕木の凹凸にあたっているからだ。すぐに列車が止まり、僕は復旧作業に入る。復旧が完了すると「行ってよし。」と合図を送る。だが、また同じ位置に来たところでまた脱線した。同じようにまた復旧作業。3周目も同じところで脱線した。

「なんで脱線するんだよ。」

脱線する72系にキレ気味に話しかける。脱線した車両を観察してみると運転室よりの車輪がちゃんとはまっていないうことに気付いた。（なるほど。これで毎回脱線するんだな。）

車輪を書きだすようにして外し、再び元に戻す。ちゃんとはまったことを確認して線路上に戻した。次の周回からは脱線することはなくなり、僕は空河に原因を話した。

善知鳥先輩たちは子供たちの世話が嫌だと言っていたが、その理由も分かる。暁フェスタの時にはあった車両を抑えつけて脱線させるなどと言った子供もいなかったため個々の展示はそう大変ではなかった。

ここの展示が終わると部活としての活動はほとんどない。ここか

ら3月まではちょこちょこ活動があるだけ。それ以外の日は暇になるのだ。

そうなつてから数日・・・、

「うーん。次は何走らせるかなあ。」

独り言を言った。こついうときは独り言を言いながら運転をするというのが一番だ。これは半分変人扱いされるかもしれないが、こつしなないと少し落ち着かないというのが僕の実情だ。

「そついえばここにコキ50000形のコンテナ貨車あつたよなあ。」

「
車両庫のほうに行って父の箱の中から該当するものを探す。コキ50000形というのは皆さんが駅で見たりすることがある貨物列車^{かもつれっしや}の荷物が載せてあるほうだ。1両に40t位の荷物を載せることができ、それを機関車により100km/h^{キロ}で高速牽引される。」

「うーん。こいつの牽引つて言つたらEF510(レッドサンダー)なのかなあ。ナヨロン先輩そつちのほうがいいつて言つてたし。」
今度は機関車が入っている箱を探す。EF510(レッドサンダー)が入っている箱は駿^{しゅん}兄^{あに}ちゃん^{ちゃん}の箱。その中からEF510(レッドサンダー)を探し出す。機関車の側面には「RED THUNDER^{トリスサンダー}」というエンブレムもある。このところのJR貨物の機関車にありがちなデザインだ。

「・・・。いくらつなげるつて言つても20両くらいだよなあ。それ以上連結したやつもあるにはあるけど・・・。コキ50000の数が足りない・・・。それも2両。」

(くそゴミだなあ。)

しばらくどうすれば26両になるか考える。

(そつだ。コキ100を2両連結すれば26両になるけど・・・カブラー違つし。父ちゃんカブラーTN化しなかつたんだ。)

「・・・。うーん。」

(これやめた。やつぱりコキ100で26両やる。)
という結論に達した。牽引はEF510(レッドサンダー)。その

次位はどうしようか迷ったが、EF81をつなげて回送ということ
はしないことにした。

コキを貨物駅に並べているとドアが開いた。来たのは駿兄ちゃん
だ。

「駿兄ちゃん。」

「よーす。智。」

軽くあいさつ。駿兄ちゃんはいま並べている貨物列車を見て、

「智。ちよつと意外なこと聞かせてやる。」
と言った。

（意外なこと。なんだろう。）

駿兄ちゃんは携帯のボイスレコーダーでとった録音を聞かせてくれ
た。

「間もなく3番乗り場に貨物列車が．．します。黄色い線の内側ま
でお下がりにください。フォー。」

このときアナウンスは「．．します」といった。
「えっ。」

その声に耳を疑った。もう一度聞かせてと言って再生させてもらう。
だが、何度聞いてもアナウンスは「貨物列車が通過します。」とは
いつていない。「貨物列車が停車します。」と言っているのだ。

「．．．。」
「そうなるのは分かるよ。俺だって嘘言ってるのかと思ったくらい
だよ。」

今度は別のテープを再生してくれた。

「フォン、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォ
ーン、フォフォーン。3番乗り場から貨物列車が発車します。ご注
意ください。」

フォというところで表したのは発車メロディー。そのあと明らかに
「発車します」と言っている。列車はふつうに乗れる旅客列車では
ない。こんなのがふつうの駅に停車するということが実際あるらし
いのだ。

「こんなのって……。本当にあったの。」

「うーん。じゃあ、これのほうが説得力あるかなあ。」

と言って今度は携帯ケータイの写真を再生してくれた。映っていたのはコンテナ貨車だけだった。駅の電気によってうつりは悪いが、全体的に写真がブレいていないことは分かる。

「これって秒撮したんじゃないの。」

「確かにそう思うかもな。だけど考えてみる。ふつう携帯ケータイで秒撮なんてできない。どうしても景色か車両のどっちかがブレルことになるからな。」

「。。。。。」

「やっぱり動画のほうがもつと説得力あったかなあ。ビデオとか持つてかなかつたからなあ。今度行ったときはそれ撮って来るよ。」
と言ったが、

(パソコン。)

「智とも。あれちよつと使っていていいか。」

「えっ。いいけど。」

駿しゅん兄あにちゃんはずぐにパソコンを立ち上げ、動画サイトを開いた。検索で敦賀つるが駅とかけて、動画を絞る。するとその中にちゃんとあった。牽引はEF510(レッドサンダー)で敦賀つるが駅の5番線から発車していく動画だった。

「。。。。。」

「なっ。いかに東海道本線とうかいどうほんせんがせわしないかわかるなあ。」
独り言のように言った。

僕はその動画を見るとすぐに周回の中に戻った。列車を貨物駅から発車させて、しばらく放っておく。

(牽引はちよつどEF510(レッドサンダー)。。。。。。ならいける。)

普段だったらサウンドコントローラーの駅アナウンスという機能を使うところだが、ここはあえて反抗することにしよう。

「間もなく1番線かむつれしやに貨物列車が停車します。黄色い線の内側まで下

がつてお待ちください。」

「おいおい。それはEF510（レッドサンダー）……。あつ。これだからか。」

多分それはEF510（レッドサンダー）でなければできないと言おうと思つたが牽引している機関車がそれだからやめたのだらう。

僕はいつも電車を止めている要領で1番線の一番端まで機関車に牽引させる。徐々にスピードを落として停車させる態勢をとり、機関車がホームからはみ出すところで停車させた。停車位置がずれないかとツツコミを入れたくなるかもしれないが、機関車などではこのような停車方法がふつうというところだつてある。

停車して10秒ほど経つと、

「1番線から貨物列車かもつれっしやが発車します。ご注意ください。」

コントローラーのブレーキを解除。マスコンを入れて常点灯をちよつとあげる。走りだしたらすぐに0に戻した。後は走っていくEF510（レッドサンダー）に任せるだけ。徐々にスピードを上げていった。

またしばらく放つておいて、

「間もなく1番線をオープンタイプの列車が通過します。黄色い線の内側まで下がつてお待ちください。足元白色。丸印。1番から2番で2列に並んでお待ちください。」

今度は駿兄しゅんせちゃんと言つた。

オープンタイプと言つた意味はすぐに分かつた。コキ100形などのコンテナ貨車はコンテナを積んで初めて3メートルくらいの高さになる。普段コンテナを積んでいない貨車は人間の腰から少し高い位置の高さしかない。ホームから見る高さで言えば、ホームと同じ高さの位置。つまり乗ろうと思えば乗れるのだ。

「なおところどころコンテナを積んでいる個所がございます。乗車の際コンテナにご注意ください。」

さらに続ける。

僕は速度を落とさずにホームを通過した。

「バカ野郎。少し速度落としてやれよ。おかげで列車まっつてた10人中85人がグシャってなったじゃねえか。」

「あーあ。コンテナが血まみれ。ていうか26両に100人って必要なすぎじゃない。もうちょっと増やして2600人ぐらいとか。」

「東京じゃないんだからそんな人数乗るわけないだろ。それプラスオープンタイプ。何百人単位でコキから落ちるだろ。」

「……。」
(もつと面白いの考えてやる。)

「そう思いながらまた一周させる。」
「間もなく1番線を貨物列車が通過します。ご利用の方は黄色い線の外側までお進みください。」

「違う。間もなく1番線を貨物列車が通過します。黄色い線の内側までお下がりにください。ご購入の際は高電圧にご注意ください。」
高電圧とは架線にかかっている直流1500Vか交流20000Vのことである。

「うーん。駿兄ちゃん考えたな。跳躍してコンテナの上に乗ろうっていう算段かあ。」

と言っている間に列車は駅を通過。また一周させる。

「間もなく1番線を貨物列車が通過します。黄色い線の内側までお下がりにください。ご購入の方は魚にご注意ください。」

「えつ。」
「この意味は分からなかった。なぜ魚なのか……。」
「だって貨物列車が運ぶのは八朔とかだけじゃないぜ。魚だって運ぶぞ。」

「だからって生のまま運ぶってどこまでバカなんだよ。」
「あとこれだって行けるぜ。貨物列車が通過します。ご利用の方は油にご注意ください。」
油とは石油のことだ。

「……。」
はつ。間もなく1番線を貨物列車が通過します。黄色い

線の内側までお下がりください。ご利用の方はトイレトペーパーにご注意ください。」

「なるほどな。ワムか。」

こんな感じで僕たちにしか通じないギャグを何連発も考えた。例えば・・・車内への危険物の持ち込みは禁止されておりません。そして持ち込んでいいものは核爆弾オンリー。こんな物騒なこと以外にはまっとうかいどう、せん、ほくりくせん、しんえつせん、じょうえせん、たかさきせん、しゅうなんしんじゆく、浜松発東海道線、北陸線、信越線、上越線、高崎線、湘南新宿ライン、経由浜松行き各駅停車など。ものすごく無駄に長い列車なども考えた。

鉄道マニアにとって鉄道とは何か。それは現実を楽しむところであり、現実と大きく違う世界を想像するものだと思はる。

58列車 カオスギャグ（後書き）

「貨物列車が停車します。」はマジです。

話が変わりますが、このごろ思うものがあります。

僕にないのは経験と文才です。

しかし、経験豊富だからこういうものが描けるのであって、文才があるからこんなに書ける。と思う人が多いでしょう。説得力がありませんがこれは事実です。

ストーリーを投稿するとき一度文面を確認して投稿していますが、確認しきれていない時があり、とても変な文面になっている個所があつて、すみません。気づいたらこちらでも直していますが、おそらく直しきれていないかも・・・。

59列車 別れる前は

その日からというものは僕は離れにこもって模型をいじっていることが多くなった。12月に入ってもそれは変わらず。学校のある平日と奇数週の土曜日とオープンキャンパスの無い休日はほぼその状態が続いて、年を越しても変わらなかつた。

1月もほぼその調子。2月もその調子のままだつた。これが僕の11月からの習慣になつた。

2月12日。

「……。」

(永島のやつ今度は何で元気がないんだよ。
机にもたれかかっている永島に話しかけた。)

「どうした。この頃いつもそんな調子だな。」

「なんで部活がないのかなあつて。」

(お前部活ないと生きてけないのか……。)

「なんていうかなあ。このごろ部活ないしなんかテンションあがらないし……。うーん。なんかいい方法とはないかなあ。」

(知るか。)

1年4組では……、

(あいつはとうの昔に……。それにこいつもあと見れるのはわずかかあ……。本当にいつちやうんだな。)

手に持っているのは「鉄道ファン」という鉄道雑誌。

「さくら。何見てるの。」

木ノ本にその本を見せる。

(2007年の4月つて。結構前の見てるな。)

「どうしたの。それ。」

「家から持ってきたの。」

「……。」

「あつ。そつだ。明日500系でもとりがてらどっか行かない。」

(500系かあ。もうすぐさよならだったよなあ。)

「うん行こう。」

木ノ本もすぐにこの提案にのった。

放課後……、

「へえ。名古屋とかにでも行ってくるのか。」

「うん。だから永島も一緒に行かないかなあと思って。」

「……。」

ちよつと考えた。確かに500系はこのままだと載らずじまいで終わってしまう。でもここはしょうがない。今から乗ろうとしてもチケットが取れるほうがすごいというレベルに達していることは間違いない。だが……。

「いいよ。」

(そういえば500系ならうちにも模型がある。それに本物は……)

「そうか。永島だったらのってくれると思ったけど。」

「女だけの旅行に男子がついてくると思う。ここは私たちだけで行くことにしようか。」

留萌はそう言った。

その帰りというものの僕の頭の中には500系を見たときのビデオが再生されていた……。

「智。もうちよつとゆっくり行けよ。」

「しゅんにいちゃん、はやくはやく。」

僕はその時広げれる中で一番大きく手を広げて駿兄ちゃんを呼んだ。

「そんなに急がなくても500系は行っちゃわないうて。」

「えっ。なんで。」

「なんでっ……まだ時間じゃないから。」

「どっぴいっこと。」

「……。」

駿兄ちゃんは少し考えたみたいだった。僕から視線をそらしてホームの何かを見たのだと思う。

「智。抱いてやるからこつちおいで。」
僕は駿兄ちゃんが差し出した手に導かれるように駿兄ちゃんに近づく。新幹線がよく見えるように駿兄ちゃんはいつも抱き上げてくれるのだ。その時は決まって新幹線が浜松駅を通過するときと決まっている。

抱き上げられてしばらくすると「キーン」という音に包まれてくる。東京方面から黄色っぽいライトをつけた新幹線が猛スピードで近づいてくる。普段から見慣れている僕はライトの位置でおおよその新幹線の区別ができた。真ん中らへんにあるのはおそらく700系だという見当をつけた。このときの僕が嫌いな「カモノハシ」である。

だがその予想は大きく外れた。車体は白ではない。紫色をしている。ということは……。

「500系。」
駿兄ちゃんが僕の耳元でささやく。その声を聞いたら動かすにはいられない。抱かれた状態から抜け出そうとする。駿兄ちゃんは抜けだそうとする僕をしっかりと抱いてくれている。

あたりが轟音に包まれる。このときしゃべっても声は届きづらい。その時発した声は轟音にかき消される。声をかき消しながら丸い車体の新幹線が通過していった。

16号車が僕たちの隣を通過すると同時に顔を新大阪方面に向けてる。そして、浜松駅の陰になって見えなくなるまで見送った。

駿兄ちゃんが僕をホームにおろす。

「新幹線をご利用いただきましてありがとうございます。間もなく、番線に……時……分発。」「こだま、……号」「東京行きが到着いたします。」

反対側のホームと思われる。アナウンスが聞こえてきた。このアナウンスを聞くと駿兄ちゃんのズボンのすそをつかんで引つ張る。

「なんかくるみたいだよ。」

駿兄ちゃんは振り返るとちよっと笑った。もちろん僕にはこれから

来るのが100系新幹線しんかんせんだとは思っていない。さらに気づいてもいなかった。駿兄ちゃんしゅんはわざと100系や500系を見に来ているのだ。このときの僕にはそれが分からないので駿兄ちゃんしゅんは神様のように見えた。

ベルが鳴って新大阪方面しんおおさかほうめんからとがった鼻の新幹線しんかんせんが入ってきた。その好きな顔を見て思わず叫ぶ。

「100系だ。」

「よし。智ち、おいで。」

また駿兄ちゃんしゅんが両手を差し出す。また抱いてくれるそうだ。駿兄ちゃんしゅんは僕を抱いて100系が止まっているホームまで急いだ。階段を上って100系がいるホームに来る。そのまま走って先頭車まで来た。

「うわああああああ。」

目を輝かせている僕の傍らで駿兄ちゃんしゅんは息切れしていた。

僕は運転室の中を見た。どこかで見たことのある顔だと思った。確か花巻はなまきという人だ。

「・番線。」「こだま・・・号」。東京行きとうきょうゆきが発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」

ドアを閉めるブザーが鳴ってゆっくりと100系のドアが閉まる。

「ファーン。」

100系がいきなり声を発した。

100系が合図に答えてくれた。

僕は飛び跳ねたくて仕方がなかった。その気持ちを抑えてくれるように駿兄ちゃんしゅんが僕の肩に手を置いている。100系はゆっくりと走りだして、どんどんスピードを上げていく。16号車じゅうろくごうしゃ(本当は1号車)が過ぎていくと、僕と駿兄ちゃんしゅんの顔は同時に東京方面とうきょうほうめんを向いた。

「バイバイ。」

走り去っていく100系に手を振る。これが浜松駅はままつに行った時の日課だった。

（あいつともお別れかあ。）

3月と10月は鉄道ファンにとって決してうれしい月ではない。たとえて言うなら刃でもあるのだ。

翌日2月13日。浜松駅。

「結局寝台特急撮ってたのかよ。」

「いやあ。徹夜ってやっぱりいいもんだね。」

「……。」

と話す木ノ本と一緒に今日は気まぐれにどこかまで行ってくることにした。豊橋までの切符を買って、電車を待つ。最初に乗ったのは311系。こちら辺で活躍する普通に乗ってまずは豊橋まで。次に一度改札を出て「青空フリーパス」という切符を買って再び構内に戻る。ここから先は新快速にお世話になる。名古屋まで行くと新快速を降りる。降りたら一度改札を出て入場券を買う。これで新幹線のホームに入り500系が来るのを待つ。

ここに来る500系は10時30分発「のぞみ6号」東京行きだ。名古屋には1分の停車。停車したらすぐに発車する。

問題の10時29分。新幹線ホーム14番線に500系が姿を現す。今自分たちがいる16号車付近にはたくさんカメラを提げた人がいる。目的はもちろん同じ。500系の撮影。撮影は停車の前から始まる。停車してからは撮影場所の取り合い状態。いいところをとらないと失敗作を生む。もちろん他の人と譲り合うのは当たり前。自分に回ってくる少ないチャンスをものにする。

10時30分。500系のドアが閉まって名古屋駅を後にしていた。

「行っちゃったね。」

木ノ本が隣でつぶやいた。

「……。」

今は言葉を発することができない。

（俺はまだ走りたいのに……か。かわいそうだよなあ。）
走り去っていく音がどうしてもそう聞こえてしまう。

(あいつもこの時どういう気持ちだったのかなあ。)

もし自分がその時から注意していれば、あいつの声も聞けたかもしれない。今ふと思った自分を悔やんだ。もうあいつはここには帰ってこないのだ。

そのあと新幹線ホームから出て、在来線のほうに回る。次に来る500系は折り返し「のぞみ29号」博多行き。この列車が京都に着くのは14時50分。米原の通過はその20分くらい前の14時30分ごろ。このときに新幹線ホームにいればまたチャンスがある。木ノ本にそう提案されて、米原に向かうことにした。

米原までは普通でゆつくりと行った。岐阜で米原まで直通する特別快速を待つて米原に着いたのは11時20分だった。

到着した2番線の反対側には223系が止まっていた。新快速姫路行きだ。

「留萌の好きな223系だっけ。」

木ノ本が話しかけた。留萌はその223系をちらつと見た。

(側面にビードがない……。)

「あれは違う。2000番台。少なくとも私のタイプじゃないわね。」

「……。」

313系を降りて、前のほうに回ってみる。木ノ本でも223系の違い位は分かる。ヘッドライトの形状が留萌の好きなやつとでは違うということを確認した。

「しかし、雨とはなあ。関ヶ原のあたりは一面雪で覆われてたのに。」

「これじゃスプリンクラーもなしだね。」

「……。天気のパカ野郎。」
「叫んでもどうしようもないことだ。」

まずはホームにある立ち食いソバ屋を見つけて食事。さっさと終わらせて、6番線の来る列車を撮影。と言ってもきたのはさっきと同じ2000番台だった。

（仕方ないんだよなあ。V編成だけでも53編成、W編成だけでも30編成あるからなあ。）

「さつきと同じじゃん。」

傍らで木ノ本きののほんがつぶやいた。

「留萌るもへいの好きになやつつていつになつたら・・・。」

「バカか。あれは大阪から和歌山にかけてでしか動いてない。」

「怒んなくなつていいじゃん。」

「あつ。ごめん・・・。」

（米原まいはらに0番台かあ・・・。）

ちよつとその姿を想像してみる。

（あわん。うん。やつぱりここに来るのは1000番台か2000番台のほうがあつてる。）

ベンチに座つて雑談。時間はまだ12時を少し過ぎたところ。500系が折り返してくるまでまだ2時間以上ある。その間にネタが尽きてしまつたろう。

「間もなく、3番乗り場に、新快速しんかいそく、姫路ひめじ、行きが、8両で、参ります。黄色い線まで、下がつて、お待ちください・・・。」

「また223系だ。いっぱいすぎて見飽きるよ。」

「・・・。今度は223系も空気を読んでくれたみたいだな。」

最初この意味は分からなかった。

近づいてくる223系はこれまで見てきた223系とはなんか違うというのはヘッドライトの光方で読み取った。ヘッドライトすぐ下にある空間がないように見えるのだ。

「1000番台。」

下についているテールライトの位置がはっきりする。

「ホントだ。よく分かるねえ。」

「感覚で番台見分けるっていうのも結構難しいんだよ。特に共通運用は。」

「へえ。」

留萌るもへいが言うことについては感心するしかない。自分は運用につい

てはまるで知らない。分かっていることというとな古屋圏で運行されている快速列車はすべて313系ということぐらいだ。

しばらく3番線にして新快速を見送る。時間はまだあってまた雑談。その間にまた1000番台が来たのでそれも撮りに行った。そうしている間に時間は14時20分になった。

新幹線ホームに言って500系の通過を待つ。通過した後は東京寄りまで歩いて行った。そこまで歩いていくとさっきの名古屋と同じようにカメラを掲げている人が一人いた。

「何か待ってるのかなあ。」

その姿を見て留萌が話しかけた。

「何か待ってるって。何を待ってるのよ。もう500系は行っちゃったし待つものもないんじゃない。」

「それはそうだけだよ。まだ珍しいものが来るとか。」

「それはないだよ。団体列車じゃあるまいし。」
二人でゆっくり歩いてきたため時間は40分ちよつと前を指している。この間に通過していった新幹線は1本。N700系だった。

しばらく東京方面を向いたままている。

「フユウイイーン。」

どこからか警笛が聞こえた。

「えっ。」

普段聞いている警笛とは感じが違う。

「何。今の。なんか自分もまだ走れるのに。って言っていたような。」

「まだ俺も走れるのに。そう聞こえるとも言いたいんだろ。」
ずっと黙って東京方面を見ていた人が口を開いた。

59列車 別れる前は（後書き）

前後書きに「テキストではなくピクチャーでとらえるほうが情報量が多い」というようなことを書きました。

そこでこの小説をテキスト（文字）ではなくピクチャー（絵）を想像してこれから読んでみてください。

しかし、絵を想像するには説明文が足りませんので、読者それぞれが考えた個性的なキャラクターを想像してください。

とここでこのことに触れるのもなんですが、

女子のスカート丈。もし想像するなら大体膝あたりまでとしてください（制服の時など）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0514x/>

MAINE TRAFFIC

2011年11月28日05時48分発行